

博士論文 2024 年度

日本に暮らすムスリム第二世代
——「生きられたイスラーム」の視点から——

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科

クレシ 好美

日本に暮らすムスリム第二世代
——「生きられたイスラーム」の視点から——

論文要旨：

本研究では、日本に暮らすムスリム第二世代が、外国ルーツと宗教的背景を持つことによる重層的な周縁化を経験しつつ、〈ムスリムであること〉にどう向き合おうとするのかを考察する。

先行研究が、モスクやイスラーム団体などの組織に紐づく超可視的なムスリムを代表化させてきたのに対し、ヨーロッパのムスリム研究の新たな枠組みである「生きられたイスラーム (lived Islam)」や「組織に属さないムスリム (non-organized Muslims)」の概念が、これまで描かれてきたムスリム像の解像度を上げつつある。本研究は、これを日本のムスリム研究に応用することで、組織に紐づいていない場合が多い第二世代の多様な実態を明らかにする。第二世代 75 人への「二人称的かかわり」による質的調査と、103 人分の量的調査および 6 年分の参与観察によって得られた結果を、「生きられたイスラーム」の視点から分析した。

第二世代の語りからみえてきたのは、家庭で行われる宗教継承に負担を感じながら、親の愛情を求めて無理する者が少なくないこと、そして親の目に良きムスリムとして映る子のなかには、実は大きな葛藤に懊悩する者がいることである。一方、学校生活における経験として、周縁化の様子とそれゆえに抱く周囲への同化願望の切実さ、さらにはそれがイスラームの名のもとに課される義務や禁忌といった実践によって叶えられないことへの戸惑い、またそこから生じる親世代との距離感もうかがえた。こうした状況において、第二世代の〈自分とは何者か〉への答えは、発達の過程で経験する環境や出会いによって変容する。その際、〈ムスリムであること〉と日本人として生きることの葛藤を乗り越えるために、イスラームの知識の獲得と理解者の存在が重要な役割を果たすことが確認された。

第二世代の生きられた経験の可視化は、始まって日が浅い第二世代研究の空白のいくつかの部分埋めるものとして、学術的意義がある。また社会的意義として、親世代に子の心情を想像し寄り添うための、手がかりを示し、教育現場にも理解者を増やすきっかけにもなりうる。それによって学校が、第二世代に限らずさまざまな背景をもつ子どもたちにとって居心地よい場として機能し、共生の成功モデルとして社会全体に拡大していくならば、本研究はマイノリティの子どもたちの疎外感の軽減にも貢献するものとなるだろう。

キーワード：日本に暮らすムスリム、ムスリム第二世代、生きられたイスラーム、生きられた経験、二人称的かかわり

The Second-Generation Muslims Living in Japan: From the Perspective of “Lived Islam”

Summary:

This study explores how second-generation Muslims in Japan, who experience marginalization due to their foreign roots and religious backgrounds, navigate their Muslim identity.

While previous research often focused on hypervisible Muslims tied to mosques and Islamic organizations, recent European studies introduced frameworks such as "lived Islam" and "non-organized Muslims," offering a more nuanced understanding of Muslim identities. Using these frameworks, this research examines Japan's diverse, often organization-independent second-generation Muslims. The results of qualitative research involving “empathic second-person relationship” with 75 second-generation Muslims, quantitative surveys with 103, and 6 years of participant observation were analyzed.

Their narratives reveal that many feel burdened by religious expectations set by their parents while pushing themselves to meet them in hopes of gaining parental love. It also became clear that those considered good Muslims by their parents may still experience intense internal struggles. At school, experiences of marginalization foster a strong desire for assimilation, which can clash with religious obligations, leading to confusion and a sense of distance from their parents. In this context, second-generation Muslims' answers to the question "Who am I?" evolve through their developmental process, shaped by the environments and people they encounter. The research also highlights that acquiring knowledge of Islam and having supportive individuals play crucial roles in helping them reconcile their internal conflicts between “being Muslim” and living as a Japanese.

Making visible their lived experiences holds academic significance by addressing gaps in the nascent field of second-generation Muslim research. Socially, it provides insights that help parents empathize with their children's experiences and foster greater understanding among educators. It is hoped that this leads to more inclusive schools for minority children from diverse backgrounds and that such schools become models of successful multicultural coexistence, inspiring broader societal change.

Keywords : Muslims living in Japan, second-generation Muslims, lived Islam, lived experiences, empathic second-person relationship.

Doctoral Course, Graduate School of Media and Governance, Keio University
QURESHI, Yoshimi

目次	1
図表目次	4
イスラーム関連用語	5
序章 研究の概要	9
1 研究の背景と目的	9
2 研究の対象	11
(1) 第二世代の定義	11
(2) 第二世代の多様性	13
(3) 研究の対象との関係	15
3 論文の構成	20
第1章 研究の枠組みと先行研究	22
1 マイノリティとしてのムスリム研究における新たな概念	22
(1) 「組織に属さないムスリム」	22
(2) 「生きられたイスラーム」	24
(3) 日本のムスリム研究に求められる新たな視点	26
2 ヨーロッパのムスリム移民と第二世代研究	28
(1) 社会的争点の渦中にある集団としてのムスリム	29
(2) 生きられたイスラームの視点から見る第二世代	31
3 日本のムスリム研究	35
(1) 第一世代に関する研究	35
(2) 第二世代に関する研究	38
(3) 第二世代の生きられた経験に注目して	40
4 第二世代に共通する背景をもつ子どもの研究	42
(1) 外国ルーツの子どもに関する諸考察	42
(2) 新宗教における宗教継承問題	46
5 小括	47
第2章 日本社会と日本に暮らすムスリム	50
1 第一世代の流入	50
(1) 学びの機会を求めて入国したニューカマー	50
(2) 就労の機会を求めて入国したニューカマー	52
(3) ニューカマー・ムスリムの属性	53
2 第一世代の定住	55
(1) 滞在の延長／社会的ネットワークの発展	55
(2) 長期定住の意識の高まり／コミュニティの出現	58

3	日本に暮らすムスリムを取り巻く環境.....	61
(1)	ニューカマー・ムスリムへのまなざし.....	61
(2)	二世世代へのまなざし.....	65
4	小括.....	69
第3章	調査の概要.....	71
1	研究の問い.....	71
2	調査の方法.....	72
(1)	質的調査.....	72
(2)	量的調査.....	78
(3)	参与観察.....	82
3	小括.....	82
第4章	家庭環境における生きられた経験.....	83
1	ムスリム家庭の子育て.....	83
2	量的調査からみえてきたこと.....	86
3	宗教継承に対する子の受け止め方.....	90
(1)	幼い頃からのクルアーン学習と礼拝.....	90
(2)	イスラームの世界観を理解しないまま従う実践.....	94
(3)	納得のいく説明を求めて.....	96
4	親子の意識のずれ.....	101
(1)	子を取り巻く環境を理解しない親からの期待.....	102
(2)	大きすぎる親からの期待に苦しむ第一子.....	105
(3)	親の愛情を求めて.....	107
5	小括.....	113
第5章	学校生活における生きられた経験.....	116
1	学校現場でのイスラーム理解.....	116
2	量的調査からみえてきたこと.....	121
3	外国にルーツを持つことによる疎外感.....	123
(1)	外見的な差異.....	124
(2)	ムスリムに付与されるスティグマ.....	127
4	宗教的背景による疎外感.....	129
(1)	食の禁忌により意識される差異.....	130
(2)	服装規定により意識される差異.....	136
(3)	行動制限により意識される差異.....	138
5	教員の無理解による疎外感.....	143
(1)	偏見をもった教員がもたらす影響.....	143
(2)	教員の配慮によって変わる学校生活.....	145

6 小括.....	150
第6章 〈ムスリムであること〉にどう向き合うか.....	152
1 第二世代の生きられたイスラーム.....	152
(1) アスマ（女性 初回調査時 27 歳、最終調査時 32 歳・73）.....	152
(2) アリフ（男性 初回調査時 25 歳、最終調査時 30 歳・32）.....	155
(3) マイサ（女性 初回調査時 21 歳、最終調査時 28 歳・71）.....	157
(4) ディーン（男性 初回調査時 17 歳、最終調査時 18 歳・8）.....	159
(5) ダリヤ（女性 27 歳・70）.....	161
2 生きられたイスラームの分析.....	163
(1) 5 人の選択と背景の概要.....	163
(2) 〈ムスリムであること〉を否定する要因.....	165
(3) 〈ムスリムであること〉を肯定する要因.....	167
3 他の調査協力者の語りと併せての考察.....	168
4 ムスリムとしての自覚.....	172
5 小括.....	178
第7章 総括.....	181
1 各章で得られた知見.....	181
(1) 家庭環境における第二世代の生きられた経験はどのようなものか.....	181
(2) 学校生活における第二世代の生きられた経験はどのようなものか.....	183
(3) 第二世代は〈ムスリムであること〉にどう向き合うのか.....	184
2 研究の目的を振り返って.....	185
3 研究の意義.....	187
4 研究の限界と今後の課題.....	190
5 今後の展望.....	195
参考文献.....	197
付録：調査協力者の語り.....	217
家庭での宗教継承についての語り.....	217
家族についての語り.....	225
宗教実践についての語り.....	231
学校での経験についての語り.....	244
イスラームの肯定につながる環境についての語り.....	253
〈ムスリムであること〉についての語り.....	258
謝辞.....	265

図表目次

表序-1	ルンバウトと宮島僑による第一世代と第二世代の区別	12
表2-1	1990年のニューカマー・ムスリムの主要5か国出身者の在留資格上位5つ...	60
表2-2	2000年のニューカマー・ムスリムの主要5か国出身者の在留資格上位5つ...	60
表2-3	2010年のニューカマー・ムスリムの主要5か国出身者の在留資格上位5つ...	60
表2-4	イスラームに関する情報源とその内容	64
表3-1	質的調査協力者のプロフィール：第二世代.....	73
表3-2	論文中に引用した質的調査協力者のプロフィール：第一世代（親世代）	77
表3-3	論文中に引用した質的調査協力者のプロフィール：教員.....	77
表3-4	量的調査協力者のプロフィール：第二世代.....	79
表5-1	イスラームの学習と情報についての調査結果	118
表5-2	イスラームのイメージについての記述式アンケートの結果	119
表5-3	SYM参加の第二世代の弁当持参の形態（12人中）	132
表6-1	5人の宗教継承の背景	164
表6-2	〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を及ぼす要因	169
図序-1	第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方	14
図2-1	主なムスリムマジョリティ国出身の留学生数推移.....	51
図2-2	主なムスリムマジョリティ国出身の研修生数推移.....	51
図2-3	主なムスリムマジョリティ国出身の「短期滞在」資格入国者数推移.....	53
図2-4	男女別・年齢別滞日者の数	54
図2-5	主なムスリムマジョリティ国出身の超過滞在者数推移	56
図2-6	主なムスリムマジョリティ国出身の「日本人の配偶者等」保持者数推移	57
図2-7	外国人刑法犯の検挙人員：総数に対するニューカマー・ムスリムの割合	62
図3-1	質的調査協力者の性別と年代.....	75
図3-2	質的調査協力者の親の出身国の組み合わせ.....	75
図3-3	量的調査協力者の性別と年代.....	80
図3-4	量的調査協力者の親の出身国の組み合わせ.....	80
図3-5	「現時点でムスリムの自覚はありますか」への回答	81
図4-1	「〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことはありますか」への回答...	87
図5-1	イスラームのイメージについての選択式アンケートの結果	117
図5-2	「学校で不快な経験をしたことがありますか」への回答.....	121
図6-1	①アスマ、②アリフ、③マイサ、④ディーン、⑤ダリヤの〈ムスリムである こと〉への向き合い方	164
図6-2	第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方（図序-1の再掲）	173
写真5-1	自治体ごとに仕様が異なる調理手順書	132

イスラーム関連用語

イスラーム関連用語のカタカナ表記は、原則として『岩波イスラーム辞典』（大塚ほか編 2002）による。本論文で使用するイスラーム関連用語の簡単な説明を、以下に記す。

アザーン (adhān) : 礼拝の規定時間の到来を知らせる呼びかけ。学派によって繰り返しの回数に差異があるが、基本的なフレーズは以下の通り。「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）× 4 回または 2 回、アシュハド・アッラー・イラーハ・イッラッラー（私はアッラーの他に神なしと証言する）× 2 回、アシュハド・アンナ・ムハンマド・ッラスールッラー（私はムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する）× 2 回、ハイヤー・アラッ=サラー（礼拝のために来たれ）× 2 回、ハイヤー・アラー・アル=ファラーハ（成功のために来たれ）× 2 回、アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）× 2 回、ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーの他に神なし）」（磯崎ほか訳 1987: 262-3）。

アキーダ ('aqidah) : 信仰箇条。神の唯一性、ムハンマドの預言者性、週末における死者の復活など。

ハディース (ḥadīth) : 預言者ムハンマドの言行の伝承。伝承の経路によって細部の点で微妙な違いがあり、また編纂者によって複数の伝承集が認められ、その信憑性によって、サヒーフ（真正）、ハサン（良好）、ダイーフ（脆弱）などに区分される（牧野 1996: 194, 206）。主要なハディース集の編纂者は、アル=ブハーリー、ムスリム・イブン・ハッジジャージュ、アブー・ダーウード、アル=ティルミズィー、イブン・マージャ、アル=ナサーイーなど。本論文においてハディースを引用する際には、前二者については日本で発行されている邦訳版を使用、それ以外はウェブ上にあるハディース検索サイトにある英語訳を筆者が和訳したものを使用することとし、引用の始めに「ハディース（編纂者の名前）には～」と表示する。

ハッジ (hajj) : 大巡礼。イスラームの五行のひとつで、ズル=ヒッジャ月（イスラーム暦 12 月）にサウジアラビアのメッカを訪れて定められた儀礼を行う。これ以外の期間に任意で行う小巡礼はウムラ ('umra) という。

ハラール (ḥalāl) / ハラーム (ḥarām) : イスラーム法上、合法とされるもの／ことがハラール、禁止されるもの／ことがハラーム。クルアーンには、「かれは正義をかれらに命じ、邪悪をかれらに禁じる。また一切の善い（清い）ものを合法〔ハラール〕となし、悪い（汚れた）ものを禁忌〔ハラーム〕とする。（第 7 章 157 節）」とあり、ムスリムは善い・清いものを食べ、善い・清い行いをすべきとされ、悪い汚れたものを食べる、悪い汚れた行いを避けるべきとされる。

イバーダ ('ibādah) : アッラーへの崇拜、服従、転じて宗教儀礼。礼拝前の清め、礼拝、喜捨、斎戒、巡礼。このうち礼拝、喜捨、斎戒、巡礼の 4 つに信仰告白を加えるといわゆ

る「五行」となる。『岩波イスラーム辞典』では「イバーダート (‘ibādat)」と複数形で表記されているが(東長 2002: 149)、日本に暮らすムスリムの多くはアラビア語話者でないため、単数形で「イバーダ」と言うことが多く、本論文では、調査協力者の語りのまま「イバーダ」と記す。

イマーム (imām)：宗教指導者、礼拝の先導者。後者の意味では、集団礼拝の際のみの一時的資格として使用される(松本 2002: 168)。国内モスクでは、礼拝の先導のため専属のイマームが雇用されている場合があり、職名としても使用されている。

イマーヌ (īmān)：イスラームにおける正しい信仰。いわゆる六信(アッラー、アッラーの天使たちの存在、アッラーにより啓示された諸啓典、アッラーの預言者たち、審判の日と来世の存在、アッラーによって定められた運命を信じることを公式に宣言すること(東長 2002: 170)。また内面的信仰心の意もある。本論文中ではほとんどが前者の意味で用いられるが、一部、調査協力者の発言中に後者の意味で用いられる場合、語の後に「(信仰心)」と注記して区別する。

イスラーム (islām)：唯一の神アッラーを信仰し、ムハンマドをその使徒であると認め、ムハンマドに啓示されたアッラーの教えに従って生きること。井筒俊彦は、「イスラームとは、この宗教の正式の名称である」(井筒 1979: 113)とする。だが国内出版物の一部に「イスラム教」という表記が見受けられる点について、東長靖は、「教」がつけられることで日本人の考える「宗教の枠組みに押し込めてしまう」(東長 1996: 9)と批判する。他の研究者も「教」をつけた表記を「正しい呼び名ではない」(森本 1998: 2)とし、「正しくはアラビア語名前でイスラームと呼ぶべきでしょう」(蒲生 1958: 1-2)と主張する。

イカーマ (iqāma)：礼拝の開始を告げる呼びかけ。「学派によって繰り返しの回数に差異があるが、基本的なフレーズは以下の通り。「アッラーフ・アクバル(アッラーは偉大なり)×2回、アシュハド・アッラー・イラーハ・イッラッラー(私はアッラーの他に神なしと証言する)、アシュハド・アンナ・ムハンマド・ッラスールッラー(私はムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する)、ハイヤー・アラッ=サラー(礼拝のために来たれ)、ハイヤー・アラー・アル=ファラーハ(成功のために来たれ)、カドゥ・カーマティッサラー(礼拝はまさに始まった)×2回、アッラーフ・アクバル(アッラーは偉大なり)×2回、ラー・イラーハ・イッラッラー(アッラーの他に真に崇拜すべきものはなし)」の11文から成る。

イード (‘id)：イスラームの祭日。シャウワール月(イスラーム暦10月)1日のイード・アル=フィトル(断食明け祭)とズル=ヒッジヤ月(イスラーム暦12月)10日のイード・アル=アドハ(犠牲祭)はイスラームにおける二大祭で、この日は午前中に集団でイード礼拝を捧げる。日本でも各地のモスクや貸ホール、公園などに大勢のムスリムが集まって集団礼拝が行われる

ジュズ (juz)：クルアーンを30分割した1つの部分。ラマダーン月の30日間、1ジュズ

つ読誦することで、ラマダーン終了時にクルアーン全体を読了することができる。本論文で調査協力者の発言中に出てくる「30 番目」や「29 番目」のジュズは、それぞれジュズ・アンマ（第 78 章から第 114 章まで）やジュズ・タバーラカ（第 67 章から第 77 章まで）を指す。

モスク (mosque)：ムスリムの礼拝所。『岩波イスラーム辞典』では、モスクは礼拝専用場所であり、家屋や事務所の 1 区画を必要に応じて礼拝場所とするムサッラーと区別されるが（森 2002: 963-4）、国内在住ムスリムの間でその区別が行われていない状態があり、さらにはアラビア語の「マスジド」やトルコ語の「ジャーミィ」といった呼び方も混在している。本論文では用語の混乱を避けるため、これらをすべて「モスク」に統一して使用する。

ムスリム (muslim)：イスラームの信徒。「イスラム教徒」という呼び方も一部にあるが、上掲の「イスラーム」と同じ理由で「教」をつけた表記を使用しない。なおアラビア語では、女性は「ムスリマ (muslimah)」となるが、日本のイスラーム研究においては専ら性別で区別しないことに倣い、本論文ではすべて「ムスリム」と表記する。

ニカー (nikāh)：イスラーム法に基づく結婚契約の儀式。結婚に対する男女双方の同意、女性の家族の同意、新郎から新婦への婚資金の 3 要件が、ムスリム男性の証人 2 人の立ち合いのもとに確認され、新郎新婦と証人が契約書に署名することで、合法的な結婚が成立する。

サラート (ṣalāt)：礼拝。イスラームの五行のひとつで、1 日に 5 回の礼拝を行うことが義務とされる。本論文で調査協力者の発言中に出てくる「ファジュール (fajr)」・「ズフル (dhuhr)」・「アスル ('asr)」・「マグリブ (maghrib)」・「イシャ ('isha)」は、それぞれ夜明け前・昼・午後・日没時・夜の礼拝を指す。

シャハーダ (shahāda)：信仰の証言。イスラームの五行のひとつで、カリマ (kalima) すなわち「ラー・イラー、イッラッラー（アッラーの他に神はない）、ムハンマド・ッラスール・ッラー（ムハンマドはアッラーの使徒である）」の 2 文をアラビア語で唱えること。

カダー (qadā)：定められた宗教義務を怠ったことの埋め合わせ。例えば定められた礼拝時間内に義務の礼拝ができなかった場合、カダーの礼拝によって埋め合わせる。ラマダーン中に、体調不良やその他の理由によって断食ができなかった場合にも、後日カダーの断食を行う必要がある。

クルアーン (qurān)：イスラームの聖典。預言者ムハンマドに下された神の啓示であるとムスリムは信じている。本論文においてクルアーンを引用する際には、日本ムスリム協会発行の『日亜対訳・注解 聖クルアーン』を使用することとし、引用の最後に章と節を表示する。なお、本論文で調査協力者の発言中に出てくる「スーラ (surah)」は、クルアーンの章を指す。

ラマダーン (ramadān)：イスラーム暦 9 番目の月名。この月に、イスラームの五行のひとつ

つであるサウム (ṣawm) を行う。サウムは断食だけでなく、さまざまな欲望を断ち、クルアーンを読誦し、信仰を深めることを指す。

ウドゥー (wuḍū') : 礼拝前の浄め。ウドゥーの意思表示をしてから、正常な水で、両手・口中・鼻中・顔・右前腕・左前腕・頭・両耳・右足・左足の順に洗うことが、礼拝を有効とする必要条件である。ウドゥーが失効しない限りは、礼拝の都度これを行う必要はない。

※本論文で調査協力者の発言中に使われる用語を引用する際には、上記の表記に揃えた。

例：イスラム教は「イスラーム」、イスラム教徒は「ムスリム」 など

そのほか、日本語で表現しても意味が通るものは、本文中に引用する際は日本語に変えた。

例：ヒジャーブは「スカーフ」、サラート／ナマーズは「礼拝」、サウムは「断食」 など

序章 研究の概要

1 研究の背景と目的

イスラームとは、自分にとって「最も大切なものである自分自身をそっくり神に引き渡すこと」(井筒 1979: 124)を表すアラビア語である¹。すなわち、自分に関わる一切を唯一の神に委ねるという生き方であり、その教えが預言者ムハンマドを通して啓示されたものと認める者をムスリムという。

店田廣文によれば、世界 200 カ国以上の国・地域に広がるムスリムの人口は、2019 年時点で 18 億 7783 万人と推計され、世界人口の 24.3%を占めている。インドネシアやパキスタンといったムスリムマジョリティ国家だけでなく、非イスラーム圏にマイノリティとして暮らすムスリムも多く、OECD 諸国には 2200 万人がいるという(店田 2021 :3-5)。なかでもヨーロッパは第二次世界大戦後、かつての植民地からあるいは二国間協定によって、マグレブ地域、インド・パキスタン、トルコ系の移民を安価な労働力として受け入れた歴史があり、半世紀を経てその子孫を含むムスリム移民の定住によって、2016 年の時点でヨーロッパの人口に占めるムスリムの割合は 5%、今後 2050 年までにその 2 倍以上に増加する可能性さえある(Lipka 2017: para.2)。日本に目を転じると、1980 年代以降のニューカマーと呼ばれる外国人の大量流入に伴いムスリム人口が増加しており、1984 年末に約 5100 人だった外国人ムスリムは 2023 年末には約 29 万 4385 人である(店田 2024: 3-4)。このほかに、日本人ムスリムが 5 万 4000 人いると推計され、これを合算すると、日本に暮らすムスリムは約 35 万人である。日本の人口に占める割合は 0.3%と、ヨーロッパの数値に比べればかなり低い²、外国人ムスリムと日本人ムスリムを合算したデータに注目すると、2010 年末の 11 万人が 10 年後の 2020 年末に 23 万人と約 2 倍に増加しているのに対し(店田 2015: 14, 2023: 89)、最も新しいデータではわずか 3 年で約 1.5 倍に増加していることから、日本においてもムスリム人口の急増が予測される。

上記の日本に暮らすムスリムの内訳をみるに、最も多いのは①1980 年代以降に来日し定住した外国人ムスリムであり、②かれらが日本人との国際結婚および自国からの家族呼び寄せによって形成したムスリム家庭に誕生した子どもたち、③入信した日本人、④帰化した元外国籍の者が続く(店田 2023: 93-4)。本研究では、①と④を現代日本におけるムスリム第一世代、②をムスリム第二世代と呼び(以下、「第一世代」と「第二世代」)、後者を研究

¹ アラビア語の Islam は、最も大切な所有物を他人の手に渡してその自由処理に任せるという意味の動詞 aslama の名詞形。これをイスラームした人という意味で能動分詞形にしたのが Muslim である(井筒 1979: 121-4)。

² 日本の総人口は、店田の統計の基準である 2023 年に合わせて、同年 10 月時点の 1 億 2435 万 2000 人として計算した(総務省統計局 2024)。

の対象とする。第二世代のルーツについては、店田による 2016 年末のムスリム家庭の世帯数のデータを援用すれば（店田 2018: 116）、親の一方が外国人である者が 59%、両親ともに外国人である者が 38%、両親ともに日本人である者が 3% であり³、ほとんどが「外国ルーツの子ども」である。その数を類推するに、援用元のデータにより約 5～8 万人と開きはあるが⁴、いずれにせよ日本に暮らすムスリムの中で無視できない数であり、今後さらなる増加が予想されることは間違いない。

日本のムスリム研究がこれまで対象としてきたのは主に第一世代であり、その宗教実践を中心とした生活実態やコミュニティを築いていく様子を明らかにする作業が続けられてきた。また世間の注目も、ハラールや土葬墓地といった話題性のある問題に十分過ぎるほどの注目が集まっている。しかし、第二世代に目を向けた研究は数えるほどしかない（工藤 2016; クレシ 2021b など）。外国ルーツの子どもに関しては「ハーフ」研究やエスニック集団ごとのニューカマー第二世代研究が、生まれながらに日本社会のマイノリティに分類されてきた当事者の語りを豊富に集め分析を進めているが、そこに第二世代の宗教的な背景による周縁化の経験は反映されにくい。宗教継承に悩む「宗教 2 世」問題はメディアの注目を浴び、新宗教研究の対象となりつつあるが、教団組織をもたないイスラームにおいてムスリムコミュニティ（以下、「コミュニティ」）と関りを持たない第二世代は多く、コミュニティからも研究者からもその存在が見過ごされがちである。かくして、第二世代が抱える問題

³ 店田によれば、2016 年末の「外国人と日本人の夫婦からなる世帯」は 1 万 1500 世帯、外国人夫婦世帯は 7500 世帯、同論文から類推して日本人夫婦世帯は 500 世帯である（店田 2018: 116, 123）。これらを合算した 1 万 9500 世帯を分母として各世帯の割合を計算した数字を援用。

⁴ 前掲注 3 の世帯数をもとに、店田（2018a: 115）にしたがい、各家庭の子の数を 2 人として計算すると、親の一方が外国人である第二世代は 2 万 3000 人、両親ともに外国人である第二世代は 1 万 5000 人、両親ともに日本人である第二世代は 1000 人、合算して 3 万 9000 人となる。このデータがとられた 2016 年末の日本のムスリム人口は 17 万人であるから（店田 2019a: 225）、2023 年のムスリム人口に当てて単純計算すると、親の一方が外国人である第二世代は 4 万 6000 人、両親ともに外国人である第二世代は 3 万人、両親ともに日本人である第二世代は 2000 人、第二世代全体の数は約 7 万 8000 人となる。ただし 2020 年末の「第二世代の日本人ムスリムが二万七千」（店田 2023: 94）という、より新しいデータがあり、これを親の一方または両親が日本人の第二世代の数を表すものと解釈して、この年の日本のムスリム人口 5 万人を 2023 年のムスリム人口に当てて単純計算すると 2 万 9000 人となる。これは 2016 年末のデータから類推した親の一方または両親が日本人の第二世代 4 万 8000 人の約 6 割であるので、この割合を 2016 年末のデータから類推した第二世代全体の数に当てて単純計算すると、2023 年の第二世代全体の数は約 4 万 7000 人となる。

や葛藤はコミュニティや研究者の関心を引くことなく、表に出てこないため当事者間で共有されることもなく、一部の第二世代が孤立していくその状況すら看過されがちな現実がある（クレシ 2021b, 2022）。本研究は、この第二世代に焦点を絞り、これまで十分に集められてこなかった当事者の語りを議論の俎上に乗せることで、かれらの抱える問題や葛藤の様相を明らかにしていくものである。

具体的には、第二世代の家庭環境と学校生活に焦点を当て、かれらが幼児期・児童期から青年期にかけてどのような環境の中でどのような経験をしてきたかを丁寧に読み解くことで、かれらが〈ムスリムであること〉にどう向き合うのかを検討することとし、以下の3つの問いを設定する。

問い1 家庭環境における第二世代の生きられた経験はどのようなものか

問い2 学校生活における第二世代の生きられた経験はどのようなものか

問い3 第二世代は〈ムスリムであること〉にどう向き合うのか

なお研究の方法として、第二世代への質的調査を通して得たデータを中心に、第二世代を取り巻く大人たちへの質的調査、第二世代および非ムスリムの生徒・学生への量的調査、第二世代の集会への参与観察から得られたデータを適宜使用する。

2 研究の対象

研究の対象は、日本に暮らす「ムスリム」の「第二世代」である。ムスリムの両親のもとに生まれた子がムスリムとみなされることについて、イスラーム法学者たちの見解は一致しているが（小野 2019: 78）、本人の自認については本研究で扱うものであるため、これをいったん留保し、ひとまずムスリム家庭に生まれた者を「ムスリム」として扱う。一方、「第二世代」という語の示す範囲は、研究者によって統一されていない。また、これまでムスリム第二世代といったとき、それが単にムスリムの子ども世代を指しているとしても、その語に代表されるのは宗教実践を遵守しイスラームを積極的に肯定する者とされがちであった。だがかれらの信仰形態や宗教実践のあり方はさまざまであり、なかにはイスラームに否定的な感情を抱く者さえ珍しくはない。そこで本節では、本論文で用いる「第二世代」という語の示す範囲を検討し、それによって示される者の多様性について確認しておく。そのうえで、研究の対象と筆者との関係について付言する。

(1) 第二世代の定義

ルベン・ロンバウトは、アメリカの移民研究において、外国で生まれ成人として来米した者を第一世代、アメリカで生まれ両親が外国生まれの者を第二世代とする一般的な定義を認めつつも、子どものときに来米した者や親の一方がアメリカ生まれの者がひと括りにされ、事実上の第二世代として扱われることを疑問視する（Rumbaut 2002: 47）。そし

表序-1 ルンバウトと宮島僑による第一世代と第二世代の区別

	移民の背景	ルンバウト	宮島僑
①	外国生まれ 成人期以降(18歳以上)に移住	1.0世代	第一世代
②	外国生まれ 青年期(13～17歳)に移住	1.25世代	
③	外国生まれ 学童期(6～12歳)に移住	1.5世代	第二世代
④	外国生まれ 乳幼児期(0～5歳)に移住	1.75世代	
⑤	ホスト国生まれ 両親が外国生まれ	2.0世代	
⑥	ホスト国生まれ 親の一方が外国生まれ	2.5世代	
⑦	両親がホスト国生まれ 祖父母の一方または双方が外国生まれ	3.0世代	
⑧	祖父母がすべて外国生まれでない	4.0世代	

出所：Rumbaut（2004: 1167-8）、Portes & Rumbaut（2024: 234）、宮島（2016: 251; 2021: 232）をもとに筆者作成

て、移民の出生地や入国時の発達段階と年齢によって詳細な区別を行うことで（Rumbaut 2004:1167-8）、第一世代の教育や職業の達成度と来米後の職業移動の相関関係、第二世代の教育水準の経済的成功への影響度合い、言語や文化への順応の程度と世代ごとの背景との関連を分析する。本研究の目的は人口統計学的特徴を分析することではないため、こうした詳細な区別は行わないが、「社会化（socialized）」の年齢が適応の軌跡に影響を及ぼすことが示されていることは念頭におきたい。

ヨーロッパ移民研究の文脈において宮島僑は、日本語の「二世」と「第二世代」を使い分け、前者が単純に「移民一世の子ども」という意味であるのに対し、後者はそのうちの「主な教育（社会化）をホスト国で受けた者」とあり、ホスト国での社会化に着目する（宮島 2016: 251）。そこに「来欧時の年齢の高い子ども（12・3歳以上）にこれを充てることは想定していない」と但し書きしていることから、およそ12歳までの教育によってその社会化が完了するという前提が読み取れる。ルンバウトが、1.25世代（表序-1の②）の適応プロセスを1.0世代（表序-1の①）のそれに近いと指摘していることから（Rumbaut 2004: 1167）、ホスト国での社会化という視点においてこの年齢の区切りは十分な妥当性をもつ。したがって本研究も宮島に倣い、およそ12歳までに日本で社会化が行われた者を第二世代と呼ぶこととし、ルンバウトのいう1.5世代（表序-1の③）と1.75世代（表序-1の④）をこれに含める。その年齢の区切りが日本の学校教育制度における小学

校修業年齢に相当するため、これをひとつの目安とし、外国生まれでも学童期までに来日して日本の小学校教育を受けた者は第二世代として扱う。

2016 年末現在の日本におけるムスリム家庭のうち、夫婦双方が外国人の家庭は 7500 世帯、外国人と日本人の夫婦からなる家庭は 1 万 1500 世帯と推計されるが（店田 2018: 116）、ルンバウトによるなら、前者の家庭に生まれた者は 2.0 世代（表序-1 の⑤）、後者の家庭に生まれた者は 2.5 世代（表序-1 の⑥）にあたる。なお店田の推計を援用すれば、このほかに夫婦双方が日本人の家庭も 500 世帯あると考えられる⁵。本研究では、これら 3 通りの親の背景をもつ者を区別せずすべて第二世代と呼び、ルンバウトが 3.0 世代・4.0 世代と呼ぶ者についても（表序-1 の⑦・⑧）、宮島が移民第二世代以降の世代をひとまとめに「移民第二世代」とするのに倣い（宮島 2021: 232）、第二世代と呼ぶこととする。

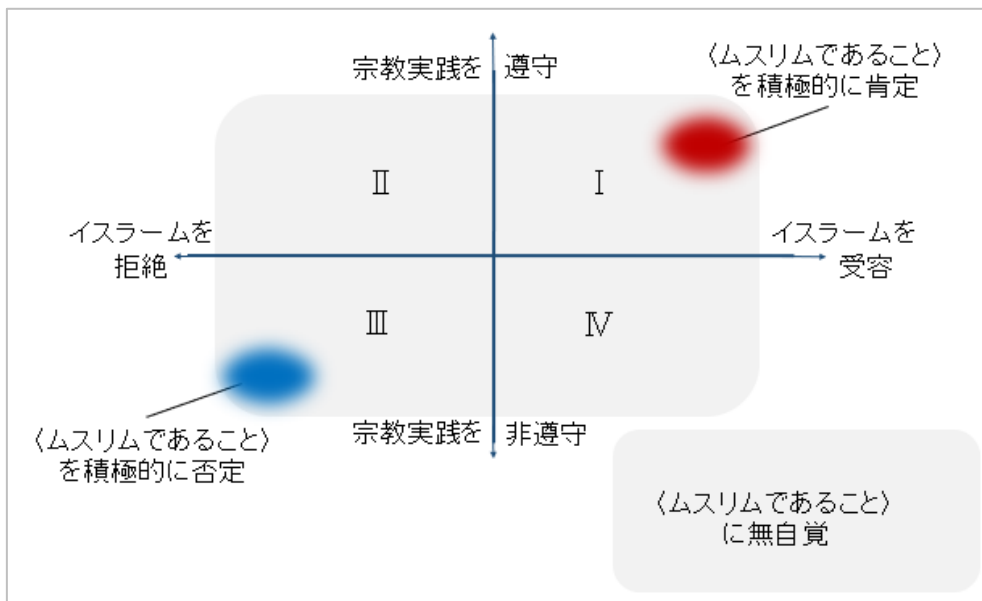
以上を整理すると、本研究で用いる「第一世代」は、外国で生まれ成人として来日した者であり、「第二世代」は、出生地にこだわらず主な教育（社会化）を日本で受けた者である。

（2）第二世代の多様性

注意すべきは、第二世代がすべて自身をムスリムだと自認しているわけではない点である。その理由の一つに、〈ムスリムであること〉に無自覚なまま成長する第二世代が一定数いることが考えられる（図序-1 の右下部分）。店田・岡井による親世代を対象とした調査では、家庭でイスラーム教育を「行っていない」と回答した者は 12.7%（店田・岡井 2010: 35）、また店田による日本への「帰化ムスリムを対象とする調査結果」の報告書の 1 回目と 2 回目の調査を平均すると、家庭で「イスラーム教育はしていない」と回答した者は 15.4%と（店田 2019b; 18, 2020: 18）⁶、イスラームの継承を行わない家庭が一定数あることがわかる。また後者の調査において、回答者自身の宗教実践として、「日常的に礼拝を行う」を選択しなかった者は 42.3%、「ハラール食品を食べる」を選択しなかった者は 19.7%おり、宗教実践の遵守にこだわらない者が相当数いることもわかる（店田 2019b;

⁵ 前掲注 3 による。

⁶ 調査は 2018 年と 2019 年に行われたもので、この設問では、1 回目の回答者 39 人、2 回目の回答者 26 人。家庭でのイスラーム教育についてどの程度行っているかを問う設問に対して、「イスラーム教育はしていない」と回答した者はそれぞれ 12.8%と 19.2%。回答にかなりのばらつきがみられることから、どちらか一方の値を採用せず、2 回の調査の値から回答者数を算出したものを再計算して平均した値を示す。これ以下、当該調査のデータに言及する際は、同様に扱うこととする。



図序-1 第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方 （著者作成）

17, 2020: 17) ⁷。こうした家庭に育つ第二世代が、〈ムスリムであること〉に無自覚なまま成長する可能性は大きい。

一方、家庭で宗教継承が行われても、イスラームの価値観を受容することができず、これを拒絶する者もいれば迷う者もいる。また、日常的な礼拝や断食、食の禁忌を守るといった宗教実践についても、上記調査の対象である帰化した親世代がそうであるように、第二世代もまたすべて欠かさず遵守するわけではない。図序-1は、イスラームの受容の程度を横軸に宗教実践の度合いを縦軸にとって示したものであり、第一象限の右上端の赤色の部分と第三象限の左下端の青色の部分とでは、〈ムスリムであること〉への向き合い方は大きく異なる。そしてこの両極端の間には、さまざまな向き合い方のグラデーションがあり、それぞれの象限に十人十色百人百様の〈ムスリムであること〉への向き合い方をうかがうことができる。

しかし、国内各地のモスクやイスラーム団体といったコミュニティで見かける若年層のムスリムは〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する者がほとんどであり、それは第一象限に分類される第二世代の一部にすぎない。だがこれを典型的な第二世代と思い込む親世代のなかには、ここから外れた我が子に失望し恥じそれを隠し、自らや我が子を責める者がいる。第二世代自身も、〈ムスリムであること〉に迷いあるいは否定する者はコミュニティを敬遠することが多いため、互いにつながり合うことは難しく、その葛藤を共有で

⁷ 上掲注と同じ調査。この設問では、1回目の回答者40人、2回目の回答者31人。宗教実践の遵守について問う設問に対して、「日常的に礼拝を行う」と回答した者はそれぞれ55.0%と61.3%、「ハラール食品を食べる」と回答した者はそれぞれ77.5%と83.9%。

きる存在に出会えないまま疎外感を抱えることになる。かれらは親世代そして当事者である第二世代から「見えない存在」となっており、そのせいで研究者からも顧みられることなくその葛藤に注目されることはない。本研究はこの「見えない存在」を含む、家庭で宗教継承が行われた子どもたちの〈ムスリムであること〉へのさまざまな向き合い方を検討するものである。

(3) 研究の対象との関係

ここで本研究における筆者の立ち位置を述べておく。筆者は日本人改宗者として、4人の第二世代を育てる母として、また名古屋のコミュニティで第二世代の居場所づくりに関わる者として、しばしば研究者に語りを提供する側に立ってきた。それはすなわち、筆者自身が長らく研究の対象になってきたということであり、安溪遊地が指摘するような、当事者がどうしても記録に残したいことと研究者の関心のずれに気づいているからこそ(安溪 2008: 68)、これを克服することが可能であるという利点がある。だが同時に、本研究においてはその対象である第二世代に極めて近い背景をもつということを意味し、それゆえに、当事者性に基づく調査研究に向けられてきた「客観性への疑念」(植村 2015: 49)という批判を、同様に受けることにもなる。実際、筆者が調査協力者に向き合う際には、かれらと同じ視点に立って、語られる経験を追体験するような聞き方で臨むことが多く、「日本社会でムスリムとして生きること」(安達 2017: 199)をめぐる葛藤にまつわる課題についての語りを、同感や共感⁸を隠して聞き通すのは難しい。それでは、厳密な客観的視座を有しない者は研究に向かないのだろうか。そうだとすれば、当事者の意思と研究者の関心のずれはいかにして埋められるのか。これらの疑問を解決するために、「一人称視点」あるいは「二人称的(共感的) かかわり」について以下に検討する。

普遍性や再現可能性を重視する自然科学において、研究者は客観的で中立的であることが求められる。だが諏訪正樹は、そうした客観的な観察こそが研究手法の基本中の基本であるとされてきた従来の「三人称視点による探求」と相補的な新しい研究論として、「一人称観点から世界を見る」ことを提起する(諏訪 2015: 4, 2020: 222, 236)。同様の視点は、マイノリティの人々の生きられた経験を拾い上げる過程でも、肯定的に用いられてきたものである。社会的弱者や被差別者などマイノリティのライフストーリーを記録してきた桜井厚も、聞き取りという行為を、語り手との相互行為を通してその経験を言語化し意味づけし再構築することとする。それは単に過去の出来事や体験が何かを聞き出すことなく、語りに状況操作や演技が含まれることすら受け止めて、「いま・ここ」を語り手と聞

⁸ 佐伯胖によれば、「同感」は、自分の経験や思い、情感を相手に投影すること、「共感」は、相手が見ている物事を相手の立場から捉え、その奥にある訴えを感じ慮ることである(佐伯 2017: 44-7)。佐伯は、前者を「一人称的かかわり」、後者を「二人称的かかわり」と呼んでいる。

き手がともに生きることである（桜井 2002: 28-31）。桜井のライフストーリー研究と親和性が高いとされる現象学的手法においても（岩崎 2018: 91）、生きられた経験は、客観的な現実を再現しているというより、「回想の中で作り上げられていくもの（村井 2000: 350）」である。したがってそこでは、客観性を担保するためあらかじめテキストから知りたいと思うものを指定しておくような「コーディング分析、分類、データの組織化と混同されるようなことがあってはなら」ず（Van=Manen 1990=2011: 56）、それとは対照的に「研究者自身の主観的な感じ方や確信の根拠が明確に示される」ことさえ厭わない（岩崎 2016: 24）。むしろ現象学的手法は、一人称的な観点から経験を探求することから始まっているのである（吉川 2017: 6）。

また障害をもつ当事者である稲原美苗は、研究の対象として三人称的に捉えられた経験と実際の経験との間の乖離に疑問を抱く（稲原 2018: 31）。稲原が「研究者の先入観や既存の理論」によって実際の経験が矮小化され「枠」にはめ込まれることにながかりしたように（稲原 2018: 33）、筆者もまた、研究者に語りを提供する際に、またその成果物を読む際に、何度か違和感を抱いたひとりである。研究のあり方によっては、「客観的に判断できるのは研究者であるという」実証主義の暗黙の前提ゆえに（桜井 2002: 3）、「調査される側」からの問題意識の提示が受けとめられにくく、そこに当事者と研究者との関心のずれが生じることがある（安溪 2008: 68）。それによって当事者が抱く違和感は、果たしてどれだけ研究者に届いているのだろうか。またそうした現実、客観的視座が必ずしも万能ではないことの証左ではないだろうか。

とはいえこれらの疑問は、ある特定の事象については当事者にしか語ることができないという意味ではない。前述の「一人称観点から世界を見る」ことを提起する諏訪は、「『内側からの現実』を捉えるには、本人が一人称的に語る以外に方法はありません」（諏訪 2015: 31）と述べつつも、二人称的な親しい人が当事者との対話を通して一人称的に観察し記述することは可能であるとし、その結果生まれた研究を、協力者にとっての「二人称研究」という（諏訪 2015: 4）。この協力者の「二人称的（共感的）かかわり」は、「一人称的視点から世界を見る」という点で、対話的構築主義や現象学的手法に重なるものであり、「三人称研究にはアクセスできない個別具体的な側面に着眼」するための方法論として（諏訪 2020: 222, 245）、その有効性が吟味されるべきだろう。すでに現象学的手法は、教育や医療、看護、福祉などの対人援助の研究分野において、「生きづらさ」の意味や本質に触れることのできる最も有効な方法として取り入れられている（岩崎 2016: 25）。そうであるなら、「生きづらさ」を抱えた第二世代の生きられた経験を描こうとする本研究においても、二人称的かかわりは有効であるといえよう。

イギリスの第二世代研究において、安達智史は「アウトサイダー」の立場の意義を主張する。そこでは、イギリスに暮らす南アジア系第二世代の調査を行う際に、自身が非イギリス人、非南アジア系、非ムスリムであること、また調査協力者との関係が「一回限り」のものであったことが、かれらのアイデンティティの戦術的な呈示に奏効したと述べられ

る（安達 2020: 135-6）。同じくイギリスのベンガル系第二世代に調査を行ったダニエル・デハナスも同様に、非ムスリムの白人のアメリカ人であるという自身の背景が、調査協力者にアイデンティティの戦術的な展開を促し、その自意識的な呈示を研究するために価値があると評価している（DeHanas 2013: 75）。だがここで気になるのは、研究者の非ムスリムという背景が、調査協力者に、ポスト9/11の社会的文脈の中で負わされたある種のスティグマを意識させてはいないかということである。スティグマのある人は、「自分が人に与える印象について自意識を働かせ計算づくにならなくてはならないので、自分は〈舞台に立って〉いる、と感ずる傾向がある」（Goffman 1963=2016: 34）ため、調査協力者がことさらに非ムスリムの聴衆を意識した語りを生産したとしても不思議ではない。安達は、「質問とは関係のない意見を表明するために、多くの時間を割いてしまうことが多々みられた」（安達2020: 403注3）と吐露しているが、その瞬間こそまさに調査協力者がアウトサイダーとの関係において、否定的なアイデンティティに抵抗し承認されることを目的とした語りを生産していたのだと考えられないだろうか。つまりここでは、聞き取りの過程が第二世代にとって「イスラームやムスリムについての誤解を解き、自身の宗教の正しい理解について説明しようとするプロセス」（安達2020: 133）となっていたのであり、アウトサイダーの視点こそが調査協力者の戦術的自己呈示を引き出すための重要な鍵であったといえるだろう。

それではこれらの調査協力者に、アウトサイダーでない研究者が聞き取りを行ったとしたら、どのような語りを引き出すことができるだろうか。三人称視点と一人称あるいは親しい人による二人称視点とでは、「みえる世界が異なる」（諏訪 2015: 10）という前提に立てば、まったく別の語りを得られるのは必至である。どちらがより真実に近いかということではなく、語り手は「語りを生産する演技者であって、十分に聴衆（インタビュアー、世間など）を意識して語る」（桜井 2005: 38）ものであるから、聞き手が異なればそれに合わせて新たな真実が呈示されるということにほかならない。では調査協力者に近い背景をもつ研究者は、かれらのどのような自己呈示を受け止めればいいのか。アーヴィング・ゴッフマンは、スティグマをもつ者は、それがどんなことかを経験している「同類」に「精神的支持を求め」「くつろぎ、やすらいだ気分ひたることのできる慰めを求める」と指摘する（Goffman 1963=2016: 43）。したがって、調査協力者の同類に向けた語りは、アウトサイダーに対峙する際の社会的文脈を配慮しない代わりに、より私的な領域での、例えば親世代や周囲の大人に対して抱える不満や怒りの発露となりやすい。第4章以降に引用する第二世代の語りには⁹、「親を殺したいっていつも、何度も思ってる（ザミン 男性 18 歳・9）」や「先生もお父さんもお母さんも何をしてたんだ！（サイダ 女性 18 歳・47）」といった、社会に向けた戦術的自己呈示とは異なる、むしろそういった社会に対する鎧を外したところにある本

⁹ 第二世代の語りの引用には、仮名と性別、年齢、表3-1のプロフィールに対応する番号をつけることとする。詳細は第3章を参照。

質的なものが呈示されている。これは同感や共感を隠して聞き通すのは難しいという筆者の立場に呼応したものであり、日本人改宗者として、また親世代の一人として行う主観的な相槌や意見の表明に対して、定型の語りではなく、「『言葉を探す』『主張を生成』というかたち」(清水・諏訪 2014: 125)で、かれらの本音が引き出された結果といえるだろう。

さらに、前出のザミンが調査協力の直前に「全部ぶちまけてくる」と周囲に漏らしていたことは、ゴッフマンのいう「精神的支持」を筆者に期待していたと考えられるし、初回は号泣し興奮して聞き取りを中断せざるをえなかった前出のサイダが、翌週の再調査時には打って変わって穏やかにしかも饒舌に話していたことは、初回調査で心の澱を吐き出せたことが何らかの「慰め」につながったと考えられる。実際、調査の後で「すっきりしました(サービラ 女性 30 歳・72)」と晴れやかな表情を見せる者は多く、調査後に私的な相談や報告というかたちでかれらと度々連絡を取り合う関係に発展することもある。また調査協力者を紹介してくれた者から、「ハニフに何度も『今日はありがとう』と言われました(ハニフの友人)」、「『すごく楽しかった』と言って帰ってきました(サリマの母)」と後日謝意を伝えられることさえもある。これらのことは、本心を吐露する場をほとんど与えられてこなかった第二世代が、「共感的に受容されたと感じられたときにカタルシスが得られ」たことで「語り手自身になんらかの変化がもたらされ」、「現在の自己の肯定」が促されるといった(小林 2005: 117)、前向きな経験をしたことの証左とはいえないだろうか。そうであるなら、二人称的にかかわりによる調査の意義をここにも見出すことができるといえよう。

とはいえ、調査協力者に近い背景をもつ場合の聞き取りには、いくつかの支障があるという指摘も少なくない。例えば年少者から年長者に特定の質問をすることが困難であるなど、コミュニティの規範やタブーに影響を受けたり(Rabe 2003: 157)、調査協力者が親やコミュニティの成員に伝わることを心配して個人的な問題を自由な態度で語れなかったり(Jacobson 1998: 49)といった懸念が挙げられる。前者についていえば、女性への調査が男性研究者に開かれていないムスリムコミュニティにおいては(店田 2015: 46; 川添 2017: 31 注15)、研究者の年齢よりむしろ性別が問題であるから、女性である筆者は男女どちらにも調査が可能であるという優位性をもつ。後者については、まず調査協力者のプライバシー尊重と秘密の遵守は研究を行う上で当然のことであり、この点は調査の際に伝えている。これに加えて、優等生的な回答をする必要のないことを感じてもらうため、筆者自身や筆者の家族の背景や経験を、コミュニティ内では憚られるようなものも含めて、導入の部分や相槌を打つなかであえて披露するようにしている。それが奏功しているのか、筆者の印象として、個人的な問題を語る際に躊躇する様子がみられた者はなく、それどころか競馬や麻雀といった賭け事や飲酒などハラーム(禁忌)¹⁰に関与しているとい

¹⁰ クルアーンには、「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。(第5章 90 節)」とあり、飲酒や賭け事はハラームとされる。

う、コミュニティ内では絶対に話題にできない私生活についての告白さえも複数人から語られている。「聴き手が主観を織り込んで発話した場合、話し手に対する共感が示されていれば、話し手は自らの考えを語る」(清水・諏訪 2014: 129)ことの好例だと考えられる。

なお客観性への疑念については、「研究場面では当事者としての特徴よりも、研究者としての特徴をより自覚しているように思われるので、研究者が当事者の特徴をもっていることがすなわち問題についての客観的視座を失うこととは言えない」(松本 2002: 96) という当事者研究の側からの反論を引くに留める。それより、当事者研究だからこその利点として「当事者と対話的な視座で考察をくわえることができる」ほか、研究者の問題意識や動機の強さや(松本 2002: 96)、人間関係の構築しやすさ、その文化の用語を知っていること(鈴木 2010: 69-70)などを挙げる研究者が多いことに注目したい。本研究の調査協力者も同様に、「余分な説明が要らないと言いますか、当事者じゃないとわからない世界観を共有しているという点で、何を言ってもうなずいてもらえるのは嬉しいです(アズマ 男性 23 歳・27)」と語っており、筆者自身は正確には当事者ではないが、調査協力者に近い背景によって、上記の利点を相応に有すると考える。また、当事者でもある研究者として聞き取りを行う宮下阿子¹¹、調査協力者との間に「あらかじめ体験の共有可能性が閉じられていないという〈期待〉がある」ことで、いわゆる「あるある話」を可能にさせると述べている(宮下 2014: 23)。筆者が行う聞き取りにおいても、こうした「あるある話」はしばしば登場するものであり、それが語り手との間に「生活文脈が共有された『信頼』という強い関係性」(諏訪・清水 2014: 4)を構築するのに役立っていると感じる。

調査協力者に近い背景をもつことの利点はもうひとつ、研究の対象へのアクセスの容易さにもある。ナタール・デッシングが、研究者であることを明かしたことで参与観察中の学習グループから強制的に追い出されることになったり、非ムスリムがいると安心できないという理由で参与観察を拒否されたりといった経験を語るほか(Dessing 2013: 41-4)、ジェシカ・ジェイコブソンは、白人のイギリス人であるために調査対象者の親たちに強い疑念を抱かせ、言葉の壁のせいで問題をさらに悪化させたと記している(Jacobson 1998: 48)。いずれの経験も、自身が「アウトサイダー」であるがゆえのアクセスの困難さであると説明されており、こうした困難を排除するのが「同じでありながら異なる(Dessing 2013: 45)」という立ち位置である。それは例えば、研究者と調査協力者が同じ民族的背景をもちながらある意味で周縁的な立場にあるとか、あるいは同じ宗教を共有しながらその形態が異なるといった関係であり、共通点が両者間の権力的不平等を軽減するのに役立つ、違いが過剰な相互理解の危険を最小限に抑えるために重要である。筆者と調査協力者

¹¹ 宮下は、当事者の経験を当事者が伝える「当事者研究」と、当事者の経験を当事者でもある研究者(他者)が伝える研究とを区別する(宮下 2020: 31)。なお宮下は、後者の立場から研究を行っている。

である第二世代とは、ムスリムでありながら親世代と子世代という違いがある点でこれに近い関係にあるといえよう。もちろん調査協力者の中には、親世代である筆者を前にして本音を語ることに抵抗を感じた者がいなかったと断言するつもりはない。語り手は常に自己防衛的な「状況操作や演技」(桜井 2002: 30) をするものであることを念頭に置きつつ、それでもなお、「アウトサイダーだけでは得られない大きな洞察を内部に通じる者が提供できる」(Rabe 2003: 156) という可能性を信じて、異なる背景の研究者による調査と補完し合うための語りを集める役割を果たしていきたい。

3 論文の構成

本論文は序章のほか、7つの章より構成する。全体を大きく2つに分け、第1章から第3章で本研究の分析の前提を述べ、第4章から第7章で調査に基づいた分析を論じる。各章の内容は、以下の通りである。

まず第1章では、研究の枠組みと先行研究について述べる。ヨーロッパのムスリム研究において近年用いられる「組織に属さないムスリム (non-organized Muslims)」¹²と「生きられたイスラーム (lived Islam)」¹³という概念を検討し、この枠組みに基づいて分析する本研究の新規性を示す。そして、すでに蓄積のあるヨーロッパの第二世代研究がこれまで明らかにしてきたことと、前述の枠組みを用いた研究が新たに示した視点を概観し、本研究の方向性を確認する。そのうえで、日本に暮らすムスリムに関する先行研究において、これまで何が語られ何が語られてこなかったのか、また今後何を明らかにしていくべきなのかを整理する。加えて、外国ルーツの子どもや宗教継承に葛藤する子どもなど、第二世代の経験に共通する関連研究の課題に着目し、考察の糸口につなげたい。第2章では、第二世代が日本に誕生するまでの経緯をたどり、日本におけるムスリムと第二世代がおかれている現状について述べる。具体的には、第一世代である外国人ムスリムの来日から定住、そしてムスリム家庭を築くまでの小史を概観し、その中で第一世代が日本社会と

¹² “non-organized”には、「脱組織化した」(安達 2017)や「組織化されていない」(岡井 2018: 187; 店田 2023: 96-100)や「制度や組織の外側にいる」(岡井 2024: 126)などと訳されており、定訳はない。本論文では、コミュニティに所属しないあり方への表現としていずれが適当かを数人のムスリム当事者に諮ったうえで、“non-organized”を「組織に属さない」と訳出することとする。

¹³ “lived Islam”を日本語に訳出した論考はまだないが、後述する“lived religion”については「生きられた宗教」「生きられる宗教」「生きた宗教」「生活の中の宗教」(安達 2017, 2020: 370; 守屋 2023: 99; 中村 2017: 245 など)とさまざまに訳出されている。一方、後述する“lived experience”については「生きられた経験」が定訳となっている(村井 2000; 岩崎 2016; 児島 2006 など)。そこで、本論文での“lived”の日本語訳を「生きられた」に揃えることとし、“lived Islam”については「生きられたイスラーム」と訳出する。

どう関わってきたのか、そして第二世代にどのような視線が注がれているのかを検討することで、日本のムスリム研究における本研究の位置づけを確認する。ここまでの背景を踏まえ、第3章で改めて本研究の問いの妥当性を確認し、調査の概要と分析の方法について述べる。

第4章と第5章では、「第二世代の生きられた経験はどのようなものか」を考察する。第二世代が抱える問題や葛藤にはさまざまな要因があるが、かれらを取り巻く環境として最も影響力の大きい家庭環境と学校生活に焦点を絞り、聞き取りや参与観察で得られた第二世代の語りを引用しながら、そこに共通する経験について考察を進める。具体的には、ムスリム家庭における宗教継承の理想と現実について、第二世代当事者の生きられたイスラームの経験を引用しつつ、家庭環境においてどのような問題や葛藤の原因があるのかを第4章で論じる。さらに第5章で、第二世代が経験する複合的な周縁化の要素について検討するとともに、教員や生徒・学生などの視点にも着目して、学校生活においてどのような問題や葛藤の原因があるのかを論じる。第6章では、5人の第二世代のライフストーリーを取り上げ、「第二世代は〈ムスリムであること〉にどう向き合うのか」を考察する。家庭や学校で直面する問題の解決や葛藤の克服のあり方はさまざまであるが、青年期の問いに、かれらなりの答えを見つけようと模索する生きられたイスラームの経験を丁寧に描いていく。第7章では、これまでの議論を振り返り、研究の問いに対する答えを見つけることを試み、最後に、本研究の学術的意義と社会的意義をまとめるとともに、残された課題と今後の展望について述べる。

第1章 研究の枠組みと先行研究

1 マイノリティとしてのムスリム研究における新たな概念

2020年の国際移民の数は2億8100万人であり、そのうち、全体の23%にあたる6300万人がヨーロッパ生まれである（DESA 2020: 5, 15）。このことは、ヨーロッパにはすでに何世代か前に国際移動してきた移民が定住化し、その子孫が数を増していることを意味する。その中の相当数がムスリムだという状況において（石川 2024: 235）、ムスリム移民の実態を捉えようとする研究がヨーロッパを中心に進められてきており、モスクやイスラーム団体、学習グループなどのコミュニティを構成する者の信仰形態や宗教実践が描かれてきた。しかし実は、そうした組織・集団に所属するムスリムはそうでない者より少数派であるため（Bectovic 2011: 1130）、これをもってムスリムの全体像を語ることは適当でない。また、非イスラーム圏に暮らすかれらがムスリムマジョリティ社会で行われるのと同等の実践を維持することは容易ではないため、個人レベルでの信仰や実践の形態はさまざまに変容しつつある。そこで近年、ヨーロッパのムスリム研究では、マイノリティとして生きる個々のムスリムの経験に注目する動きが始まったところである。この新たな概念と理論枠組みを以下に整理する。

(1) 「組織に属さないムスリム」

エミル・デュルケムによる有名な宗教の定義、「神聖すなわち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連帯的な体系、教会と呼ばれる同じ道徳的共同社会に、これに帰依するすべての者を結合させる信念と行事である」のあとには、「宗教観念は教会の観念から不可分である」という一文が続く（Durkheim 1912=1975: 86-7）。教会こそ宗教における本質的なものだと考えるなら、第二次世界大戦後のヨーロッパで進む教会離れは宗教の衰退を意味するものであり、世俗化論の展開は自然な流れだろう（McGuire 2002=2008: 425-6）。しかしトーマス・Luckmannは、「教会と宗教との無批判な同一視」を疑問視し、多様化した近代の人々が、教会によって提供される「宗教表象の詰合せ」を丸ごと受け入れるのではなく、自分の嗜好によって「いろいろな宗教的主題」を部分的に選択するようになったことを指摘する（Luckmann 1967=1976: 39, 152-153）。宗教が個人の選択に委ねられる「私事化」の過程を、宗教の衰退と捉えあるいは「見えない宗教」と捉える一連の議論は、ヨーロッパにおいてキリスト教が「公」の領域を支配していた歴史的背景を前提としている。

一方イスラームには、ウンマ（umma＝共同体）と呼ばれる共同体はあるが、これは仏教の僧伽やヒンドゥーのカーストなどを包括する「聖なる共同体」の概念に近いもので、キリスト教的な「教会」ではない（中村 2005: 90-1）。「人は全て個人として、一人々々みな裸一貫で神の前に立たされる」のであり、神と人間の関係は「垂直的關係に成立する」ため（井筒 1979: 29, 215）、教会のような組織を媒介とせずともムスリムは、「自らの意思にもとづ

いてアッラーと対話し、また罪を犯せば自らの責任においてこれを告白し、悔悟すればよい」(黒田 1980: 132)。つまりイスラームにおいて、宗教は初めから個人の選択に委ねられ私事化されたものだったといえるのではないだろうか。世界のムスリム 19 億人の信仰と実践が多様性の認容のもとに維持され継承されているのは、それぞれの国や地域の文化伝統に影響を受ける柔軟さがあるからであり、また神の唯一性やムハンマドの位置づけといった根幹部分は個人の嗜好によって揺らぐものではないが、宗教実践については異なるイスラーム法学者の見解を取捨選択する自由がある。いうなれば 19 億人が 19 億通りにイスラームを信仰しているのである。

しかし、宗教に「教会」があるという前提は、これまでのムスリム研究をモスクやイスラーム団体に注目させ、そこに積極的に関与するムスリムを代表化させてきた(Bectovic 2011: 1122, 1130)。ムスリム研究に関するヨーロッパで最初の国際会議が 1986 年に開催された際、ムスリム組織の設立とネットワーク化が議論の焦点とされていたことや、2000 年代になってもなお、組織で活動するムスリムが調査の出発点であったことが(Jeldtoft & Nielsen 2011: 1113-4)、その表れといえる。だが上述の通り、神との関係を「直接的、個人的なもの」(Hamidullah 1957=1983: 65)であると理解するムスリムにとって、組織に属するか否かはさほど重要なことではなく、実際、いずれのコミュニティにも属さないあるいは地域社会と継続的な関係をもたないムスリムは想像以上に多い(Bectovic 2011: 1130)¹⁴。ナディア・イエルトフトは、かれらを「組織に属さないムスリム(non-organized Muslims)」と呼び、組織に依存しないイスラームの形態を分析する概念として有用であると主張する(Jeldtoft 2011: 1134)。それは、特定の組織の主張を全体の代表とみなし偏った結論に至る危険性から(Bectovic 2011: 1126)、ムスリムの多様性を開放するものである(Jeldtoft & Nielsen 2011: 1117)。例えば、イエルトフトの調査に協力する組織に属さないムスリムたちは初めのうち、「私は実践していない」とか「私は良いムスリムでない」と自身が代表的ムスリム像にそぐわないことを訴えるが、聞き取りのなかでは、実践することが善良なムスリムであるという言説に異議を唱える(Jeldtoft 2011: 1140-1)。つまりそれは、これまでのムスリム研究が活動的で発信力のあるムスリムを「本物の代表者」と認識してきたことへの、当事者側からの異議といえるのではないか。無論これまで描かれてきたムスリム像も多様なムスリムの現実の一部ではあるが、ムスリムの全体像を捉えるためには、これまで代表的でないといみなされてきたむしろ多数派のムスリムにも関心を払うこと、すなわち「研究者によるイスラームだけでなく、ムスリムによるイスラームも議論の対象とする」ことが肝要である(Bectovic 2011: 1131)。

ただし組織に属さないムスリムは、当然ながら組織から「見えない存在」であるために

¹⁴ 2009 年のデンマークの統計から、モスクやイスラーム団体など各組織の構成員を合計した約 3 万 5000 人の、同年同国のムスリム人口 22 万人強に対する割合を計算すると(Jeldtoft & Nielsen 2011: 1115)、コミュニティに紐づいたムスリムは約 16%になる。

コミュニティ経由でたどり着くことはできない。調査協力者へのアクセスには工夫が求められ、例えば、ダニエル・デハナスは、ロンドンのイーストエンドの街頭や市場などで出会った若者に声をかけるというユニークな方法で (DeHanas 2013: 74) ¹⁵、ヨナス・オッターベックは、デンマークとスウェーデンの高等学校経由で調査協力者を探している (Otterbeck 2011: 1183)。イエルトフトも、自身が関心を抱く宗教性にアクセスすることが簡単でないことを告白し、人口統計学的な偏りがあるとしつつも「雪だるま式」を採用せざるを得ないと認めている (Jeldtoft 2011: 1139)。だがそうした地道な工夫こそが、私的な空間で宗教実践を行う者、宗教実践それ自体に無関心な者、イスラームに対して批判的な者を含めた多様なムスリムの日常に焦点を当てることを可能にする。

そしてイエルトフトは、組織に属さないムスリムがどのように自分たちの言葉でイスラームを意味付けているかを分析するため、「日々生きられた宗教 (everyday lived religion)」の理論枠組みを採用する (Jeldtoft 2011: 1138)。メレディス・マクガイアが「生きられた宗教 (lived religion)」 (McGuire 2008) と呼び、ナンシー・アンマーマンが「日々の宗教 (everyday religion)」 (Ammerman 2007a) と呼ぶこの枠組みは、すでにキリスト教やユダヤ教、さらにはニューエイジ運動の研究にさえ用いられてきたにもかかわらず、ムスリムに対してこうした視点は向けられてこなかった。よって、組織に属さないムスリムの日々の生活における生きられた実践やイスラーム理解の多様性に目を向け、ムスリム研究を新たな段階に進めたイエルトフトの功績は大きい。

(2) 「生きられたイスラーム」

フランスの宗教社会学において用いられていた「生きられた宗教 (la religion vécue)」の概念をアメリカに紹介したのはデイビット・ホールである (Hall ed. 1997)。それまで「公的宗教 (official religion)」に並置されてきた「民衆宗教 (popular religion)」という術語は、権威ある本物としての前者に対して非公式の劣ったものであるかのような高低の区別を想起させがちであるという議論の中¹⁶、この二項対立的枠組みを打破する新しい術語として「生きられた宗教 (lived religion)」が提起された (Neitz 2011: 47)。ホールは、『アメリカの生きられた宗教 (Lived Religion in America)』 (Hall ed. 1997) において、アメリカの宗教学者らが「神学や (例えば) 教会と国家の歴史については多くを知っているが、実

¹⁵ デハナスによれば、イーストエンドはイギリスで最もバングラデシュ人が集住している地域で、どの自治体よりもムスリムの割合が高く、そのほとんどが第二世代以降の若者である (DeHanas 2013: 74)。

¹⁶ 例えばレナード・ノーマン・プリミアノは、「民衆宗教」という術語が信徒を「毀損する」として、「ヴァナキュラー宗教」という術語を提唱しており、この「ヴァナキュラー宗教」の定義の中に「生きられた宗教」という表現が含まれている (Primiano 1995=2007: 130, 137)。

践される宗教についてはほとんど何も知らないし、一般信徒たちの日々の考え方や行動についてはほとんど知らない」ことを指摘する (Hall 1997: vii)。この論集には、「神学は、街頭や教会、神社や人々の居間といった単一の場合だけで作られるものではない」ことを説くロバート・オルシヤ (Orsi 1997: 9)、宗教の専門家ではない一般信徒の経験を優遇すべきであるというアンマーマンなど (Ammerman 2007b: 5)、生きられた宗教という概念を発展させるうえで重要な論考が収められている。

アンマーマンは同論集において、アメリカのキリスト教徒の宗教実践の多様性と社会との相互作用を描いたが (Ammerman 1997)、その後、アメリカのほかイギリス、スウェーデン、イタリア、スペインにおける「現場からの報告」を集め、キリスト教徒やユダヤ教徒らの豊かで複雑な経験の記述を『日々の宗教 (Everyday Religion)』 (Ammerman ed. 2007) にまとめている。「日々の」が表すのは、宗教行事や組織の外で起こる日々の活動を指す。一方マクガイアは、「生きられた宗教 (lived religion)」という術語を用いて、40年にわたる現場での調査から得た一般の人々の経験や実践についての豊富な事例をまとめている (McGuire 2008)。そこに描かれる、瞑想やガーデニングによる神秘的な体験や、宗教実践として社会活動、さまざまな文化資源を折衷した祭壇への祈りなどは、教会やシナゴグで行われる実践のみに注目してきたこれまでの宗教の概念からは逸脱したものである。だがマクガイアは、これまで宗教学者が扱ってきた概念を狭すぎるとし、「広い意味での宗教とは、人々が自分たちの世界をどのように理解するか、つまり自分たちが生きていくための物語である」と再定義する (McGuire 2007: 187-8)。「日々の宗教」そして「生きられた宗教」という術語は名称こそ違え、「宗教者の実際の経験を、制度的に定義された信念や実践という規定された宗教から区別する」 (McGuire 2008: 12) 枠組みとして、近年アメリカやヨーロッパに暮らすキリスト教徒やユダヤ教徒の経験や実践を、豊かにそして生き生きと描き出していく。

しかし前述の通り、ムスリムに対してこの視点は「驚くほど欠如している」 (Jeldtoft 2011: 1138)。それは、エドワード・サイードが指摘するように、イスラームに対する「個別化された行動はきわめてまれ」な、「その信徒の経験に含まれる実存的リアリティーを正当に評価したり検討したりすることのできない文化である」 (Said 1978=1993: 224) といった思い込みがヨーロッパにあったことが考えられる。

ようやくこの枠組みをムスリムに適用したのがナタール・デッシングやイエルトフトらであり、その共同研究の成果をまとめたものが『ヨーロッパの日々生きられたイスラーム (Everyday Lived Islam in Europe)』 (Dessing et al. eds. 2013) である。かつて外国人労働者や移民としての括りにあったムスリムは、ポスト9/11のヨーロッパで宗教的帰属によって識別されるようになったことで¹⁷、にわかに研究者らの関心を引くようになった。だが

¹⁷ 「ポスト9/11」は、2001年9月11日にアメリカで発生した同時多発テロ事件以降の時代や状況を指す用語であり、この文脈においては、メディアの拡散するムスリムへのステ

イスラームは、多くの国家でキリスト教が公的なものとして受け入れられているヨーロッパの文脈において「宗教的他者 (religious other)」であり、それゆえ差異が強調され、モスクやスカーフといったマジョリティ社会との対立や衝突の中で構築される「超可視的 (hypervisible)」な部分に注目が集まりやすい。その結果、ムスリム学生団体への参加やスカーフの着用、礼拝や断食といった目に見える宗教実践に熱心で活動的なムスリムが、これまでの研究の対象となってきた (Jeldtoft 2013: 25-7)。デッシングやイエルトフトらは、そうした研究からこぼれ落ちてしまうような「不可視的な」個人の宗教性に関心を移すために (Dessing 2013: 46)、商店や学校や職場などのより社会的な領域にまで注目の範囲を広げ、その中で宗教がどのように作用しあるいはそれらを横断してどのように展開するか注目する (Dessing et al. 2013: 2)。とはいえ、「生きられたイスラーム」の視点は、組織に紐づいたムスリムに関する研究に取って代わることを主張するものではない。これまでの研究を補完して、ヨーロッパのムスリム像をより現実に近いものとして描き出すために有用な、「視点の転換、視線の変更、対象の変更」なのである (Woodhead 2013: 11)。

(3) 日本のムスリム研究に求められる新たな視点

日本のムスリム研究は、その先駆的役割を果たしてきた早稲田大学アジア社会論研究室が 11 年間にわたり開催してきた「全国モスク代表者会議」¹⁸に象徴されるように、モスクやイスラーム団体、学習グループといったコミュニティに参加するムスリムを調査の出発点に置いてきた (工藤 2008; 上代ほか 2016; 川添 2017; 子島・服部 2019; 大橋 2021 など)。だがこうしたムスリムコミュニティはいずれも互助・共助的に形成されたもので (クレシ 2020, 2021a)、キリスト教の教会籍や仏教の檀家、神道の氏子のような、制度と信徒が不可分に紐づけられたものではない。早稲田大学の滞日ムスリム調査プロジェクトの一環として行われた「日本のモスク調査」の報告書を見ても、金曜日の集団礼拝参加者数は¹⁹、「数百人 (東京ジャーミイ)」、「200~350 人 (名古屋モスク)」、「少ないとき 1 人、多いとき 60 人 (新居浜マスジド)」と規模は違えどその数字はかなり大雑把であり (店田・岡井 2008: 18, 54, 70)、各モスクが利用者数を正確に把握できていないことを物語っている。これは、教会や寺院に相当するとみなされがちなモスクが、実は単なる礼拝用の建築物にすぎ

レオタイプが偏見や差別を増大させ、社会的な緊張が高まっている状況を示している。

¹⁸ 2012 年に名称を「全国マスジド (モスク) 代表者会議」に変更 (店田 2020: 3)。なお、第一回目のテーマがまさに「日本のムスリム・コミュニティを語る」であった (店田 2009)。

¹⁹ ハディースには、「タリク・イブン・シーハブは預言者が言ったことを伝えている：金曜日の集団礼拝はすべてのムスリムにとって必要な義務である。ただし、奴隷、女性、子ども、病人を除く (アブー・ダーウード)」とある (SUNNAH.COM a)。したがって、モスク利用者が最も多いのが金曜日の集団礼拝となる。

ず、これを利用するかしないかは個々のムスリムの判断に委ねられることを知れば、不思議なことではない。ムスリムにとっては、モスクのみならずイスラーム団体や学習グループを含め複数のコミュニティが横断的に利用可能であり、他方でそうしたコミュニティの活動に一切参加しないという選択肢もあるため、どこか特定のコミュニティに紐づいたムスリムというのは、その運営者や関係者を除いてほばいないということになる。このことはつまり、コミュニティを中心に調査を行ってきた日本のムスリム研究も、ヨーロッパのそれと同様に一部のムスリムの現実しか明らかにしてこなかったことを示している。

この「一部の現実」がどれほどの割合になるのかを測ることは困難だが、例えば店田による日本への「帰化ムスリムを対象とする調査結果」の報告書の1回目と2回目の調査を平均すると、「モスクでの集団礼拝に参加する」と回答した者は40.8%、イスラーム関係の「ほとんどの集まりに参加している」と回答した者は7.0%である（店田 2019b: 17-8, 2020: 17-8）²⁰。前述の『日本のモスク調査報告書』（店田・岡井 2008）に記された金曜日の集団礼拝参加者数に大きなばらつきがあるのは、週に1度の義務の遂行ができるならいずれのモスクでも礼拝できるためであるが、金曜日が休日でない日本では、昼の休み時間に参加する者が多く、職場や学校に近いモスクが選ばれやすい。そうした利用者は礼拝後すぐにモスクを退出するので、隣で礼拝しているムスリムの名前すら知らないことも珍しくなく、モスク運営者や関係者からその存在を把握されていない可能性は大きい。これに対して、週末に行われるコミュニティ内の集まりは、親睦を深め情報を交換する場として機能しており、一般的に食事が提供され、定期的な利用者が多い。どちらを一部の現実と捉えるかは議論の余地があるが、当事者にとって特定の組織に属しているという意識をもちやすいのは後者であろう。そうだとすれば、日本のムスリム像は1割にも満たない少数派のムスリムを代表として形作られてきたものだということになる。

こうした現実を岡井宏文は「代表性問題」と呼び、「制度や組織の外にいるムスリムをも含めた日本のムスリムの多様なありよう、スペクトラムを捉えていく営み」によってこの課題を乗り越えるべきこと、そのためには生きられたイスラームの具体的な事例の積み上げが必要であることを主張する（岡井 2024: 126-7）。とはいえ日本のムスリム研究において、non-organized Muslims の概念はいまだ一般的ではなく、岡井や店田廣文の最近の論考に「組織化されていないムスリム」（岡井 2018: 187; 店田 2023: 96-100）や「制度や組織の外側にいるムスリム」（岡井 2024: 126）といった訳語によって言及がみられるのみである。今後、その対象の範囲を広げた研究が進んでいくことが予想される。

一方、Lived Islam の枠組みに関して述べられた論考はまだない。しかし、安達智史が日

²⁰ 前掲注6と同じ調査。この設問では、1回目の回答者40人、2回目の回答者31人。「モスクでの集団礼拝に参加する」と回答した者はそれぞれ32.5%と51.6%、イスラーム関係の「ほとんどの集まりに参加している」と回答した者はそれぞれ10%と3.2%。2回の調査の値から回答者数を算出したものを再計算して平均した値を示す。

本人女性改宗者の分析を行うにあたり、『日々生きられる宗教』という枠組みを用いつつ、組織的な宗教活動に必ずしも参与していないムスリム女性の分析をおこなう」（安達 2017: 186）と述べている。そこでは、一般にスカーフに表象されるムスリム女性とは程遠い、しかしムスリムであることを否定しない日本人女性改宗者の個人化した戦術や資源に焦点を当て、かれらが「これまで生きてきた日本社会と、新たに加入したイスラームの価値や実践の間の断絶を繕う」（安達 2017: 201）ために奮闘する具体的な事例が提示される。安達によるこの論考は、non-organized Muslims と Lived Religion の両概念が日本のムスリム研究に取り入れられた最初のものであり、この新たな事例の積み上げは、前述のヨーロッパの生きられたイスラームになぞるなら、これまで明らかにされてきた日本人女性改宗者に関する研究を補完して、日本のムスリム像をより現実に近いものとして描き出すために有用なものである。

第一世代の流入から間もないうちは、宗教的他者である外国人ムスリムに注目が集まり、その超可視化された信仰形態や宗教実践が研究の対象となるのは自然なことであった。その際、コミュニティ経由での調査が第一選択肢とされてきたのも、アクセスの容易さを考えれば当然である。だがすでに流入から40年が経過し、コミュニティを構成する活動的な人々に関する研究の蓄積がある程度達成された今、次に目指すべきは、日本に暮らすムスリムのおそらくは多数派である人々の「生きられたイスラーム」を明らかにすることではないだろうか。本研究が対象とする第二世代は、「日本社会でムスリムとして生きること、あるいは日本人としてイスラームを実践すること」（安達2017: 199）という、安達の論考に登場する日本人女性改宗者とまったく同じ課題を抱えている。この一見共存が困難と思われがちな価値観のもとで葛藤する第二世代を、生きられたイスラームの視点を通して観察し、その経験や心情を丁寧に描いていく本研究は、non-organized Muslims と Lived Religionの両概念を日本のムスリム研究に取り入れた安達の研究に続くものであり、対象を第二世代に絞ったものとしては本邦初のものである。

2 ヨーロッパのムスリム移民と第二世代研究

さまざまな人種宗教が混在しているアメリカやカナダでは、移民を受け入れてきた歴史も長く、ムスリム移民は国家を構成するいくつもの要素のひとつにすぎない²¹。これに対し、ヨーロッパにおけるムスリム移民は、ここ数十年で急増したマイノリティ集団であり、ホス

²¹ アメリカで移民が全人口に占める人口割合は、14.3%（Moslimani & Passel 2024）、その出身国は多い順に、メキシコ、インド、中国、フィリピン、エルサルバドル（同前）。カナダで移民が全人口に占める人口割合は、23.0%（Statistics Canada 2021a）。その出身国は多い順に、インド、フィリピン、中国、シリア、ナイジェリア（Statistics Canada 2021b）。移民が人口を占める割合は多いが、そのなかでムスリム移民が目立って多いとはいえない状況にある。

ト国のマジョリティ側から明らかに超可視的な存在として他者化されがちである点が、日本におけるムスリムの現状に近い。また、国際移民の 23%がヨーロッパ生まれであることから (DESA 2020: 15)、ムスリム移民の第二世代²²に関する研究の蓄積は厚い。そこで本節では、ヨーロッパのムスリム移民とその第二世代に注目して先行研究の検討を行う。その多くは、ホスト社会側から見えるマイノリティ集団としてのムスリムを描くものであり、かれらを取り巻く社会・政治環境に「抗議する政治的勢力として言及される傾向」(安達 2020: 371)にある。だがその一方で、個人としての第二世代の経験に焦点を当てた、生きられたイスラームを描こうとする試みも始まっている。それらを以下に概観する。

(1) 社会的争点の渦中にある集団としてのムスリム

ヨーロッパでは第二次世界大戦後、かつての植民地からあるいは二国間協定によって、マグレブ地域やインド・パキスタン、トルコなどから安価な労働力として移民を受け入れ、その数は 1960 年代の戦後復興期をピークに増え続けた。1973 年の石油危機以降、経済低成長時代に入った各国は移民の受け入れを停止するが、それが駆け込み入国や出身国からの家族呼び寄せを加速させ、さらなる移民の増加を招く結果となる。現在多くの国で子孫を合わせた移民人口は 2 割以上、その中の相当数がムスリムだとされる (石川 2024: 235)。

移民初期の子どもたちは、両親ともに移民であることから言語・学習面や学校参加での親のサポートが得られないため (植村 2016: 114)、平均して学業達成度が低く、親世代と同じ不熟練労働に就く選択肢しかなかった (宮島 2016: 253)。だがその後、ホスト国の言語を母語として育ちホスト国で社会化された移民第二世代が労働市場に参加するようになって、職への道が容易に開かれない状況は変わらず、挫折感を抱く者は多い (宮島 2016: 258)。かれらが直面する失業と不安定雇用は、学業達成度だけが理由ではなく、ムスリムという集団へのある種の「否定的なまなざし」によるものであることは否定できない。例えばフランスでは、移民第二世代の方が同階層の全国平均より学業達成度が高いにもかかわらず失業率は全国平均の 2 倍以上、採用面接に進める確率は同学歴の白人フランス人の 5 分の 1 以下であり (森 2016: 258)、スペインでも、十分な教育を受けたマグレブ系移民が就職困難に直面している (Murshed & Pavan 2009: 25)。イギリスの 24 歳までのムスリムの 5 分の 1 は失業しており、25 歳以上の失業率も全国平均の 3 倍以上という数字があり、オランダで行われた社会実験では、イスラーム風の名前で採用面接に進めた者の割合は伝統的なオランダ名の場合の半分以下であったという結果もある (Murshed & Pavan 2009: 21, 27)。これらの報告は、ヨーロッパのいたるところでムスリムという集団が社会的に排除の圧力にさらされていることを示している。

イエルトフトは、それまで「外国人労働者」「アジア人」「アラブ人」と呼ばれていた人々

²² ヨーロッパではすでに移民第二世代以降の世代が誕生しているが、序章で述べた通り、宮島 (2021: 232) に倣いこれをひとまとめに「移民第二世代」とする。

が「ムスリム」という宗教的な帰属によって括られるようになった時期を、ポスト 9/11 のことだとする (Jeldtoft 2013: 25)。宮島喬も、1990 年代のある時期以降、「途上国出身」「第三世界出身」という呼び方が「イスラーム移民」に変わったことを特筆しており (宮島 2016: 276-7)、それよりもっと早い 1980 年代半ばからムスリムへの差別が始まったという指摘もある (浪岡 2013: 70)。いずれにせよ、ムスリムがホスト国の「価値観に馴染まない存在」として問題視されるようになったのは、ホスト国で教育を受けホスト国との親和性が高まっているはずの移民第二世代の時代になってからのことである (森 2016: 258-9)。これを象徴するのが、1989 年フランスで起きたスカーフ事件だろう²³。それまで見慣れていたはずの移民のスカーフが、この時期になっていきなり「宗教的狂信の印」として拒否されることになったのは (植村 2000: 43)、ムスリムという移民集団への「政治社会の眼が変わった」からにはほかならない (宮島 2016: 279)。

こうしたまなざしの変化は、すでに文化的には統合されながらしかし社会的には差別や排除を経験する第二世代の「幻滅と怒り」を招き (宮島 2016: 259)、それが非行や暴力につながることもある。自身も過激主義に染まった経験をもつアフマド・マンスールが、「過激なイスラム原理主義の説教者は子どもを狙って狩りをしている」と述べているように (Mansour 2015=2016: 48)、「(イスラーム主義者などの) 人の弱みに付け込む言説」に感化されやすい状況にある若者は、卑劣な集団に取り込まれやすい (Zuber 2023: 53)。2000 年代に入って相次いで起きた、スペインの列車爆破、オランダの映画監督殺害、フランスの郊外暴動、イギリスの地下鉄爆破や空港爆破未遂、ドイツの列車爆破未遂などは²⁴、いずれもホスト国育ちの移民第二世代が関わったものとされる。自分たちの社会の内部に不満を抱えた若者が育っていることに気付いたホスト国では、「ムスリムへの恐怖感で増殖された不寛容の台頭」 (Zuber 2023: 57) により、ムスリムを標的とした暴力事件やモスクへの襲撃、イスラーム系小学校への放火など、ムスリムを標的とした暴力事件が頻発するようになる (Murshed & Pavan 2009: 17-27)。2010 年代に入っても、フランスの出版社襲撃²⁵やそれに対する報復とみられるモスク襲撃や爆破事件、ムスリムを狙った殺傷事件など²⁶、もはや

²³ 1989 年、パリ郊外の中学校でスカーフを着用して登校したマグレブ系移民の女子生徒 3 人が、ライシテ (政教分離の原則) に反するとして退学処分になった事件。

²⁴ それぞれ順に、2004 年 3 月、マドリッドで起きた 3 つの駅で 4 つの列車が爆破された事件、2004 年 11 月、アムステルダムで起きたイスラームを嘲笑する内容の映画を作成した監督の殺害、2005 年 10 月、パリ郊外で起きた 1 万台の車両が放火された暴動、2005 年 7 月、ロンドンで起きた 3 つの列車と 3 台のバスが爆破された事件、2006 年 8 月、イギリスからアメリカに向かう 10 機の旅客機を爆破させる計画を未然に阻止した事件。

²⁵ 2015 年 1 月、パリで起きた預言者風刺画に抗議する出版社襲撃事件。

²⁶ 例えば南仏では、上掲注の事件から 1 週間のうちに、複数のモスクへの銃撃事件と豚の

どちらが先に始めたのかわからないほどに対立は深まり、憎しみと暴力の連鎖は途切れることがない。

いまやヨーロッパ各地で、反イスラームを掲げる政治家が露骨な人種差別的発言を発信し²⁷、ナショナル・ポピュリストによる作品やメディアの論調がムスリムへの偏見を膨張させ²⁸、ムスリム移民は「脅威」あるいは「遅れた」存在であるとする言説が広まり（義澤 2023: 63）、それらが支持される状況にある。だがそこで描かれるイスラームは、暴力や女性蔑視、家父長主義といった極端なまでのステレオタイプであり、憎悪が向けられているのは、「一枚岩的で、人間の日常経験をさげすむ、粗野で還元的で普遍的」（Said 1978=1993: 224）、顔の見えない想像上のムスリムという移民集団である。ホスト国民は「ムスリムによってヨーロッパのアイデンティティが危機に瀕している」（浪岡 2020: 243）ことに焦燥感を抱き、「自らの攻撃・排除する対象を、実際には知らず、識別もかなわず、幻想・錯覚のなかでつくられた対象の排撃を叫んでいる」（宮島 2016: 308）、そこでは、一般のムスリムのほとんどがホスト国の「法秩序や社会常識の枠内で生活しているというあたりまえの事実」が見過ごされている（石川 2018: 165）。

宮島によれば、ヨーロッパの移民第二世代の行動を分析してきた研究者の多くは、「社会的な争点がつねに重要性を持っていて、失業、雇用差別、社会的排除などが訴えられている」と考えており（宮島 2016: 304）、そこから個人としてのムスリムの顔は見えにくい。それでは、社会的争点の渦中にあるマイノリティの集団としてのムスリムではなく、組織化された「最も敬虔な人々」（Otterbeck 2013: 115）や超可視化された「エリート経験」（Woodhead 2013: 9）でもない、ヨーロッパのムスリムの大部分を占める「一般信徒たちの日々の考え方や行動」（Hall 1997: vii）はどのように描かれるのだろうか。

（2） 生きられたイスラームの視点から見る第二世代

一般信徒たちの日々の考え方や行動を明らかにするものとして、生きられたイスラームの枠組みが有効であること、そして近年、この視点をヨーロッパに暮らすムスリムに適用した研究が進められていることは前節に述べた。そのうち、第二世代の個人的な経験に焦

頭部と内臓が吊される事件、ムスリムへの銃撃事件と刺殺事件が起きている（在マルセイユ日本国総領事館 2015）。

²⁷ 例えば、2022年のフランス大統領選や2023年のオランダ大統領選などでは、反イスラームを掲げる候補者が公けに人種差別的発言を弄することで支持され、得票数を上げている（Joseph 2022; Kassam 2023 など）。

²⁸ 例えば、ヨーロッパがムスリム移民によって脅かされていると主張する『西洋の自死（The Strange Death of Europe）』（Murray 2017=2018）やイスラーム政権に支配されるフランスを描いた小説『服従（Soumission）』（Houellebecq 2015=2015）は、数十か国で翻訳され、各国でベストセラーとなっている。

点を当てた論考を以下に概略する。

デハナスは、非常にユニークな調査方法で、イギリスの第二世代のアイデンティティ形成に宗教と文化がどのように影響するかを論じている (DeHanas 2013)。すなわち、街頭や市場などで出会った若者に声をかけることで、イスラームの実践をしない者や常習的に大麻を吸っている者までも含む、組織に属さない 18 歳から 25 歳の第二世代 36 人にアクセスする。そして、「アジア人」「イギリス人」「ロンドンっ子」「ベンガル語」「ムスリム」などアイデンティティにかかわる選択肢を記した 18 枚のカードを、個人的に共感できる順にランク付けさせることで、かれらの動的な自己定義の様子を観察した。すると、宗教実践の度合いにかかわらず、第一に選ばれることが多かったのが「ムスリム」であり、そのカードを選んだ理由についての語りからは、親の文化的・宗教的期待に対して、また国家やメディアが描くポスト 9/11 のムスリム像に対して、かれらなりにアイデンティティを再定義しようとしている様子が観察された。そして第二世代のアイデンティティ自認のための戦術的²⁹スタイルを、先行研究から「連続型」・「文化の狭間型」・「ハイブリッド型」・「脱文化型」の 4 つに分類し³⁰、イーストエンドに住むベンガル人の第二世代が、ある部分は脱文化、ある部分はハイブリッドという強力な組み合わせを用いる「弾力的な正当性 (elastic orthodoxy)」をもって多様な影響力に対抗していると結論づける (DeHanas 2013: 82)。

オッターベックが論じるのは、スウェーデンとデンマークの第二世代の信仰と宗教実践についてである (Otterbeck 2013)。高等学校経由でアクセスした民族的に異なる 17 歳から 19 歳の第二世代 9 人のうち、8 人がムスリムを自認しており、そのうち 6 人が時折でも礼拝などの宗教実践を行っていた。ムスリム家庭に育つかれらにとって、宗教的な儀式のやり方を知りイスラームの中心的な教義や物語を知っていることは、家族の前での自己呈示やムスリム家庭の一員であるという個人的な感覚のために重要であり、ムスリムを自認しない 1 人でさえクルアーンを何度も読んだことがあり、礼拝のやり方を知っていた。だが一方で、かれらは日々の生活のなかで経験する差別的な冗談や中傷によって、自分たちの宗教性を公けに披露することの危険性も知っている。宗教実践はあくまで私的なものとして分けられ、イスラーム的な服装や礼拝のような儀式、その他の目に見える差異につながるもの

²⁹ デハナスは、ミシェル・ド・セルトーに従って「戦略 (strategy)」と「戦術 (tactics)」という語を使い分け、前者は親やメディア、国家、イスラーム機関といった制度側による計画的な行動、後者はそれを出し抜くために個人が用いる手段であると述べる (DeHanas 2013: 69-70)。

³⁰ それぞれの戦術スタイルは次の通り (DeHanas 2013: 70-3)。

- ①連続型：第一世代との間に強い結びつきがあり世代間の連続性がある
- ②文化の狭間型：イスラーム的価値観と西洋的視点との間で揺れ動く
- ③ハイブリッド型：イスラームと西洋との文化世界を融合させる
- ④脱文化型：イスラームを第一世代の伝統主義的な文化と切り離し理解する

は公けの場では避けなければならない。ムスリムがマイノリティであるヨーロッパでは、学校では宗教実践を行わず、家庭ではその帰属を保証するためにイスラームの規範を遵守し知識を示すという戦術が有効とされる (Otterbeck 2013: 131-2)。

また、生きられたイスラームの枠組みへの言及はないが、山下泰幸は、「名前のない抽象的なムスリムではなく、一人の個人としてフランス社会を生きる姿を捉える」(山下 2018: 45) ことを目指し、学業および職業上の成功をおさめた一人の第二世代の語りを取り上げる。そこでは、フランスの世俗的規範と家庭で継承される宗教的規範との間に生じる葛藤を乗り越える解決策として、積極的な宗教実践を伴わない「順応型イスラーム」が示される。それは、「フランスの文化が多分に組み込まれたハイブリッドなイスラーム」(山下 2018: 53) であり、イスラーム嫌悪の激しいフランス社会の構造的圧力のもとで、ライシテと無矛盾なかたちで信仰を保つための戦術といえるだろう。

一方、安達は、組織に属さないムスリムが意識されているわけではないが、民族的にも年齢も多様な 89 人もの第二世代の生きられたイスラームの語りから、かれらがポスト 9/11 という社会的文脈の中でどのようにアイデンティティを管理しイギリス社会へと統合されるのかを分析する (安達 2020)。調査協力者へのアクセスがモスクやイスラーム団体経由であるためか、すべての調査協力者がムスリムを自認する者であり、2 人を除いて他の全員がイギリス人であることと〈ムスリムであること〉の両立に成功している。かれらがイギリス人としてのアイデンティティを有し、イギリス社会で生きること満足しているその背景には、イギリスが多様性を尊重する多文化空間であることもあろうが、第一世代が依拠する「伝統」を再帰的に問い直すことで宗教を文化から切り離し、新たなヨーロッパという文脈の中でイスラームを解釈していることが大きい。かれらは、イギリス社会において否定的な評価が与えられている一部の慣習をエスニックな文化に帰属させることで、イスラームをより純粹かつフレキシブルなものとして再定義しており、それを可能にするのがイスラームの知識である。学ぶ機会に乏しかった第一世代と異なり、第二世代はインターネットを駆使することで著名な学者や説教師によるテキストや映像とつながり、あらゆるテーマについて数多くの知識を容易に取得することができる。知識によってかれらは、イスラームを西洋社会の制度や価値観と矛盾しないものとして理解し、自身のアイデンティティとして積極的に引き受けることを可能にする (安達 2020: 222-3)。

同じイギリスの第二世代でありながら、ジェイコブソンによる少し古い調査では、調査協力者である 33 人のパキスタン系第二世代のほとんどがアイデンティティの問題に関してある程度の自信喪失や不確実性を表明している (Jacobson 1998: 71)。そこでは「文化の狭間型」にあるような二つの価値観の間で混乱する第二世代も描かれるが、さまざまな文化形態の要素を融合させる驚くべき能力を示す「ハイブリッド型」の戦術がより強調されている (Jacobson 1998: 72)。注意すべきは、この調査が 9/11 以前に行われたものであるということである。かれらがイギリス人であることとの両価性に悩んでいたのは、パキスタン人あるいはアジア人としてのアイデンティティについてであり、〈ムスリムであること〉ではな

かった。それは当時、〈ムスリムであること〉についてスティグマが貼られる危険性も「メディアによる描写に警戒する」（安達 2020: 173）必要も現在ほどに大きくはなかったからだろう。だが安達の調査対象者は、イスラームと結びついた差別や否定的な言説の中で、「自身のアイデンティティを意識化し、それについて考えたり、自己嫌悪に陥ったり、あるいはそれを擁護したりするよう」（安達 2020: 153）促されて日々を過ごしている。かれらは、ジェイコブソンの調査時とは一変してしまったイギリス社会を生き抜くために、イスラームの知識を駆使して〈ムスリムであること〉に再帰的に向き合おうとしている。

安達の調査協力者によって繰り返し語られる知識の重要性については、デハナスやオッターベックの調査協力者からもしばしば語られていた（DeHanas 2013: 81; Otterbeck 2013: 131 など）。ただしその知識は、安達やデハナスの論考においては「脱文化型」の戦術に有効な手段として、すなわち伝統主義的な文化にとらわれた親世代のイスラームから自由になるために必要なものとして語られるのに対して、オッターベックの論考においては、親世代に受け入れられるための伝統に関する知識であり、そこで取られる戦術は「連続型」である。この違いは、イギリスとデンマークという異なる社会環境によるものかもしれないが、あるいはオッターベックの調査協力者の年齢層が 10 代であり、家族への依存度が高いことも戦術の違いに影響していると考えられることもできる。これを裏付けるものとして、安達の調査協力者のほとんどがイスラームを自身の積極的なアイデンティティとして引き受けることに成功している中、これに困難を抱える者が 2 人だけいたことが思い出される（安達 2020: 240-3）。この 2 人はいずれも 17 歳であり、オッターベックの調査協力者の年齢層にちょうど重なる。少ない事例からではあるが、家庭の価値観を宗教と文化に区別できるだけの知識を十分に得ることは、この年代の第二世代にとってそれほど簡単ではないこと、そして家族への帰属の優先度が高い年齢層の第二世代には、親世代からの宗教的な期待あるいは圧力に異を唱えることが難しいことが推察できる。

ところで、イエルトフトは、「研究者が調査協力者をどのように選ぶかということは、つまりムスリムが誰であるかを方法論的に定義していることである」と指摘する（Jeldtoft 2013: 7）。デッシングもまた、ヨーロッパのムスリム研究が活動的で敬虔なムスリムを優遇し、組織に参加しない者を除外したかたちで行われていることを批判する（Dessing 2013: 40）。いずれも、組織に紐づいたムスリムのみに目を向けてきた研究への反省であり、そこで見落としてきた組織に属さない存在にまで視界を広げることの必要性を主張している。しかし、見落とされてきた者の声を拾い上げる作業は、活動的で敬虔なムスリムを対象としたそれよりはるかに難しい。特にホスト国で社会化された第二世代は、宗教性を公けに披露することを避ける傾向にあり（Otterbeck 2013: 131）、第一世代以上に組織に紐づいていないために、アクセスの方法に工夫が求められる。それゆえに調査協力者をどのように選ぶかの自由度は小さく、ようやく拾い上げた声も、社会環境や年齢層や民族の偏りから、現実の一側面をわずかに反映するにすぎない。それでも、街角や市場あるいは高等学校やムスリムコミュニティ経由などまったく異なる方法でアクセスした、社会環境も年齢層も民族も

さまざまな第二世代の語りを接ぎ合わせる作業の積み上げによって、ヨーロッパの第二世代像は少しずつ現実に近づきつつある。しかしながら日本において、第二世代に関する研究の蓄積が薄いのはさることながら、生きられたイスラームの視点からの分析作業はいまだ手付かずである。本研究はその手始めとして、さまざまな背景を持つ第二世代の声を拾い上げ分析することで、今後進められていくはずの日本の第二世代研究の糸口を示したい。

3 日本のムスリム研究

昭和期に入ってからイスラーム研究史を中村廣治郎(2005)にしたがって概観すれば、日本のイスラーム研究の最初のピークは1930年代に訪れている。帝国主義的な背景から回教圏研究所や大日本回教協会などの組織が次々と設立され、「回教」や「回教圏における民族・文化」についての研究が国策として奨励されたが、第二次世界大戦終結とともに、多くの研究施設や貴重な資料は焼失あるいは接収され、研究活動は終息する。戦後の混乱期が過ぎた1950年代以降、イスラーム世界の動態やアラビア語をはじめとするイスラーム関係諸言語が注目を浴びるようになり、いくつもの大学で関係学科や研究所が付置される中、1970年代の石油危機やイラン革命などを経て高まるイスラーム世界への関心から、日本のイスラーム研究は第二のピークを迎える。この時期には、さらに言語学、哲学・思想史学、文献学、法学、政治学、経済学、国際関係論、文化人類学とさまざまなアプローチからの研究方法が加わり多様化していく。ここに近年新たに加わったのが、「日本のムスリム」を社会学的また人類学的な視点から読み解こうとする研究である。本節では、この日本のムスリム研究の発展過程を整理し、その中で第二世代に関する研究がどのような位置づけにあるかを確認する。

(1) 第一世代に関する研究

日本にまとまった数のムスリムが居住するようになったのは1920年代のことである。1917年のロシア革命後、内戦と共産党政権による圧力を避けて多数のタタール人避難民がシベリア鉄道沿いに満州へ流入、一部が日本に渡り、東京・名古屋・神戸・熊本にタタール人コミュニティを作ったほか(松永 2009: 9; クレシ 2020: 28-9)、神戸にはこの頃最盛期を迎えた日印貿易に関わるインド系ムスリム商人や中東諸国出身者も集まっていた(福田 2008: 26-30, 41-4)。1930年代には東京・名古屋・神戸にモスクも建設され³¹、この時期、

³¹ 日本で最初のモスクは、1935年神戸に設立された「神戸ムスリムモスク」で、戦火を逃れて現存している。翌1936年には名古屋にもモスクが設立されたが、1945年に米軍機の空襲により焼失、現在の「名古屋モスク」は1998年別の団体により設立されたものである。東京にも1938年モスクが設立されたが、1986年に老朽化のため解体、その後2000年に「東京ジャーミイ」として再建された。各モスクの設立経緯は、それぞれ福田(2010)、クレシ(2020)、坂本(2001)に詳しい。

日本には 500～700 人程度のムスリムがいたとされる（店田 2023: 88）。だが戦中戦後に商人らが帰国したのはもちろん、離日のすべなく滞日していた亡命タタール人らも 1953 年にトルコ国籍を付与され順次出国していき、その子どもたちも「親や兄弟、結婚相手とともに、あるいは単身でトルコやアメリカへと移住した」（沼田 2012: 129）。数を減らした滞日ムスリムは、戦後のイスラーム研究において注目されることはなく、当時の第二世代についてもごく一部のタタール人の子弟を除き³²、情報はほとんどない。

その後の日本において、再び外国人ムスリムの数が急増するのは 1980 年代のことである。「ニューカマー」³³と呼ばれる外国人の中にはインドネシア、マレーシア、バングラデシュ、パキスタンなどを出身とするムスリムも大勢いた。だがニューカマーの就労実態や国際結婚に関する初期の研究において、バングラデシュ人やパキスタン人は登場するものの、ムスリムとしては注目されていない（手塚ほか編 1992; 石井 1995 など）。イスラーム研究においても、本節冒頭で概観したように、多方面の分野で優れた研究が進む中、なぜかムスリムへの注目度は低い。東長靖が「回教」や「イスラム教」という呼び方につけられた「教」の部分の致命的だと指摘したのは、「宗教の枠組みに押し込めてしまう」ことへの懸念からであるが（東長 1996: 7, 9）、すでに多くの研究者が「イスラーム」という表記を使用するようになってもおお宗教的側面への注目度は高く、そこに生きる人々の生活面に関心が寄せられることはなかった。かろうじて北米や中東に暮らすムスリムの日常生活を日本に紹介した論考もあるが（片倉 1991）、日本に暮らすムスリムについての言及は、「週刊誌・雑誌・新聞の紹介ないしは問題提起のレベルに留まっているものが大半」（樋口 2005: 49）という状況は変わらなかった。イスラームはあくまで遠く離れた異国の宗教であり、「文字通り異邦人、隣人にはなりはしたものの、まことに妙な隣人の文化」（井筒 1991a: 18）だというのが、日本人の長らくの認識であったことは間違いない。

ところがその後、「ニューカマー」と呼ばれていた外国人ムスリムのなかに長期にわたり

³² 福田義昭の論考の注に登場する「神戸在住のキルキー氏」（福田 2008: 54）は、そのプロフィールから戦前期の名古屋モスクのイマーム（礼拝の先導者）キリケーフの子弟であることは間違いない（クレシ 2020: 30）。また、『産経新聞』（2002.3.10）に亡命タタール人の子弟としてテミムダル・モヒド氏が紹介されている。ほかに、芸能活動をしていたハンナン・サファ（芸名ロイ・ジェームス）やオスマン・ユセフ、プロレスラーのユセフ・トルコ、野球選手のヴィクトル・スタルヒンなどが、亡命タタール人の子弟であったことは有名である。

³³ 「ニューカマー」は、1980 年代（研究者によっては 1970 年代あるいは 1990 年代とも）以降に急増した日本に中長期的に滞在する外国人を指す呼称。その対語としての「オールドカマー」は、日本の植民地支配と第二次世界大戦を契機に日本に在留することとなった中国・台湾・韓国・北朝鮮にルーツを持つ者およびその子孫を指す（清水 2021a: 15; 田村ほか: 2007: 7）。

滞日する者が増えることで、「ムスリム移民」³⁴の存在がにわかに研究者らの関心を集めるようになる。外国人ムスリムの来日に至る各国のプッシュ要因から来日後の生活、ネットワーク作り、モスク設立の動向、結婚と子育て、ハラール、墓地など幅広い話題が、イスラームに馴染みのない日本人に向けて紹介されたのを皮切りに（桜井 2003; 駒井 2004 など）、これらの各論に焦点を絞った調査の成果が現在のムスリム研究の土台を築いていく。例えば、滞日ムスリムの食の実態を明らかにするためのハラール食品店と貿易会社への大規模な調査報告（樋口・丹野 2000）は、現在に至るハラール認証問題への警鐘（クレシ 2017; 大形 2021 など）につながり、当時埋葬可能であった墓地の詳細と制約についての論考（樋口 2005）は、昨今話題の墓地問題の考察（Kojima 2023; 岩倉 2024 など）に先鞭をつけたものといえる。この頃外国人ムスリムの主導により開所が相次いだモスクの調査（店田・岡井 2008, 2009）も、その後不定期に「全国モスクリスト」として情報が更新され続け、2024年発表の最新版に引き継がれている（店田 2024: 19-27）。また、早稲田大学アジア社会論研究室が11年間にわたり開催してきた「全国モスク代表者会議」の第1回目が開かれたのもこの時期である（店田 2009）。これは、日本のムスリム社会における課題を当事者が議論する画期的な試みであるだけでなく、開始当初は横のつながりの希薄なモスク関係者に相互交流の機会を提供し続けた点でもその意義は大きい³⁵。

またこの時期には、外国人ムスリムだけでなく、かれらとの結婚を機に改宗した日本人女性にも関心が向けられた。女性研究者による集会への参与観察や聞き取りを通して³⁶、日本人女性の結婚満足度やイスラームへの適応状況（竹下 2000, 2001）、結婚後の心情の変化や日本でのムスリムとしての生活、外国人家族との関わり方（寺田 2003; 工藤 2008 など）などが明らかにされていった。近年は、こうした参与観察のような手法が取られることはほぼなくなり、日本人女性に関しては、コミュニティに関わる日本人女性についての報告（ク

³⁴ 移民政策を取らないという日本政府の立場からは、日本に「移民」は存在しないことになっているが、国連の定義に基づけば、移民は「通常居住しているのとは異なる国に、少なくとも12か月間居住する者」であり（DESA 1998: 10）、実質的にかれらは「移民」である。研究においても「移民」として取り扱われることが多く（樋口ほか 2007; 額賀ほか編 2019; 福田 2012; 小林編 2020; 清水ほか 2021 など）、本論文も同様に「移民」として扱う。

³⁵ 2009年の第1回会議から2019年の第11回会議まで、20以上のモスクやイスラーム団体、また日本人のムスリム有識者や二世世代を含む若いムスリムが参加している（店田ほか編 2020: 3-4）。

³⁶ コミュニティの多くは男女の空間が明確に分けられており、男性研究者には女性の調査協力者へのアクセスは難しいため（川添 2017: 31 注15）、女性の学習グループなどにおける参与観察は専ら女性研究者の独壇場であった。なお普通、女性研究者が男性に調査を行うことは問題ない。

レシ 2021a) や、前述の日本人女性改宗者の生きられたイスラーム (安達 2017) の延長上にある安達 (2023) の論考が見受けられる程度である。

結婚を機に改宗した日本人女性への関心が後退したとはいえ、それは日本に暮らすムスリムに関する研究が勢いを弱めたということではない。ここ数年の日本のムスリム研究の動きとして、外国人男性ムスリムの高齢化の現状が反映されるようになったほか (岡井 2023)、研究の対象は、日本に暮らす外国人女性ムスリムや (五味・大田 2024)、結婚に拠らず改宗した日本人ムスリム (桂 2021)、第一世代の子どもたちである第二世代と多様化している。

(2) 第二世代に関する研究

日本のムスリム研究において第二世代への言及が見られるようになったのも、2000 年代に入ってからである。カースルズとミラーの移民の定住過程のモデルをムスリム移民に当てると (Castles & Miller 1998: 28)³⁷、3 段階目すなわち家族の呼び寄せや長期定住の意識が高まる段階に入ったのがちょうどこの頃だろう。ただしヨーロッパでは主に家族の呼び寄せがみられたのに対し、日本では、当時 20 代から 30 代の单身男性であった外国人ムスリムは (桜井 2003: 28)、妻を呼び寄せてあるいは日本人女性との国際結婚によってムスリム家庭を新たに築くことが多かった。よって、そうしたムスリム家庭に子どもが誕生するのも多くはこれ以降のことであり、店田と岡井がムスリムの親世代を対象とした教育に関する調査で、回答した親世代の第一子の平均年齢が 8.6 歳であったこと (店田・岡井 2010: 9) にも納得がいく。

第二世代が研究の視野に加えられたのもこの時期である。まだ第二世代が若いこともあり、日本の現状に関する分析というより、海外のムスリム研究や国内のイスラーム学校の事例から³⁸、将来的にムスリムの子どもたちを受け入れる際に抱えるであろう日本の公教育の課題が教育学の文脈で語られる程度であった。例えば学校給食に関しては、イスラームにおける食の禁忌が取り上げられ、豚肉だけでなく「油や原材料に含まれるラード等を始め、それらを用いた料理で使用されたフライパン等の調理器具で調理された食事」 (丸山 2007: 169) までも食べられないと考える家庭があることが紹介される。また、保育園

³⁷ カースルズとミラーが提示する移民の定住過程の 4 段階モデルは以下の通り (Castles & Miller 1998: 28)。

第 1 段階：一時的な若い労働者の移民が中心、海外送金と母国への帰国志向が強い

第 2 段階：滞在の延長、社会的ネットワークの発展

第 3 段階：家族呼び寄せ開始、長期定住の意識の高まり、エスニックコミュニティ出現

第 4 段階：永住もしくは排除、永続的なマイノリティ集団を形成

³⁸ 学校といってもここで挙げられているのは、宗教教育のみ行う週末学校とインドネシア語で教育を行う民族学校であり (杉本 2002: 155-61)、どちらも一条校ではない。

で男子と女子を同じプールに入れたり裸で日光浴させたり昼寝させたりすることに強い抵抗を感じる外国人親の事例から（桜井 2003: 178）、体育の授業が制限される可能性が指摘され、「学校で行われるレクリエーションなどで男子と手をつなぐ、あるいは肩に触れるといった行為も厳密には避けられるべきもの」（丸山 2007: 170）であり、保健の授業における性教育への危惧、制服の問題や言語の問題についても言及される（杉本 2002: 154）。だがこうした論考においては、些か極端な事例が列挙されるのみで、学校側が取るべき対応についてまったく示されていない。それどころか、「教室に席をもらうだけでも恩恵として感謝すべきことであり、『ムスリムとしてのアイデンティティを保持しようとする教育』などは望むべくもない」（杉本 2000: 322）という、学校側の配慮は初めから不要であるかのような論調さえ見受けられる。当時まだ数少ないムスリム家庭が、マジョリティ側に大幅に妥協するかたちで子どもたちを学校に通わせていた状況をよく表している³⁹。

2000 年代といえば、アメリカで起こった同時多発テロ事件をはじめ、前節に言及したようなムスリムが関わったとされる事件がヨーロッパ各地で起きた時期である。これらの事件以降、メディアの否定的な報道と政治家の発言が「イスラモフォビア」を煽り続け、それによってムスリムやイスラーム施設への脅迫や物理的攻撃は急増する（Elkassam et al. 2018: 5-6）。日本の第二世代が直面する環境条件についても、海外のこうした状況を受けて、「自民族（集団）中心主義をもとに生まれる、ムスリムを蔑視する態度、無視する傾向を持つ日本人ならば、今後に自らの生活にムスリムがかかわるようになると強い反応が生まれる」（丸山 2007: 172）という懸念が語られている。

こうした教育学の分野における悲観的な論調は、第一世代の学校現場に対する不安にも呼応する。前述の店田・岡井による調査で、「学校教育に関する悩みや不安」として最も多くの親世代が回答したのは「給食」であり（59.5%）、次いで「イスラーム的にそぐわない授業内容」（41.8%）、「学校のイスラームへの理解度」（35.4%）、「いじめ」（32.9%）と続く（店田・岡井 2010: 25）。これはまさに、杉本（2000）や丸山（2007）が特別な対応が必要であるとして列挙した課題とイスラモフォビアへの言及に重なるものであり、研究者の懸念をムスリムの親世代が裏付けた結果となっている。とはいえ、回答した親世代の第一子の

³⁹ 筆者が行った、この当時子どもを小学校に通わせていた親世代への聞き取りや参与観察の中に、「ムスリムとしてのアイデンティティを保持しようとする教育」を学校に要求していたという事例はない。例えば給食について妥協することを選んだ家庭では、学校でのみ豚肉を食べることを許容していたり、調理中の汚染に目をつぶって配膳後の皿から豚肉を除けさせていたほか、妥協を嫌った家庭では、小学校の6年間を通して子どもにはパンと牛乳だけで過ごさせていた。また、体育や保健の授業で特別の対応をしてもらったという事例もなく、本文中に挙げた保育園に抵抗を感じる外国人親も、その状況を「なんとか許容」しており（桜井 2003: 178）、こうした現状に不安を抱きつつも、ムスリム家庭から学校に対して宗教的配慮を求める家庭はそう多くないと思われる。

平均年齢が 8.6 歳であるということは（店田・岡井 2010: 9）、その回答の多くは、現実的な悩みというより将来的な不安であると考えられ、その点においては研究者による懸念と同じく、第二世代を取り巻く現実を反映するには、2000 年代は時期尚早であった。

（3） 第二世代の生きられた経験に注目して

第二世代が直面する環境条件の検証は、かれらの成長を待つてようやく、2010 年代半ば以降に可能となる。その先駆けとなったのは、2015 年早稲田大学において開催された「全国モスク代表者会議」⁴⁰である（岡井ほか編 2015）。この年の会議には当時 21 歳の第二世代が登壇したほか、討論の際にはフロアから中学生、高校生、大学生の第二世代による発言もあった。このような公けの場で第二世代当事者が自らの学校生活の経験を語ったのは、日本のムスリム研究においてこれが初めてのことである。「全国モスク代表者会議」には、その後 2018 年（2 回）と 2019 年の計 3 回の会議も含めのべ 24 人の第二世代が登壇し（岡井・店田編 2019a, 2019b；店田ほか編 2020）、慶應義塾大学でも、2017 年以降に開催された 4 回の「全国ムスリムミーティング」に、のべ 18 人の第二世代が登壇している（野中監修 2020, 2021, 2025）。いずれの会議においても、まだ研究の俎上に乗ったことのない大変貴重な当事者の経験が披露されていたが、それらの語りは議事録に残るのみで、学術的に分析し考察する作業はいまだ手付かずの状態である。「生きられたイスラーム」という枠組みへの言及はないものの、これらはまさしく貴重な当事者の生きられた経験の記録であることは間違いなく、今後その分析が期待される。

なお「全国モスク代表者会議」と「全国ムスリムミーティング」の両会議に登壇した第二世代ののべ人数は、前述の通り、合わせて 42 人にのぼるが、実はその半数が 2～5 つの会議に重複登壇しており、実際の登壇者は 22 人と、その顔ぶれはそれほど多様ではない。しかもそのほとんどが、図序-1 で示した第一象限に属する者であることは⁴¹、前節で言及したイギリスの第二世代の調査において（安達 2020）、調査協力者 89 人すべてがムスリムを自認する者であったことに共通する。研究者から第二世代へのアクセスがコミュニティ経由あるいはそこからの「雪だるま式」である場合、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する者が選ばれやすいのはやむを得ない。だがコミュニティから「見えない存在」である第二世代のなかには、〈ムスリムであること〉に迷いを抱えたりこれを否定したりする者も少な

⁴⁰ 前掲注 18 の通り、「全国モスク代表者会議」は 2012 年に名称を「全国マスジド（モスク）代表者会議」に変更されているが（店田 2020: 3）、本論文では混乱を避けるためすべて「全国モスク代表者会議」と記す。

⁴¹ 慶應義塾大学の「全国ムスリムミーティング」第 3 回と第 5 回には、第三象限に属する者が計 3 人登壇しているが、これは筆者が「見えない存在」の声を拾い上げる意図で会議企画の段階で推薦したものである。〈ムスリムであること〉に否定的な者が研究者主催の会議に登壇したのは画期的だといえる。

くなく、これを無視して第二世代の経験を一般化することには慎重でなければならない。今後は、組織に属さない第二世代へのアクセス方法を工夫することで、その多様性が反映されていくべきだろう。

現時点でこれに成功した研究として、工藤正子による「ハーフ」として差異化される第二世代 8 人の重層的な周縁化の経験や自己定義に関わる葛藤の様相を述べた論考がある（工藤 2016）。結婚を機に改宗した日本人女性についての研究が 2000 年代に行われたことは前述したが、工藤もそうした女性研究者のひとりであり、パキスタン人と結婚した日本人女性についての詳細な報告と分析を行っている（工藤 2008）。学習グループでの参与観察や聞き取りを通して形成された調査協力者とのラポールが、かれらの子どもたちへのアクセスを容易にしたりすることは想像できる。工藤によるこの論考は、第二世代の生きられた経験を学術的に分析し考察した最初のものであり、第二世代研究を新たな段階に進めたという点で非常に有意義なものである。しかし、調査協力者の両親がパキスタン人父×日本人母に限定されていることと、8 人の調査協力者のうち大半が海外在住もしくは日本で社会化が行われていないことから、日本に暮らす第二世代の全体像を構成する材料としてはごく一部を提供するに過ぎない。

ここで、序章に記した第二世代の両親の組み合わせについてのデータを再掲すると、親の一方が外国人である者が 59%、両親ともに外国人である者が 38%、両親ともに日本人である者が 3% である。つまり大きく分けて、多い順に⁴²、①外国人父×日本人母、②外国人父×外国人母、③日本人父×外国人母、④日本人父×日本人母という家庭の多様性があり、さらに外国人父や外国人母の出身国や地域にも多様性があり、そこに育つ第二世代が家庭によってさまざまな文化や習慣の影響を受けさまざまな葛藤を抱えていることは間違いない。ムスリム移民によるコミュニティ形成が、結婚をきっかけとしない自発的入信の機会を日本人に提供することになったことを考えれば、④の家庭は①②③の家庭に比べてやや遅れて成立しており、両親ともに日本人である第二世代の年齢層は平均してまだ低く、かれらに特有の経験に焦点を当てた研究を行うことは時期尚早かもしれない。だがそれは、すでに成長した①②③の家庭に育つ第二世代の生きられた経験を紡ぐ作業を遅らせる理由にはならない。工藤が明らかにした第二世代の一側面を礎として、今後その多様性を反映した研究が進み、第二世代の解像度を上げる作業が必要だろう。

現時点では、その後の工藤による第二世代の進路選択への言及や（工藤 2021）、第二世代

⁴² 前掲注 3 に記した、2016 年末の「外国人と日本人の夫婦からなる世帯」1 万 1500 世帯に（店田 2018: 116）、「永住者」と「日本人の配偶者等」の在留資格を有する 25 歳以上のムスリムの推計値を合わせた約 2 万 4000 人のうち男性約 1 万 7000 人（店田 2018: 114-5）の割合を充てると、夫が外国人の世帯は約 8000 世帯、妻が外国人の世帯は約 3500 世帯と類推できる。これを、外国人夫婦世帯 7500 世帯、日本人夫婦世帯 500 世帯（店田 2018: 116, 123 より類推）と比較して、多い順に並べたもの。

の女子に特化した考察のほかに（工藤 2024）、第二世代に章を割いた佐藤兼永の著作において（佐藤 2015:100-23）、かつて第一世代を対象に行われたような多角的な調査や研究は進んでいない。親の国籍を限定せずまた〈ムスリムであること〉への向き合い方もさまざまな第二世代の生きられた経験进行分析し考察した成果は、筆者もすでにいくつか報告の機会を得ているが（クレシ 2021b, 2022, 2024a, 2024b; 大形ほか 2023）、本論文はその集大成として、日本における第二世代研究の裾野を広げる一助となりうるものとする。

4 第二世代に共通する背景をもつ子どもの研究

前節で整理したように、日本に暮らすムスリムについては、第一世代を対象とした研究の蓄積が厚いのにに対して第二世代を対象としたものは少なく、生きられたイスラームに目を向けたものはさらに限られている。だが視点を変えて見ると、第二世代と名指されてはいなくとも、かれらに共通する背景をもつ子どもについては、すでに多く語られてきた。例えば、前節で示した①②③の家庭は親の一方または双方が外国人であり、それは第二世代の 97% が外国ルーツの子どもに関する研究の対象者と重なっていることにほかならない。また昨今話題の「宗教 2 世」問題に代表される新宗教の宗教継承問題は、家庭の価値観としての宗教を継承したい親世代とこれを受け容れることに抵抗を感じる子世代という構図が一部のムスリム家庭に共通する。したがって、外国ルーツの子どもに関する研究で何が論じられてきたか、新宗教研究において宗教継承問題がどう扱われてきたかを参照することは、第二世代研究の蓄積の薄さを補うために有効と考える。本節では、第二世代に共通する背景を持つ子どもに関して論じられてきたことを整理する。

(1) 外国ルーツの子どもに関する諸考察

2020 年 12 月末の時点で、19 歳以下の外国籍者は 33 万 7786 人、日本国籍で外国にルーツを持つ子どもは 42 万 5149 人以上と推測される（榎井 2022; 21, 23）。かれらが日本に暮らすうえで直面する問題については、さまざまな視点から分析され支援の取り組みがなされている。それらのすべてに言及することは本論文の目的ではないため、ここでは、深刻な教育格差の原因とされる言語的なハンディキャップと、宮島が指摘する「三重の剥奪状態」（宮島 2014）、いわゆる「ハーフ」やニューカマー第二世代が経験する周縁化の視点から、何が第二世代の抱える問題に共通するのがあるいはしないのかを検討する。

外国ルーツの子どもとって真っ先に連想されるのは、言語的なハンディキャップだろう。文部科学省は滞日外国人の急増に伴い、1991 年から日本語指導が必要な児童生徒に関する調査を継続実施しており（文部科学省 2023a）⁴³、日本語能力に端を発する不就学や学校不適応を避けるための言語教育施策や就学支援の取り組みがつとに進められてきた（森

⁴³ 2023 年の統計では、日本語指導が必要な外国籍児童生徒は 5 万 7718 人であり、2008 年の 2 万 8575 人から 15 年で 2 倍に増加している（文部科学省 2023b: 4）。

2018)。そのせいか、第二世代も同様のハンディキャップを抱えていると思われがちであり、例えば第二世代の小中学生を対象とした調査では(荻原・三浦 2022)、平易な漢字にもルビ付きの質問用紙に「学校の先生の日本語がわかるか」「教科書が理解できるか」といった設問が並ぶ⁴⁴。だがその結果は、6割以上が先生の日本語も教科書も「よくわかる」と回答しており⁴⁵、それどころか、得意言語を日本語と回答した者は7割を超えている(荻原・三浦 2022: 41, 44-5)⁴⁶。なお回答者の属性をみるに、9割近くが日本生まれおよび就学前に来日した者、すなわち日本で社会化の過程を経た者であり⁴⁷、言語習得環境は日本の子どもと大差ないと思われる。来日してすぐに小中学校に転入するムスリム子弟には日本語支援は必要だろうが、かれらのほとんどが第二世代の定義から外れることを考えれば、言語的なハンディキャップが第二世代を象徴する大きな問題とはいえない。

次に、外国人の子は経済・家族生活・教育の三つの次元で「三重の剥奪状態」にあり重層化による悪循環に置かれているという指摘と、第二世代の状態とを比較する。一つ目の経済的貧困は、主に日本人男性との離婚によって母子世帯になったタイ人やフィリピン人の家庭、また非正規雇用者が多いインドシナ系の元難民などの家庭に集中している(宮島 2014: 180-2)。店田による日本への「帰化ムスリムを対象とする調査結果」の報告書から回答者の属性をみると、9割近くが自営業・会社経営および正規社員であり(店田 2019b: 10, 2020: 10)⁴⁸、かれらが曲折を経て、「経済的基盤を持つ相対的に階層の高い人々が日本に残った」(福田 2020: 90)ことを示している。そのなかには、「ニューカマー最大の企業家移民」(樋口 2010: 14)といわれるパキスタン人やバングラデシュ人を筆頭にスリランカ人やアフガニスタン人などの自営業者が多く含まれており(小川 2022: 4)、非正規雇

⁴⁴ 質問用紙は、筆者の関わる名古屋のコミュニティにおいて確認。

⁴⁵ 調査結果では、学校の先生の日本語が「よくわかる」者 65.3%、「時々わからない」者 31.4%、教科書が「よくわかる」者 66.1%、「漢字がわからない」者 30.6%である(荻原・三浦 2022: 44-5)。ここでみられる「時々わからない」や「漢字がわからない」の回答率から、「子ども達は、ダブルリミテッド、あるいは学習言語の習得が不十分である」(荻原・三浦 2022: 56)と結論づけられる。だが日本人生徒との比較なしに、これらの数字を外国ルーツの特徴とみなすことには疑問が残る。

⁴⁶ 調査結果では、得意言語を「日本語」と回答した者 66.9%、日本語と母語の「両方」と回答した者 5.8%である(荻原・三浦 2022: 41)。

⁴⁷ 調査結果では、「日本生まれ」47.1%、来日時の年齢が「0～3歳」22.3%、「4～6歳」16.5%、「7～9歳」9.1%、「10～12歳」3.3%である(荻原・三浦 2022: 41)。

⁴⁸ 前掲注6と同じ調査。現在の仕事を問う設問に対して、1回目と2回目の調査で「自営業・会社経営」と回答した者はそれぞれ32.5%と12.9%。「専門職・管理職・技術職」ほかの職種を合わせて「正規社員」と回答した者は、それぞれ55.0%と77.4%。2回の調査の値から回答者数を算出したものを再計算して平均した値を示す。

用や貧困が第一世代を苦しめている様子はほぼみられない。二つ目の親子接触の時間的貧困や関係性の貧困については、夫婦そろって早朝からあるいは夜間の勤務に就く南米系の出稼ぎ型夫婦にありがちな問題だとされる（宮島 2014: 183-4）。だが男女の役割分担が比較的明確になされるムスリム家庭では、母親が不就労であることが多く、家族の結びつきを重視するイスラームの教えに従って子育てに多くの時間をかける家庭が一般的であり、これも第二世代を特徴づけるものとはいえない。

だが三つ目の教育の機会の貧困については、「保護者の教育制度への無知、学習支援のなさ」（宮島 2014: 189）による就学と学習達成への障害が、一部のムスリム家庭にうかがえる。日本学術会議の資料によれば、横浜市と浜松市の外国人意識調査で「子どもを高等学校に進学させたい」と考える外国人の保護者はそれぞれ 82.5%と 72.3%であったにもかかわらず、2018 年の外国人の子どもの高等学校進学率は 64%である（日本学術会議 2020: 5, 10）。同年の日本全体の高等学校進学率が 98.8%であるなか（文部科学省 2018: 19）、親の期待に届かない低進学率の要因として、言語的なハンディキャップや経済的困難以外に、日本の学校や高等学校入試の仕組み等に関する知識や情報が保護者にも生徒にも不十分であることが挙げられる（日本学術会議 2020: 10-1）。店田による日本への「帰化ムスリムを対象とする調査結果」の報告書の属性から第一世代の最終学歴をみると、9割が高等教育を修了しており（店田 2019b: 10, 2020: 10）⁴⁹、かれらが自身と同等の学歴を子どもにもつけさせたいと考えるのは自然である。例えば筆者の関わる名古屋のコミュニティでも教育熱心な親は多く、子どもを小学生のうちから学習塾に通わせたり中高一貫校に通わせたりする家庭は珍しくなく、大学進学はもちろん大学院に進学する第二世代も少なくない。しかしその一方で、せっかく進学した高等学校を中途退学してしまう者がいる。2019 年にコミュニティ内の集会のコーディネータが調査した第二世代 52 人のうち、高等学校に進学したのは日本人母をもつ者 100%に対し外国人母をもつ者 79%で、進学後に中途退学したのは日本人母をもつ者 5%に対して外国人母をもつ者 50%という数字がある（名古屋モスク 2019）。子どもの中途退学をすべて外国人母に帰責するつもりはないが、日々の学校との連絡に関わるが多い母親が、複雑な日本語の説明を理解せずまた日本の教育制度に疎いことはひとつのハンディキャップになりうる。実際、「狭められた進路選択」（森 2018: 95）を強いられてもそれに気づかないあるいは気づいても異議を唱えられなかったり、子どもの学校不適応についての相談や支援を受ける方法を見つけられず十分なサポートが難しいという事例は、名古屋のコミュニティ内でもしばしば見受けら

⁴⁹ 前掲注 6 と同じ調査。最終学歴を問う設問に対して、1 回目と 2 回目の調査で「大学・大学院」と回答した者はそれぞれ 90.0%と 64.5%。「専門学校・短期大学」と回答した者は、2 回目の調査のみ 25.8%。2 回の調査の値から回答者数を算出したものを再計算して平均した値は、「大学・大学院」78.9%、「専門学校・短期大学」11.3%。これを合わせて高等教育修了者は 90.2%。

れ、子どもだけでなく親世代への支援は喫緊の課題である⁵⁰。外国ルーツの子どもといった大きな括りでは、なかなか第二世代の抱える問題の核心を捉えることは難しいが、一部に進学の問題を抱える第二世代がいることについてはさらなる考察と対応策の検討が必要だろう。

一方、いわゆる「ハーフ」やニューカマー第二世代に関する研究にみられる周縁化の経験は、ムスリム第二世代のそれに共通するところが非常に多い。とりわけ肌の色や容姿などの身体的特徴に起因する周縁化の経験の数々は、当事者の語りを取り上げたなかに必ずといっていいほど頻繁にみられる(岩渕 2014; 下地 2018; 角替 2021; 三浦・額賀 2021 など)。外見的な差異を理由としたからかいやいじめは小学校低学年の時期にはすでに始まり、それによって自身のルーツに劣等感を抱く子どもたちは、「小学校の中で求められる規範的な日本人像への同化をめざす」(下地 2018: 368) ようになる。つまり、できるだけ「目立たないように」そして「日本人らしく」ふるまうという戦術を、かれらは学童期に学習するのである。

しかし、かれらへの差別的なまなざしは外見的な差異によるものばかりではない。ニューカマー第二世代の研究においては、特に中国系やフィリピン系第二世代の語りに特定のエスニック集団へのステレオタイプに起因する周縁化の経験がみられる(児島 2021: 221)。メディアによって形成される「出稼ぎ」「汚い」「貧困」「環境汚染」という否定的なイメージはいとも簡単に攻撃の材料とされ(坪田 2021: 268-9; 三浦 2015: 229-30)、とりわけフィリピン人女性に付与された「エンターティナー」「水商売」といったステレオタイプは、親をも巻き込んでかれらのルーツに疎外感を抱かせる(下地 2018: 355-6; 三浦・額賀 2021: 355-6)。ムスリム第二世代もまた、メディアが拡散する「危険」「過激」といったイスラームのステレオタイプによる周縁化を経験し、親に向けられる「テロリスト」のレッテルと合わせて、自身のルーツに疎外感を抱く者が多い。しかもかれらは、ニューカマー第二世代について指摘されているのと同様に、学校の中だけで疎外感を感じているのではなく、周縁化を避けたいがための周囲への同化願望が必然的に親世代の文化や言語そして宗教的価値観との距離を生みだし、その結果家族との関係でも葛藤を抱えることになる(清水 2021b: 260)。

ニューカマーの子どもたちが青年期を迎え、あるいは成人して日本社会を支える一員となりつつある今、かれらの葛藤の様相を明らかにすること、疎外感を克服した当事者の経験を収集することは、理解者・共感者を増やし共に生きる社会を築くために重要な課題である。すでにエスニック集団ごとのニューカマー第二世代の学校経験や家庭経験についての研究は蓄積されつつあるが(高畑 2000; 児島 2006; 三浦 2015; 額賀ほか 2019; 清水ほか

⁵⁰ 名古屋モスクでは、両親ともに外国人親である第二世代とその親に向けた進学説明会「進路についてかんがえよう」を開催して、日本の教育システムや入試に向けた準備などの情報を提供している(名古屋モスク 2019, 2020, 2023)。

2021 など)、そこにムスリム第二世代の経験を重ねる作業は学術的にも社会的にも意義あることと考える。

(2) 新宗教における宗教継承問題

一般的に「新宗教」とは、19 世紀中頃の幕末維新时期以降に成立した宗教を指し(島薗 1990: 6-7)、国内に 350~400 教団ほどあるといわれる(石井 2020: 135)。古来よりイエやムラを基盤として継承されてきた伝統的な宗教と異なり(高橋 2012: 13-4)、新宗教ではその教義や日常的な実践の継承が個人レベルで行われるため、その維持存続のために各宗教教団は戦略的方法を取らざるを得ない(猪瀬 2014: 156)。それゆえ新宗教においては基本的に「信徒全員が同時に布教者」(塚田 2012: 32)であり、「奉仕」と呼ばれる個別訪問や「折伏」、「入信即布教」などが救いに至るための重要な宗教実践となる。当然ながら布教の対象は家庭内にも向けられ、信徒の子どもには幼いうちから教義の学習が積極的に行われ、集会や行事や布教活動にも参加が促される。これを後押しするため、中学・高等学校の設立など、次世代育成に積極的な教団もあり⁵¹、いまや新宗教は「家の宗教」として既成宗教化しつつある(井上 1995: 48)。

こうして育つ子どもは新宗教研究のなかで「二世信者」と名付けられ、教団や親から距離を置こうとする際の葛藤はあれど、最終的には親の期待に応じて信仰を形成していく様子が描かれてきた(猪瀬 2011; 塚田 2006 など)。それは、新宗教研究が「当の教団を通して、教団の協力を得て、熱心な現役信仰者たち」に調査協力を求めてきた結果、教団・家庭内で信仰から距離を置いている者は「見えない存在」となっていたことを示す(塚田 2023: 23)。しかし 2022 年の安倍元首相狙撃事件後、二世信者である犯人に自らを重ね合わせた当時者らが SNS で声を上げ始めると(藤田 2023: 50)、そのセンセーショナルな論調が注目を浴びるようになる。さらに、教団による支配や親からの強制に苦しむ当事者の語りを取り上げた書籍のみならず(塚田ほか編 2023; 横道編 2023a, 2023b など)、当事者自らがその過酷な経験を綴る手記までもが世に出ることで(菊池 2022; 小川 2023 など)、二世信者は急速に可視化されていく。幼児期からの体罰や不自由な青年期、宗教的実践の強制や脱会までの苦悩などが当事者の声を通して近年明らかにされつつあるなか、これまでの中立的な二世信者という用語はその苦悩や生き難さに焦点を当てた「宗教 2 世」という表現に置き換わりつつあり、2022 年の『現代用語の基礎知識』には「宗教 2 世」の項目が設けられている(塚田 2022: 278)。

これに対して、伝統宗教における宗教継承問題が社会的な注目を集めることがないのは、何世代にもわたり受け継がれてきた家族の宗教として抵抗感が少ないせいもあろうが、極端な布教活動や過酷な修行への参加また多額の献金が要求されることがない点で、反発が

⁵¹ 例えば、創価学園、佼成学園、天理学園、PL 学園、金光学園、智辯学園、幸福の科学学園など。

起こりにくいと思われる。その意味では、イスラームもまた伝統宗教に位置付けられていいかもしれない。しかし、第二世代への聞き取りをするなかで、ときに宗教 2 世当事者が紡ぐ生々しい語りに共感を示す者がいる。親世代にとっては、家族の宗教どころか地域や国家の宗教として当たり前で継承してきたイスラームだが、日本に暮らす第二世代は、何らかの宗教を信仰しているというだけで「差別や偏見の対象となりやすい危険性がある」（松木ほか 2020: 17）なかで、食の禁忌や服装規定といった超可視的な宗教実践に従うことを要求される。かれらは、宗教 2 世が経験する宗教を理由とした排除の経験（荻上 2022: 70-72; 米本 2021: 99-100 など）に自らの経験を重ね、さらに親子関係の悪化を恐れて「信仰しない自由」を行使できない家庭環境にも（荻上 2022: 59-60 など）、共通項を見出そうとする。

しかし、両者をひと括りにして議論することには注意が必要である。荻上チキによる 1131 人の宗教 2 世を対象とした調査によれば、「街中や戸別訪問での勧誘」、「友人・知人への勧誘」、「教団への献金」、「選挙集会への動員」ほかいくつもの活動において、家族よりも教団から参加を要求される頻度が高くなっている（荻上 2022: 50-3）。一方、教団といった組織や制度をもたないイスラームでは、そうした家庭外からの圧力はない。つまり、学校での排除の経験において、第二世代の苦悩は親子関係に集約されるのに対して、家庭と教団の双方から圧力を受ける宗教 2 世の置かれた状況はより複雑である。いいかえれば、宗教 2 世の直面する問題の解決には教団それ自体の構造的な変革が必要であるが、第二世代のそれは子の葛藤を親世代が理解し歩み寄ることで軽減できる可能性があるということになる。そうだとすれば、第二世代の生きられたイスラームの経験を拾い上げる作業は、親世代には理解されにくい子の葛藤を明らかにし、問題を解決する糸口になりうるという点で意義あることといえるだろう。

しかしながら、宗教 2 世の声を集めた書籍が次々と発刊され、かれらの経験がメディアに取り上げられる頻度が高まるのに対し（NHK 2023; TBS 2023; 東京新聞 2024 など）、第二世代の生きづらさは注目されにくい。荻上の調査でも、回答者の属する宗教は仏教系・神道系・キリスト教系のいずれかであり、イスラーム系は 1 人しかいなかったように（荻上 2022: 51）、第二世代の経験はなかなか表に出ることがない。本研究はこれを明らかにかにして、親世代のみならず日本社会にも、第二世代の置かれた状況への理解と共感が広がることを目指す。

5 小括

本章では、まずヨーロッパのムスリム研究において近年用いられている「組織に属さないムスリム」と「日々生きられた宗教／日々生きられたイスラーム」という概念を検討し、研究の枠組みを整理した。移民を多く抱えるヨーロッパでは 1980 年代以降、その中の相当数を占めるムスリムの実態を捉えようとする研究が進められてきた。しかし、これまでのイスラーム研究は、モスクやイスラーム団体を研究の出発点とし、そうした組織の活動に積極的に関与するムスリムを代表化させてきた。だがそれによって描き出されるム

スリム像は、実はごく一部のムスリムの経験や実践を反映しているに過ぎない。これに対し、組織や制度に依存しないムスリムがどのように自分たちの言葉でイスラームを意味付けているかを分析しようとする概念が「組織に属さないムスリム」であり、すでに組織に依存しないキリスト教徒やユダヤ教徒については、「日々生きられた宗教」の理論枠組みによって、その日々の考え方や行動が明らかにされつつある。この枠組みをムスリムに適用したのが「日々生きられたイスラーム」であり、これまでのムスリム研究からこぼれ落ちてしまうような個人の経験や実践の事例を積み上げようとするものである。なおこうした視点は、組織に紐づいたムスリムに関する研究に取って代わるものではなく、それらの蓄積を補完して、ヨーロッパのムスリム像をより現実に近いものとして描き出すために有用なものである。

一方、日本におけるムスリム像は、いまだ組織に紐づいた代表的なムスリムを代表として形作られている。第一世代の流入から間もないうちは、「超可視化」された外国人ムスリムの信仰形態や宗教実践に注目が集まるのは無理ないことであり、アクセスの容易さを考えれば、コミュニティ経由での調査が第一選択肢とされてきたのも当然ではある。だがすでに流入から40年が経過し、コミュニティを構成するムスリムに焦点を当てた研究がある程度蓄積された今、次に目指すべきは、日本に暮らすムスリムのおそらくは多数派である人々の「日々生きられたイスラーム」の経験を明らかにすることではないだろうか。しかし日本のムスリム研究において、「組織に属さないムスリム」への言及は近年みられるが、「生きられた宗教／生きられたイスラーム」の枠組みを採用していることが明言されているのは、組織的活動に関与していない日本人改宗女性者に関する論考のみである。本研究はこれに続くものであり、第二世代を対象とする点では先駆的な研究として位置づけられるだろう。

また本章では、先行研究の検討も行った。まずヨーロッパの現状として、ホスト社会によるムスリムという集団への「否定的なまなざし」があることを確認した。しかもそれは、ホスト国で教育を受けホスト国との親和性が高まっているはずの第二世代の時代になってからのことである。そうした排除の圧力が第二世代の幻滅と怒りを招き、一部の第二世代が起こす非行や暴力はホスト社会の側にムスリムへのさらなる恐怖を抱かせ、いまやヨーロッパ各地で顔の見えない想像上のムスリムという移民集団に憎悪が向けられている。そうした状況において、第二世代の行動を分析してきた研究者の多くが焦点を当てるのは、失業、雇用差別、社会的排除といった社会的争点の渦中にあるマイノリティの集団としてのムスリムである。これに対し、個人としてのムスリムの考え方や行動を明らかにしようとする研究が近年行われつつある。そこでは、日々の生活のなかで経験する差別的な冗談や中傷の中でアイデンティティを再定義しようとする第二世代それぞれの戦術が明らかにされていき、それは例えば、親世代が依拠する伝統や文化から宗教を切り離し、新たなヨーロッパという文脈の中でイスラームを解釈するやり方であり、それを可能にするのが、クルアーンやハディースに基づくイスラームの知識である。

日本のムスリム研究に目を移すと、2000年代以降、外国人ムスリムの来日に至る各国のプッシュ要因から来日後の生活、ネットワーク作り、モスク設立の動向、結婚と子育て、ハラール、墓地問題など、第一世代を対象に広く扱われてきたことが確認できる。だが第二世代はこの時期まだ幼く、かれらについては教育学の文脈において将来的な公教育の課題が語られる程度であった。第二世代が直面する環境条件の検証が可能となるのは、その成長を待ってようやく2010年代半ば以降のことである。第二世代当事者が登壇して自らの経験を語る研究者主催の会議が開催され、また第二世代の経験を分析する論考もみられるようになる。そこで語られる経験は、どれもまだ研究の俎上に乗ったことのない貴重なものであるが、事例の数が少なく、調査協力者の背景に偏りがあることなどから、かれらの経験を一般化することには慎重でなければならない。かつて第一世代を対象に行われたような多角的な調査や研究が進まないなかで、第二世代像の解像度を上げるためにも、さらに多くの生きられた経験の記録を積み上げ、かれらの多様性を反映していく作業が進められていくべきだろう。

本章の最後では、蓄積の薄い第二世代研究を補うために、第二世代と名指されてはいなくとも、かれらに共通する背景をもつ子どもについての研究を概観した。外国ルーツの子どもに関する諸考察において言及される言語的なハンディキャップや経済的および家族生活の貧困は、第二世代を象徴する大きな問題ではないものの、教育の機会の貧困については、一部に進学の問題を抱える第二世代がいることは間違いない。また、「ハーフ」やニューカマー第二世代に関する研究で語られる学校での周縁化の経験は、肌の色や容姿などの身体的特徴に起因するものだけでなく、特定のエスニック集団へのステレオタイプに起因する排除も含めて、ムスリム第二世代のそれに共通するところが非常に多い。「危険」「過激」といったイスラームのステレオタイプによる排除の経験は、ときにかれらに周囲への強い同化願望を抱かせ、それが必然的に親世代の文化や言語そして宗教的価値観との距離を生み出すことになり、その結果学校においても家庭においても葛藤を抱える第二世代がいる。他方で、昨今話題になる新宗教における宗教継承問題も、第二世代の抱える葛藤のいくらかの部分の説明しており、宗教を理由とした学校での排除の経験や、「信仰しない自由」を選択しにくい家庭環境など、宗教2世の語りに共感を示す第二世代もいる。しかし、宗教2世が勧誘や多額の献金といった宗教活動について、家庭と教団の双方から圧力を受けるのに対して、教団といった組織や制度をもたないイスラームでは、学校での排除の経験において、第二世代の苦悩は親子関係に集約される。つまり第二世代の抱える葛藤は、親世代が理解し歩み寄ることで軽減できる可能性があり、そうだとすれば、第二世代の生きられたイスラームの経験を拾い上げる作業は、親世代には理解されにくい子の葛藤を明らかにし、問題を解決する糸口になりうるという点で意義あることといえるだろう。

第2章 日本社会と日本に暮らすムスリム

1 第一世代の流入

第二次世界大戦以前の日本にも、外国人ムスリムの流入の小さな波はあった。まとまった数のムスリムが日本に居住し、東京・名古屋・神戸にはモスクも建設されるなど、ある程度の規模のコミュニティが形成されていた様子は、いくつかの記録から推察できる（福田 2008, 2010; 吉田 2013; クレシ 2020）。だがかれらの多くは戦中戦後に離日し、半世紀の間コミュニティの拡大をみることはなかった。1980 年代、政治的・経済的な変動期にニューカマーと呼ばれる外国人が急増し、そのなかにはムスリムも多数含まれていた。これがムスリム流入の2度目の波の始まりであり、本研究の対象とする第二世代の親となるはずの者たちも、こうしたニューカマーのひとりである。本節では、1980 年代から 2000 年代初頭までに何が起きていたのかを、いくつかのデータを読み解きつつ概観する。

(1) 学びの機会を求めて入国したニューカマー

1983 年、文部省（当時）が策定した「留学生 10 万人計画」⁵²により、留学生への財政的支援を始め受け入れ態勢の整備が進められていった。1989 年に改正され翌年施行された出入国管理及び難民認定法（以下、「入管法」）では、大学・短期大学・専門学校で学ぶ学生のための「留学」と、日本語学校を含む各種学校や高等学校で学ぶ学生のための「就学」に在留資格の再編が行われ、2003 年、これらを合わせた数が目標の 10 万人を達成する。この年の留学生送り出しの多い上位 10 か国は順に、中国、韓国、台湾、マレーシア、タイ、インドネシア、ベトナム、アメリカ、バングラデシュ、モンゴルであり⁵³、ムスリムマジョリティ国が 3 か国含まれている。図 2-1 はこれらマレーシア、インドネシア、バングラデシュの留学生数の推移を示したものであり、3 か国のデータが揃う 1990 年以降を見ても、いずれも留学生の継続的な送り出し国であることがわかる。その後 2008 年に策定された「留学生 30 万人計画」⁵⁴が目標を達成した 2019 年の時点では、ムスリムマジョリティ国であるマ

⁵² 国際社会に知日・親日の人材を増やしたい政府の方針に則って、1983 年に 1 万 428 人であった留学生数を 21 世紀初頭には 10 万人にしようというもの。例えば国費留学生には、学費免除・渡航旅費支給に加え、渡日一時金・奨学金・研究旅費支給などの支援を行う。2003 年に 10 万 9508 人となり、目標の 10 万人を達成した（総務省 2005: 4-5, 8）。

⁵³ 2003 年のそれぞれの国からの留学生数は、中国 7 万 814 人、韓国 1 万 5871 人、台湾 4235 人、マレーシア 2002 人、タイ 1641 人、インドネシア 1479 人、ベトナム 1336 人、アメリカ 1310 人、バングラデシュ 974 人、モンゴル 714 人（総務省 2005: 71-2）。

⁵⁴ 日本を世界により開かれた国へとするためのグローバル戦略の一環として、2008 年に

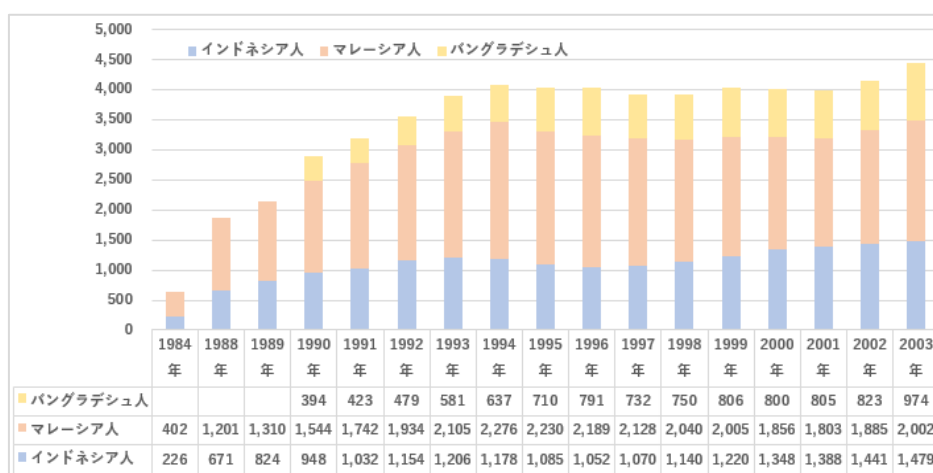


図 2-1 主なムスリムマジョリティ国出身の留学生数推移

出所：総務省資料（2005：71-2）をもとに筆者作成

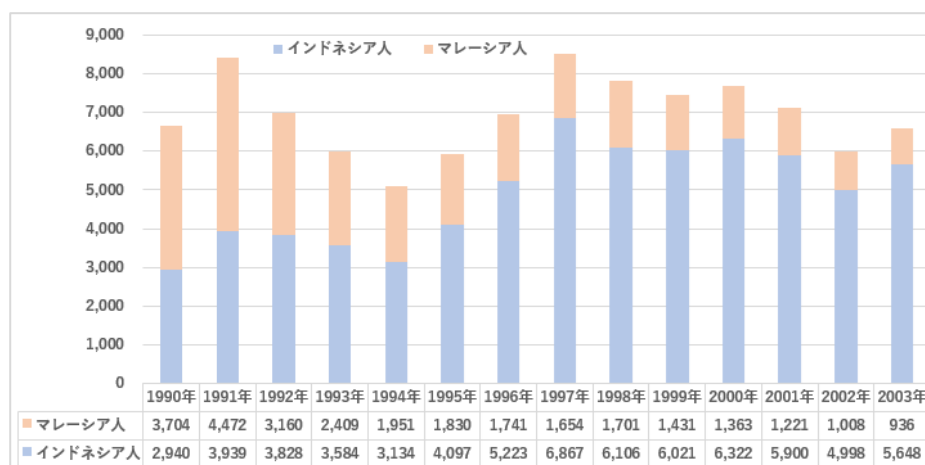


図 2-2 主なムスリムマジョリティ国出身の研修生数推移

出所：出入国在留管理庁「出入国管理統計表」1990-2003 年版をもとに筆者作成

レーシア、インドネシア、バングラデシュはそれぞれ 12 位、7 位、10 位と、順位を多少落としたものの⁵⁵、依然としてこれら 3 か国が、わが国のムスリム留学生数増加の一端を担っていたことは間違いない。

なおこの入管法では、それまで海外にある現地法人社員を受け入れるためのものであっ

12 万 3829 人であった留学生数を 2020 年には 30 万人にしようというもの。受け入れ環境づくりだけでなく、卒業・終了後の社会の受け入れ推進も図る。2019 年に 31 万 2214 人となり、目標の 30 万人を達成した（文部科学省 2021: 2; JASSO 2020: 9）。

⁵⁵ 2019 年のこの 3 か国の留学生数は、マレーシア 3052 人、インドネシア 6756 人、バングラデシュ 3527 人と、上掲注 53 の数字を大きく上回っている（JASSO 2020: 4）。

た研修制度が、海外法人と関係がない中小企業においても利用可能となり、これ以降「研修」の在留資格による入国者も増えていく（出入国在留管理庁 2000）。この年の研修生送り出しの多い上位 10 か国は順に、中国、タイ、韓国、マレーシア、フィリピン、インドネシア、台湾、ブラジル、アメリカ、インドであり⁵⁶、ムスリムマジョリティ国が 2 か国含まれている。図 2-2 はこれらマレーシア、インドネシアの「研修」での入国者数の推移を示したものであり、マレーシア人はその後漸減しているものの、それでもインドネシア人と合わせれば、留学生数を大きく超える研修生が継続して来日していることがわかる。

(2) 就労の機会を求めて入国したニューカマー

1985 年のプラザ合意による円高不況を受け、政府が行った金融緩和政策は、日本経済のいわゆる「バブル」現象を生み出した。市場シェアの拡大と顧客への過剰サービスが労働力需要を上げる中、若年労働力は都市的で華やかな職業に集中し、重筋労働や単純反復労働における人手不足は深刻化していった。一方、豊富な若年労働力人口に対し雇用機会が不足していた当時のアジアにおいて、「貧しい国々の大海原に 1 つだけぽつんと日本が繁栄している国として存在しているという構図」（依光 2002: 19）は有力なプル要因となり、はじめフィリピン人やタイ人らが目立っていた工場や建設現場等に、パキスタン人やバングラデシュ人、イラン人が加わるようになっていく。それぞれ、海外就労者への無税あるいは低税率で電化製品や自動車持ち込みができるといった移民奨励政策や大洪水による政情不安、戦争帰還者増による失業率高騰などのプッシュ要因はあれど、かれらが移動先に日本を選んだ理由は、査証相互免除協定（以下、「免除協定」）の制度によるところが大きい（福田 2020: 89; 水上 2020: 98; 桜井 2003: 87）。これにより、免除協定締結国出身者は事前の査証取得なしに空港または海港にて上陸許可が与えられ、「短期滞在」の在留資格によって 90 日以内の滞在が可能となる。当時のこの制度利用者によれば、90 日ごとに韓国やフィリピンなど日本の近隣国に向けて出国しては再入国することを繰り返し、超過滞在回避の工夫をする者が多かったという。

図 2-3 はパキスタン、バングラデシュ、イランからの「短期滞在」資格の入国者数の推移を示したものであり、1985 年以降急増している。パキスタン人とバングラデシュ人の入国者数のピークは 1988 年で、1981 年に比べるとそれぞれ約 13 倍と 47 倍の増加率であり、イラン人の入国者数のピークは 1991 年で、1981 年に比べると約 130 倍の増加率である。だがいずれもピークの翌年に入国者数は激減し、その後も緩やかな減少が続く。これは、パキスタンとバングラデシュに対する免除協定が 1989 年 1 月以降、イランに対する免除協定が 1992 年 4 月以降、一時停止されたためであり、その前年に駆け込み入国が相次いだことが考えられる。その背景に言及すると、わが国の出入国管理体制が外国人の単

⁵⁶ 1990 年のそれぞれの国からの研修生数は、中国 7846 人、タイ 5199 人、韓国 5128 人、マレーシア 3704 人、フィリピン 3596 人、インドネシア 2940 人、台湾 2072 人、ブラジル 1054 人、アメリカ 825 人、インド 615 人。

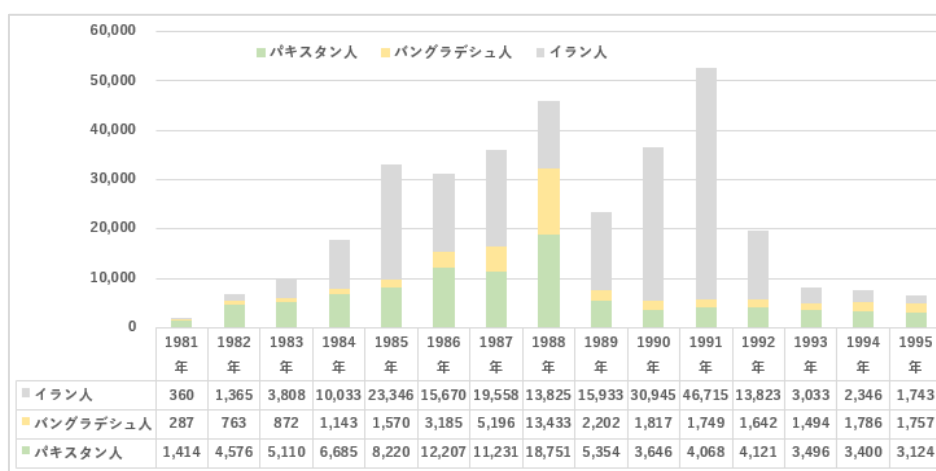


図2-3 主なムスリムマジョリティ国出身の「短期滞在」資格入国者数推移
出所：出入国在留管理庁「出入国管理統計表」1981-1995年版をもとに筆者作成

純労働就労を認めないことは現在と変わりはないが、深刻な人出不足の状況下、当時の行政が「短期滞在」の在留資格による就労を「見て見ぬ振り」をし続けていたために（依光 2002: 21-2）、資格外就労者が急増していった。その後、1988年策定の「第6次雇用対策基本計画」によって、「外国人の優秀な人材」のみ受け入れる方針が定まり（内閣府 1988: 11）、専門的・技術的労働者以外の外国人労働者の入国を制限するために改正された入管法が1990年に施行されることになる。パキスタンとバングラデシュ、イランに対する免除協定の一時停止は、これに前後して行われた外国人労働者対策であった（法務省入国管理局編 2003: 29）。入管法においては、新たな人出不足対策として日系人の入国規制を緩和する一方で、不法就労助長罪を新設して外国人労働者の入国を制限した。不法就労助長罪は雇用主に対する処罰規定であるが、外国人に対する罰則が強化されるという噂が広まったため、多くの外国人が急遽帰国する事態となった（依光 2002: 23）。

(3) ニューカマー・ムスリムの属性

前項より、1980年代以降のムスリム流入には、「留学」「就学」「研修」といった学びの機会を求めて入国した者と、「短期滞在」で資格外就労する者が多分に関わっていたこと、また前者にはインドネシア、マレーシア、バングラデシュの出身者が多く、後者にはパキスタン、バングラデシュ、イランの出身者が多かったことがわかった。ここからは、この5か国をニューカマー・ムスリムの主要出身国として扱うこととし、その出身者の属性をみるため、免除協定停止以前である1988年時点の滞日者の年齢と性別を図2-4に示す。

5か国とも全体として女性より男性の滞日者の方が多いが、バングラデシュとパキスタンではその差が顕著である。女性の社会進出の程度を推測するため、Our World In Data（1991-2021年の統計）より労働人口比率を見ると、バングラデシュは20%台後半から30%台前半、パキスタンは10%台前半から20%台前半を推移している。1988年当時のデータ

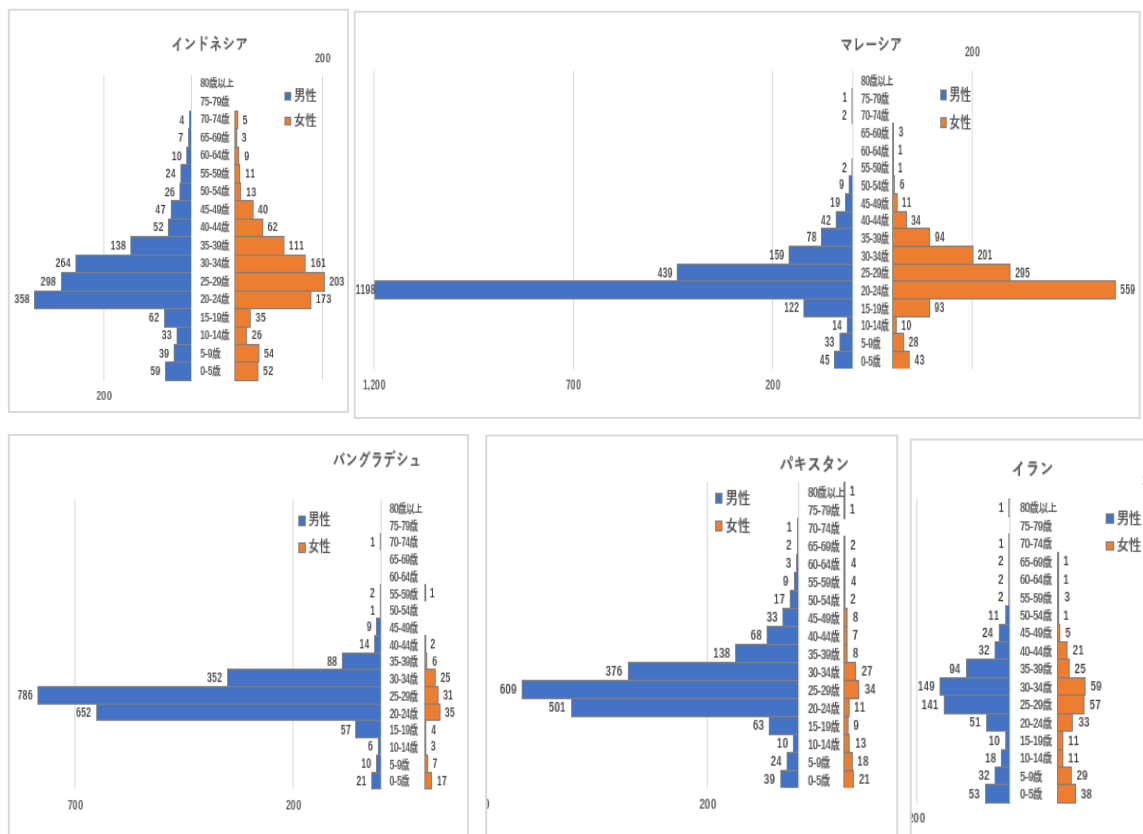


図 2-4 男女別・年齢別滞日者の数（上段左からインドネシア、マレーシア、下段左からバングラデシュ、パキスタン、イラン）

出所：出入国在留管理庁「在留外国人統計統計表」1988 年版をもとに筆者作成

はないが、上記データの 30 年間の変化の小ささを考えるに、状況は変わらないと思われ、両国ともに女性が社会進出しにくい背景が、学習や労働を目的とした海外渡航に結びつかないことを示している。同データで、インドネシアとマレーシアの 30 年間の労働人口比率は一貫して 40%を超えており、そうした背景が学習や労働を目的とした海外渡航を妨げないことが、図 2-4 に反映されている。なおイランは 10%未満から 10%台前半を推移しているにもかかわらず、バングラデシュやパキスタンほどに男女差が顕著でないのは、「短期滞在」の入国者のピークが 1988 年にはまだきていなかったことと（図 2-3）、この時期の滞日者の在留資格の多くが「家族滞在」や「日本人の配偶者」であることが影響していると思われる。それは、年齢のばらつきが他の 4 か国より小さいことから、子どもを含む家族単位の滞日者が多いと推測される。これに対して、他の 4 か国は最も多い年齢層が 20 歳代に集中しておりそれ以外の年齢層との差が大きいことから、家族単位というより大半が単身での滞日であると考えていいだろう。

2 第一世代の定住

前節でみた通り、1980 年代以降に流入した外国人ムスリムは、その多くが 20 歳代の若い男性に偏っていたことが特徴的である。それは、カースルズとミラーの移民の定住過程のモデルでいう第 1 段階、すなわち一時的な若い労働者の移住の時期であり、その多くは海外送金と母国への帰国志向を強くもっていたと思われる (Castles & Miller 1998: 28)。そうして、大半の者が在留資格に応じた在留期限内に帰国するなか、1990 年代に入ると一部に在留資格を変更してあるいは在留期限を超過してそのまま滞日続ける者の数が増える。20 歳代の若い男性であるかれらは、ある者は出身国から配偶者を呼び寄せてまたある者は日本人と結婚して、ムスリム家庭を形成していく。本節では、この定住過程モデルの第 2 段階である滞在の延長の時期から第 3 段階である長期定住の意識が高まる時期における第一世代の動向を概観する。

(1) 滞在の延長／社会的ネットワークの発展

経済低成長時代に入ったヨーロッパで、各国が移民の受け入れを停止した 1970 年代、それがかえって移民の増加を招いたことは第 1 章で述べた。我が国の免除協定の停止や入管法の改正といった滞日外国人排除の政策もまた、滞日者の減少にはつながっておらず、むしろ在留期限を超過しても滞日続ける外国人を増加させる結果となった⁵⁷。国が門戸を閉じようとすることは、これまで自由に入出国が許されていた外国人にとっては突然の不都合な事態であり、すでに滞日していた者が二度と入国できないことを恐れて出国を躊躇ったり、出身国から急いで家族を呼び寄せたりすることがあっても不思議ではない。かくして、免除協定の停止は、前節でみたように直前の駆け込み入国者を急増させ、これまで 90 日ごとに出国と再入国を繰り返していた者を超過滞在者⁵⁸に転じさせる結果となった。また、現在でもなお留学生や技能実習生の失踪が社会問題であることに鑑みれば (『日本経済新聞』2019.6.11, 2023.10.5 など)、当時の「留学」「就学」「研修」の在留資格をもつ滞日者の中にも受け入れ機関から失踪し、結果的に超過滞在者となる者が当時も相当数いたことは想像に難くない。

これら超過滞在者の正確な数が初めて公表されたのは 1990 年である。そこから 10 年間

⁵⁷ 改正入管法が施行された 1990 年に約 10 万人だった超過滞在者は、1992 年 5 月には約 29 万に増え、わずか 2 年弱で 3 倍近くに達したことを受けて、改正入管法を「大いなる失敗」とする見方もある (倉 2003: 70)。

⁵⁸ 1990 年の入管法改正以降、上陸時に許可された滞在期限を超えて超過滞在する者に「不法」という表現が付されるようになり、警察の強調に追随するかたちで行政にも「不法残留者／不法滞在者」の表現が浸透していくことで、「治安悪化」の「元凶」としてスケープゴートにされているという見方がある (高谷 2018: 539)。そこで本論文では、「不法」という表現を避け「超過滞在者」という語を用いることにする。

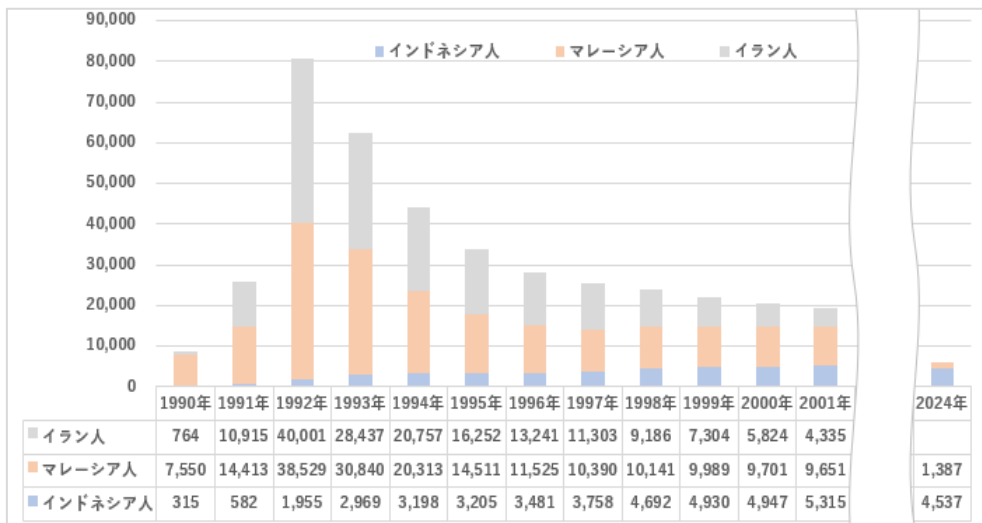


図2-5 主なムスリムマジョリティ国出身の超過滞在者数推移

出所：厚生労働省（2002）および出入国在留管理庁（2024）をもとに筆者作成

の推移を報告した厚生労働省資料（2002）によると、2001年1月1日現在の超過滞在者の多い上位10か国は順にタイ、韓国、フィリピン、中国、マレーシア、イラン、ペルー、台湾、ミャンマー、インドネシアであり、ムスリムマジョリティ国が3か国含まれている。図2-5はこれらマレーシア、イラン、インドネシアの超過滞在者数の推移を示したものである。まず目を引くのは、イラン人の超過滞在者数のピークは1992年であり、上掲の図2-3でイラン人入国者数のピークが免除協定停止の前年である1991年であったことと合わせて考えるに、超過滞在を覚悟したうえでの大量駆け込みがあったとみてよいだろう。また、マレーシアとインドネシアは、直近のデータにおいても超過滞在者の多い上位10か国に上げられており（出入国在留管理庁 2024）⁵⁹、かつての研修生送り出し国であった両国は依然として技能実習生の大量送り出し国として⁶⁰、超過滞在者を生み出しうる潜在性を有している。

なおバングラデシュとパキスタンについては、前出の厚生労働省資料（2002）で超過滞在者の多い上位10か国に含まれていなかったためその数字は明らかでないが、両国の入国者数のピークが免除協定停止の前年である1988年であることから（図2-3）、これはイランと同様、超過滞在を覚悟したうえでの大量駆け込みだったと考えられる。したがって、1989年以降の5～6年間ほどは相当数の超過滞在者がいたことは間違いない。だがそ

⁵⁹ 2024年1月1日現在、超過滞在者の多い上位10か国は順に、ベトナム、タイ、韓国、中国、フィリピン、インドネシア、台湾、スリランカ、カンボジア、マレーシアである。

⁶⁰ 外国人研修制度は度重なる制度改正を経て外国人研修・実習制度へ移行、2010年に在留資格「技能実習」が設けられ、2013年の入管法改正によりかつての研修生は技能実習生として法的地位の安定化が図られた（総務省 2013: 2-4）。

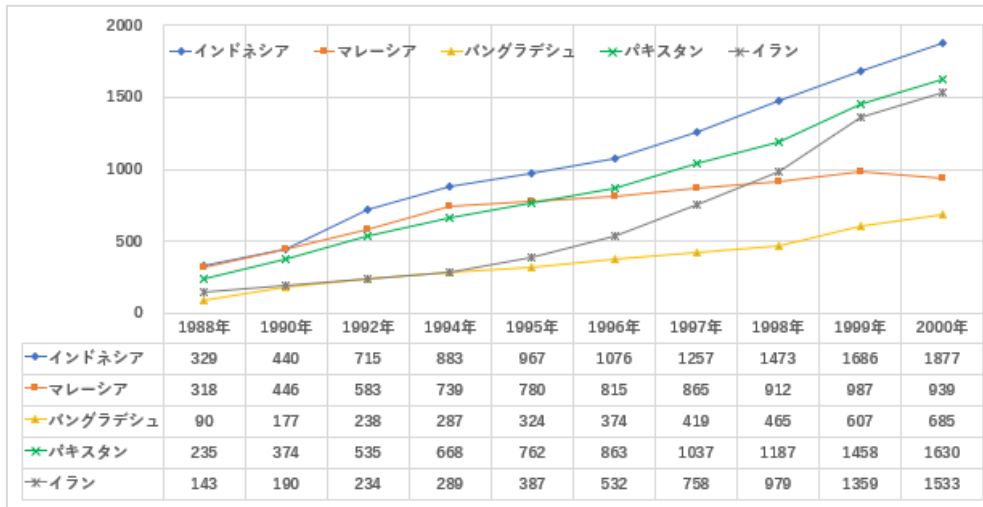


図2-6 主なムスリムマジョリティ国出身の「日本人の配偶者等」保持者数の推移
出所：出入国在留管理庁「出入国管理統計表」1988-2000年版をもとに筆者作成

の数も、研修・技能実習生や「定住者」の在留資格を与えられた日系人との「入れ換え」によって就労の場所を失い（高谷 2018: 538）、また超過滞在者を治安上の問題と結びつける警察の徹底的な取り締まりによって⁶¹、漸減していったのだろう。

とはいえ、すべてが帰国したわけではなく、在留特別許可（以下、「在特許可」）により正規の在留資格を取得する者も少なからずいた。在特許可は、超過滞在者を退去強制することが人道的な観点等から問題が大きいと認められる場合、法務大臣の裁量で特別に在留が許可される制度である（法務省 2002）。前述の通り、滞日者の多くは20歳代の単身の男性であり、そのなかには日本人女性と結婚する者がいたとしても不思議ではない。在留期限内に結婚した者は比較的容易に「日本人の配偶者等」の在留資格に変更できるが、期限を超過してしまった場合、入管局に出頭し退去強制の対象となる中で複雑な要件を整えて申請を行い、在特許可が下りるのを数年単位で待つことになる。1990年代後半から在特許可件数が急速に増大しているという指摘は（鈴木・藤本 2013: 22）、免除協定停止後の超過滞在者急増の時期から在特許可を得るまで数年のズレがあるせいだろう。ニューカマー・ムスリムの主要5か国について1988年以降の「日本人の配偶者等」保持者の人数の推移を示した図2-6からも、1990年代後半以降、特にインドネシア、パキスタン、イランの出身者の増加が目立っており、そこに在特許可により正規の在留資格を取得した者が

⁶¹ 1990年の入管法改正によって新設された「不法」就労助長罪による検挙数は、1991年・1992年・1993年の順に、242件・351件・692件で増加しており、超過滞在者に対する「不法」就労摘発者数の比率も、1991年・1992年・1993年の順に、マレーシア19.1%・41.4%・46.4%、イラン35.4%・42.3%・37.2%、バングラデシュ3.7%・4.7%・9.0%、パキスタン10.0%・13.3%・18.9%と急増している（田巻1995：269-270）。

相当数含まれていると考えられる。

こうして滞日ムスリムの滞在期間が延長していくにしたがい、一時的な滞在のつもりでいた時期には妥協していた宗教実践のいくつかを、本来のやり方で遂行しようとする者が増えていく。例えば食生活において当時の様子を概略すると(クレシ 2017:3-5)、初めのうち豚肉を避けこそすれ、一般市場に流通する牛肉や鶏肉は屠畜方法にこだわらず口にするのが普通だった者たちがハラール性を気にし始める。その中で食肉処理施設とつながった者が、施設を間借りして買い取った牛や鶏をイスラーム法に則り屠畜、自宅に持ち帰って費用負担者の人数分に袋詰めして分配するようになり、ハラール肉を入手するためのネットワークが構築されていく。こうしたやり方はムスリム同士の相互扶助の一環として、東海圏では1998年まで⁶²、関西圏では2000年代まで続いていた。一方、関東圏ではいち早くこれをビジネスにする者が現れ、1980年代には自営する会社の一角や自宅に大型冷凍庫を置いてハラール肉を販売する、食品衛生法に基づく営業許可を持たないいわゆるアンダーグラウンドの店舗が増えていった。また、金曜日の集団礼拝についても、利用者が費用を負担し合ってアパートの一室や公共の集会所を賃借するなどして、その後のモスク設立の前身となるような地域ごとの集まりが各地にみられるようになっていく。

(2) 長期定住の意識の高まり／コミュニティの出現

先にみた通り、滞日ムスリムの多くは滞在期間の延長にともない、日本で家庭を築くようになる。出身国から配偶者を呼び寄せる場合、正規の在留資格を有する者は里帰りの際に、また超過滞在者は日本を出国できないため、電話でニカー（結婚の契約）を行う。前者の場合、現地で発行された婚姻証明書によって「家族滞在」の在留資格を得て妻の来日が可能となるが、後者の場合、妻は「短期滞在（観光）」の在留資格で入国し、そのまま夫とともに超過滞在することになる。一方、日本人女性と結婚する場合には、正規の在留資格を有する者は日本と出身国の両国の法的手続きと「日本人の配偶者等」への在留資格変更の手続きを行い⁶³、超過滞在者は入国管理局に出頭の上、在特許可申請を経て「日本人の配偶者等」の在留資格を得ることになる。それとは別に宗教的手続きとしてニカーを行う必要があるが、そのためには男女双方がムスリムでなければならず⁶⁴、日本人女性はニカーに先んじてイス

⁶² 東海圏では、1998年の名古屋モスク設立まで、その前身の名古屋イスラム協会が賃借していたムサッラーに冷凍庫が置かれ、ハラール肉が供給されていた(クレシ 2017:6-7)。

⁶³ 具体的には、出身国発行の出生証明書と婚姻要件具備証明書を日本の役所に提出し、日本の役所発行の婚姻届受理証明書を出身国の大使館に提出し、その後婚姻の記載のある戸籍謄本ほか必要書類を揃えて在留資格変更の申請を行う。

⁶⁴ クルアーンには、「多神教の男が信者になるまでは、あなたがたの女子をかれらに嫁がせてはならない(第2章221節)」とあるが、「啓典を授けられた民の食べ物、あなた

ラームに入信する。入信自体はムスリムの証人2人以上の立ち合いのもとにシャハーダ（信仰の証言）をするだけで完了するが、1990年代当時、大使館に提出するための入信証明書や結婚証明書を発行できるのは、東京のイスラミックセンター・ジャパンと神戸ムスリムモスクしかなく⁶⁵、地方在住者も煩をいわず東京や神戸に赴き入信と結婚の手続きを時間差で同日に行うなどしていた。

かくも煩雑な手続きを経て、日本にようやく誕生した「ムスリム家庭」であるが、その数は滞日者全体のどれくらいなのだろうか。超過滞在者の実態は統計がないため不明だが、正規の在留資格をもつ者について、ニューカマー・ムスリムの主要5か国出身者の在留資格の割合を多い順に示したものが表2-1～3である。まだ在特許可件数が増大する以前の1990年（表2-1）には、「日本人の配偶者等」の在留資格を有する者がいずれの国でも1割前後、「家族滞在」についてはイラン以外の4か国で1割前後いたことがわかる⁶⁶。また、この時期すでに免除協定が一時停止しているパキスタンとバングラデシュで「短期滞在（観光）」が目立つが、その多くは超過滞在予備軍と考えられ、なかにはすでに超過滞在者となっている者が配偶者として呼び寄せた女性も相当数含まれている可能性がある。その10年後の2000年（表2-2）に、「日本人の配偶者等」を有する者の割合はインドネシア以外の4か国で増えており⁶⁷、特にパキスタンとイランで全体の2割を超えているのは、在特許可件数が急増した結果だと思われる。なお「日本人の配偶者等」の在留期間は、通常は初め1年間、複数回目の更新時に3年間、5年間と延長されていくが、5年間の在留期間付与後に「永住者」の在留資格への変更申請が可能である。よって、2000年の時点で「日本人の配偶者等」だった者の多くは漸次「永住者」に在留資格を変更していったと考えられ、その結果、10年後の2010年（表2-3）には、5か国とも「永住者」が「日本人の配偶者等」を

がたに合法であり、あなたがたの食べ物、かれらにも合法である。また信者の貞節な女、あなたがた以前に、啓典を授けられた民の中の貞節な女も（第5章5節）」とある。したがって、非ムスリムの男性は必ず入信しなければならず、女性がキリスト教徒やユダヤ教徒である場合は啓典の民として本来結婚は許される。しかし、キリスト教徒やユダヤ教徒が少ないバングラデシュやパキスタンの出身者はそうした例に馴染まないためか、キリスト教徒の女性にも改宗を求める事例が多い。

⁶⁵ 1998年以降、名古屋モスクも証明書を発行するようになるが、それ以前は、名古屋モスクの前身である名古屋イスラム協会が入信と結婚の立ち合いを行い、イスラミックセンター・ジャパンに証明書作成の取り次ぎを行っていた（クレシ 2021a: 246）。

⁶⁶ イランが他の4か国と異なるのは、先の男女別・年齢別滞日者数から推察したように、1980年代からすでに家族単位での滞日者が多く、まだ単身の男性の入国のピークが来ていないためと思われる。

⁶⁷ インドネシアが他の4か国と異なるのは、留学生の就職活動期間に与えられる「特定活動」の在留資格を有する者が多いという、特殊な背景がある。

表 2-1 1990 年のニューカマー・ムスリムの主要 5 か国出身者の在留資格上位 5 つ

	インドネシア 総数 3623 人	マレーシア 総数 4683 人	バングラデシュ 総数 2109 人	パキスタン 総数 2067 人	イラン 総数 1237 人
1	研修 28.9% 1047 人	留学 35.2% 1649 人	就学 24.3% 512 人	短期滞在(観光) 34.9% 721 人	短期滞在(観光) 23.8% 294 人
2	留学 26.7% 968 人	研修 17.1% 803 人	留学 23.3% 492 人	日本人の配偶者等 18.1% 374 人	家族滞在 23.6% 292 人
3	家族滞在 13.8% 500 人	日本人の配偶者等 9.5% 446 人	短期滞在(観光) 13.3% 280 人	家族滞在 11.4% 236 人	日本人の配偶者等 15.4% 190 人
4	日本人の配偶者等 12.1% 440 人	就学 9.0% 423 人	家族滞在 8.7% 184 人	短期滞在(商用) 4.7% 98 人	留学 6.8% 84 人
5	永住者 3.7% 135 人	家族滞在 7.3% 341 人	日本人の配偶者等 8.4% 177 人	就学 4.6% 95 人	定住者 4.8% 59 人

出所：出入国在留管理庁「登録外国人統計」1990 年版をもとに筆者作成

表 2-2 2000 年のニューカマー・ムスリムの主要 5 か国出身者の在留資格上位 5 つ

	インドネシア 総数 19346 人	マレーシア 総数 8386 人	バングラデシュ 総数 7176 人	パキスタン 総数 7498 人	イラン 総数 6167 人
1	特定活動(その他) 28.5% 5518 人	短期滞在(観光) 27.1% 2273 人	短期滞在(観光) 18.5% 1331 人	短期滞在(観光) 22.0% 1650 人	短期滞在(観光) 41.0% 2531 人
2	研修 23.3% 4506 人	留学 22.5% 1890 人	家族滞在 16.2% 1163 人	日本人の配偶者等 21.7% 1630 人	日本人の配偶者等 24.9% 1533 人
3	日本人の配偶者等 9.7% 1877 人	日本人の配偶者等 11.2% 939 人	留学 14.2% 1018 人	短期滞在(商用) 10.4% 783 人	永住者 7.1% 436 人
4	留学 7.5% 1448 人	家族滞在 7.1% 598 人	日本人の配偶者等 9.3% 665 人	家族滞在 7.7% 578 人	家族滞在 5.0% 311 人
5	家族滞在 6.7% 1304 人	永住者 6.9% 581 人	短期滞在(商用) 8.9% 641 人	永住者 7.3% 546 人	短期滞在(商用) 3.2% 198 人

出所：出入国在留管理庁「登録外国人統計」2000 年版をもとに筆者作成

表 2-3 2010 年のニューカマー・ムスリムの主要 5 か国出身者の在留資格上位 5 つ

	インドネシア 総数 24895 人	マレーシア 総数 8364 人	バングラデシュ 総数 10175 人	パキスタン 総数 10299 人	イラン 総数 4841 人
1	永住者 15.6% 3894 人	留学 32.0% 2676 人	家族滞在 22.1% 2253 人	永住者 31.8% 3280 人	永住者 50.3% 2435 人
2	特定活動(その他) 15.0% 3736 人	永住者 23.5% 1968 人	永住者 20.3% 2062 人	家族滞在 16.0% 1644 人	日本人の配偶者等 10.4% 504 人
3	留学 10.9% 2725 人	家族滞在 12.8% 1071 人	留学 16.9% 1715 人	人文知識・国際業務 8.1% 836 人	短期滞在(観光) 9.3% 449 人
4	日本人の配偶者等 10.7% 2657 人	日本人の配偶者等 7.0% 584 人	人文知識・国際業務 5.6% 565 人	日本人の配偶者等 7.9% 818 人	家族滞在 6.3% 306 人
5	家族滞在 10.5% 2622 人	短期滞在(観光) 2.7% 229 人	技術 4.6% 466 人	短期滞在(観光) 5.9% 608 人	留学 5.3% 256 人

出所：出入国在留管理庁「登録外国人統計」2010 年版をもとに筆者作成

上回ることになる。さらに、この「永住者」の在留資格を有する者の中には将来的に日本に帰化する者も少なくなく、かれらの定住化は確実にすすんでいる。

長期定住の意識の高まりは、前述した宗教実践を遂行するための応急的な対策を恒久的なものに変えようとする営みの原動力となる。かつてアンダーグラウンドで行われていたハラール肉販売は、食品衛生法に基づく営業許可を取得した正規店舗に取って代われ、スパイスや豆類ほかのエスニック食品を扱う大規模なハラール食材店や、それを使用した料理を提供するハラールレストランの経営に乗り出す外国人ムスリムが増えていく。なかでも目立つのはパキスタン人で、ハラール関係だけでなく中古自動車や機械の貿易に携わる者が多く、エスニック・ビジネス従事比率は1995年の11.8%から2000年には27.0%と急増し、「ニューカマー最大の企業家移民」（樋口 2010: 14）、「ニューカマーのなかでもっとも自営業進出に成功した者」（福田 2012: 221）とさえいわれる。そして、それらパキスタン人を中心とする「成功したムスリム」からの「数百万単位の高額の寄付」（岡井 2007: 189）によって⁶⁸、国内に次々とモスクが設立されていくのもこの時期である⁶⁹。無論モスクは礼拝のための施設であるが、ムスリムがマイノリティである日本においては、学習や交流のための集会が定期的で開催されるなど、相互扶助のための重要な拠点にもなる。こうして、第一世代の長期定住が進むにつれ、モスクを中心としたコミュニティが各地に形成されていくことになる。

3 日本に暮らすムスリムを取り巻く環境

第一世代の滞日理由や形態はさまざまであり、国費留学生として来日したエリートもいれば、滞日中に「短期滞在」の在留資格から「投資・経営」に変更して正規の就労資格を得た者もあり、すべてが超過滞在し不法に就労していたわけではない。当然ながら、かれらのすべてが治安悪化の原因であるはずもないし、危険な思想を持っているわけでもない。しかしながら、第一世代の多くは日本社会において、「あるときは『不法滞在者』として、あるときは『犯罪者』として、またあるときは『テロリスト予備軍』として」まなざされてきた（樋口 2007: 19-20）。こうした否定的なまなざしは、第一世代のみならず第二世代にも多分に影響を及ぼすものであるため、以下に概観しておく。

(1) ニューカマー・ムスリムへのまなざし

1980年代半ば以降の深刻な出入不足の状況下、外国人労働者は警察も含め半ば公然化された存在であり（高谷 2018: 534）、当時の行政も見て見ぬふりをすることで実態を把握してはいなかったため（依光 2002: 21-2）、超過滞在者の正確な数が初めて公表されたのは

⁶⁸ なかには、モスク設立のために8000万円の寄付をした者もいる（クレシ 2020: 38）。

⁶⁹ 1991年の一ノ割モスクを皮切りに、1990年代だけで11か所、2000年代には48か所のモスクが設立され、2024年現在150か所以上を数える（店田 2024: 21-27）。

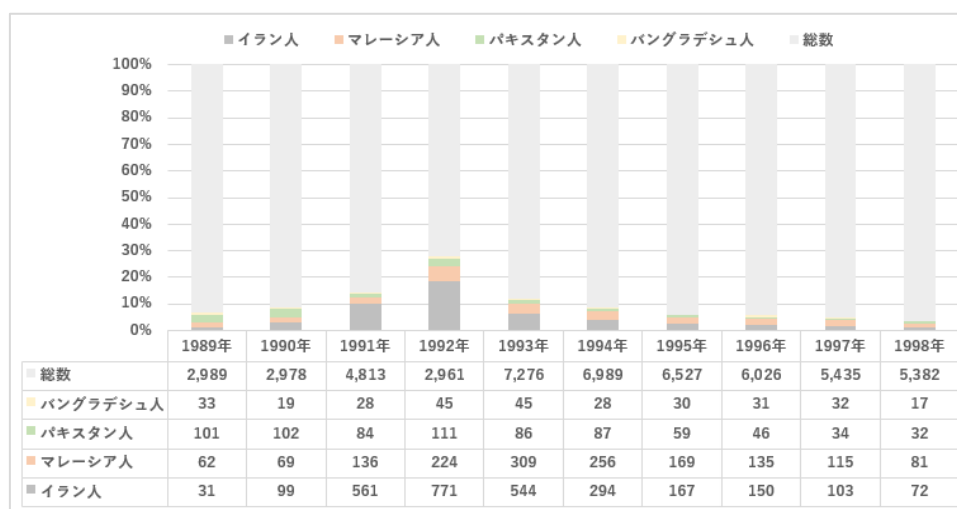


図 2-7 外国人刑法犯の検挙人員：総数に対するニューカマー・ムスリムの割合
出所：警察庁（1995）および警察庁（1999）をもとに筆者作成

1990年のことである。同年、改正入管法施行により不法就労への制度的対応が取られるも、この時点で「不法」という言葉は入管法に違反しているという意味であり「犯罪」とは別物であった（高谷 2018: 535）。しかし、超過滞在者の数の可視化と連動するかのよう
に、1993年度の『警察白書』には、その前年までなかった「国際化社会と警察活動」の章
が設けられ、「不法滞在者」が各種犯罪の発生と結びつけて語られるようになる（警察庁
編 1993）。さらに、その翌年度の同白書同章には、「来日外国人凶悪犯の半数以上が不法
滞在者によるものである」という記述さえもみられる（警察庁編 1994）。とはいえ、「外
国人凶悪犯」とひと括りにされるその内訳をみれば、図 2-7 に示す通り、ニューカマー・
ムスリムが特に目立って多いということではない。外国人刑法犯の検挙数は、いずれの年
次でも中国・韓国・北朝鮮の出身者の合計がその半数以上を占めているが（警察庁編
1995, 1999）、これらの国々の出身者が外見的に日本人と相似しているのに対して、ニュー
カマー・ムスリムは可視性が高く、その存在は急速に広まる「治安悪化神話」において日
本社会に暮らす人々に不安を抱かせる（高谷 2018: 539）。特に、イラン人の入国者数がピ
ークに達した1991年（図 2-3 参照）から数年間は⁷⁰、改正入管法施行により行き場を失っ
たイラン人が代々木公園や上野公園にい集する様子がメディアに取り上げられ、ときに
「覚せい剤」「偽造テレカ」「逮捕」といった言葉とともに報道されることも多かった（南

⁷⁰ イラン人の大量入国はパキスタン人やバングラデシュ人のそれより遅れて始まっており、すでに 1990 年の改正入管法施行により、外国人労働者市場が日系人にとって代わられていた頃であった。またいわゆるバブル崩壊により、日本の景気が後退に転じ始めた時期にも重なり、多くが不安定な雇用状況におかれていた（倉 1995: 196-7）。

2020a, 2020b) ⁷¹。図 2-7 でイラン人の検挙数の増加が目立つ 1991～93 年がちょうどこの時期であり、ニューカマー・ムスリムの存在が治安上の大きな問題と位置付けられるようになった要因のひとつであると思われる。

さらに、2001 年に起きたアメリカ同時多発テロ事件が、ニューカマー・ムスリムに新たな否定的イメージを加えることになる。「警察白書」でも、イスラーム過激派によるテロの脅威が強調されるようになり（警察庁編 2003: 254-255）、「イスラームをテロリズムと同義であるという考え方」をもつ政府は、「すべてのムスリムは宗教的信条を持つだけで潜在的な安全保障上のリスクがあるという前提に明確にもとづいて」、滞日ムスリムに対する大規模な監視活動を進めていく（Takahashi 2021: 171-2）。それは、モスクやイスラーム団体への潜入捜査や、尾行や自宅前での張り込みを行うことで、滞日ムスリムの氏名や写真、身体特徴、旅券番号、運転免許証番号、現住所、勤務先、使用車輛、住所歴、学歴、職歴、また家族の名や生年月日、勤務先、学校名すべてデータ化するという徹底的なものであった（第三書館編 2010: 26-130） ⁷²。

ムスリムへの否定的なイメージの拡散と定着には、メディアによる影響も大きい。表 2-4 は、店田らによるモスクのある地域の住民に対する意識調査をもとに（店田・岡井 2011: 88-90; 店田・石川・岡井 2012: 70-3, 2013: 72-3, 75-6）、イスラームに関する情報源とその内容をまとめたものである。いずれの調査においても、情報源として最も多いのは「テレビ」であり「新聞」がこれに続く。3 位以降は調査した都市によりやや異なるが、「本や雑誌」「インターネット」の回答も多く、こうしたメディア経由で得られる内容の大半は、「紛争や事件」に関することである。実際、2019 年の新聞記事におけるイスラーム関連報道をカテゴリー別に分けた統計では（Anna 2020）、多い順に、「政治・政策（29%）」「紛争（25%）」「テロ（16%）」であり、2015 年の新聞記事における「内容に暴力性が伴う記事の割合」についての統計でも（ドウカイ 2016）、キリスト教関連で 10.7%に対してイスラーム関連では 50.7%である。これらの記事の文脈をみるに、イスラーム関連の紛争がすべて宗教上の対立ではなく、また必ずしもムスリムが加害者であるわけではないが、報道の受け取り手にとってはどれも「紛争や事件」に結びつくものでしかなく、両統計の作成者によれば、「報道されるニュース内容の偏りからくるイスラーム教への暴力的なイメージの付与」と「イスラーム教の報道が少ないが故の、イスラーム教への理解不足・それに伴う、わからない

⁷¹ 上掲注のような状況で、携帯電話やインターネットが普及していないなか、情報交換ために集まるのが代々木公園や上野公園だった。最大時で 8000 人を超すイラン人が集まっていたといわれ、帰国のタイミングを逃した底辺層の一部が非行化せざるをえなかったことが指摘される（駒井 2020: 97）。

⁷² 2008 年 5 月末の時点で、都内のイスラーム諸国出身者の約 89%の実態把握が完了していることから（第三書館 2010: 134）、すでに 16 年以上が経過した 2024 年末現在では、ほぼすべての在日ムスリムの実態が日本政府によって把握されていると推察される。

表 2-4 イスラームに関する情報源とその内容

設問	回答の選択肢	岐阜市 446人 (2009年調査)	射水市 340人 (2011年調査)	福岡市 326人 (2012年調査)
イスラームに関して 何から情報を得てい るか（複数回答可）	テレビ	70.0%	75.1%	79.5%
	新聞	46.6%	45.9%	35.7%
	本や雑誌	20.2%	19.8%	25.9%
	インターネット	11.4%	8.3%	25.6%
	学校の授業	7.4%	-	-
	講座・講演	1.6%	-	-
	講義・講座・講演	-	2.1%	4.0%
	うわさ話・世間話	-	25.1%	12.1%
	ラジオ	-	-	7.7%
イスラームにかかわ る情報で最もよく耳 にする内容	近所のムスリム	-	-	6.1%
	政治	-	6.5%	10.1%
	経済	-	2.7%	1.8%
	社会	-	3.0%	1.8%
	紛争や事件	-	65.4%	50.9%
	歴史や文化	-	11.5%	14.1%
	教え	-	-	9.5%
	お住まいの地域の こと	-	2.4%	2.1%

出所：店田・岡井（2011）、店田・石川・岡井（2012）、店田・石川・岡井（2013）をもとに筆者作成

ものへの不信感の増幅」が報道の問題点として挙げられ（Anna 2020）、「大きく偏った報道はそのまま人々の大きく偏った（＝誤った）認識を形成する（ママ）」（ドウカイ 2016）ことにつながる。「歴史や文化」や「教え」を伝えるメディアが少なく、メディア以外の情報源の活用も限定的である状況においては、ムスリムに対して否定的なまなざしが醸成されるのも無理はない。前出の店田らによる調査で「ムスリムとうまく付き合えると思いますか」という設問に対する回答は、「とてもそう思う」「ある程度そう思う」を合わせて、岐阜市・射水市・福岡市でそれぞれ 20.4%、11.6%、27.3%、「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」を合わせて、それぞれの都市で 72.4%、84.6%、68.4%であったのがその証左である（店田・岡井 2011: 90-2, 店田・石川・岡井 2012: 73-4, 2013: 77）。

また昨今、ヨーロッパが「自死を遂げつつある」（Murray 2017=2018）という表現をなぞって、日本もまた「欧州の後を追うかのように、自死への道を歩んでいる（中野 2018）」とする論調がある。ムスリム移民を受け入れたことがヨーロッパの治安悪化やテロ事件の頻発を招いたとする前提で進められるこの論調は、日本に暮らすムスリムの排除につながる。すでに SNS 上では、千葉県のカンファレンス代表の日本人の写真が「イスラム国の指

導者」⁷³として拡散され、大分県のイスラーム団体代表が「2100年に日本はイスラム国家になる」と主張しているという虚偽の情報におよそ2000件の反イスラームのコメントがついている⁷⁴。また、ムスリムの過激性をことさらに強調するイスラーム思想研究者の書籍が巷間もてはやされてもいる⁷⁵。

否定的まなざしは、それにさらされるムスリムの側にもある種の緊張感を生む。モスクに集まるムスリムを対象とした調査でも、日本で望むこととして最も多い回答が「悪いイメージ（テロ、怖い等）がなくなること」であり（大橋 2021: 129）、ムスリム留学生を対象とした調査でも、社会生活上の困難として「マスメディアからくる悪印象による過ごしにくさ」が二番目に多く挙げられている（中野ほか 2015: 141）。こうした日本社会での生き難さは、大人たちだけが乗り越えねばならないものではなく、本研究の対象である第二世代もまた物心ついたときから直面する試練である。

（2） 第二世代へのまなざし

社会におけるムスリムへのまなざしが否定的なものであることは、前項で論じたが、それはニューカマー・ムスリムだけでなく第二世代にも向けられている。日本政府によるイスラームとテロリズムの同義化は、「ホームグロウンテロリスト」として第二世代をも警戒の対象とする。例えば、2009年1月14日付の「関東地域国テロ担当補佐等会議概要」と題する文書には、以下のような記述がある。

ムスリムの過激化動向をいち早く察知するためにも、ムスリム第2世代の把握に特

⁷³ YouTube では、2024年9月1日時点で再生数は4万回を越えていたが、現在は閲覧不可能（雑学紹介チャンネル 2004）。なおTikTokでは、同内容のものが12月31日時点でも閲覧可能（kokkai_watch 2024）。

⁷⁴ YouTube では、2024年12月31日時点で再生数約46万回、コメント欄は「全員強制送還がのぞましい」「乗っ取ろうとしてる国の人は住ませてはいけない」など反イスラームのもので埋め尽くされている（JPステーション 2024）。なおこの動画のもとになったイスラーム団体代表のスピーチ内容は、まったく別の趣旨のものである（HUMAYUN MUGHAL TV JPN 2022）

⁷⁵ このイスラーム思想研究者の書籍は、2025年1月中旬の時点で、オンライン通販サイトの「イスラム教（一般）関連書籍の売れ筋ランキング」5位までに、4冊ランクインしている（Amazon ランキング 2005）。なおこの研究者については、他のイスラーム研究者から「著者がイスラム法学の諸理論について正確な理解を欠いている」（松山 2018: 74）、「一面的で不正確な個人的な見解に基づいて、あたかも正確なイスラーム法の真実を明らかにするかのような宣伝文句を帯びて出版された著作」（塩尻 2020: 108）といった批判もある。

に力を入れていただきたい。第2世代ムスリムは、帰化している可能性もあるほか、日本人を親に持つムスリムの子供は日本国籍を有し、外国人登録をしていない場合が多く、入管統計に表れないと思われます。(……)

いわゆるホームグロウンテロリスト対策に向けても、ムスリム第2世代の把握は不可欠であります。特に第2世代の内、15歳以上のムスリムについては就職適齢年齢であり、ホームグロウンテロリストの脅威になりうる存在でありますので、早期に把握していただきたい。(……)

ムスリム第2世代の把握方策として、

- ・子どものためのコーラン教室参加者から把握
- ・自転車の防犯登録のデータベースにより把握
- ・スクールサポーター等を通じた把握(イスラム教を起因とする学校における相談事案等の取扱い)

等を参考としていただきたい。(……)

ここで関西のある県による「県内におけるムスリム第2世代の実態」を分析した好事例を紹介いたします。調査対象は県で把握しているムスリムの第2世代で、現に日本に定住しているもの及び将来、定住すると思われる者としています。分類では親の国籍・0歳から9歳の年代・居住地域別として統計化して、

- ・現段階でホームグロウンテロリストとなり得る者の数
- ・第2世代対策の対象となる国の抽出

を行っています。また、第2世代の生活実態を分析、特に学校生活について詳細に調査しています。例えば、第2世代特有の行動として、「学校での礼拝や礼拝を理由とした遅刻状況・ラマダン期間中の給食拒否状況・給食制の学校における弁当持参状況・ラマダン中の体力減退に伴う体育の見学状況・女子学生のスカーフ着用」等を挙げています。(……)

第2世代が抱える問題の分析では、各県も共通するところがあると思いますが、

1 ムスリム特有の行動や外見上の違い等に起因するいじめや差別

2 イスラムの教えを实践させようとする親の意向とそれを望まない本人との対立

を挙げています。これらの問題は将来、日本社会に対する不満へと発展し、その不満が第2世代の過激化の要因となる可能性もありますので、今後、各県の皆さんもぜひ「県内におけるムスリム第2世代の実態」について分析して下さい。(下線部は引用者による)(第三書館 2010: 375-6)

上記文書には、入管統計に表れない第二世代の把握が難しいことへの焦りとともに、実態把握に向けた具体的な内容が示されている。第一世代の実態把握に際して、取引銀行や宿泊ホテルなどが警視庁公安部(以下、「公安」)の照会に応じて個人情報を提供していることから、第二世代についても学校関係者による情報提供はすでに行われていると推察できる。

なお、引用の最後にある第二世代の抱える問題についての言及（下線部）は、2009 年初めに交付された文書であるにもかかわらず、まさに本論文が扱う学校での周縁化や家庭での宗教継承に関する分析を先取りしたものであり、その内容は的確である。先行研究に言及した店田・岡井による同時期の調査で、回答した親世代の第一子の平均年齢が 8.6 歳であったように（店田・岡井 2010: 9）、この時期ほとんどの第二世代は、同文書中の関西の事例にみられる「0 歳から 9 歳の年代」であり、日本の第二世代研究はまだ始まっていないにもかかわらず、である。もちろん同文書中に記されたような「15 歳以上のムスリム」が当時まったくいなかったわけではないが、ニューカマー・ムスリムの定住化の過程を勘案するにその数はまだ少なく、本論文が行ったようなさまざまな背景をもつ第二世代の経験を網羅的に調査することは不可能と思われる。おりしも 2004 年から 2006 年のヨーロッパで、ホスト国育ちの第二世代が関わるテロ事件が立て続けに起きたことから⁷⁶、これが当時のヨーロッパにおける分析を引いてきたものであると推察できる。そうだとすれば、15 歳を「就職適齢年齢」とする日本の一般的な通念に照らせば違和感ある表現にも納得がいく。だが、ヨーロッパで一部の第二世代に過激化傾向がみられたからといって、日本の第二世代も当然その轍を踏むと決めつけ、無差別にすべてを警戒の対象にすることは正しいのだろうか。むしろそうしたムスリムという移民集団への「政治社会の眼」（宮島 2016: 279）こそ、第二世代を「日本社会に対する不満へと発展」させる可能性はないだろうか。

例えば公安の文書において、職務質問や巡回で得た情報を「活動報告書又は各署で定められた書式に簡記し、公安係に報告。なお、活動報告書の件名は『実態把握について』とすること」（第三書館 2010: 136）という指示が行われているが、実際に多くの第二世代は、頻繁に職務質問を受ける経験をしている。特に両親ともに外国人であるなど、外見的に日本人との差異が目立つ男子に職務質問の経験が集中しており、1 日に 3 回も職務質問を受けたという「最高記録」をもつ者もいれば、「もう慣れましたけどね」と言うほどにごく当たり前の日常になっている者もいる（西田 2023: 380）⁷⁷。東京弁護士会による外国ルーツをもつ人への調査において、過去 5 年間に複数回にわたり職務質問を受けたことがある者は 72.7% にのぼるが、そのうち「6～9 回」と「10 回以上」と受けたことがあると答えた者の合計を民族的ルーツ別にみると、多い順に「アフリカ（37.1%）」「南アジア（34.5%）」「中東（33.3%）」と（東京弁護士会 2022: 6, 18）、ムスリム出身者の多い地域に重なる。レイシ

⁷⁶ 前掲注 24 を参照。

⁷⁷ 参与観察や聞き取りのなかでも、あまりに頻繁に足止めされるのでパトカーを見かけるたびに怯えて隠れていたという経験や、自転車走行中にすれ違ったパトカーの警官にトランクから取り出した自転車で追いかけられた経験、身分証をもたない小学生の時期に身元確認できないためなかなか解放されなかったという経験など、職務質問にまつわる語りはしばしば聞かれた。なかには、毎朝同じ警官に呼び止められるので、「僕の顔覚えといってくださいよ（アリーム 男性 22 歳・26）」と訴えたという語りもある。

シャルプロファイリングは本来認められるものではないが⁷⁸、実態として、第二世代が「ホームグロウンテロリスト」対策の警戒対象になっていることは間違いない。また同調査で、職務質問によって「気分を悪くした」と回答した者は77.3%であるが(東京弁護士会 2024: 3)、長時間の聴き取りや所持品検査、高圧的な警官の態度に不快な思いをする第二世代も多いと推察される。こうした経験の積み重ねは、第二世代に社会からの差別や排除を意識させるきっかけになりはしないだろうか。

ヨーロッパにおいて、ムスリムという集団に対する社会的・経済的な差別や排除が第二世代の「幻滅と怒りをみちびき」(宮島 2016: 259)、そうした状況が「(イスラーム主義者などの) 人の弱みに付け込む言説」(Zuber 2023: 53)に感化される引き金となりうるという説明には説得力がある。だが現時点で、日本社会はそこまでの状況にあるようにはみえない。確かに、社会におけるムスリムへの否定的まなざしは1990年代から継続的に存在しているが、まだそれはヨーロッパにみられるほどの激しい攻撃的憎悪には発展していない。少なくとも筆者の知る国内各地のコミュニティやムスリムのネットワークのなかには、「日本社会に対する不満」を募らせる第二世代は、現時点では見当たらない。むしろかれらは、日本社会に受け入れられることを期待して同化願望を抱き、日本社会の価値観とイスラームの価値観を両立させて生きようとしてさえいる。この現実を確認することなく、ヨーロッパの分析をそのまま取り入れて、すべての第二世代を「ホームグロウンテロリストの脅威になりうる存在」として監視対象にすべきとする論理には、いささかの飛躍があるのではないだろうか。無論、大事を未然に防ぐための警戒や対策は必要だろうが、国家によるあからさまな差別や排除は、かえって第二世代が抱く社会への期待を打ち砕きかねない。

ヨーロッパの第二世代とて、当然ながらすべてが「社会に対する不満」を抱いているわけではない。石川真作が指摘するように、一般のムスリムのほとんどはホスト国の法秩序や社会常識の枠内で生活しており(石川 2018: 165)、山下泰幸や安達智史が描くようなホスト社会のエリート層に生きる第二世代も決して少なくない(山下 2018, 安達 2020)。日本の第二世代も同様に、法と常識に従って平和に暮らしている者がほとんどであり、筆者の知る限りでも、医師や弁護士を目指して学業に励む者、学校教員や消防士などの公職に就く者、各種企業に就職する者、会社や団体を興す者など、非ムスリムの日本人と同じように、日本社会に貢献しようと努力している者は多い。ときにその成長の過程で大きな葛藤を抱え心理的危機に陥る場合はあれど、そうした問題は、親世代や教員など第二世代を取り巻く大人たちがかれらを理解し手を差し伸べることで解消されあるいは軽減されうる。それゆえ、今まさに青年期の葛藤に苦しみ〈ムスリムであること〉とどう向き合っているかわからずにいる第二世代や、葛藤を乗り越えてアイデンティティを確立した者の生きられた経験を明ら

⁷⁸ レイシャルプロファイリングは、「人の外見という生来的な特質に着目した差別であり、憲法第14条(法の下での平等)、警察法第2条第2項(警察活動における責務)、同法第3条(警察職員の服務)に反する」ものとされる(東京弁護士会 2024: 1)。

かにすることは、ヨーロッパの轍を踏まないためにも意義あることといえよう。

4 小括

本章では、本研究の対象とする第二世代の親を含む第一世代の来日から定住までの動向を、1980年代から2000年代初頭までに絞って概観した。それは、カースルズとミラーの移民の定住過程のモデルをきれいになぞる形で進んでおり、初めは母国への帰国志向を強くもつ若い单身男性が多いなか、滞在を延長する者が増えるにつれ社会的ネットワークが発展していき、さらにムスリム家庭の形成とともに長期定住の意識が高まりモスクなどのコミュニティが形成されていく様子がみられる。以下に、その流れを簡単にまとめる。

1980年代に急増したニューカマーのなかには、学びの機会を求めまた就労の場を求めて来日した外国人ムスリムも多くいた。学びについては、「留学生10万人計画」や改正された入管法をプル要因に、マレーシア、インドネシア、バングラデシュから留学生や研修生が継続して入国し、就労については、日本経済のいわゆる「バブル」現象による人出不足を補うかたちで、パキスタン、バングラデシュ、イランから査証相互免除協定を利用した入国が相次いだ。だが1989年にパキスタン、バングラデシュとの、1992年にイランとの免除協定が一時停止され、さらに1990年に改正入管法の施行もあり、これまで自由に出入国が許されていた外国人のなかには、急いで滞在資格を変更する者や、それが叶わず超過滞在に転じる者も出てくる。かれらは滞在期間の延長にともない、一時的な滞在のつもりでいた時期には妥協していた宗教実践のいくつかを本来のやり方で遂行するため、相互扶助的なネットワークを構成していく。とはいえこの時期、ハラール肉の入手はアンダーグラウンドのハラール肉販売であったり、モスクの代わりにアパートの一室や公共の集会所が賃借されたりといった程度のものであった。これらが、食品衛生法に基づく営業許可を取得した大規模なハラール食材店や、それを使用した料理を提供するハラールレストランの開店、また土地建物を購入した恒久的モスクの開所に発展し、各地にコミュニティが誕生するようになるのは、滞日ムスリムの定住化に合わせてのことである。かれらは、出身国から配偶者を呼び寄せ、またある者は日本人と結婚して、日本でムスリム家庭を築き子を育てていく、本研究の対象である第二世代の親世代である。

しかし、これらニューカマー・ムスリムに対する日本社会のまなざしは、否定的なものが多い。「不法滞在者」や「犯罪者」といったレッテルが貼られ、また海外で起こるイスラーム過激派によるテロの脅威は、滞日するムスリムすべてが潜在的な安全保障上のリスクとみなされる現状につながる。公安はすべてのムスリムを大規模な監視活動の下におき、第二世代さえも「ホームグロウンテロリスト」として把握し警戒すべき対象となっている。メディアもまた同様に、ムスリムに対する否定的なイメージの拡散と定着に大きな役割を果たし、ムスリムの側にもある種の緊張感を生む結果となる。特に第二世代は、物心ついた時からこうしたスティグマを負って生きることを余儀なくされており、こうした現状が「日本社会に対する不満」を生じさせることになれば、社会からの攻撃的憎悪によって幻滅と怒りを

抱く結果となったヨーロッパの移民第二世代の轍を踏む可能性も否定はできない。顔の見えない集団としてのムスリムを一括りにし否定的にまなざすのではなく、個人としての第二世代一人ひとりが日本社会に受け入れられることを期待して同化願望を抱き、日本社会の価値観とイスラームの価値観を両立させて生きようとしている姿に目を向けることも必要だろう。そうした視線は、ときにその成長の過程で抱えるかれらの葛藤や心理的問題を解消し軽減する助けにもなりうる。それゆえ、今まさに青年期の葛藤に苦しみ〈ムスリムであること〉とどう向き合っているかわからずにいる第二世代や、葛藤を乗り越えてアイデンティティを確立した者の生きられた経験を明らかにすることの意義は大きい。

第3章 調査の概要

1 研究の問い

前章までに見てきたように、日本におけるムスリム第一世代の来日と定住は、ヨーロッパにおけるそれより約20年遅れて始まった。社会から否定的まなざしを向けられる点は共通しているが、日本の状況はヨーロッパ全体に蔓延するイスラモフォビアのような激しさはまだない。それゆえに、社会的な差別や排除に幻滅し怒りを抱く第二世代は、少なくとも筆者の知る国内各地のコミュニティやムスリムのネットワークのなかには、現時点でみられない。だがもし、日本がヨーロッパのムスリム受け入れの歴史を追っているとしたら、日本に暮らす第二世代が抱える問題や葛藤に目を向けることは喫緊の課題である。

ヨーロッパにおける「生きられたイスラーム」に着目するナディア・イエルトフトによれば、「研究者が調査協力者をどのように選ぶかということは、つまりムスリムが誰であるかを方法論的に定義していること」(Jeldtoft 2013: 27)である。これまで日本のムスリム研究が選んできたのは、序章で示した図序-1で第一象限に分類される者たちであり、そうした〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する者の語りによってある程度の第二世代像が形成されてきたことは間違いない。だがそこに、他の象限にみられる〈ムスリムであること〉への向き合い方のグラデーションは反映されにくい。今後は、確実に存在するにもかかわらず選ばれなかったかれらの声を拾い上げることで、第二世代像の解像度を上げていく必要があるだろう。

ところで、青年期の主題は〈自分とは何者か〉という問いに答えを見つけることである(鑑 1990: 61)。エリク・エリクソンのライフサイクル論によれば、この時期は、幼児期・児童期から経験してきた変化する多様な自己像とさまざまな役割機会とを調和させて、自分というもののアイデンティティを確立する段階である(Erikson & Erikson 1997=2001: 97)。しかし、外国ルーツの子どもとしてまた宗教と向き合わざるを得ない環境の中で、幼児期・児童期から重層的な周縁化を経験し、かつ多様な価値観の中で葛藤を抱えてきた第二世代にとって、この問いに答えることは容易ではない。それどころか、確実な自分を見出せず危機に陥ってアイデンティティの混乱が起こると、不登校や非行、精神疾患の誘因となる可能性も指摘される(鑑 1990: 106)。しかも、かれらの置かれた状況は親世代の誰も経験したことのないものであり、家庭にも学校にも理解者を得られない第二世代は孤立しやすい。青年期における疎外感がアイデンティティの混乱を引き起こすのであるなら(Erikson 1968=2017: 155)、第二世代の葛藤を軽減しかれらの青年期の発達課題を達成するためには、理解者の存在が後押しになるはずである。そのためには、第二世代が幼児期・児童期から青年期にかけてどのような環境の中でどのような経験をしてきたかを丁寧に読み解き、かれらが青年期に抱える問題や葛藤の様相を明らかにする作業が有用だろう。さらには、すでに青年期を過ぎた第二世代がこれらの問題や葛藤を乗り越えてきた経験についての事例を積み上げることに意義があると考ええる。

そこで本研究では、組織に属さない二世世代を研究の対象に加えることで、〈ムスリムであること〉への向き合い方のグラデーションを二世世代像に反映させつつ、日本に暮らす二世世代の生きられたイスラームの事例の積み上げに貢献することを目指す。具体的には、二世世代の家庭環境と学校生活に焦点を当て、かれらが幼児期・児童期から青年期にかけてどのような環境の中でどのような経験をしてきたかを丁寧に読み解くことで、かれらが〈ムスリムであること〉にどう向き合うのかを検討するものであり、以下に研究の問いを改めて確認する。

問い 1 家庭環境における二世世代の生きられた経験はどのようなものか

問い 2 学校生活における二世世代の生きられた経験はどのようなものか

問い 3 二世世代は〈ムスリムであること〉にどう向き合うのか

2 調査の方法

本研究は、二世世代への質的調査を通して得られたデータを中心に、かれらの生きられた経験について議論を展開する。これを補うため、二世世代を取り巻く大人たちへの質的調査、二世世代および非ムスリムの生徒・学生への量的調査、二世世代の集会の参与観察から得られたデータを適宜使用する。すなわち、「量的・質的研究アプローチを戦略的に統合することで、どちらか一方のメソッドのみでは知り得ない、現象に対するより深い理解を得ることを目指す」（抱井ほか 2022: 94）混合研究法を採用するものである。調査の概要を以下に述べる。

(1) 質的調査

二世世代への質的調査として、2016 年 7 月から 2024 年 12 月にかけて、75 人の二世世代に半構造化面接を行ったほか、その後の追加調査として複数名に複数回の非構造化面接を行った。

対象へのアクセス方法は、23 人が筆者の関わる名古屋のコミュニティに参加する者で、後述の参与観察の対象者にも一部重なる。ほかに、調査協力者がイスラームを受容し宗教実践を遵守する者に偏るのを避けるため、国内のムスリムネットワークのなかで〈ムスリムであること〉に迷いや否定的感情を抱いている者を紹介してほしいと依頼したほか、日本人改宗者の子弟や、SNS で呼びかけを行って連絡を得た者、そこからさらに「雪だるま式」で紹介された者が 48 人である。また、後述する量的調査において、「〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことはありますか」の設問に「ある」と回答した者のうち、半構造化面接の承諾が得られた 4 人を質的調査協力者に加えた。

調査地点は、関東・中部・関西・九州地方のいくつかの都市である。面接の場所は、「モスクに入ることには抵抗がある子たち」（カンほか 2024: 56）を考慮して、親世代が周囲にいるモスクなどの空間を避け、「語り手が安心していられる場所」（桜井 2005: 86）とし

表3-1 質的調査協力者のプロフィール：第二世代

	仮名	性別	年齢	学生/社会人	父親の出身地域	母親の出身地域	きょうだ い順位	海外合宿 /留学経
1	イムティアズ	男性	15	中学生	中央アジア	中央アジア	1	
2	ラハット	男性	16	高校生	東南アジア	日本	1	
3	ヒシャム	男性	16	高校生	日本	東南アジア	2	○
4	ナスィール	男性	16	高校生	南アジア	日本	1	○
5	ハリーム	男性	16	高校生	日本	東南アジア	1	○
6	オマール	男性	17	高校生	パキスタン	南アジア	不明	
7	ヤシーン	男性	17	高校生	西アジア	日本	1	
8	ディーン	男性	18	高校生	西アジア	日本	1	
9	ザミン	男性	18	高校生	東南アジア	東南アジア	1	
10	アリーブ	男性	19	高校生	南アジア	日本	1	○
11	ウセイド	男性	19	高校生	南アジア	南アメリカ	1	
12	ハミド	男性	19	大学生	南アジア	日本	1	○
13	シャーフィン	男性	19	専門学校生	南アジア	日本	1	
14	アイマン	男性	20	社会人	南アジア	南アジア	2	
15	ユースフ	男性	21	大学生	日本	東南アジア	1	
16	ジャリール	男性	21	大学生	東南アジア	東南アジア	1	○
17	シャヒーム	男性	21	大学生	南アジア	日本	1	○
18	ムラド	男性	21	大学生	南アジア	日本	1	
19	エリヤス	男性	21	社会人	西アジア	日本	1	
20	アサド	男性	22	社会人	南アジア	日本	3	○
21	アシーフ	男性	22	大学生	東南アジア	日本	1	○
22	ラシード	男性	22	大学生	東南アジア	日本	1	○
23	タイイブ	男性	22	大学生	東南アジア	日本	1	
24	アーリズ	男性	22	社会人	南アジア	日本	1	○
25	ターヒル	男性	22	大学生	日本	日本	1	
26	アリーム	男性	22	大学院生	南アジア	日本	2	○
27	アズマ	男性	23	大学院生	南アジア	日本	4	○
28	ハルーン	男性	24	社会人	南アジア	日本	1	○
29	ハニフ	男性	24	社会人	南アジア	日本	1	○
30	スレイマン	男性	25	社会人	南アジア	日本	1	
31	ガフル	男性	28	社会人	東南アジア	東南アジア	2	○
33	アリフ	男性	30	社会人	南アジア	日本	1	○
32	イルファン	男性	40	社会人	南アジア	南アジア	1	

	仮名	性別	年齢	学生/社会人	父親の出身地域	母親の出身地域	きょうだい 順位	海外合宿 /留学経	スカーフ 着用
34	アイン	女性	12	中学生	南アジア	日本	3		
35	アイザ	女性	13	中学生	南アジア	日本	1		
36	イマーラ	女性	15	高校生	南アジア	日本	2	○	
37	ヤスミーナ	女性	15	中学生	北アフリカ	北アフリカ	1		○
38	マライカ	女性	16	高校生	東南アジア	東南アジア	2	○	
39	サワ	女性	16	高校生	南アジア	日本	2		
40	メレク	女性	16	高校生	西アジア	日本	2		
41	アンバー	女性	16	高校生	南アジア	日本	1		
42	アリーシャ	女性	16	高校生	南アジア	南アジア	3		
43	ライラ	女性	17	高校生	東南アジア	東南アジア	1		
44	アシア	女性	18	高校生	南アジア	日本	2		
45	スハナ	女性	18	高校生	南アジア	日本	1	○	
46	サフィナ	女性	18	高校生	北アフリカ	日本	1		○
47	サイダ	女性	18	高校生	南アジア	日本	2	○	
48	ヤミナ	女性	19	大学生	南アジア	日本	1		
49	タルーブ	女性	19	大学生	南アジア	日本	2	○	
50	サフーラ	女性	19	大学生	南アジア	日本	1		○
51	アナム	女性	19	大学生	南アジア	日本	3		
52	シャジア	女性	20	大学生	南アジア	日本	1		
53	ヒナ	女性	20	大学生	日本	日本	1	○	○
54	マイザ	女性	20	その他	南アジア	日本	1		○
55	アイニー	女性	21	大学生	南アジア	日本	2		
56	ミズラ	女性	21	不明	日本	東南アジア	1	○	
57	サリマ	女性	21	大学生	南アジア	日本	1		
58	シリーン	女性	21	その他	南アジア	日本	2		○
59	サーニア	女性	22	社会人	南アジア	日本	1		○
60	シャヒラ	女性	22	大学生	南アジア	南アジア	1	○	○
61	ユスラ	女性	22	社会人	南アジア	日本	不明	○	
62	ラニヤ	女性	23	大学生	南アジア	南アジア	1		
63	アニサ	女性	23	大学院生	南アジア	南アジア	2		
64	マグフィラ	女性	23	大学院生	東南アジア	東南アジア	1	○	○
65	アミーラ	女性	24	社会人	東南アジア	東南アジア	1		
66	バラカ	女性	24	大学院生	東南アジア	東南アジア	1		
67	ナジュマ	女性	24	大学生	南アジア	日本	1	○	
68	アリーバ	女性	25	社会人	東南アジア	日本	不明	○	○
69	フスナ	女性	26	主婦	南アジア	日本	1	○	○
70	ダリヤ	女性	27	社会人	日本	東南アジア	1	○	
71	マイサ	女性	28	主婦	北アフリカ	日本	1		
72	サービラ	女性	30	社会人	南アジア	南アジア	1		
73	アスマ	女性	31	社会人	南アジア	南アジア	1		
74	ヌール	女性	34	主婦	日本	西アジア	1	○	
75	サリー	女性	39	社会人	南アジア	日本	1	○	

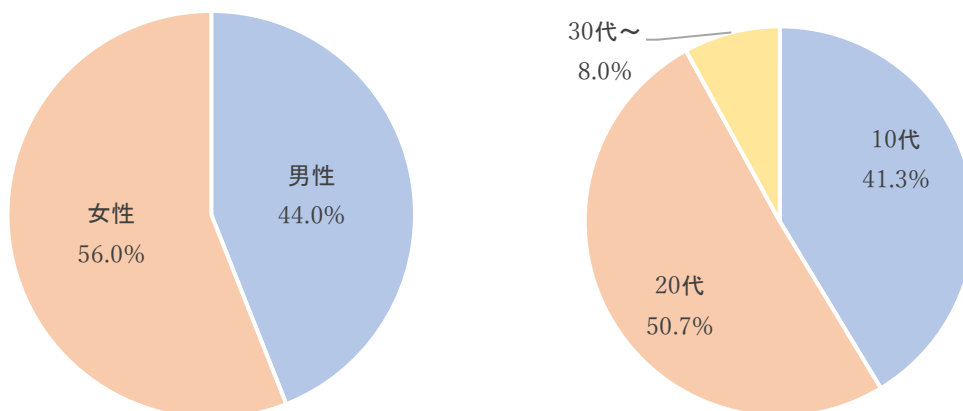


図 3-1 質的調査協力者の性別と年代

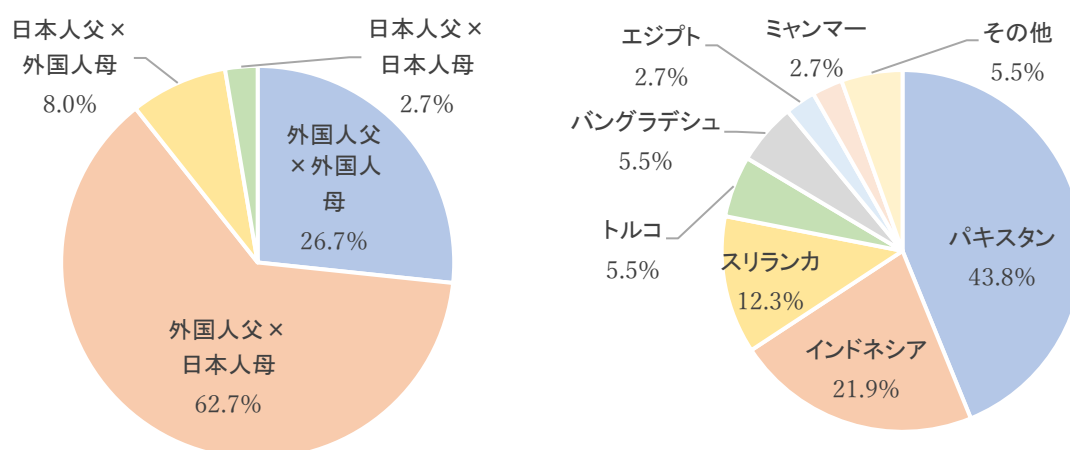


図 3-2 質的調査協力者の親の出身国の組み合わせ（外国人の場合はその出身国）

た。具体的には、おもに調査協力者の自宅もしくは筆者の自宅や仕事場を選び、それが難しい場合は、調査協力者が指定したレストランやカフェで行い、また2回目以降はメールやSNSを利用することもあった。例えば、最も接触回数が多かった者についていえば、2018年3月に筆者の仕事場で質問項目を提示しながらの半構造化面接を行い、3日後に同じ場所で非構造化面接、2021年9月に調査協力者の指定したカフェで非構造化面接、同年8月に量的調査、2022年には2月にSNSを通じた調査を行い、7月以降2023年1月までに9回その後の近況や心境を尋ねる連絡のやりとりがあった。

調査協力者75人の仮名とプロフィールは表3-1に示す通りである。親が外国人であるか日本人であるかは重要な情報であるが、人物の特定を避けるため外国人の場合はその出身国を明らかにすることはせず、代わりに国連の地理統計用の地域名（DESA 2025）を記し

た。また、複数回の調査を行った調査協力者について、本論文中でその発言を引用する際には調査時点の年齢を発言者の仮名の後に記すこととし、表3-1には最終調査時の年齢を記した。さらに、本論文中で引用する発言者のプロフィールを参照しやすいよう、この表に付された番号も発言者の仮名および属性の後に記した。

調査協力者の属性を概観すると、性別は、男性33人（44.0%）・女性42人（56.0%）、年齢は、調査時点（複数回の調査を行った場合は最終調査時点）で10代の者31人（41.3%）・20代の者38人（50.7%）・30代以上の者6人（8.0%）である（図3-1）。親の国籍については、外国人父×外国人母をもつ者20人（26.7%）・外国人父×日本人母をもつ者47人（62.7%）・日本人父×外国人母をもつ者6人（8.0%）・日本人父×日本人母をもつ者2人（2.7%）である。なお外国人親の出身国は、多い順にパキスタン32人（43.8%）・インドネシア16人（21.9%）・スリランカ9人（12.3%）・トルコ4人（5.5%）・バングラデシュ4人（5.5%）・エジプト2人（2.7%）・ミャンマー2人（2.7%）・その他モロッコ・インド・イラク・ウズベキスタン各1人（合計5.5%）である（図3-2）。

半構造化面接における質問項目は、調査の進捗状況によって多少の修正を加えたものの、共通する項目は以下の通りであり、その調査データは当事者の語りとして引用し主に第4章から第6章に報告する。

- ①回答者の基本情報についての質問（年齢・職業・出生地・生育地・父母の国籍）
- ②回答者の家庭での経験についての質問（両親のイスラーム教育の熱心さ、イスラーム教育の内容・家庭での不快な経験の有無、経験がある場合はその内容）
- ③回答者の学校での経験についての質問（小学生・中学生・高校生それぞれの時期における不快な経験の有無、経験がある場合はその内容、家庭と級友らとの価値観の違いへの葛藤の有無、葛藤がある場合はその内容）
- ④回答者のアイデンティティについての質問（ムスリムの自覚と自覚の変遷の有無、変遷がある場合はその内容と変遷のきっかけ）
- ⑤その他（日本で子育てする親世代に伝えたいこと、日本に暮らす第二世代に伝えたいこと、自身にとってイスラームとは何か）

このほかに、死亡や不在または回答拒否の第二世代に代わって、親世代に非構造化面接を行うこともあった。2016年7月から2021年11月にかけて、国内外のムスリムネットワークを利用してアクセスした10人の親世代に、子の成育歴や〈ムスリムであること〉への向き合い方について質問を行ったもので、その属性は、男性4人・女性6人、国籍は日本4人・パキスタン5人・インドネシア1人、調査地点は関東・中部・中国地方、面接の場所は調査協力者の自宅や筆者の自宅や仕事場、調査協力者が指定したカフェである。本論文中でその語りを引用した者については、登場順にアルファベットの仮名を付すこととし、そ

表 3-2 論文中に引用した質的調査協力者のプロフィール：第一世代（親世代）

仮名	長子の性別	長子の年齢	本人の出身地域	配偶者の出身地域
父A	男性	34	南アジア	日本
父B	男性	25	南アジア	日本
母A	男性	21	東南アジア	日本
母B	男性	34	日本	南アジア
母C	男性	30	日本	北アフリカ
母D	男性	25	日本	南アジア
母E	女性	15	日本人	南アジア

表 3-3 論文中に引用した質的調査協力者のプロフィール：教員

仮名	性別	勤務校の種別
教員A	男性	私立高等学校（図 5-2 の学校5）
教員B	男性	私立高等学校（図 5-2 の学校5）
教員C	女性	私立高等学校（図 5-2 の学校5）
教員D	女性	私立高等学校（図 5-2 の学校5）
教員E	男性	公立中学校
教員F	男性	公立中学校
教員G	男性	公立中学校
教員H	男性	公立中学校
教員I	男性	私立高等学校（図 5-2 の学校5）
教員J	男性	公立高等学校

のプロフィールを表 3-2 に示す。第二世代のプロフィール同様、人物の特定を避けるため外国人の場合はその出身国を明らかにすることはせず、代わりに国連の地理統計用の地域名（DESA 2025）を記した。

また、第二世代が置かれた環境を知るため、中部地方のムスリム生徒受け入れ経験のある学校の教員にも調査協力を依頼した。2020年7月と8月に私立高等学校教員合わせて7人に、11月には公立中学校教員2人に、質問用紙を提示しながらの半構造化面接を実施し、また2024年9月に公立中学校教員9人に、非構造化面接を実施した。面接の場所は、調査協力者の勤務校あるいはオンラインで行った。本論文でその語りを引用した教員については、登場順にアルファベットの仮名を付すこととし、その仮プロフィールを表 3-3 に示す。

半構造化面接における質問項目は、以下の通りであり、その調査データは学校教育現場に関わる者の語りとして引用し第5章に報告する。

- ①受け入れ生徒の基本情報についての質問（人数・性別・国籍・宗教実践に関する家庭あるいは本人の要望）
- ②学校の対応についての質問（受け入れ前の準備・受け入れ前の想定と現実の比較・

家庭あるいは本人の要望に対する取り組み・その際に生じた困難・その結果得られた効果)

③他の生徒との関係についての質問（ムスリム生徒が他の生徒に与える影響・どういう関係が築けていたか）

④その他（ムスリム生徒を受け入れたことによるメリット・デメリット・他校へのアドバイス・学校における共生を実現させるための鍵）

(2) 量的調査

第二世代への量的調査として、2021年8月から9月にかけて、インターネット上のプラットフォームでアンケートを行った。ひと月間で93人分の回答を回収したが、その後もムスリムネットワークの中で関りを持った第二世代に回答を依頼することで、2024年末現在、回収数は115人分となっている。そのうち、序章に述べた第二世代の定義に該当しない者を除いた有効回答数は103人分である。

調査協力者の仮名とプロフィールは表3-4に示す通りである。親の出身国については任意の回答でありすべてを把握できないため、外国人であるか日本人であるかの区別のみ記した。また、本論文中で引用する発言者のプロフィールを参照しやすいよう、この表に付された番号も発言者の属性の後に記した。なお番号は、表3-1に付したものと混同を避けるため、101番から始めることとする。

調査協力者の属性を概観すると、性別は、男性50人（48.5%）・女性51人（49.5%）・回答なし2人（1.9%）、年齢は、10代の者42人（40.8%）・20代の者54人（52.4%）・30代以上の者6人（5.8%）・回答なし1人（1.0%）である（図3-3）。親の国籍については、外国人父×外国人母をもつ者28人（26.2%）・外国人父×日本人母をもつ者60人（57.3%）・日本人父×外国人母をもつ者10人（9.7%）・日本人父×日本人母をもつ者4人（3.9%）・その他1人（1.0%）である。なお外国人親の出身国として記述があったものは、多い順にパキスタン36人（記述があったもののうち35.0%、以下同様）・インドネシア16人（15.5%）・スリランカ10人（9.7%）・バングラデシュ9人（8.7%）・エジプト4人（3.9%）・マレーシア4人（3.9%）・トルコ3人（2.9%）・その他モロッコ・インド・ガーナ各1人（合計2.9%）である（図3-4）。

量的調査における主な質問項目は以下の通りであり、その調査データは主に第4章と第5章に報告する。

①回答者の基本情報についての質問（性別・年齢・職業・生育地・父母の国籍）

②回答者の家庭での経験についての質問（両親のイスラーム教育の熱心さ、イスラーム教育の内容・家庭での不快な経験の有無、経験がある場合はその内容）

③回答者の学校での経験についての質問（小学生・中学生・高校生それぞれの時期における不快な経験の有無、経験がある場合はその内容、家庭と級友らとの価値観の違

表3-4 量的調査協力者のプロフィール：第二世代

	性別	年齢	父親	母親		性別	年齢	父親	母親
101	男性	10代	外国人	日本人	151	女性	12	外国人	日本人
102	男性	14	外国人	外国人	152	女性	13	外国人	日本人
103	男性	15	外国人	日本人	153	女性	14	外国人	日本人
104	男性	15	外国人	日本人	154	女性	14	外国人	日本人
105	男性	16	日本人	外国人	155	女性	15	外国人	外国人
106	男性	16	外国人	日本人	156	女性	15	外国人	日本人
107	男性	16	外国人	日本人	157	女性	16	外国人	日本人
108	男性	16	外国人	日本人	158	女性	16	外国人	日本人
109	男性	17	日本人	外国人	159	女性	16	外国人	外国人
110	男性	17	外国人	外国人	160	女性	17	日本人	日本人
111	男性	17	日本人	外国人	161	女性	17	日本人	日本人
112	男性	18	外国人	日本人	162	女性	17	外国人	日本人
113	男性	18	外国人	日本人	163	女性	17	外国人	日本人
114	男性	18	外国人	日本人	164	女性	17	日本人	外国人
115	男性	18	外国人	外国人	165	女性	17	外国人	日本人
116	男性	18	日本人	外国人	166	女性	18	外国人	日本人
117	男性	19	外国人	日本人	167	女性	19	外国人	外国人
118	男性	19	日本人	外国人	168	女性	19	外国人	日本人
119	男性	19	外国人	日本人	169	女性	19	外国人	外国人
120	男性	20	外国人	日本人	170	女性	19	外国人	日本人
121	男性	20	外国人	外国人	171	女性	19	外国人	日本人
122	男性	20	外国人	外国人	172	女性	20	外国人	外国人
123	男性	21	外国人	日本人	173	女性	20	外国人	日本人
124	男性	21	外国人	日本人	174	女性	20	外国人	日本人
125	男性	21	日本人	日本人	175	女性	20	外国人	外国人
126	男性	21	外国人	外国人	176	女性	21	外国人	外国人
127	男性	21	外国人	日本人	177	女性	21	外国人	日本人
128	男性	21	外国人	日本人	178	女性	21	外国人	日本人
129	男性	22	外国人	日本人	179	女性	21	外国人	日本人
130	男性	22	外国人	日本人	180	女性	22	外国人	日本人
131	男性	22	外国人	日本人	181	女性	22	外国人	日本人
132	男性	22	外国人	日本人	182	女性	22	外国人	日本人
133	男性	22	日本人	日本人	183	女性	22	外国人	日本人
134	男性	22	外国人	日本人	184	女性	22	外国人	日本人
135	男性	23	外国人	日本人	185	女性	23	外国人	外国人
136	男性	24	外国人	日本人	186	女性	23	外国人	外国人
137	男性	24	外国人	外国人	187	女性	23	外国人	外国人
138	男性	24	外国人	日本人	188	女性	24	外国人	日本人
139	男性	24	外国人	外国人	189	女性	24	外国人	外国人
140	男性	25	外国人	日本人	190	女性	24	外国人	日本人
141	男性	26	外国人	日本人	191	女性	24	外国人	外国人
142	男性	26	外国人	日本人	192	女性	24	外国人	外国人
143	男性	27	外国人	日本人	193	女性	25	外国人	外国人
144	男性	27	外国人	日本人	194	女性	25	外国人	日本人
145	男性	28	外国人	日本人	195	女性	25	外国人	外国人
146	男性	29	日本人	外国人	196	女性	25	外国人	外国人
147	男性	29	外国人	日本人	197	女性	27	日本人	外国人
148	男性	30	外国人	日本人	198	女性	30	外国人	日本人
149	男性	32	日本人	外国人	199	女性	30	外国人	外国人
150	男性	不明	日本人	外国人	200	女性	31	外国人	外国人
					201	女性	32	外国人	外国人
					202	回答なし	13	外国人	外国人
					203	回答なし	16	外国人	日本人

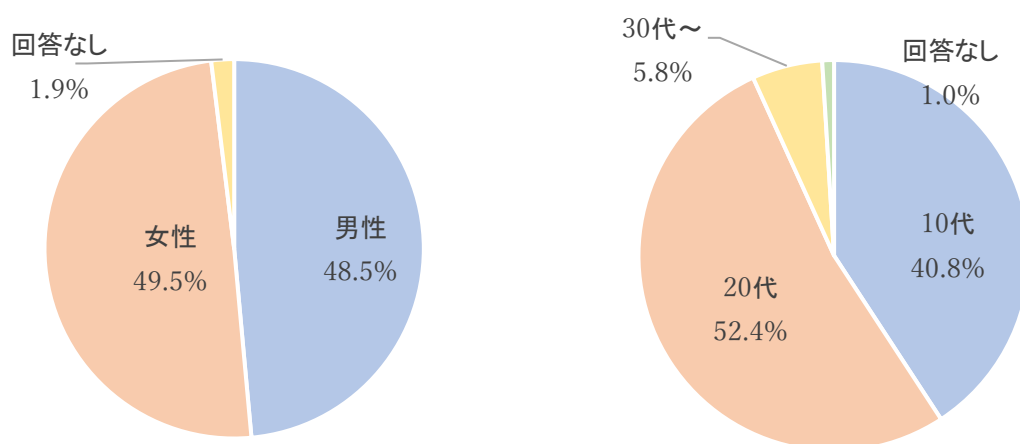


図 3-3 量的調査協力者の性別と年代

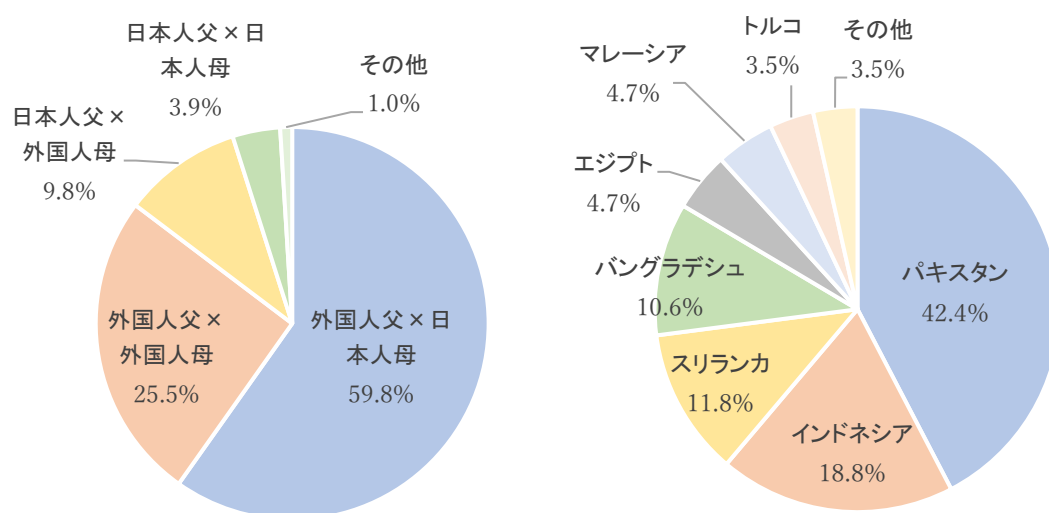


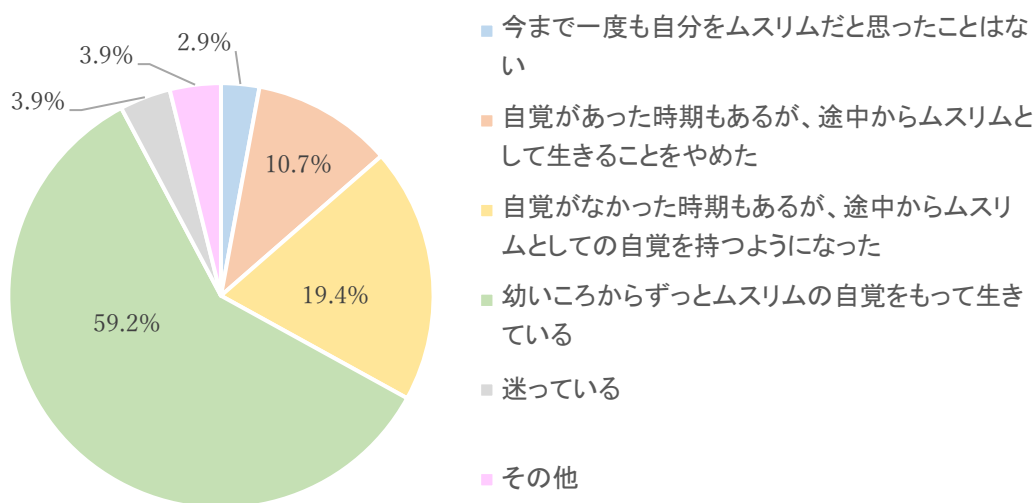
図 3-4 量的調査協力者の親の出身国の組み合わせ (外国人の場合はその出身国)

いへの葛藤の有無、葛藤がある場合はその内容)

④回答者のアイデンティティについての質問 (ムスリムの自覚と自覚の変遷の有無、変遷がある場合はその内容と変遷のきっかけ)

ところで、図 3-5 は、上記④を尋ねる設問のひとつである「現時点でムスリムの自覚はありますか」への回答を示すものであり、最も多い回答が「幼いころからずっとムスリムの自覚をもって生きている (59.2%)」であり、次いで「自覚がなかった時期もあるが、途中からムスリムとしての自覚をもつようになった (19.4%)」である。国内のイスラーム団体が行った調査結果 (見原 2023: 246) やムスリムネットワークから得られる情報の多

図3-5 「現時点でイスラムの自覚はありますか」への回答



くが、イスラムとしてのアイデンティティをもつ二世世代が少ないことを示しているのに対して、この結果はかなり乖離している。調査はインターネット上のプラットフォームで行っており、その拡散の過程で一部にイスラムコミュニティの協力があつたことから、回答者の多くが図序-1における第Ⅰ象限に示される二世世代となつてしまった可能性も否定できない。標本抽出に偏りがあると仮定すると、この調査の数値的なデータを用いて母集団全体の傾向を推測することは適当でないことになる。しかしながら、自由記述欄に記された内容はいずれも貴重な経験談であり、分析の参照に値するものであつたことは付言しておく。

このほか、2023年10月と12月、2024年10月と12月に、中部地方の大学の学生を対象として、イスラムのイメージについての選択式アンケートを行った。回答者数はそれぞれ42人と35人、選択肢は以下の通りであり、その調査データはそれぞれ学校1・学校2として、第5章に報告する。

- | | |
|-------------|-------------|
| ①先進的 | ②後進的 |
| ③自由 | ④不自由 |
| ⑤平和的で穏やか | ⑥攻撃的で怖い |
| ⑦理解しやすい | ⑧理解しにくい |
| ⑨教えを柔軟に解釈する | ⑩教えを厳格に守る |
| ⑪異教徒に対し寛大 | ⑫異質な考えを認めない |

また、2019年5月から2024年10月にかけて、中部地方の私立中学校生徒203人、公立高等学校生徒40人・私立高等学校生徒140人、私立大学学生20人、私立大学学生116人、私立

大学学生40人に、イスラームのイメージについての自由記述式アンケートを行った。その調査データはそれぞれ学校3・学校4・学校5・学校6・学校7・学校8として、第5章に報告する。

(3) 参与観察

参与観察は、名古屋のコミュニティ内における2つの集会で行った。

1つ目は第二世代の集会で、これは中学生以上の年代の子どもたちの仲間づくりを目的に「中高生お茶会」の名称で2014年8月に発足し、参加者の成長に合わせて2017年に名称を「Space for Young Muslims（通称SYM=サイム）」に変更して毎週開催されていたものである（クレシ 2020: 257）。2020年3月以降、新型コロナウイルス感染拡大防止のための活動自粛により定例開催はなくなったが、交流会やイベントといった形で不定期に集まる機会がある。2014年8月の初回から筆者が関わるなかで気づいた諸点は本論文中で随時言及するほか、2016年5月（参加者7人）および2020年10月（2回の参加者合計15人）と12月に行われた第二世代同士の座談会（参加者13人）、そして2020年11月の非ムスリム学生との交流会（参加者8人）の録音データは、当事者の語りとして引用し主に第4章から第6章に報告する。

もう1つは日本人女性改宗者の集会で、これは月に一度の親睦と情報交換を目的に1994年3月に発足し現在も継続開催されている「日本人女性お茶会」である。筆者が参加したのは1994年3月の初回から2004年7月までの期間であり、多くの日本人母によって交わされた子育てに関する話題は当時の状況を示すものとして貴重であるが、録音データとして残されているものではないため発言の引用は難しい。だが特に印象的なものについては、当時の発言者もしくは集会参加者に確認を取りつつ、その内容を補足的に参考とする。

3 小括

本章は本論文の前半部分の最後にあたるものであり、ここまでの議論を踏まえて本研究の問いを改めて確認した。すなわち本研究は、第二世代の家庭環境と学校生活における生きられた経験を読み解くことで、かれらが〈ムスリムであること〉にどのように向き合うのかを検討するものである。

問いの検証に際しては、これまで焦点が当てられてこなかった組織に属さない第二世代をも視野に入れることとし、その多様なあり方を反映することで、蓄積の薄い第二世代研究に新たな事例を提供するものである。また、調査の方法としては、第二世代75人への半構造化面接によって得た語りを中心に議論を展開するが、これを補うため、親世代への非構造化面接、ムスリム生徒受け入れ経験のある教員への半構造化面接、第二世代への質問紙調査、非ムスリムの生徒・学生への質問紙調査、第二世代の集会への参与観察から得られたデータを適宜使用する。

第4章 家庭環境における生きられた経験

家庭は、幼児期・児童期から青年期のアイデンティティ形成に重要な役割を果たすものであり（Grotevant & Cooper 1986: 93-5）、特にイスラーム継承に関する社会的資源を活用できない日本においては、継承の鍵はほぼすべて家庭にあるとあっていいだろう。そこで本章では、研究の問いの1つ目である「家庭環境における第二世代の生きられた経験はどのようなものか」について考察する。その際、まず一般的なムスリム家庭の子育てについて概観し、そのうえで、実際に第二世代がどのような環境の中でどのような経験をしてきたかを読み解いていく。なお、親子関係を論じる際には、第一世代を「親」、第二世代を「子」と適宜表記する。

1 ムスリム家庭の子育て

ムスリムの両親のもとに生まれた子がムスリムとみなされることについて、イスラーム法学者たちの見解は一致している（小野 2019: 78）。だがその子が成長してムスリムを自認するかどうかは親の育て方にかかっており⁷⁹、多くの家庭ではクルアーンに従いハディースに倣って、宗教儀礼を行いまたイスラーム教育を行うことになる。

改めて確認しておく、クルアーンは預言者ムハンマドに下された神の言葉の集合体であり、ハディースは預言者ムハンマドが人間として語った言葉と行いの記録の集大成である（牧野 1996: 186）。どちらもムスリムにとっては生活の指針となるものであるが、ムスリムの日常生活における両者の位置づけはやや異なる。前者は神の言葉であるから、そこで命じられていること——例えば、礼拝することや豚肉を食べてはいけないことなど——は絶対的な義務や禁止であるのに対し、後者に記されているのは神の言葉を預かるほどに理想的な人間の言動の記録として——例えば、家庭や隣人を大切にすることや旅人をもてなすことなど——、それを模範に仰ぐことが奨励される。現実にかかる多様な事象に対処しようとするときは、クルアーンを第一の法源、ハディースを第二の法源として参照するが、それらに見出せない事象については、イスラーム法学者たちの解釈による合意や類推によって問題解決が図られることになる。クルアーンは一字一句の附加も削除も変更も許されないのに対し、ハディースは伝承の経路によって細部の点で微妙な違いがあり、また編纂者に

⁷⁹ ハディース（ムスリム）には、「アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとしていつも言っていた：およそ子供は全てフィトラ（本然の姿）を持って生れて来ない者はない。しかしその両親がユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたり、マニ教徒にするのである」とある（磯崎ほか訳 1989: 581）。なお、同ハディースの日本語訳には、「フィトラをもって生まれて来るとは本来の姿で生れて来ること、従ってイスラーム教徒として生れてくるといったように考えられている」という注がつけられており、親の宗教継承の重要性が示される。

よって複数の伝承集が認められる（牧野 1996: 103-4, 199）。一方、依拠する典拠が異なったり、同一の典拠に異なる解釈がなされたりすることで、イスラーム法学者による見解は無数に生じうるが、主要な学説は四学派にまとめられ⁸⁰、現代に継承されている（小野 2019: 13-4）。

以上を踏まえて、子育てに関わる宗教儀礼を見ていくと、まず子が生まれて最初に行われるのは、ハディースに倣って⁸¹、新生児の耳もとでアザーン（礼拝参加への呼びかけ）を唱える儀礼である。実際には右耳にアザーン左耳にイカーマ（礼拝開始の呼びかけ）を唱えることが多く、どちらも礼拝の都度耳にし口にし誰しも諳んじているものであるから、外国人父が自身で行うことができる簡単な儀礼であるが、出身地域の習慣にしたがって宗教的権威者にこれを依頼する家庭もあり、聞き取りの中でも、モスクのイマームを出産した病院に呼んで唱えてもらった事例があった⁸²。その後に、やはり宗教的権威者によるタハニーク（なつめやしの実を新生児の口に含ませる儀礼）を行うことがハディースに記されているが⁸³、親世代への聞き取りにおいても集会での参与観察においても、この儀礼についての事例が聞かれたことは一度もない。イスラーム以前からのアラブの習慣といった要素が強いこともあり、おそらくは衛生上の観点からも、タハニークは日本ではほぼ行われていないと思われる。

次に、生後7日目にアキーカ（新生児の剃髪と羊を屠る儀礼）を行うべきであることは数

⁸⁰ 四法学派は、ハナフィー派、マーリク派、シャーフィイー派、ハンバル派。

⁸¹ ハディース（ティルミズイー）には、「ウバイドッラー・ビン・アビー・ラフィーは父から聞いたこととしてこう伝えている：ファーティマがアル＝ハサン・イブン・アリーを出産したとき、神の使徒が彼の耳元で礼拝のアザーンを唱えているのを見た」とある（SUNNAH.COM b）。

⁸² 例えば、妹の出産時に姿を見せなかった父がようやく病院に現れたときには、「モスクから先生連れてきて、妹に謎の言葉聞かせて（スレイマン 男性 25 歳・30）」いたという語りがある。なおこの語り手は、中学3年生だった当時、「生命にかかわることよりもイスラームを優先する」父を見て「一生分かり合えないんだ」と感じたという。

⁸³ ハディース（ムスリム）には、「アブー・ムーサーは伝えている：私に男の子が生まれた。私はその子を預言者の所に連れて行った。その御方は彼にイブラーヒームと名前を付けて下され、なつめ椰子の実でタハニークをして下された」とある（磯崎ほか訳 1989: 222）。なお、同ハディースの日本語訳には、「これはタハニークと呼ばれているアラブの習慣の一つ。ある。アラブは子供が生まれると徳の高い人物の所に連れて行き、なつめ椰子の実、あるいはそれに類する物を囓んでもらい、その人の唾液のついた物で新生児の口蓋をこする。そうすることによってその子供に祝福があると信じている」という注がつけられており、これがイスラーム的な儀礼というよりアラブの習慣によるものであることがわかる。

多くのハディースに記されている⁸⁴。その解釈は法学者によって異なり(小野 2019: 84-7)、外国人親の出身国や地域による習慣的な要素も加わって、その時期ややり方はさまざまであるが、羊やヤギを屠りその肉を貧者や近隣に分配すること、また剃髪した髪の毛の重さに応じて貧者に寄付をすることは共通している。しかし、これらすべてを日本で行うことは難しいため、親が剃髪のみ済ませて、それ以外の工程を外国人親の出身国にいる家族に代わってやってもらったり、直近の里帰りの時期まで延期したりすることが多いようである。子の命名も生後7日目に行うようハディースに記されており⁸⁵、外国人親の出身国や地域によっては大々的な祝宴や行列行進などが行われるが⁸⁶、これも里帰りの際に、アキーカや割礼の祝いと合わせて催されるようである。なお割礼についての言及はハディースにあるものの⁸⁷、その解釈は法学者によって異なり(小野 2019: 88-9)、外国人親の出身国や地域による習慣的な要素も加わって、その時期ややり方はさまざまであるが、里帰りした際に床屋などで簡単に済ませることが多い。日本でも最近では、産婦人科医が出生後すぐに、あるいは2か月以内であれば麻酔なしで処置する小児科もあるというが、外国人親が超過滞在などの理由で里帰りが叶わないことが多かった時期には、成長した子が局所麻酔あるいは全身麻酔で手術を受けていたという事例はよく聞かれた。

子が幼児期に入ると、多くのムスリム家庭ではアダブ(ハディースに基づいた礼儀作法)が教えられる⁸⁸。例えば、飲食の前に「ビスミッラー(神の名において)」と唱えることや右

⁸⁴ ハディース(イブン・マージャ)には、「サムラは預言者が言ったことを伝えている：すべての子はアキーカの義務がある、だから7日目に犠牲を屠り、剃髪し、命名しなさい。」とある(SUNNAH.COM c)。また、別のハディース(ティルミズイー)には、「ムハンマド・ビン・アリー・ビン・アル＝フサインは伝えている：アリー・ビン・アビー・タリブによると、神のみ使いは、アル＝ハサンのために一頭の羊でアキーカし、『ファータィマよ、彼の頭の毛を剃り、その毛の重さと同量の寄付を貧者に施しなさい』と言った。」とある(SUNNAH.COM d)。

⁸⁵ 上掲注71のハディース(イブン・マージャ)を参照。

⁸⁶ 賑やかに祝われるエジプトの命名式の様子は太塚(2004: 53-4)に、割礼の祝いの行列や宴の様子は堀内(2008: 61-2)に詳しい。

⁸⁷ ハディース(ムスリム)には、「アブー・フライラは、アッラーのみ使いから聞いてこう伝えている：フィトラには次の五つがあり、それらは、割礼すること、恥毛を剃ること、口髭を切りそろえること、爪を切ること、腋毛を抜くことである。」とある(磯崎ほか訳 1987: 203-4)。

⁸⁸ ハディース(ティルミズイー)には、「アイユーブ・ビン・ムーサは、父が祖父から聞き、祖父がアッラーのみ使いから聞いたことを伝えている：父親が息子に与える贈り物で、礼儀作法ほど立派なものはない。」とある(SUNNAH.COM e)。ブハーリーによる「Al-Adab al-Mufrad」は、預言者ムハンマドの言動を収めたアダブ集として有名である。

手で食べること⁸⁹、用便後に手を洗うことなどが⁹⁰、預言者ムハンマドに倣った行為として日常生活の中で伝えられていく。店田・岡井が親世代に行った調査で、家庭での宗教教育の内容として最も多かったのが「イスラームの作法（79.4%）」であることから、アダブを重視する親が多いことがわかる。なおこの調査では、これに続いて「クルアーンの読み方（52.2%）」「クルアーンの暗記（50.7%）」を宗教教育として行う家庭が多い（店田・岡井 2010: 36）。アズミ・ムクリサフが親世代に行った調査でも、礼拝やクルアーンの読誦を幼い頃から習慣づけることの大切さや、幼い方がクルアーンを覚えやすく、それによって脳が活性化される利点が語られており（ムクリサフ 2024: 81-2）、クルアーン学習を早くから開始する家庭は多い。また、イスラームの五行（5つの宗教的義務）のひとつである礼拝については、何歳から義務とされるかはハディースからは判然としないが、いずれの法学派においても、子が7歳になったら親は礼拝についての教育を始めるべきであるとするのが一般的である（小野 2019: 40）。

親世代の出身国や地域では、こうしたアダブやクルアーン学習、礼拝の習慣化のために、マドラサ（イスラームを学ぶ塾）が一翼を担い、また小学校でもイスラーム学習は必須の履修教科のひとつとして、イスラームに関する知識がその世界観を含めて伝授される。しかし、そうした社会資源を利用できない日本のムスリム家庭では、子へのイスラーム教育はすべて親がその責を負わなければならない。踏襲すべき先例がないなか、第一世代である親たちがそれぞれに試行錯誤を繰り返していたことは想像に難くないが、これが第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方に大きな影響を及ぼすことは、この後に詳述する。

2 量的調査からみえてきたこと

家庭環境における第二世代の経験を検討するため、はじめに第二世代を対象に行った量的調査の結果をみておく。この調査では、前章で述べたように、青年期の途中あるいは幼い頃からずっとムスリムの自覚をもって生きていると回答した者の合計が8割に近い結果となった（図3-5）。他方で、あるイスラーム団体が行った調査では、8割以上のムスリムの第二世代がムスリムとしてのアイデンティティを失いかけているという、まったく逆の結果もある（見原 2023: 246）。いずれが現実をより反映しているかは、この2つの調査だけ

⁸⁹ ハディース（ブハーリー）には、「ウマル・ビン・アブー・サラマーは、アッラーのみ使いから言われたことを伝えている：神の名を唱えなさい（例えば、食べる前にビスミッラーと唱えなさい）、右手で食べなさい、近くにあるものから食べなさい。」とある（SUNNAH.COM f）。

⁹⁰ ハディース（ムスリム）には、「アナス・ビン・マーリクはこう伝えている：アッラーのみ使いが囲いの中にお入りになると、私たちの中で最年少の召使いが、水つぼを持って彼のあとについて行き、それをロートス木（シドラ）の傍らに置いた。み使いは用便後囲いから出て、その水で両手をお洗いになった。」とある（磯崎ほか訳 1987: 207）。

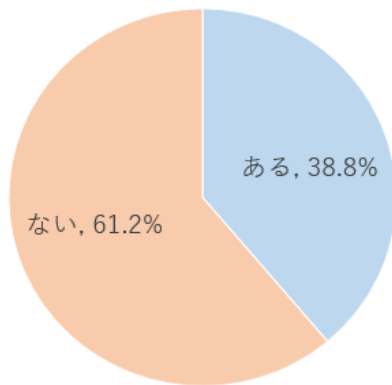


図4-1 「〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことはありますか」への回答

では判断できないが、標本抽出のやり方によって大きな誤差が生じたことは否めない。よってこの調査の数値的なデータを用いて母集団全体の傾向を推測することはせず、自由記述欄に記された回答に注目し、個々の経験談を拾い上げることでみえてくる傾向を論じることとする。

図4-1は、設問「〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことはありますか」への回答を示すものである。「ある」と回答した者が少ないのは、前述の通り標本抽出に偏りがある可能性を否定できないため、これが日本に暮らす第二世代全体の意識を反映していると断定することはできない。しかし、この設問に続く自由記述回答からは、〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったきっかけについての個々の経験が垣間見える。そこで以下に、「ある」を選択した回答者の自由記述欄から、内容が重ならないもの10件を引用し考察する。なお引用の最後に付した番号は、前章の表3-2に対応するものである。

設問：「ある」と答えられた方へ、差し支えなければ具体的にやめたいと思ったきっかけをお書きください

〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことが「ある」を選択した者の回答：

- ・お祈りや、宗教の勉強の強制（女性17歳・160）
- ・めんどくさいのに、ガーガー言われる（女性14歳・153）
- ・やる事が多く、禁止される事が多いと思った（女性27歳・197）
- ・親に押し付けられる度に思う（女性21歳・177）
- ・とにかく押しつけられるのが嫌だった。お祈りもなんでやらなくてはいけないのか、服装も門限もなぜ厳しいのだろうか、結婚観など、十分な説明や納得のいく理由もなくいわれ、喧嘩になることが多かった（女性23歳・185）
- ・周りと違うことを嫌ったから。制限があることを望まなかったから（男性29歳・147）
- ・友達は肌が出ている服を着ているのに自分は着れないこと（女性13歳・152）
- ・ミニスカなど可愛い服が着れない、異性と付き合うことができないなど、周りが当た

り前にやっていることをできないと知った時（女性 25 歳・193）

- ・日本人なのになんで自分は制限だらけの中で自由じゃないのかや、周りのハーフの子はやれてることが私たちはなんでやったらダメなのかなど（女性 22 歳・180）
- ・周りの子たちは普通にしていることが、ムスリムにとってはダメということがある。ノンムスリムの子たちといると、自分だけイスラームという大きな壁を抱えていると負担に感じていた。そのような違いにどう対応するかが全くわからなかったし、なぜダメなのかがわからなかった（男性 19 歳・117）

これらの記述からは、家庭での宗教継承が強引に進められることへの抵抗感と、それに従うことで周囲との差異を意識せざるを得ないことに戸惑う様子がみてとれる。だがこれらは、ムスリムがマイノリティである日本で、ほとんどの第二世代が大なり小なり経験するものである。それにもかかわらず、こうした経験がかれらに〈ムスリムであること〉への否定的な感情を抱かせる場合とそうでない場合があるのはなぜか。これを検討するため、次に家庭での宗教継承がどのように行われたかをみていく。

上記の設問で〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことが「ある」と選択した回答者の自由記述欄から、内容が重ならないもの 10 件を引用する。

設問：（家庭で受けたイスラーム教育ついて）具体的にどのようなことを教えられたか
お書きください

〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことが「ある」者の回答：

- ・クルアーンの暗記、お祈り等（男性 29 歳・147）
- ・1 日 5 回の礼拝、毎日のクルアーンの勉強と暗記など（女性 13 歳・152）
- ・毎日お祈りをする、父の言うこと絶対（女性 21 歳・177）
- ・礼拝をしたのか、礼拝の時間の度に聞かれた（女性 32 歳・201）
- ・礼拝を見える限りさせる、クルアーンレッスンに行くことを勧めるだけ（男 19 歳・117）
- ・幼少期よりモスクに通うことは絶対でした（女性 25 歳・193）
- ・モスクでの礼拝やクルアーンの勉強が必ずだった（男性 23 歳・135）
- ・きちんとお祈りする、肌見せたらダメ等（女性 21 歳・177）
- ・礼拝、服装など（女性 25 歳・195）
- ・幼少期はよみかきなども教えようとしてくれたがだんだん「あれはダメ」「これもダメ」と制約や束縛だけになった（女性 31 歳・200）

これらの記述に共通するのは、礼拝やクルアーンの暗記といった実践に関することが継承の中心であり、これに服装などの制限が加わることで、かれらが非ムスリムの級友らとの行動面での差異をより意識せざるを得ない状況に生きていることがうかがえる。

では反対に、〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことが「ない」と回答した者は、家庭で受けたイスラーム教育の内容について、どのように記述しているのだろうか。同様に、内容が重ならないもの10件を引用する。

設問：（家庭で受けたイスラーム教育について）具体的にどのようなことを教えられたか
お書きください

〈ムスリムであること〉をやめたいと思ったことが「ない」者の回答：

- ・イスラームとは何か。宗教実践の基本的な事(主に六信五行に基くこと)（男性 21 歳・126）
- ・六信五行の事をきちんと教わりました（女性 25 歳・196）
- ・五柱と六信はもちろんのこと、ムスリムとしてどう生きれば、天国に行けるのかを具体的な預言者様のお話などもしながら教えてくれました（女性 20 歳・173）
- ・イスラームの基礎を教えてくれる（男性 17 歳・110）
- ・イスラームの美德、やってはいけないこと、何故やってはいけないかなど（女性 19 歳・167）
- ・礼拝の仕方やクルアーンの読み方、クルアーンの意味、アキーダ(信仰心)、預言者やサハーバのハディース、他の預言者たちの話など（女性 17 歳・161）
- ・お祈りの作法や断食、飲食のルールなど基本的なムスリム教養など(男性 32 歳・149)
- ・幼少期からモスクに連れて行ってもらったり、イスラームの教えやお祈りの仕方などを教えてもらっていた（男性 22 歳・129）
- ・幼少期の頃は特に、寝る前や朝起きた時、家に入る時、お手洗い前など、とにかくたくさんスーラを教えてもらいました。礼拝は一日 5 回きっちりできていなかったものの、ラマダーン期は必ず、そして身なりやものの考え方に関しても、全てクルアーンに書かれていること、ハディースで言われていることから教育されました（女性 20 歳・173）
- ・アッラーの慈悲深さを絶えずリマインドされていたり、モスクに連れていく頻度の多さ、父自身が新たに学んだイスラームの知識を定期的に時間を設けて教えてくれた事を考慮しました（男性 22 歳・130）

ここでも礼拝やクルアーン学習といった実践の継承が行われている点は同じだが、なぜそれをすべきなのか、なぜしてはいけないのかといった説明が示されている様子がうかがえる。〈ムスリムであること〉に否定的な感情を抱く者が、十分な説明や納得のいく理由なしに実践を押し付けられていると感じるのとは対照的である。

これらの調査結果から、日本のムスリム家庭で行われるイスラーム教育のやり方には、実践のみの継承と知識を伴う継承の二通りあること、そしてそれが第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を与える可能性が確認できる。そうであるなら、かれらの〈ム

スリムであること〉への抵抗感や戸惑いを軽減するには、十分な知識の継承が重要であると考えられる。この点について、質的調査による当事者の語りを通して、以下の節で検証する。

3 宗教継承に対する子の受け止め方

前節で、日本のムスリム家庭では二通りの継承が行われていること、それが第二世代のムスリムとしての自覚に影響を及ぼす可能性があることを確認した。これらを検証するため、本節以下で、第二世代の生きられたイスラームの経験を取りあげながら考察を進めていく。それらの語りの発言者はすべて仮名で表すこととし、そこに付した年齢は調査時点のもの、番号は前章の表3-1に対応するものである。なお引用は調査協力者に固有の経験であり、これらによって第二世代の経験を一般化するものでないことをはじめに断わっておく。また、調査協力者の語りはできるだけ忠実に引用するが、一部に省略や伏せ字、表現の統一を行うこととする⁹¹。

(1) 幼い頃からのクルアーン学習と礼拝

本章1節で述べた通り、子へのクルアーン学習を早くから始める家庭は多い。クルアーンを神の言葉であると考えるムスリムにとっては、これを啓示されたままに読むことが重要であり⁹²、したがって「クルアーンを読む」といったときには、原典であるアラビア語の音で読むことを指す。単語の意味や文法を理解することは非アラビア語圏の者にとって困難であるが、一つ一つのアラビア文字が単語の中でどのように形を変えどのように前後の文字とつながられるかを学べば、それを音として読むことは、幼い子どもにもそれほど難しくない。

スハナ 女性 18歳・45：(小学)5年生までにクルアーン2回読み終わってます。

—アラビア語で？

スハナ：(アラビア文字の学習は)3歳からやらされてたんで。普通に読めます。

⁹¹ 調査協力者の語りを引用する際、必要に応じて省略した部分は「(……)」で示し、表現を統一させるため、発言中のイスラム教は「イスラーム」、イスラム教徒は「ムスリム」、ヒジャーブは「スカーフ」、サラート／ナマーズは「礼拝」に揃えた。なお聞き取りの際に語られた地名や言語名などの固有名詞は、個人が特定されるのを避けるため、「○○」と伏せ字にした。また家族の呼称に出身国の言語を使用する者も複数名おり、これも個人の特定を避けるため、一律に「父」「母」「兄」「姉」に揃えた。

⁹² クルアーンには、「われは、アラビア語のクルアーンを下した(第12章2節)」とある。したがって、クルアーンとはアラビア語で書かれたもののみを指し、それ以外の言語に翻訳されると「原テキストの意味が見失われる危険がある」(井筒 1991b: 63)ため、日本語の訳本は「注釈書」として扱われる。

ヒシャム 男性 16 歳・3：学校から帰って 1 時間ぐらいしたら、クルアーンを読まされます。

——小さい時から？

ヒシャム：小 4 から、毎日。

——どれくらい読むの？

ヒシャム：僕は毎日 2～3 ページずつだけど、弟は 5 ページとか。

クルアーンをアラビア語で読むことは、その一文字ごとに 1 つ善行を果たしたと考えられることから⁹³、親は子に何度でも繰り返し読むことを求める。また、クルアーンは「音による反復と暗記によって学び、読み、伝えられてきた書物」(Graham 1993: 80) であるため、その全体もしくは一部でも暗記し、それを朗唱できるようにという教育が早期から始められる。

ラニヤ 女性 23 歳・62：5 歳の時、〇〇（両親の出身国）に帰った時に、クルアーンの先生が来て、暗記させられた。

——それは今も覚えてる？

ラニヤ：全部忘れちゃった。

ザミン 男性 18 歳・9：6 歳からクルアーン読まされてた。小 5 で〇〇（国内の地名）に引っ越してから、本格的に暗記が始まって。嫌がっていたのにやらされた。

——今も覚えてるの？

ザミン：ジュズ・アンマもスーラ・バカラも⁹⁴。今はモスク行って復習してる、週 2 回。本当は行きたくないんやけど。

——でも、すごいじゃない。

ザミン：親自身覚えてないくせに、俺にだけ無理やり暗記させるのは納得いかん。

⁹³ ハディース（ティルミズイー）には、「アッラーの書のうち一文字を読む人は、それによって 1 つの善行を得る。そして善行は 10 倍になる。アリフ・ラーム・ミームで一文字というのではなく、アリフで一文字、ラームで一文字、ミームで一文字である」とある (SUNNAH.COM g)。

⁹⁴ ジュズ・アンマはクルアーン第 78 章（アン＝ナバア章）から第 114 章（アン＝ナース章）までのこと。これらひとつひとつは短めの章だが、合わせると全体の 30 分の 1 の分量になる。スーラ・バカラはクルアーン第 2 章（アル＝バカラ章）のこと。286 節から成る最も長い章で、全体の 12 分の 1 の分量になる。

クルアーンは 114 章から成り、節の数は全部で 6236、単語数は 7 万 7460 にのぼるが（東長 1996:28）、これをすべて子に暗記させようとする親もいる。そこまででなくとも、7 節から成る第 1 章（アル＝ファーティハ章）は礼拝で唱えるための必須のものとして、また 3 節しかない第 108 章（アル＝カウサル章）や 4 節だけの第 112 章（アル＝イフラス章）などを幼いうちに覚えさせられた第二世代は多いだろう。

礼拝については、親が日常的に礼拝する家庭では、子は幼いうちから親の横でその動作を真似て覚えていくものであり、クルアーン学習を早くから始めている子は、礼拝中に唱えるクルアーンの章節やアラビア語の文言を新たに覚える苦労は小さい。よって、特に 7 歳を待たずに礼拝を始めさせる家庭は多く、聞き取りの中では、「礼拝は 2 歳からしていました（ヒナ 女性 20 歳・53）」という者もいた。熱心な家庭では、幼稚園や小学校でも礼拝のための場の提供を求めることがある。

ユースフ 男性 21 歳・15：自分が礼拝を始めたのは 4 歳のときです。年長で日本に来たのですが、（母が）幼稚園の先生方をお願いして部屋を貸してもらい、礼拝していました。

ヤシーン 男性 17 歳・7：（礼拝は）小学生から少しずつ始めて、ちゃんとできるようになったのは中学です。

——学校でも礼拝してるのよね。どこでやるの？

ヤシーン：小中は空き教室でやってました。高校では保健室で。

上記引用の 2 人は、幼い頃から礼拝することが習慣になっており、時間が来たらどこにしようとして礼拝することは当たり前のことと捉えていた。ユースフは、「礼拝用の教室に行くのが億劫で」級友らのいる教室で礼拝することにも抵抗がなく、遊んでいる公園や映画館の駐車場でも礼拝をしているという。ヤシーンも、中学校の修学旅行先のテーマパーク内で、「みんなが周りを囲んで、壁を作ってくれ」た空間で礼拝したという逸話があり、聞き取りをした日も、「常にこれ持ってるんで」とポケットから携帯用礼拝マットを取り出して、塾の自習室でも礼拝していると語った。ユースフからは『「何でお祈りしないといけないの？」』『いいから、しなさい！』みたいなことはなかったです』という母についての語りが、ヤシーンからは「母が行動で示すのを見てやろうと思うというか。弟たちも母を見てああなりたいてって言ってます」という語りが聞かれたように、母親が家庭でのイスラーム継承の鍵を握っている様子がうかがえる。

だが結婚を機に入信した日本人女性のなかには日常的に礼拝をしない者もあり、日中子と過ごす時間が多いはずの母親が手本を見せられない家庭も少なくない。外国人父が休日や夜にこれを補うことができればいいが、それが難しい場合、継承を断念することになる。「（日本でイスラームを実践するのは）難しいって言ってましたね、母は」というタイイブ

(男性 22 歳・23) は、「(小学校低学年の頃までは) 礼拝みたいなのもいろいろ教え込まれたんですけど。いつの間にか気づいたら、そういうのなくなってる。多分、父もあきらめて」、その結果、大学生になった時点でムスリムとしての自覚はない。

ヤミナ 女性 19 歳・48: 母が最近イスラームの勉強し始めたけど。私は何も知らない。

——じゃあ、礼拝したこともない？

ヤミナ: 年に 1 回くらい、父に誘われて (礼拝に) 行くことはあるけど。

——やり方はわかる？

ヤミナ: 一人じゃできないから、みんながやってるのを見ながら、真似して。でも手と足はちゃんと洗える。

アシア 女性 14 歳・44: うち父だけ一人で礼拝してる、断食も一人でしてる。母は関係ない、興味ない。家で一番きちんとイスラームやってるのは父で、次が私で、その次が兄で、最後が母。

——え、アシアは 2 番目なんだ。

アシア: 私は、たまに自分から礼拝するし。

——すごいねー。たまにって、どれくらい？

アシア: えー、去年は 5 回くらい。

——SYM (第二世代向けの集会) に来たとき？

アシア: うん、あとはイードで。

ヤミナ の家庭でもアシア の家庭でも、日本人母が宗教継承に一切関わっていない。そのためかどちらも、イスラームは外国人のものであり、日本人の自分には関係ないもの、といった考えをもっているようである。ヤミナ が年に一度父に連れられて行くのはイードというイスラームの祝日の礼拝のことと思われるが、「イード」という語を知らないこと、またその語りから礼拝前の浄めを示す「ウドゥー」という語も知らないことが推察できる。イスラーム家庭においてはさほど珍しくない日常語であるから、これらを知らないということは、外国人父も家庭ではほとんどイスラームに関連する話をしていないことがうかがえる。こうした家庭に育ち、ムスリムの自覚なく育つ第二世代は、〈ムスリムであること〉についての葛藤を抱かずにすむ。しかし、アダブやイスラームの知識を身につけずに成長した子に対し、それに慌てた外国人親が急に熱心に宗教継承を始める場合、子の戸惑いは大きい。

ハミド 男性 19 歳・12: 今頃ぐいぐい来られても困る、今さら話しかけてくんなくて感じ。

ライラ 女性 17 歳・43: 押し付けてくるのに説明もやり方もなんも教えてくれない。

小学生の頃から教えてこなかったお前ら（両親）が悪いだろうって思う。

ハミドやライラのように、神がどういうものか来世がどういうものかといったイスラームの世界観をまったく知らないまま、礼拝や断食といった形式的な実践のみを強要されることに不満を抱く第二世代は実は多い。

(2) イスラームの世界観を理解しないまま従う実践

十分な説明なしに実践のみを継承しようとする外国人父は、聞き取りのなかで頻繁に登場する。例えば、「小さい頃から『礼拝やれ』とうるさかった（フスナ 女性 26 歳・69）」、「小さい頃は『礼拝しろ』『お祈りしたか』とよく言っていた（ハニフ 男性 20 歳・29）」など、幼いうちから礼拝するよう繰り返す親についての語りは非常に多い。しかし、なぜ礼拝するのか、礼拝の対象はどういう存在なのか、その存在と自分との関係はどういうものなのか、さらには礼拝中に唱えるアラビア語はどういう意味なのか、きちんと説明を受けたことがある者は少なかった。

ハルーン 男性 21 歳・28：何で礼拝しなければならない？って親に聞いても「とりあえずやれ」。イスラームのこと教えてくれって言っても「そこにあるもの読め」。あとは言うことがコロコロ変わる。

アリーバ 女性 25 歳・68：なんか礼拝の部分とかも、ただ「礼拝 5 回は義務だからやれ」とか。

ユスラ 女性 22 歳・61：そう、「なんで？」ってならんくない？

アリーバ：そうそうそう。だからその理由とか、礼拝の大切さをまず教えてたら、多分子どもが礼拝したくなると思います。

ムスリムマジョリティ社会で育ってきた外国人親にとって、礼拝は周りの誰もがやっていることであり、説明するまでもない当たり前の実践だという意識があるのかもしれない。だが日本で育つ子にとって、礼拝は周りの誰もやっていないことであり、自然に身につくわけでもない。イスラームの継承を望むのであれば、アリーバが語るように礼拝の大切さを教えて、正しいやり方を手ほどきするのは、親の役目であるはずだが、これを怠って実践のみを強要する場合、その家庭に育つ第二世代は、父の叱責を避けるために礼拝をする、あるいは礼拝したふりをする。

イルファン 男性 40 歳・32：中学生の頃には（父に）怒られないように先読みして、言われる前に礼拝するようにしていた。

ガフル 男性 28 歳・31:とにかく(父に)怒られないように行動して。「礼拝したか」
って言われるから、礼拝マットをちょこっと動かしたりして、礼拝したふりをしてた。

厳しい叱責を良しとしない親のなかには、子に礼拝を習慣化させるため、「5 つお祈りすると 50 円上げると言って礼拝させた (父 A)」という者もいる。こうした小遣いと引き換えに実践を促すやり方を思いつく親は珍しくないようで、クルアーン学習についての語りのなかにも時折見受けられる。

——クルアーン全部読み終えたら、1 万円もらえるって言ってたよね。

ナスィール 男性 16 歳・4: はい。断食も (ひと月間)、フルにできたら 1 万円。ハッジ (大巡礼) も。

——あっ、だから行ったんだ。

ナスィール:行きたくなかったけど、1 万円って言われたから、まあそれで(参加した)。

アサド 男性 19 歳・19: クルアーン覚えると (父から) お金もらえてた。

——え、そうなの?いくらもらえるの?

アサド: タバーラカッラジーナ覚えたら 5000 円とか、ヤースィーン覚えたら 3000 円とか⁹⁵。

本章冒頭に述べた通り、イスラーム継承は第一世代にとって重要な課題である。しかしそれは、親としての義務を果たすためだけでなく、愛する我が子が来世で幸福であるようにと願って行われるものだろう。それにもかかわらず、子にとっての礼拝の目的は叱責を避けるためになり、クルアーンを読み暗記することは小遣いをもらうための手段になる。

なぜ実践のみにこだわる第一世代が多いのか。早稲田大学で開催された「全国モスク代表者会議」に登壇した第一世代の「私たちも自分の子どものときに同じことやられているから」(店田ほか編 2020: 19) という発言や、「イーマーン (六信) もイバーダ (宗教儀礼) もスンナも小学校で勉強した、ちゃんと教科書があって。その後モスクに行ってクルアーンの勉強。家では何も教えてもらわなかった (父 B)」という回想がその答えを示唆する。かれらが生まれ育ったムスリムマジョリティ社会では、学校やマドラサなど、家庭の外にイスラームの世界観を学ぶ環境が整っていた。そういう社会では、礼拝しクルアーンを読み暗記することは周囲の誰もが行う当たり前のものであり、かれらの親はその実践を促すための声かけをするだけで良かったのかもしれない。だが家庭の外に学びの環境がない日本でも同様

⁹⁵ どちらもクルアーンの、比較的長い章の出だしの言葉。「タバーラカッラジーナ」で始まるのは、クルアーン第 67 章 (アル=ムルク章) で、30 節から成る。「ヤースィーン」で始まるのは、クルアーン第 36 章 (ヤー・スィーン章) で、83 節から成る。

に、自身の親を手本にして実践の声掛けのみすればいいと考える第一世代がいる。しかし、子にいくら繰り返しクルアーンを読ませ暗記させたところで、それは音として読んでいるだけで単語の意味や文法を理解していないから、イスラームの世界観を理解したことにはならない。

イスラーム継承を意図するのであれば、第一世代は、かつて子ども時代に学校やマドラサなどで得た知識を、自身で子に伝えなければならないことに気付く必要がある。例えば、礼拝はイスラームにおける五行のひとつであるが、それは強要されてやむなく実践する義務ではなく、罪が許され天国に行くことへの期待という積極的な動機に基づいて行われるものである⁹⁶。しかし、神がどういう存在かの説明すらなく、「天国」や「来世」を始めとしたイスラームの世界観を子どもに伝えないまま宗教実践のみにこだわる家庭では、イスラームはその教えの豊かさに反して形骸化する。そして、この形骸化したイスラームを継承する家庭に育つ第二世代が、〈ムスリムであること〉を自身のアイデンティティとして引き受けることに困難を感じやすいことは、本章 2 節で示した量的調査の自由記述回答からも明らかである。

(3) 納得のいく説明を求めて

家庭の外に学びの環境がない日本で、それを補うのが親の役割であると気付ける親もいる。両親ともに外国人の家庭では、「父がイスラームの歴史を教えてくれて、母が礼拝の仕方を教えてくれた（ラニヤ 女性 23 歳・62）」というように、役割分担も可能だろう。だが親の一方が日本人の家庭では、外国人親が孤軍奮闘することになる。

サリー 女性 39 歳・75：食事中にイスラームの講義が始まっちゃうんです。一方的で反対できないからそれ以上話が進まない。（……）小 2 の時、学校で習ったことを話したらイスラームではそうじゃないって否定されて、それ以来学校での話ができなくなって。もう中学以降は、一緒にご飯食べてても会話がなかったね。

ヤシーン 男性 17 歳・7：（父は）厳しいですね。小 5 からファジュール（夜明け前の礼拝）に起こされるようになって。ファジュールやった後も、クルアーンを読んでからじゃないと二度寝させてもらえないんです。

——眠いのにな…。

⁹⁶ ハディースには、「アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えてい
る：もし、あなた方の誰か一人の家の戸口の近くに川が流れており、毎日五回そこで身
体を洗うならば（……）それはあたかも一日五回の礼拝のようなものです。アッラーは
その五回の礼拝によって罪を消して下さるのです（ムスリム）」（磯崎ほか訳 1987: 454）
とある。

ヤシーン：弟たちは眠くて泣いてます。

——お父さん、とても熱心なのね。

ヤシーン：そうですね。夜は家族を集めて、クルアーンとかハディースとか読みます。

家庭の内外で役割分担をするのが一般的なムスリム家庭では、外国人父は日中仕事で外に出ていることが多く、時間的な余裕のなさを補うため、夜の家族団らんの時間が宗教継承に充てられるのもやむを得ない。そうした限られた時間のなかで、おそらくはイーマーンやイバーダといった「イスラームの講義」を行い、クルアーンやハディースを読みながらその内容を解説するといったやり方は、形式的実践を押し付けるだけのイスラーム継承よりはるかに効果的だろう。しかしそれは、日本で社会化する子にいくらかの戸惑いを生じさせ、ときに親世代と子世代の意識のずれを生むこともありうる。

一方、外国人母は日中も子と過ごす時間が長いため、子が幼いうちから身近な事象や出来事を通して、イスラームの世界観を伝え理解を促すことができる。それは難しい「イスラームの講義」とは異なり、日々の生活のなかで子に自然と神への感謝や畏怖の念を抱かせるようなやり方であることが多い。例えば、慶應義塾大学で開催された「第5回全国ムスリムミーティング」⁹⁷に登壇した外国人母の神の伝え方は、時間的余裕のない外国人父のやり方と対照的である。

例えば、お祈り。形だけ教えたとして、それは正しいですかということ。(……)小さい時は、あまり理解できないだろうけど、なんとなく、食べる前に「ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム⁹⁸」と言ったり、自然を見るときに「アッラーが創った物ですよ」と言ったり、「アッラーがあなたを創った」、「ママとパパの出会いもアッラーから」と言ったりします。(野中監修 2020: 11)

すごく大変な状況になった時に、「ヤーアッラー、ヤーラッビー、ヤーカリーム（アッラーよ、私の主よ、寛大な御方よ）」とよく言っていたんです。そしたら、子供たちが変なことをやった時に、私が、急に黙ると、3人揃って子供たちが「ヤーアッラー、ヤーラッビー、ヤーカリーム」って言ったりするようになりました。「あー、ママが大変だ」って。(野中監修 2020: 53)

⁹⁷ 慶應義塾大学にて2018年11月16日開催。テーマは「神をどう伝えるか——母と子による報告」。第二世を育てる母親5人と第二世代6人が登壇した。

⁹⁸ 「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」という意味のアラビア語。クルアーンの114章中、第9章（アッ=タウバ章）以外のすべての章は、この節で始まる。ムスリムは、日々の生活のさまざまな場面で、例えば礼拝や仕事、勉強、食事などの初めにこの節を唱える。

イスラームの継承は子と過ごす時間をゆっくりと確保できる母親の役割だと考えて、初めから母語で子育てに臨む外国人母もいる。日々の生活の中で神への感謝や畏怖を伝えるには、また自身が子ども時代に学校やマドラサなどで得た知識を説明するには、不慣れな日本語より母語の方が適切だと判断したのだろう。

母 A：イスラームを教えるのは私の責任です。イバーダやイーマーンは母語でないと伝えられないから、あえて日本語を学習しませんでした。

ユースフ 男性 21 歳・15：(母は) ○○語を(母の出身国の言語)を終始貫いていました。自分の母語でしか、アキーダ(信仰箇条)やイーマーンを説明できないということで、子どもたちには常に○○語を使っていました。

イスラームの継承には、時間的余裕だけでなく、支障なく意思疎通できることも重要である。「父もなんか説明してくれてるのかもしれないけど、多分父の日本語的にも(問題があるし(サーニア 女性 22 歳・59)」という語りにみられるように、子にわかるような丁寧な説明を日本語で行うことは外国人親には難しい。さらには、「父とはまともな話ができないなって思う。(……) 日本語ができないから、そういう(子どもみたいな)父しか見えない(アイニー 女性 21 歳・55)」、「弟たちにしてみたら、何あの日本語、みたいな(マグフイラ 女性 23 歳・64)」という語りのように、日本語の会話において自分より語彙力の劣る父親からの指示は軽視されやすい。その点では、上記引用の外国人母が宗教継承のために母語を使用したのは正しい選択だったのかもしれない。例えばユースフの母は、信仰に関わる根幹の部分においては厳しい姿勢を前提としつつ、その行為の意味や理由を、子の年齢や理解度に合わせて言語的ハンディキャップなく示すことができている。

ユースフ 男性 21 歳・15：礼拝やマグリブ(夕方の礼拝)の後のクルアーン朗読などとイスラームの大原則のような守るべきことは譲らない母でした。(……)母はいつも質問に答えてくれました。答えが分からないものに関しては分からないけど、きっと意味があると言っていました。

それに対し、意思疎通に支障がある場合、子の求めに応じた説明が難しく、つい「生まれつきだから」「ムスリムだから」「イスラームではそう決まっているから」といった回答で済ませてしまいがちである。

シリーン 女性 21 歳・58：(父に)「ダメだからダメ」とか言われて、え、なんで、っていう。詳しいとこ聞いて納得したいのに、それが返って来ない。(……)バックグラウ

ンドにはイスラームのことがあるんだからって言われるけど。

アイニー 女性 21 歳・55：（父の禁止に）理由はない。ダメだからダメ。（……）なんで今までこんなことしてきてるんだろう、何が理由でずっとやらされてるんだろう、みたいな。「とりあえずダメなの、この家は」「ムスリムの家に生まれてきたからダメなんだよ」って母にも父にも言われてきて。じゃ、なんでムスリムの家に生まれたのって。ずっと、なんでなんでなんで、って。なんかやらされてるみたいな感じだったんで、結構それがつらかった。

知識を有するはずの外国人親が意思疎通の困難さを抱える一方で、結婚を機に入信した日本人親は伝える知識を十分にもち合わせていないことが多い。この問題を解決するための社会資源は、日本にはまだ十分に整えられていない。モスクは各地に増えつつあるが、基本的に礼拝するための施設であるため、必ずしも勉強会のような場が提供されているわけではなく、たとえ提供されていても、国内モスクのほとんどが外国人による運営である現実を鑑みるに、その指導者もまた意思疎通が困難な外国人であることが多い。その結果、「英語はわからないと伝えているのに、英語だけでずっと話し続ける」ような指導者によって「アラビア語とクルアーンの勉強を長時間強制された」第二世代は、「大人がいるモスクに入ることに抵抗がある子たち」になってしまう（カンほか 2024: 56）。早稲田大学で開催された「全国モスク代表者会議・第2回次世代部会」⁹⁹に登壇した第二世代も同様の経験を語っている。

（中高生のときに通っていたモスク勉強会の指導者は）日本語ができないんですね、まだ、日本のことはよく分かっていないから。だから、どぎついアラブなまりで（……）、アラビア語とかクルアーンとか教えられて、日本の英語教育だったら、私、公立学校に行っていたんで、日本の英語教育ってそこまでじゃないですか。分からないんですよ、宿題も分からないし、何を言っているかも分からないのに、永遠に怒鳴られて怒られて。それでちょっと私、本当に PTSD 的なものが発生してしまって、モスクの教えてくるおじさんたちを見ると体が震えてしまっていたんです、その、冷や汗が出て。（岡井・店田編、2019b: 43）

さらにこうしたモスク勉強会で行われるのは、上記引用にある通り、たいていクルアーンの読み方や暗記といった指導であり、イーマーンやイバーダ、そしてイスラームの世界観が

⁹⁹ 早稲田大学にて 2018 年 9 月 15 日開催。テーマは「ヤングムスリムとムスリム・コミュニティ：ヤングむすりむの居場所から考える」。第二世を育てる母親 5 人と第二世代 6 人が登壇した。

伝えられることはめったにない。

アイニー 女性 21 歳・55：小学校の時モスク行くじゃないですか。子どものモスクと大人のモスクみたいの分かれてて。大人のモスクでは、なんかハディース読み合い会みたいなのが行われてたんですけど。子どものモスクは、もうなんかアラビア語をとにかく覚えようみたいな、字で覚えようみたいな、なんかクルアーンを覚えようみたいな会だったんで。だから、知識を得る機会はなかったですね。そっちの方が正直興味あったかもしれない、アラビア語知るよりも。まあクルアーンも覚ええないといけないけど。

——いっぱい覚えてる？

アイニー：もう忘れしました。

ハミド 男性 19 歳・12：家では誰も何も教えてくれない。だいたい父が手本にならんし、礼拝もしてないから。

——え、それなのにモスクに連れて行かれるの？

ハミド：母に。父に言われて。クルアーン暗記するため。あと礼拝のやり方。意味とかじゃなく、動きとか言葉だけ。電話で勉強させられたこともあるし。もうしんどい、中学の時一回キレた。

——じゃ、もうモスクには行ってない？

ハミド：連れて行かれます。行っても礼拝しないけど。

本章 2 節で示した量的調査の自由記述回答にもみられるように、十分な説明や納得のいく理由なしに実践を押し付けられていると感じる第二世代は、〈ムスリムであること〉に否定的な感情を抱きやすい。それでは、時間的余裕も意思疎通のための言語能力も十分でない家庭では、いかにして知識を伴う継承を行っているのか。

これは子が日本語以外の言語をいくらかでも理解する場合に限られるが、一部の家庭は社会資源を海外に求めて、子をイスラーム圏に留学させたり、宗教学校などに泊まり込んでイスラームを学ぶ数日から数週間の「短期合宿」に参加させたりする。それによって例えば、それまでスカーフの着用にも否定的で、「イスラームの居心地が悪かった（ミズラ 女性 21 歳・56）」と言っていた者が、わずかひと月間の合宿後にはきれいにスカーフを被った状態で現れて、「モスクが綺麗で、楽しかった。（……）私の中でイスラームのイメージが変わった」と語るまでに変化していた。質的調査を行った 75 人の第二世代のうち、その語りからわかる限りでは、33 人が何らかのかたちで海外でイスラームを学ぶ機会をもっており、そのうち 32 人が、調査の時点で程度の差はあれムスリムの自覚があると語っていることから、海外での学びの経験と〈ムスリムであること〉への向き合い方とに因果関係をみることができだろう。

ガフル 男性 28 歳・31：高 1 の夏休みに〇〇（両親の出身国）のモスクに泊まって勉強させられたんです、2 泊 3 日で、いのこと一緒に。（……）そのとき、「神様を見つけた！」って思った。

——それまでは神様がいなかった？

ガフル：何のために生きているのかわからなくて、目の前のことをやりこなしていかなければならないつらさがあった。真っ暗だった、神がいないから。（……）（神を見つけてからは）生きる意味が決まっているからすごく楽。

ハルーン 男性 21 歳・28：（イスラームを肯定できるようになったのは）高 2 の時、〇〇（父の出身国）でイスラームの先生に会ってから。イスラームについて何も知らないことに気がついたんですよ。形ばかりのイスラームじゃなく、人間が生きる意味を勉強していくようになったら、クルアーンやハディースに書いてあることがスッと入って来るようになったかな。

日本ムスリム協会青年部主催の「留学報告会¹⁰⁰」では、登壇した 2 人の二世が、「私にとってこの 1 か月っていうのはものすごく宝物です」、「あの 6 年間、私は思い返すと宝物だったなという風に思います。自分の人生のなかですごく輝いていた時間でした」と、奇しくも同様の言葉で自身の報告を締めくくっていた。ムスリムマジョリティ国で過ごしイスラームを学ぶ経験は、その期間の長短にかかわらず、かれらの人生に大きな影響を与えることは間違いない。とはいえ、海外での学習には、日本語以外の語学力が必須となる。そうした語学力が十分でない二世世代に向けた、日本語でのイスラーム学習のための環境整備が、今後の親世代にとっての課題だろう。

4 親子の意識のずれ

日本に暮らす日本人が自分はなぜ日本人なのかを問うことがないように、外国人親は〈ムスリムであること〉に疑いをもたずに成長したのだろう。だが二世世代を取り巻く環境は、外国人親が学童期や青年期を過ごしてきたムスリムマジョリティ社会のそれとはまったく異なる。次章で詳述するように、二世世代は学校でさまざまな周縁化を経験し、日本で社会化するなかで家庭の価値観とは異なるものの見方を知り、自身が絶対的マイノリティであることを意識して育つ。その一方で、かれらは親の愛情を失うことを恐れ、周囲への同化願望を抑え込んで親の期待に応えようとする。そこに生じる葛藤は、〈ムスリムであること〉に疑いをもったことのない外国人親には理解されにくい。愛する我が子が来世で幸福であるようにとの願いからであれ、子を取り巻く環境の違いを無視して実践を強要する親に対

¹⁰⁰ 2024 年 8 月 24 日、オンラインで開催。パキスタン、エジプト、インドネシア、マレーシア、サウジアラビアに留学経験をもつ 5 人の二世世代が登壇した。

して、ある子は戸惑い、ある子は反発し、ある子は絶望する。本節では、そうした親世代と子世代の意識のずれと、それを修復しようとする親の試みに焦点を当てて論じる。

(1) 子を取り巻く環境を理解しない親からの期待

社会では多様性の尊重が叫ばれているものの、日々の礼拝や食の禁忌、服装規定などの「超可視的」な実践は排除の要因となりやすい。そのため、差異が目立つことに抵抗を感じる第二世代は多い。

シャヒラ 女性 20 歳・60：小 5 の夏休み、家族で〇〇（両親の出身国）へ行って、日本に帰国する前の日、「日本に帰ったらスカーフ被るって約束して。それができないなら日本に帰さない」って、父に言われて。約束しました、日本に帰りたかったから。始業式の日は雨だったから傘で隠して行って。でも学校に着いてすぐ外しちゃった。「ダメだった」って言ったら、父は「明日からがんばろう」って。

シャヒラの父が新たな服装規定を課したのは、我が子への愛情からの要求であつたろう。しかし、スカーフ姿を見られないよう深く傘をさして歩く子の気持ちを、また学校に着いてその傘をたたむ瞬間の子の気持ちを、父はどれだけ想像できただろう。帰宅後、子が父に期待していた言葉は「明日からがんばろう」だったのか。ここに親と子の意識のずれはないだろうか。

日本で社会化する第二世代を取り巻く環境は、親世代の誰も経験したことのないものである。これを少しでも想像しようとするなら、有無を言わせぬやり方で実践を強要するのではなく、子が納得して従えるよう知識を与えることの重要性に気づくはずである。だが実際には、十分な理由を示されないまま、級友に許されていることを禁止され級友がしていないことを強要され続ける子は多く、たとえそれに抵抗を感じていても、年齢が低いうちは家庭の価値観に従う以外の選択肢はない。また親の出身国や地域によっては父権制の影響が強い場合があり、そうした「伝統的な父権制の家族は、極度に権威主義的な関係に支配されていることが多い」（Mansour 2015=2016: 122）ため、子が親の意向に異を唱えること自体難しく、質問さえも許されないことがある。

マライカ 女性 16 歳・38：〇〇（両親の出身国）では「なんで？」って聞くと、はたかれるのが当たり前。言ったら怒られるから聞けない。

サービラ 女性 30 歳・72：（父に尋ねても）「イスラームでは疑問を持つことが罪だ」「地獄に落ちる」と言って答えてもらえない。疑問に持つことは当たり前じゃないですか、知らないことを。それを、そもそも宗教的に疑問を持つちゃいけないみたいな感じを、一方的にそればかり言って。

それでも第二世代の多くは、たとえ納得がいかなくとも、「父のためにモスクに行って（アズマ 男性 16 歳・27）」、「父のために礼拝して（アリーム 男性 22 歳・26）」、親の期待に応えるためだけに食の禁忌や服装規定に従う。もし親が、その様子を見て宗教継承に成功していると満足するなら、そこには親世代と子世代の意識のずれがある。

アリフ 男性 25 歳・32：礼拝するのは、アッラーのためとかじゃなく父のため。アッラーの存在については、どちらでもいいや。

サーニア 女性 22 歳・59：父に見られたらヤバいんだみたいな、ずっと恐怖心があるというか。（……）ちょっと私的には冒険したような行動をしても、後から罪悪感がすごく襲ってくる感じで、見つかったら父に怒られる、って。

——罪悪感はお父さんに対して？アッラーに対してではなく？

サーニア：父。アッラーとかじゃなくて、もう父に対して罪悪感が…。だから私的には、めっちゃイーマーン（信仰心）の高いムスリムっていうよりは、なんか父に怯えて育ってきたっていうか。

知識を伴わない形骸化したイスラームを実践することに疲弊した子は、「なんでこんな家庭に生まれちゃったのか（サリー 女性 39 歳・75）」と嘆くが、試行錯誤しつつ宗教実践を伝える努力を行ってきたと自負する親には、実はその親の努力こそが、子の葛藤を深めていることが理解できない。例えば、複数の子をもつある外国人父は、「（子どもたちは）みんなムスリム、（イスラームを）誰も嫌じゃない。でも礼拝しない。ムスリムだったら礼拝するのが当たり前でしょ？それなのに、どうしてやらないのかわからない（父 A）」と頭を抱える。

子を取り巻く環境への無理解は、日本ではかなり極端と思われるような出身国や地域の文化の押し付けにもつながる。もちろんムスリムマジョリティ社会の習慣であるから、その背景にイスラーム的価値観が見え隠れするものの、それはすべてのムスリムに課される義務や禁忌でない以上、地域的なものだと考えられる。例えば一部の南アジア出身の親にとって、女子は遊びに行くものではないというのが「常識」であることが、第二世代の語りからうかがえる。そうした家庭に育つ子は、小学生の頃から登校以外の外出は禁じられ、「友達と遊びに行くのもダメ、部活もダメ、文化祭の打ち上げもダメ（マライカ 女性 16 歳・38）」、「花火に行くのもバイトするのも許されない、謝恩会も出させてもらえなかった（アスマ 女性 27 歳・73）」というような制限の多い中学高校生活を送る。「中高大ずっとお泊りダメ（シャジア 女性 20 歳・52）」というように外泊を禁じる家庭では、その延長上で修学旅行への参加も許されない。また男女関係なく、「歌を聴くのも歌うのもダメ（アスマ 女性 27 歳・73）」、「アニメを見ると（父に）暴力をふるわれる（スレイマン 男性 25 歳・30）」とい

うように歌や絵に触れることを嫌う家庭では、カラオケやアニメの禁止はもちろん、なかには音楽や美術の授業に出席することを許さない場合もある。こうした極端な制限がムスリム全体に共通するルールとはいえないことに気付いている第二世代からは、親の継承しようとするイスラームについて、「お父さん教」や「〇〇（父の出身国）教」といった表現で批判する語りも聞かれた。

スレイマン 男性 25 歳・30：ちょっと父の教えるイスラーム、おかしいんじゃないかなって思い始めて。それからは普通に、もうやり過ごすことがメインになりました。

シャジア 女性 20 歳・52：ここは日本やから、〇〇（父の出身国）のイスラームを教えないでほしい。

第1章に述べた通り、神と人間の関係は垂直的關係であり（井筒 1979: 215）、世界のムスリム 19 億人の信仰と実践は多様性の認容のもとに維持され継承されてきたものである。それは、それぞれの国や地域の文化伝統に影響を受ける柔軟さがあり、また異なるイスラーム法学者の見解を取捨選択する自由があるからであるが、ときにこの多様性や柔軟さに気づかない外国人親が、自身の出身国や地域の常識に固執する。「（父の出身国には）ホントに3回とか、それぐらい行ったことしかないのに、『〇〇（父の出身国）の子はこうだよ』って言われたところで（サーニア 女性 22 歳・59）」、日本で社会化する第二世代を納得させられる説明にはならない。外国人親が育った環境では、誰もがそれに従っている当たり前の習慣であるから特段厳しいものだという意識はないのだろうが、日本で社会化する第二世代にとっては、周囲との差異をさらに意識せざるを得ない実践は大きな負担である。かれらは、自身を取り巻く環境を親に知ってほしいと望んでいる。

アイニー 女性 21 歳・55：父は、私がいろいろ言っても聞いてくれないんですよ。聞こうとしてくれない、聞く耳をもたない。私になんか言っても、「ダメ、それは違うから」って。私の意見とかは何もないんですよ。（……）私の意見を聞いてもらえてるっていうときがほしかった。いつもビクビクしながら、そういう話になったら何も言えなかったから。

アシーフ 男性 22 歳・21：僕は親になったら気を付けようと思ってることは、子どもの話を聞くことを絶対やろうと思ってて。ちっちゃい頃、父はずっとイスラームのこと教えてたんですけど、僕らの話はあんま聞かへんかった。今日学校で何してたとか、最近部活どうやとかいう話はなくて。それで一方的にイスラームの教えだけを、「今日このハディースのこっからここまでを読め」みたいなことを言う。

前出のアスマやスレイマンは、かれらを取り巻く環境を考慮しないルールへの押し付けに苦しみ、その結果イスラームを嫌悪するに至っており、厳しい制限は宗教継承の成功につながらないことを示している。一方で、「音楽や漫画も禁止されませんでした（……）打ち上げも参加しましたし、異性ともカラオケを熱唱していました」というユースフ（男性 21 歳・15）は、「なんで自分はムスリムだろうと疑ったことはありません。なんで周りの人たちはムスリムではないのだろうかと思うことはよくあります」と言うほどに、〈ムスリムであること〉に一切の迷いがない。無論ユースフも、家庭と級友らの価値観との衝突に悩む経験はあったが、『無理だと思ったら、皆に合わせていいよ。アッラーは分かってくださる』と母がいつも逃げ道を作ってくれていたのも、乗り越えられました」と語る。まさに「北風と太陽」の寓話の通り、親世代の柔軟さこそがかれらの望む宗教継承の成功につながるのではないか。

（2） 大きすぎる親からの期待に苦しむ第一子

親が課すルールの厳しさには男女差やきょうだい順位の差があることが、聞き取りのなかで目立った。男女差については、上記の事例にみるように女子に課されるルールの方がより厳しく、例えば門限は、かなり早い時刻に定められ、帰宅が遅いと学校に電話をかける家庭も珍しくない。同じ家庭内でも男子には門限が課されない場合もあり、「連絡さえしてれば、1 か月間家にいなくても、なんも言われなくていい。この差をちょっと…。まあ妹に申し訳ないだろうって、あんまり夜遅く帰ってきたりしないようにしてる（エリヤス 男性 22 歳・19）」という語りもある。当然ながら女子はこの違いに気付いており、「兄は全部オーケーで、ずるいなーっていつも思う（マライカ 女性 16 歳・38）」、「弟を見てると、あ、なんか全然自由じゃん、みたいな（サーニア 女性 22 歳・59）」というように、兄や弟にはない行動制限が自分にだけ定められていることへの不満を漏らす。

きょうだい順位の差については、長男や長女に対して、より厳しいルールが課されがちである。それは、踏襲すべき先例がない日本での宗教継承に試行錯誤を重ねる親世代が、子を取り巻く環境を理解するにつれ次第にその厳しさを緩めていくためだと考えられる。無論、親世代と子世代の意識のずれが埋められることは好ましいことではあるが、第二子以降に見せる親の寛容な態度は、厳しいルールを課されてきた第一子にとって非常に不公平なものに感じられる。それによって、きょうだい間での不和が生じるといった事例も、聞き取りのなかに頻繁に登場する。

アイニー 女性 21 歳・55：姉の方が門限とかすごい厳しかったし。私はそんな言われなかったんですけど、姉はすごい厳しくて。7 時になって校内放送かけられてるし。（…）だから姉はすごい私のこと、恨んでるんですよ。「アイニーはいいよね」「アイニーはいいとこしか見てないんだよ」みたいなのがずっとあって。だから私、あんまり姉と仲良くないんですよ。（……）姉は、私だけでできてることが多いから、「なんでアイニー

だけは許されるのよ」「あの時、私は許されなかったよね！」みたいなのがずっとあって。(……)「話しかけないでよ」「知らないよ」みたいな。話ができない。

サービラ 女性 30 歳・72：帰ってきたのが 11 時半だったから、(父に)「ムスリムの女としてとしてお前はこーだあーだ」と言われてからの、「ふしだら」とか「売女」とか。その年から私も研究室入って、帰ってくるのが 11 時 12 時過ぎることがあって。帰ったら、「どうせ大学の男と何かしてたんだろう」とか。(……)(妹は)あんだけ遊び歩いて、あんだけクソ自由にバイト三昧で、帰ってくるのは(夜中の)2 時くらいとかで。(……)それでいて見下してくる、「お姉ちゃんはできなかったもんね」みたいな。シバキ回すぞ、このクソガキ！

自分より自由度の高い生活を送っている弟や妹に理不尽な怒りを感じるという語りはよく聞かれたが、「自分は一番上だったから、いろんな押し付けをされたし、禁止されたことも多かった。だから下の兄弟をみると、羨ましくなるし、同時に親を恨めしくもなる(ハルーン 男性 23 歳・28)」という語りのように、それを許す親に強い憤りを向ける者もいる。そうしたきょうだいや親に対するわだかまりのせいで、きょうだいや親と数か月から数年単位で会話がないという者も複数人いた。家庭内で孤立するかれらは、家を出て一人暮らしをしたいと望むが、それもまた許されないことが多い。

ザミン 男性 18 歳・9：親を殺したいっていつも、何度も思ってる。悪いことをしたくなるのは家で受けたストレスのせい、反抗とかじゃなく、悪いことがしたい。家を出たい、一人暮らししたい。

——高校卒業したら出られるんじゃない？

ザミン：結婚するか(全寮制の)ハーフィズ¹⁰¹の学校に入る以外じゃ、家を出さないって言ってる。もう生きてる意味がない。

マイザ 女性 20 歳・54：人生めっちゃめっちゃになっちゃってる。家を出るには、医者になるか結婚するかって(父に)言われて。〇〇(父の出身国)人とも日本人とも結婚したくない。だから医者になろうと思って、勉強したんですよ。でもダメだった。

家を出ることに成功した者もいるが、かれらは、聞き取りをしたなかでは、例外なくイスラームとはまったく縁のない生活を送っている。前出のアイニーの姉やサービラも、家を出て家庭の価値観から自由になった一人である。我が子の来世での幸福を願っての宗教継承が、結果的に子のイスラーム離れを招き、家族の関係悪化につながったことについて、親は

¹⁰¹ クルアーンの 114 章をすべて暗記した人に与えられる称号。

何を思うのだろうか。

(3) 親の愛情を求めて

宗教継承が行われる家庭に育つ第二世代は、「もっぱら両親だけに完全に『同一化』している」(Erikson 1968=2017: 133) 幼児期に、家庭の価値観に疑問をもつことはない。しかし、他人と共有された世界で生きる学童期そして他人の目に映る自分の姿に心を奪われる青年期には(Erikson 1968=2017: 144, 151)、「**学校に行くようになって周りとは違うことに気付いた。うちは何してるんだろう、って**(アリフ 男性 25 歳・32)」というように、周囲との差異を意識し、それをもたらす家庭の価値観に否定的な感情を抱くことがある。特に、なぜそうするか十分な説明なく厳しい実践のみ強要されて成長した第二世代は、いずれ青年期特有の〈自分とは何者か〉を自問するようになったとき、その不自由さがすなわちイスラームだと考え、それを自身のアイデンティティとして受け容れることに抵抗を感じる。例えば、慶應義塾大学で開催された「第3回全国ムスリムミーティング」¹⁰²に登壇した第二世代は、自身が受けた宗教継承を以下のように振り返る。

イスラーム教育って、色々あると思っていて。一般的なのは、ルールばかり。「これがハラームで、これがハラールで、これがマクルーフで¹⁰³、これはだめ」…それだけなんです。「なぜそうなの？」とか、「イスラームってそもそも何なの？」っていうところは完全に無視で、ルールばかりを強調する。でも、いくら押し付けられたって、イスラームを好きでもない人に「ハディースはこうだから」とか言っても、1ミリも響かないですよ。じゃあ、どうなるのか。僕の頭の中では、「イスラーム＝(イコール)ルール」でした。しかもその「ルール」が、「これはやっちゃだめで、これがだめ、これもだめ」…もうだめなことばかりですよ。(……)つまりイスラームは、邪魔な要素になってきちゃうんですよ。普通に考えてメリットが何一つなく、デメリットがこんなにも多い。楽しみや自由を制限するもの。親のためにやっていたイスラームだったので、東京に出て親とかがいなくなった瞬間に、自然と失くしました。それで、非イスラーム的な生活の頂点を極めたような生活をしました。(第3回議事録)

上記引用のように、第二世代がイスラーム実践から離れることは、家を出て一人暮らしをすることとひと続きになっていることが多い。そこには、親の目が届くところでは良きムス

¹⁰² 2017年2月11日慶應義塾大学にて開催。テーマは「ムスリム2世の教育について考える：中学・高校時代をいかに過ごすか」。第二世を育てる母親6人と第二世代5人、モスク勉強会の指導者1人が登壇した。

¹⁰³ イスラーム法上許されたものがハラール、禁じられたものがハラーム、避けた方がいいものはマクルーフ。

リムでなければならないというような、ある種の不文律がかれらに共通している。イスラームが何世代にもわたり家族の宗教として受け継がれてきたムスリムマジョリティ社会では、ムスリム家庭に生まれた子がムスリムであることは疑いようもない絶対的事実である。そうした地域出身の第一世代にとって、我が子が〈ムスリムであること〉を否定するなど、まさに青天の霹靂だろう。それを知っているから、子は実践の意味を理解できなくとも親の前ではこれに従ってみせる。そこには親を悲しませたくない、がっかりさせたくないという思いがあり、その根底には親の愛情を失いたくないという、子として当然の欲求がある。

サリー 女性 39 歳 75：父の前ではいい娘でいたいという思いがあって、父の話はいいことだと自分に言い聞かせてました。(……) ムスリムであるという自分の属性を疑問に思ったことは何度もあったけど、父の信頼を裏切ってはいけないという思いがずっとありました。

アリフ 男性 30 歳・32：(親にイスラームが嫌であることを) 言えないよ、そんなの。言えるわけないじゃん。

——なんで言えなかったんだろう。

アリフ：確かに。なんで言えなかったんだろうな…。

——怒られるから？親がかわいそうだから？がっかりさせたくないから？

アリフ：全部あるんじゃない。怖いよ怖い、全部怖かった。

——全部？

アリフ：そりゃ怖いよ。親から嫌われるのも怖いし、怒られるのも怖いし、悲しまれるのも怖いし、家族の中で自分だけ孤立するのも怖いし、自分が間違ってることをしてるっていう風に認識するのも怖いし。全部怖いよ。

「葛藤」とは、「複数の相互排他の要求が同じ強度をもって同時に存在し、どの要求に応じた行動をとるかの選択ができずにいる状態」(赤井 1999：285)である。第二世代が親の愛情を求めて無理をする一方で、それでもなおイスラームを受け容れることを困難に感じる場合、「一つの対象に対して接近したい要求と回避したい要求とが併存」(赤井 1999：285)する状態にかれらは葛藤し疲弊する。前述の、イスラーム実践から離れることが家を出ることとひと続きになっているというのは、根本的な解決にはなっていないが、少なくとも毎日親の前で無理をせずに済むという点で、一時的に葛藤を軽減することができるだろう。一方、家族への帰属の優先度が高い年齢層の第二世代は、親世代からの宗教的な期待あるいは圧力に異を唱えることが難しく、家の外と内でムスリムでない自分とムスリムとしての自分を演じ分けるしかない。これについては第二世代当事者が、「親の意向を無視できず、同時に『普通』を諦めきれない、彼／彼女らなりにたどり着いた、最大公約数的な妥協点」(クレシ愛民 2018:33)だと述べているように、決して最善の策ではない。それゆえ、こうした

「二重生活」は、「**学校での自分と家庭での自分と二人いて、どっちが本当の自分かわかんなくなってくる**（アサド 男性 19 歳・19）」という語りのように、〈自分とは何者か〉を問う青年期の第二世代を混乱させることになる。心理学において、青年期に確実な自分を見出せず危機に陥ってアイデンティティの混乱が起これば、不登校や非行、精神疾患の誘因となる可能性が指摘されている（鑑 1990：106）。個別事例の詳述は避けるが、質的調査を行った 75 人のうち 11 人が感情障害や鬱による通院経験を明かしており、非行や不登校の経験を語る者はさらに多かった。語りのなかですべてが明かされてはいないことを考えると、実際には相当数の第二世代が大きな葛藤を抱え懊悩していると推察できる。

だがこうした第二世代の葛藤に、ムスリムであることが当たり前の社会で生まれ育った第一世代は気づくことが難しい。例えば、複数の子をもつ父 A は、子の一人が「**間違っ****てこの家に生まれた、と言ったことがある**」ことの真意を量れず、別の子が笑わなくなってしまうことや、また別の子が精神的な原因で頭髪が抜けてしまったことについて、「**どの子も精神的に問題がある**」と言う。だがそれに対し、その妻である日本人母は、「**みんな健全です。ただイスラームが嫌いなだけ**（母 B）」と違う視点から子の気持ちを代弁する。そもそも初めからイスラームを受け容れないという選択肢がない外国人親には、さまざまなかたちで示される子の訴えに気づくことは難しいだろう。しかし、もし子を取り巻く環境を想像できる日本人母が子の懊悩を汲み取れるなら、その負担は軽くなる。

母 B：〇〇（子の名）は中学からイスラームが嫌い。でもそれを父には言えないから、嘘をついて誤魔化すのがつらい様子だった。私がそれに気付いて抵抗するようになって、大学入った時に外に出した。自由にさせてやりたかったから。

ナジュマ 女性 24 歳・67：父は（イスラームの実践に）厳しい。でも母が理解してくれてるから。父との間で橋渡しをしてくれるから。

第 2 章 2 節に述べたように、日本人がムスリムと結婚する際には、ニカーに先んじてムスリムの証人 2 人以上の立ち合いのもとにシャハーダ（信仰の証言）をして入信の手続きを済ませる必要がある。だがなかには、シャハーダの意味を理解せず、ただ示されたアラビア語をカタカナで音読するだけの日本人がいる。特に、国内にモスクの数が少なかった頃あるいはインターネットが普及する以前には、イスラームについて十分な知識を得る機会がないままシャハーダをした者がほとんどであり¹⁰⁴、かれらは結婚後に知るイスラームの実践に戸惑う。質的調査のなかでわかった限りでは、外国人父×日本人母の家庭に育った 47 人

¹⁰⁴ 第 3 章 2 節に参与観察の場として示した「日本人女性お茶会」において、1994 年 3 月から 2004 年 7 月までの期間に参加したのべ 200 人以上の日本人女性改宗者のなかに、ニカーの前にイスラームを学習した経験のある女性はいなかった。

のうち 15 人の母がイスラームを拒否しあるいは無関心であるかすでに離婚していることから、日本でムスリムとして生活することに葛藤する日本人女性が少なくなかったことがうかがえる。一方、葛藤を乗り越えあるいはこれと何とか折り合いをつけてムスリム家庭を維持する日本人女性は、母になったとき、共通の経験を有する子の最も良き理解者となりうる。厳しい実践の強要のなかで逃げ場を失いがちな子にとって、子に代わって抵抗し、また仲介してくれる存在がいることは大きな救いだろう。前掲の「第 5 回全国ムスリムミーティング」に登壇した日本人母たちからも、それを意識した語りが聞かれる。

（父親が）子供たちに時々、「あなたたちがどんなすごい人になったとしても、何があっても、イスラームがなくなってしまうたら、私にとってあなたたちは何の価値もないものだ」というような言い方をするんです。そういう言い方をするので、そういう意味でも、「お父さんのために、ムスリムにならないといけない」と思っているんじゃないかなと思います。（……）外国人のイスラームにとらわれないやり方や機会を、子供たちに与えていけたらいいと思っています。（野中監修 2020：23-24）

私が仲介役に徹してしていくことで、夫もだんだん変わっていったんですが。だから、私の役割はすごく大事だと、自分自身で思っています。でも、それができないお母さんたちが多くて、よく相談されるんです。「やらなきゃいけないことは分かる」、「でもできない」、「どうしたらいいんだ」と。「主人がこういうんです、ああ言うんです」と。（野中監修 2020: 25）

上記引用からは、日本人母が葛藤に苦しむ子のために、その父親である夫との仲介役を果たそうとする努力だけでなく、その難しさにもどかしい思いをする様子も垣間見える。

すべてではないが一部の父権制が強い国出身の外国人親の中には、権威主義的な父親像を模範とする者がいる。そこでは「教育は、子ども自身の意思をくじくことを目標とするプロセスとして理解され（……）、命令し、罰を与え、侮辱し、心を折る」（Mansour 2015＝2016: 122）ことで子をおとなしく従順にさせる。聞き取りのなかでも、「**棒で叩かれたりベルトで叩かれたり、普通にグーで殴られたり（スレイマン 男性 25 歳・30）**」、「**幼稚園の時、夜中に家の外に出されて中に入れてもらえない（アスマ 女性 27 歳・73）**」ことが日常茶飯事だったという語りが聞かれる。また体罰だけでなく、すぐに激怒して大声で怒鳴る父、「**悪い種／バカで使えない／売女（サービラ 女性 30 歳・72）**」などの否定的な言葉を面と向かって投げつける父、きょうだいと比較して「**兄を見習うな／兄を手本とするな（ザミン 男性 18 歳・9）**」と繰り返す父もいる。こうした家庭では、母もまた父の圧力のもとにあり、父の意向に異を唱えられず子に味方するのが難しい。

サービラ 女性 30 歳・72：「**人前で投げ飛ばされて、（父と母の）二人がかりで罵られ**

殴られたんですよ、すごくないですか。(……)

——なんでお母さん、お父さんの側に立っちゃうんだろう。

サービラ：自分の立場が悪くなるからでしょうね。でも、あれはしょうがないと思います、〇〇（両親の出身国）は本当に（父権制が）ひどいし。母は暴力を恐れて父に何も言えない。

シリーン 女性 21 歳・58：母に言っても意味ないってなったら、もう誰に言えばいいのか。(……) 日本なんだから、こうしてあげないと子どもたちがかわいそうだからとか、(父に) そういう意見することはないんで。

第二世代のなかには、こうした家庭の構造をイスラームの教えによるものだと思い込む者がいる。かれらは求めても得られない親の愛情をあきらめる代わりに親を憎み、その原因と考える宗教そのものを拒絶する。

アスマ 女性 32 歳・73：私はもはや完全に宗教アレルギーで、父の話を聞くと反吐が出ますし、気分が悪くなります。

サービラ 女性 30 歳・72：イスラームの人みんな死ねばいい、宗教なんてくそくらえ。父と同じ宗教なんて絶対信じるもんか。

我が子がこれほどまでに宗教を拒絶する原因が家庭にあることに気づけない親は、一方的に子を責め、子はさらに傷つく。〈ムスリムであること〉を否定するサービラは父から「サタンの子、呪われた子」と罵られ、アスマは母から「ひとに何て思われるだろう、こんなこと誰にも言えない」と子を恥じる言葉を繰り返されている。また、調査協力者の一人は SNS で以下のような投稿をしている。

実家に帰ると“父にとって最悪な息子”の僕は、

- ・豚肉を食べているなんてけがれている
- ・知り合いの子供の方がいい、お前はクズだ
- ・お前は一生不幸のままだ（多分イスラームを信仰してないから）

とこのような言葉を毎日浴びせられます。18 年間、特に高校生までの間は僕がどんなにつらい思いで生きてきたか一生理解してくれないと思います。宗教のせいで僕と父は一生分かり合えないと思う（ママ）（Gryphon 2017）

ムスリムであることが当たり前の社会で生まれ育った外国人親にとっては、「ムスリムでなければ人に非ず」といった考えがあるのかもしれないが、親の愛情を求めている子にそう

した扱いをすることがどれほど残酷なことかを想像できない親がいる。こうした扱いを受けた子は自身を親からみた「失敗作」だと考える。以下は、慶應義塾大学で開催された「第5回全国ムスリムミーティング」に登壇した第二世代2人の語りである。

僕は、多分イスラーム2世として典型的な、「イスラーム教育を失敗した子」なんじゃないかなと思っています。(……) 焼き肉を食べに行ったり、お酒を飲んだり、競馬に行ったり。(野中監修 2020: 32-3)

肉食べて、お酒飲んで、麻雀したり、もうそれこそ、「失敗作その2」なんですけど。(野中監修 2020: 35)

上記引用の二人は、家を出て一人暮らしをしハラールでない肉を食べ、イスラームで禁忌とされる飲酒や賭け事を行う自由な生活を手に入れている。無論、かれらがその生活を謳歌していることは喜ばしいことだが、それと引き換えに、求めていたはずの親の愛情を手放してしまったことへの後悔が、「失敗」という言葉に垣間見える。相互排他の要求による葛藤は、一方を選び他方を捨てることでしか解消できないものなのだろうか。

同じく慶應義塾大学で開催された「第3回全国ムスリムミーティング」では、同席している日本人母を目の前にして、以下のように語る第二世代がいた。

母のせいにはしたくないんですが、幼少期から強制的に言われてきて。(……) 反発して、中学卒業後すぐ一人暮らしして、何年も親の顔を見ていなかった時期があったんですが、当時は反抗期で、ムスリムも母もひっくるめて嫌いでした。でも、母がイスラーム教であることを分かってはあげられるんです、今では。ただ、それでもいまだに母はたまに強制するんですね。「私はムスリムだからあなたもムスリムなのよ」って言われても、「なんで？」みたいになる。僕のなかで宗教っていうのは、遺伝するものでもないし、個々人の思想、考え方であって、その人の中で満足や解決ができたり、導かれたりするものであって、それを他人に求めちゃいけないと思うんです。だから、「母さんは母さんの好きにしたらいい。でもそれを僕に押し付けないで」っていつも言うんですが、「いや、押し付けるも何もあなたはムスリムだから」で終わっちゃうんです。だからまた余計に、「なんだこのばばあ」ってなっちゃうんですけれど、まあ、そういうことが今でも続いてて。(第3回議事録)

上記引用の第二世代も、親からの強制に反発し家を出て一人暮らしをしている点では、他の〈ムスリムであること〉を否定する第二世代と同じだが、親子の関係はそれほど悪くない。それは、強制するのが外国人父でなく日本人母であるという点に違いがあるのかもしれない。この家庭では、母は子がムスリムとして生きることを望み実践を強要するものの、これ

を受け容れないという理由で子を恥じたり罵倒したりはしない。登壇中に母を前にして「なんだこのばばあ」と発言できるのは、それが許される信頼関係を子が感じ取っているからに違いない。なお後日談ではあるが、上記引用の第二世代はこの会議のあとも長らくイスラームに対して「大嫌いとか、とっても嫌とか、拒否感が100%以上あった（母C）」が、その4年後、結婚に際して相手の日本人女性と揃ってシャハーダを行い、ムスリムとしてニカーを行った。入信後も実践は一切行わないことを母に向かって宣言してはいるが、その決断の背景には「母に認めてもらって結婚したいという気持ち（母C）」があったという。そこには、子がムスリムであるか否かにかかわらず愛情を示し続けた母との信頼関係が垣間見える。

サリー 女性 39 歳・75：母ははっきりと、どんな自分でもいつもサリーの味方だと言ってくれました。道を大きく外れることなく、精神的にもおかしくならなかったのは、母の無償の愛が大きかったと思っています。

ハニフ 男性 24 歳・29：結局、最後僕が思うのは、お父さんお母さんしか味方はいないんだと思うんですね。（……）（いじめの相手を殴って）停学なった時も、迎えに来てくれて。うん、そんな時も怒らへんかったもんな。

良きムスリムであるか否かに関わらず、また社会的評価がどうであるかに関わらず、子は無条件に親から愛されたいと望んでいる。上記引用の2人にとって、何があっても親が味方でいてくれるということは、困難を乗り越える支えとなっていた。だが一部の家庭では、〈ムスリムであること〉が親の愛情をつなぎとめることと引き換えになってしまっているために、イスラームを受け容れられない子は相互排他の要求に葛藤する。「（宗教を強要する父から）僕としての人格を守るために、イスラームを絶対認めたくないってところがある（スレイマン 男性 25 歳・30）」とイスラームを否定しながらも、「ムスリム抜きで認めてほしいところありますよね。ホントに、イスラーム抜きで」と語るスレイマンの口調からは、親の愛情を切望している様子がうかがえる。無論どの親も子を大切に思う気持ちは同じであるだろうが、サリーやハニフのようにそれを実感できなければ、子は不安になる。権威主義的な父親像に縛られることなく、子にわかるように親の愛情が示されれば、かれらの葛藤は軽減するのではないだろうか。

5 小括

本章では、「家庭環境における第二世代の生きられた経験はどのようなものか」を考察するため、ムスリム家庭の子育ての実践と、宗教継承に関する課題について検討した。

ムスリムの両親のもとに生まれた子はムスリムとみなされるが、その子が成長して〈ムスリムであること〉を肯定するかどうかは親の育て方にかかっている。そのため、多くの家庭

ではクルアーンに従いハディースに倣って、宗教儀礼を行いまたイスラーム教育を行う。だがムスリムマジョリティ社会のような家庭外の社会資源を活用できない日本では、子へのイスラーム教育のすべての責を親が負わなければならない。

踏襲すべき先例がないなかで、第一世代である親たちがそれぞれに試行錯誤を繰り返していたことは想像に難くないが、その内容を第二世代への量的調査の自由記述欄に書かれた経験から検討するに、礼拝やクルアーン学習といった実践の継承が行われていることが多くの回答に共通している。しかし、それらが強引に進められることへの抵抗感と、それに従うことで周囲との差異を意識せざるを得ないことへの戸惑いを抱える者がいた。かれらは、「なんでやらなくてはいけないのか」「なんで自分は制限だらけの中で自由じゃないのか」「なぜダメなのかがわからなかった」など、「十分な説明や納得のいく理由もなく」「周りが当たり前に行っていることをできない」ことに悩み、「自分だけイスラームという大きな壁を抱えていると負担に感じる」。だが一方で、同じように実践の継承が行われながらも、なぜそれをすべきなのか、なぜしてはいけないのかといった説明が示される家庭に育つ第二世代は〈ムスリムであること〉に否定的な感情を抱きにくい。ここからみえてくるのは、日本のムスリム家庭で行われるイスラーム教育のやり方には、実践のみの継承と知識を伴う継承の二通りあり、それが、第二世代のムスリムとしての自覚に影響を及ぼす可能性が大きいということである。そうであるなら、かれらの〈ムスリムであること〉への抵抗感や戸惑いを軽減するには、十分な知識の継承が重要であると考えられる。質的調査によって得られた第二世代の生きられたイスラームの経験を通して、これを検証するのが本章の主題である。

はじめに取り上げたのは、幼い頃から家庭で行われるクルアーン学習と礼拝に関する語りである。アラビア語で書かれたクルアーンは、文字を読むことと暗記することが重視され、「3歳からやらされてた」という者や、また礼拝も、「始めたのは4歳」という者がいるように、熱心な家庭では早くから宗教継承が始められる。だが子が成長してから急に熱心に始められる継承には、「今頃ぐいぐい来られても困る」という語りのように子の戸惑いは大きい。また第二世代の語りには、十分な説明なしに実践のみを強要する外国人親が頻繁に登場する。それらの実践は、ムスリムマジョリティ社会で育ってきた親には説明するまでもない当たり前のことだが、日本で社会化する子にとっては周囲の誰もやっていないものであり、その意味もわからずに従うことは苦痛である。親に説明を求めても、言語的ハンディキャップのせいで「ムスリムだから」「イスラームではそう決まっているから」といった回答しか得られないことが多く、なかには質問をすることさえ許さない家庭もある。それでも、家族への帰属の優先度が高い年齢層の第二世代は、親からの宗教的な期待あるいは圧力に異を唱えることが難しく、「父に怒られないように」礼拝をシクルアーンを読み、食の禁忌や服装規定に従うが、かれらの不満は大きい。その一方で、夜の家族団らんの時間を宗教継承に充てる外国人父や、身近な事象や出来事を通してイスラームの世界観を伝えられるよう初めから母語で子育てに臨む外国人母の事例もあり、あるいは継承のための時間的な余裕や

支障なく意思疎通するための言語能力がない場合は、海外でイスラームを学ぶ機会を用意する家庭もあった。こうした親の努力によって、「形ばかりのイスラームじゃなく人間が生きる意味を勉強」した第二世代からは、実践を行うことへの苦痛が語られることはなく、むしろ「生きる意味が決まっている」ことを喜ぶ様子うかがえた。

ところで、外国人親の中には子を取り巻く環境を理解せず、日本ではかなり極端と思われるような出身国や地域の文化を押し付ける者がいる。十分な知識を与えられないまま、級友に許されていることを禁止され級友がしていないことを強要され続ける子は、「アッラーのためとかじゃなく父のため」に実践に従い、それができない場合、神に対してでなく「父に対して罪悪感」を抱くが、その様子を見て宗教継承に成功していると満足する親がいる。さらにその実践の強要は、特に第一子に対して厳しくなりがちであり、自由度の高い生活を送る弟や妹そしてそれを許す親を恨めしく思うかれらの苦悩は理解されず、「なんでこんな家庭に生まれちゃったのか」という子の嘆きも気付かれぬまま、家庭内で孤立する第一子は少なくない。実際、「親を殺したいと何度も思う」と親への憤りを爆発させる者や、「父と同じ宗教なんて絶対信じるもんか」とイスラームを拒絶する者は、本研究の質的調査においてはすべて第一子であった。それでも宗教継承に失敗したことに気づけない親がいるのは、ムスリムマジョリティ社会に生まれ育った第一世代にとって、我が子が〈ムスリムであること〉を否定するなど考えられないことであり、その一方で子も親の愛情を失いたくないために家庭ではムスリムのふりをするからである。親の目が届かないところではイスラームとはかかわりのない生活をしながらも、「親から嫌われるのも怖いし、怒られるのも怖いし、悲しまれるのも怖いし、家族の中で自分だけ孤立するのも怖い」と考える子は、親の前で無理をする。だがそうした「二重生活」は〈自分とは何者か〉を問う青年期の第二世代のアイデンティティの混乱を招き、それが不登校や非行、精神疾患の誘因となることがある。これらの悲観的な事例は、親子の意識のずれに起因する。子は常に親の愛情を求めており、もちろん親も子の幸せを願っている。それにもかかわらず両者の思いが交わらないのは、子を幸せにするには宗教継承が欠かせないという、ムスリムマジョリティ社会の当たり前が親の意識にあるからかもしれない。

そうしたなか、日本人母が、子と外国人父の仲介役を果たす事例が複数みられる。日本でムスリムとして生活することへの葛藤を経験した日本人母だからこそ、子の良き理解者となりうるのだろう。子は日本で社会化する第二世代である。かれらを取り巻く環境は、親世代の誰も経験したことのないものであり、これを少しでも想像するなら、有無を言わせぬやり方で実践を強要すべきでないことに気づけるはずである。イスラームを拒絶しながらも、「ムスリム抜きで認めてほしいところありますよね」と望む子がいるように、良きムスリムであるか否かにかかわらず、親世代には子にわかるように愛情を示すことが求められているのではないだろうか。

第5章 学校生活における生きられた経験

学校は、成長過程にある子どもたちが一日の大半を過ごす場所である。だがそこは、「マイノリティがその異質性を理由に排除される」（児島 2021; 213）場でもあり、そこでの経験がマイノリティの子どもたちのアイデンティティ形成に大きく影響することは関連研究でもしばしば言及されてきた（清水ほか 2021; 三浦 2015; 下地 2018など）。そこで本章では、研究の問いの2つ目である「学校生活における第二世代の生きられた経験はどのようなものか」について考察する。その際、まず学校現場でイスラームがどのように理解されているのかを概観し、そのうえで、実際に第二世代がどのような環境の中でどのような経験をしてきたかを、当事者の語りを通して読み解いていく。

1 学校現場でのイスラーム理解

学校教育においてイスラームを扱う科目として、小学校では社会科、中学校では歴史・地理・公民的分野の学習が必修であり、高等学校では選択科目として地理・世界史・倫理がある。イスラームについてそこで何が伝えられるかは、各教室の担当教員に委ねられるが、ムスリムへの誤解や偏見が解消されるような授業は行われているのだろうか。

これについては、少し古いが、高等学校教員でもある松本高明による調査（松本 2005）（以下、「松本調査」）を参照したい。松本調査は、アメリカ同時多発テロ事件の1年半後、東京・神奈川の高校生 1670 人を対象に、イスラームに関してどの程度の知識を持ち、またどのようなイメージを抱いているのかについて選択式のアンケートを行ったものである。その結果、前者については、「日本社会に流布するイスラーム関連情報には偏りがあり、特にキリスト教およびユダヤ教と同根であること、中東地域やアラブ人固有の宗教ではないこと、個人主義的側面があること、といった情報の不足」（松本 2005: 203）が確認された。ここでいう個人主義的側面とは、宗教実践の選択は個人に委ねられているということであり、第1章で宗教の私事化に言及した際に述べた、19 億人が 19 億通りの多様性を許容するまさにイスラームの特徴といえるものである。だがこの調査でも、「女性は黒布で全身を隠す義務があるか」や「聖職者には必ず従う義務があるか」という設問に対して、「義務はない」と回答した者がそれぞれ 16.6%、33.1%と、正答率が低いことから、イスラームの多様性は学校教育の場でも日本社会においても伝えられていない（松本 2005: 202）。さらに、イスラームについて伝えられる情報は「規範」の側面ばかりで、『『個人主義』にまで触れた教科書の記述を目にしたことはない』（松本 2005: 208 注 10）とさえ指摘されており、こうした現状が、イスラームに付随する過度に厳格で理解し難い宗教といったイメージの助長を促すことになっているのだと考えられる。

次に、松本調査において、生徒たちの抱くイスラームについてのイメージはどのようなものであったのかを検討する。松本自身が「イスラームに対する印象がよくないことは予測していたが、これほど否定的なイメージが強いとは想像できなかった」（松本 2005: 199）と

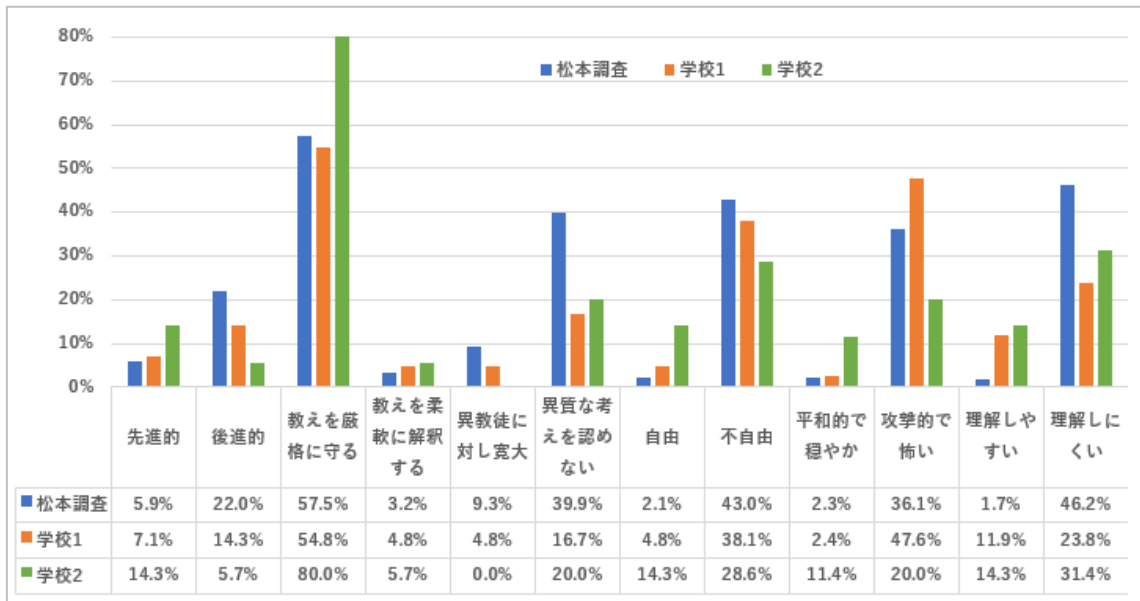


図 5-1 イスラームのイメージについての選択式アンケートの結果

出所：松本（2005）の調査および中部地方の大学生への調査結果をもとに筆者作成

述べるように、「後進的（22.0%）」「教えを厳格に守る（57.5%）」「異質な考えを認めない（39.9%）」「不自由（43.0%）」「攻撃的で怖い（36.1%）」「理解しにくい（46.2%）」といった選択肢に回答が集中している。なかでも最も多いのが「教えを厳格に守る」であることは、「規範」の側面ばかりが伝えられている現状を反映している。図 5-1 は、松本調査の結果と合わせて、筆者が中部地方の大学生を対象に 2023 年（学校 1）と 2024 年（学校 2）に行った同様のアンケート調査の結果を示したものである。学校 1 と学校 2 とともに、「後進的」「教えを厳格に守る」「異質な考えを認めない」「不自由」「攻撃的で怖い」「理解しにくい」といった選択肢が選ばれており、最も多いのが「教えを厳格に守る」であることは松本調査と変わらない。調査の時期に 20 年以上の隔たりがあり、かつ調査対象が高校生から大学生に変わっているにもかかわらず、回答の傾向がほぼ同じであることに驚きを禁じ得ない。

では、こうしたイスラームに対する否定的なイメージは、いかにして形成されたものであるのか。表 5-1 は、イスラームの学習状況と情報源について、松本調査の結果と合わせて、これを参考に筆者が学校 1 および学校 2 で行ったアンケート調査の結果を示したものである。松本調査では、イスラームについて小・中学校で「きちんと学んだ」と回答した生徒は全体の 2.7% しかなく、テロ事件に関する情報源として最も多い回答は「テレビ（91.7%）」である。20 年以上前の調査であることと調査対象が高校生であることを考慮すると、情報源がテレビに偏っていることは当然と思われるが、「学校の授業（0.6%）」が 1% にも満たない点で、中学校までの社会科学学習がイスラーム理解に果たす役割はほとんどないことがわかる。一方、学校 1 と学校 2 の調査結果をみると、小・中・高等学校で「きちんと学んだ」と回答した学生はそれぞれ 5.3% と 6.1% で、松本による調査結果をわずかに上回っており、

表 5-1 イスラームの学習と情報についての調査結果

設問	回答の選択肢	松本調査	学校1	学校2
		高校1年生 1670人 (2003年調査)	大学1～4年生 42人 (2023年調査)	大学1～4年生 35人 (2024年調査)
小・中・高等学校で (松本調査では小・ 中学校で) イスラーム を学習したか	きちんと学んだ	2.7%	5.3%	6.1%
	少し学んだ	54.9%	42.1%	30.3%
	学んでいない	17.9%	28.9%	51.5%
	学んだかどうか覚えていない	24.5%	21.1%	12.1%
イスラームに関して (松本調査ではテロ 事件に関して) 何から 最も多く情報を得たか	テレビ	91.7%	16.7%	21.2%
	新聞	4.4%	2.8%	0.0%
	本や雑誌	0.4%	0.0%	0.0%
	インターネット	1.9%	38.9%	27.3%
	学校の授業	0.6%	36.1%	48.5%

出所：松本（2005）の調査および中部地方の大学生への調査結果をもとに筆者作成

イスラームに関する情報源として「学校の授業」と回答した学生がそれぞれ 36.1%と 48.5% であることから、高等学校の社会科学習による影響があると推察できる。しかしながら、多岐に渡る学習項目の中で、イスラームの説明に十分な時間を費やすことは難しいのか、ムスリムへの誤解や偏見が排除されるような学習が行われていないことは、前出の図 5-1 に示した調査の結果に明らかである。さらに、学校 1 と学校 2 のイスラームに関する情報源として「インターネット」と回答した学生がそれぞれ 38.9%と 27.3%で、松本調査の 1.9%を大きく上回っているのは時代の流れを反映しているが、それにもかかわらず、イスラームについて抱くイメージの傾向は松本調査と変わらない。これらのことから、高等学校の社会科学習もインターネットによる情報収集も、イスラームへの否定的なイメージの修正には何ら影響を及ぼしていないことがわかる。

ところで、前出の図 5-1 に示した調査では、選択肢がそれぞれ対になっており、「厳格」か「柔軟」かといえは前者を、「平和的」か「攻撃的」かといえは後者を、といったように二者択一的な回答が誘導された可能性は否定できない。そこで選択肢を用意せず、自由記述式アンケートで得られた結果を次に検討したい。表 5-2 は、イスラームのイメージについて、関東と中部地方の中学校・高等学校・大学合わせて 6 校で行った自由記述式アンケート調査の回答から、出現回数の多いキーワードを順に上位 3 つ並べたものである¹⁰⁵。「礼拝す

¹⁰⁵ 他の回答として、「女性差別」「黒い人／茶色い人」「石油王」など一部の事例を全体化したもの、また「選民思想」「牛肉を食べない」「カバディ」などユダヤ教やヒンドゥ教との混同もあり、イスラームについての知識が不十分であることがうかがえる。

表5-2 イスラームのイメージについての記述式アンケートの結果

	学校3 中学2年生 203人 (2019年調査)	学校4 高校2年生 40人 (2019年調査)	学校5 高校1年生 140人 (2020年調査)	学校6 大学生 20人 (2020年調査)	学校7 大学生 116人 (2020年調査)	学校8 大学生 40人 (2024年調査)
最も多い回答	戒律が多い・厳しい 46.3%	怖い・過激・テロ 35.0%	肌を隠す・髪を隠す 20.0%	怖い・過激・テロ 50.0%	怖い・過激・テロ 59.5%	怖い・過激・テロ 35.0%
2番目に多い回答	怖い・過激・テロ 29.6%	戒律が多い・厳しい 20.0%	豚肉を食べない・酒を飲まない 14.3%	礼拝する・断食する 50.0%	礼拝する・断食する 42.2%	肌を隠す・髪を隠す 22.5%
3番目に多い回答	優しい 5.4%	肌を隠す・髪を隠す 10.0%	怖い・過激・テロ 13.6%	戒律が多い・厳しい 45.0%	豚肉を食べない・酒を飲まない 37.1%	戒律が多い・厳しい 20.0%

出所：関東と中部地方の中学生・高校生・大学生への調査結果をもとに筆者作成

ル・断食する」や「豚肉を食べない・酒を飲まない」といった五行や食の禁忌については社会科学習で得られる情報であり、松本が指摘するように、そうした規範の側面ばかりを知識として取り入れた結果が、「戒律が多い・厳しい」というイメージにつながったと考えられる。しかし、学校3～8すべてに共通する「怖い・過激・テロ」といったイメージは、社会科学習で得た情報とはあまり考えにくい。イスラームに関する情報源として、高校生を対象とした松本調査で「テレビ」、大学生を対象とした学校1および2の調査で「インターネット」という回答が多かったことを考えると（表5-1）、「怖い・過激・テロ」といったイメージが形成される要因にメディアの影響力が大きいことは否定できない。それを示す回答をいくつか以下に引用する。

設問：「イスラーム」についてあなたが持っているイメージについて自由にお書きください

学校7の学生の回答：

- ・私の持つイスラムのイメージは、攻撃的なものであり、恐ろしいというものです。ニュースで日本人を人質にとったというのを見た時、震えが止まりませんでした。このような事件があつてから、より怖くて、近寄りたくないものだと思ってしまいました。
- ・正直、良いイメージはないです。ニュースになるのは、自爆テロ、戦争、過激派なので、そのイメージしかないです。印象に残っているのは、日本人が拘束され殺害された事件です。
- ・過激派が起こした事件は恐ろしく今でも日本人が拘束されている映像や報道された残虐な殺し方を覚えています。
- ・毎日人と人の対立によって戦争が起きていて、人を殺しあっている。戦争でしか解決

できないと思っている。古くからの考え方が変わらず、新しい方法も見つけられず、対立することしか出来ない。人質をとって殺すか殺さないかで、他人の意志を操ろうとしか思っていない。

- ・殺人に対しての罪悪感がかなり少なく、銃声が鳴りやまない都市であり、イスラム国での普通の生活は困難であるのではないだろうか。過激派組織のニュース以外で「イスラム」の言葉を聞いたことはないといっても過言ではない。とにかく平和の反対側が「イスラム」だと思っている。

回答には、過激な事件を起こす犯罪者集団についてのテレビのニュースや、インターネットで視聴が可能だった残虐なシーンへの言及もあり、それをイスラームと混同している学生が少なくない。なかには、「イスラム教とテロ組織がごちゃごちゃになっていてはつきりとは理解していない」と、その混同を自覚する回答もあったが、大半は「銃や大砲がそこら中にある」や「銃などの武器を持っている」、「すぐに人を殺してしまう」など、無自覚なままに両者を同一視した回答であった。犯罪者集団に対する「イスラム国」という呼称がメディアによって繰り返されることで、イスラームという宗教の名称とが混同され、映像を通して伝わる視覚的イメージの強烈さが、授業で得たわずかな知識を簡単に上書きしてしまったのだと考えられる。

そもそも件の犯罪者集団に対してメディアが好んで使用する「イスラム国」¹⁰⁶という呼称は正式なものではなく、日米両政府や国連などは「国家」と認めないとの立場から「ISIL (Islamic State of Iraq and the Levant の略)」と呼んでいる（『朝日新聞』2015.1.31）。少なくとも、日本政府が ISIL と呼んでいることや（首相官邸 2014; 公安調査庁 2024 など）、この組織の戦闘員の数是世界中のムスリム人口の 0.01%にも満たないといった事実が¹⁰⁷、時事問題を扱う社会科学習の場で取り上げられるなら、上記調査のような結果にはならないだろう。だが現実には、小・中・高等学校そして大学においてさえ、メディアのセンセーショナルな報道によって生じた否定的なイメージは正される機会のないまま、事件とは無関係の圧倒的多数のムスリムに対する強い恐怖感や嫌悪感が、現在も醸成されつつある。こうした現実において、学校生活における第二世代の生きられたイスラームの経験はどのような影響を受けるのかを以下に考察していく。

¹⁰⁶ この呼称は、NHK が 2015 年 2 月 14 日に「過激派組織 IS＝イスラミックステート」と変更した後、朝日新聞、毎日新聞、東京新聞がこれに倣うが（名古屋モスク 2015a）、現在も多くのメディアが「イスラム国」という呼称を使用している。

¹⁰⁷ 人質事件が起きた 2015 年の IS の戦闘員数は 3 万人前後であり（Daveed 2015）、これは当時の世界中のムスリム人口 18 億人（Lipka 2017）の中の 0.0017%に過ぎない。

2 量的調査からみてきたこと

学校生活における第二世代の経験を検討するため、はじめに、第二世代を対象に行った量的調査の結果をみておく。

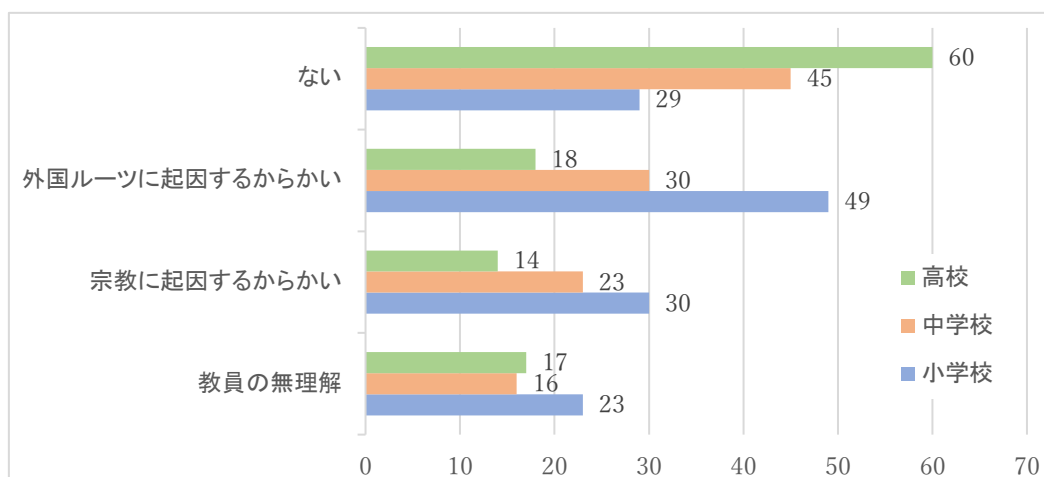


図 5-2 「学校で不快な経験をしたことがありますか」への回答

図 5-2 は、設問「学校で不愉快な経験をしたことがありますか」への回答を示すものである。「ない」という回答が多いのは、第 3 章で図 3-5 に示した通り、回答者の大半がムスリムの自覚をもつ者であることと関連があるかもしれない。標本抽出の偏りを鑑みるに、数値的なデータに過度な信頼を置くことは控えなければならないが、「外国ルーツに起因するからかい」や「宗教に起因するからかい」は、高等学校より中学校で、中学校より小学校で多く起こっている点には留意しておきたい。その実態については質的調査の結果を注視することとし、ここでは前章同様、自由記述欄に記された回答から個々の経験を引用し考察する。

まず上記の設問で、「外国ルーツに起因するからかい」と「宗教に起因するからかい」を選択した回答者の自由記述欄から、内容が重ならないもの 10 件を引用する。なお前章同様、引用の最後に付した番号は、第 3 章の表 3-2 に対応するものである。

設問：（学校での不愉快な経験について）差し支えなければ、その具体的なエピソードをお書きください

「外国ルーツに起因するからかい」と「宗教に起因するからかい」を選択した者の回答：

- ・義務教育全ていじめられた（女性 23 歳・185）
- ・ありきたりなイジメ、仲間はずれ、無視、バイ菌扱い、物を盗まれるなど（女性 31 歳・200）
- ・小学校では、やはり何かと外人扱いされては、「国に帰れ」と言われました。毎日、自分たち日本人とは別のもの、というあからさまな態度でした（女性 20 歳・173）

- ・中学生のころに同級生から「目の大きさがきもい」と言われた（女性 19 歳・168）
- ・名前、肌の色、等で馬鹿にされたり虐められました（男性 26 歳・141）
- ・国や宗教や肌が違うので当たり前前に距離を置かれたりバカにされた（男性 32 歳・149）
- ・ムスリムは貞操を大切にするという事を知った上で、あえて下ネタでいじられたりする事があった（男性 21 歳・124）
- ・イスラム国、テロと言われた（男性 16 歳・16）
- ・アラビア文字の書かれた紙を持っているだけで IS だとからかわれた（女性 17 歳・162）
- ・イスラームに関連した事件（ISIS など）が起こるたびに、学校へ行くのが恐怖だった。どう周りにジャッジされてしまうのが怖くて。特に ISIS による日本人誘拐事件の時は大変だった（男性 23 歳・135）

これらの記述と同様の経験は他の複数の回答にも記されており、特に外見に関する揶揄と、「国に帰れ」や「テロリスト」と言われた経験は非常に多く、そうした誹謗中傷は第二世代にとって、回答中にあるように「ありきたり」で「当たり前」のものであることがわかる。しかし、第二世代が学校で居心地の悪さを感じるのは、級友らによる不快な経験のせいだけではない。上記の設問で、「教員の無理解」を選択した回答者の自由記述欄から、内容が重ならないもの 10 件を引用する。

設問：（学校での不愉快な経験について）差し支えなければ、その具体的なエピソードをお書きください

「教員の無理解」を選択した者の回答：

- ・社会科教師によるイスラームへの悪印象助長。「コーランか剣か」（男性 19 歳・117）
- ・社会科の宗教のイスラームのところでの配慮の欠片もなかった（性別回答なし 16 歳・203）
- ・世界史の授業などで「イスラーム」や「ジハード」、「パキスタン」と言った単語が出てくると先生が私の方を向く（女性 31 歳・200）
- ・田舎の教員の視野の狭さと理不尽さ（男性 22 歳・130）
- ・ありすぎてまとまらないが一言で言うと僕に対して気遣いしすぎてこっちがきずつくことがおおい（男性 18 歳・112）
- ・漢字の名前があるにもかかわらず、ほかの人とカタカナ表記で区別された（男性 29 歳・146）
- ・幼稚園と小学生の時、宗教上の理由で食べられない物であるから食べてない物だと説明しても理解してもらえず、教員に好き嫌いが激しい子だと思われたこと（女性 20 歳・172）
- ・アレルギー除去食と同様の配慮をしてもらえず、「郷に入っては郷に従え」と言われ

てしまったこと（女性 22 歳・181）

- ・保育園でお肉を使わない給食を作ってもらっていたのですが、1 度母が作ったお弁当を持っていき、そのなかにハラール肉を使った唐揚げが入っていたのですが、それをみた先生が「お肉食べれるんか！」ととても怒られました。ハラール肉の事を説明すると「外人は意味わからない」とまた怒られました（女性 20 歳・173）
- ・小学校のとき、父が強く言うもんだからイヤイヤで初めてスカーフをして登校したら、一番最初に担任に「なにそれ笑」と笑われた。クラスメイトに何か言われる覚悟はしていたけど、担任に言われる覚悟をしていなかったのも、あまりのショックすぐスカーフをとった。それ以来、外でスカーフをしているとき、笑い声が聞こえたら自分が笑われていると感じるようになった（女性 24 歳・188）

これらの記述からは、教員の基本的な知識不足と配慮のなさによって、第二世代が不快な経験をしている現実がみえてくる。いうまでもなく、教員は児童生徒がどのような学校生活を送るかを左右する重要な役割を担っており、特にからかいやいじめのターゲットになりやすいマイノリティの児童生徒にとって、教員は助けの手を差し伸べてくれるはずの存在として期待されている。だがそれが叶わない教育現場が一部にあること、教員の偏見が第二世代を傷つける場合があることは、限られたスペースの短い記述にも垣間見える。

これらの調査結果から、第二世代の学校での不快な経験の原因には、外国ルーツそして宗教的背景による級友からの排除だけでなく、教員の無理解も含まれることがわかった。この点について、質的調査による当事者の語りを通して、以下の節で検証する。

3 外国にルーツを持つことによる疎外感

前節で、第二世代の学校での不快な経験の一因に、外国ルーツによる級友からの排除があることを確認した。第二世代のルーツについて、2016 年末のムスリム家庭の世帯数のデータ（店田 2018: 116）を援用すれば、親の一方または双方が外国人である者が 97%であることから¹⁰⁸、第二世代のほとんどが「外国ルーツの子ども」といえる。したがって先行研究にみた、いわゆる「ハーフ」やニューカマー第二世代の周縁化の経験は、ムスリム第二世代にも共通するところが非常に多い。外見的な差異を理由としたからかいやいじめはいうまでもなく、特定のエスニック集団に付される否定的なイメージが攻撃の材料となり、自身のルーツに疎外感を抱くことも同様に、第二世代の経験に重なる。本節では第二世代の学校生活における生きられた経験をとりあげながらその実態を検証していく。前章同様、それらの語りの発言者はすべて仮名で表し、そこに付した年齢は調査時点のもの、番号は第 3 章の表 3-1 に対応するものである。なお引用は調査協力者に固有の経験であり、これらによって第二世代の経験を一般化するものでないことをはじめに断わっておく。また、引用の一部

¹⁰⁸ 前掲注 4 を参照。

に省略や伏せ字、表現の統一を行うことも前章に同じである¹⁰⁹。

(1) 外見的な差異

「国に帰れ」というのは、教育現場における外国ルーツの子どもの現状報告において「究極の排除を迫る殺し文句である」と述べられ（榎井 2011: 6）、「ハーフ」研究において当事者の語りとして「めちゃくちゃ傷つきますね（……）いちばん、だれでも傷つくと思います」と引用されるように（岩渕 2014: 253）、外国ルーツの子どもに対する揶揄の常套句である。第二世代にとっても、「国に帰れ」をはじめとした外国ルーツに起因するからかいは日常であり、量的調査の結果に示されるように、それは年齢が低いほど起こりやすい。聞き取りの中でも、幼稚園ですでに「**ガイジン**（マイサ 女性 21 歳・28）」と言われ、小学生で「**外来種**（アズマ 男性 15 歳・27）」と言われるなど、かれらはかなり早い時期から、自身を周囲と異なる存在として意識させられる。

ラニヤ 女性 23 歳・62：小学校から中 2 までずっといじめがあった、外国人だから。無視とか陰口とか。

アリーブ 男性 19 歳・10：小学校時代は外国人だからといっていじめられて、相談室や図書室登校でした。中学校は一週間しか行ってないです。

学校現場を知る高等学校教員が、「言葉、見た目、名前が日本風でないこと、それは『いじめてよい存在』として疑わない多くの日本人にとって、罪の意識をもたずに加害してよい存在と捉えられる」と指摘するように（大谷 2022: 211）、周囲との差異はそのまま排除の要因となる。排除の内容として、陰口や無視は男女にかかわらず聞かれたが、男子からは「**小中ずーっと暴力を受けていた、外国人っていう理由で**（ウセイド 男性 19 歳・11）」といったように、身体的な攻撃を受けることも多い。

ハニフ 男性 24 歳・29：ずっといじめられてましたね。小学校 6 年間と中学校 3 年間と高校 3 年間、全部いじめられてた。

——それって全部じゃない。具体的なエピソード、何か話せる？

ハニフ：うーん…ありすぎてどれをしゃべっていいのか。（……）中学校の時は学ランっていうやつやったんですけど、もう家帰ったら、足跡めっちゃついてるとか、学ランに。払って帰ったけど、父にバレて。「これ何？「足のマークちゃう？」みたいな。

——蹴られてるってこと？

ハニフ：そうそうそう、ボコボコ。そんなんは週何回もあるし。（……）服隠されたり、

¹⁰⁹ 前掲注 91 を参照。

靴隠されたりとかもいっぱいあるし、殴られたりしばかれたり。同じ学年じゃなくて、先輩もね。めっちゃ怖いよ。学校行きたくないとか、行ってなかったりとかしましたもん。

スレイマン 男性 25 歳・30：小学校の頃いじめてる同じメンバーが同じ中学校の校区に来るんで。結局自分たちが中学校で安全な位置を確保するために、僕をいじめるわけじゃないですか。で、中学校の時に、結局それがエスカレートして、肘を骨折させられたっていうのがあったんです。

——いじめって、もっと軽いからかいの類かと思ってた…。

スレイマン：いや、すごかったですね。2 人がかりで腕を抑えられて、空手やってる子にみぞおち 30 回ぐらい膝蹴りされて。

第二世代が意識することが多いのは、肌の色や顔立ちといった身体的特徴についての差異である。ニューカマー第二世代の研究では、ブラジル系、ペルー系、フィリピン系の第二世代に共通して「日本人の『白さ』と比較した場合の自らの『黒さ』が、周囲との齟齬をもたらす要因」だと捉えられていることが指摘され（児島 2021: 208）、また「肌の色を白くしたい」というカンボジア系第二世代の反応が複数あることが示されている（清水 2021b: 251）。在留外国人ムスリムの国籍別推計値で最も多いのは順にインドネシア・パキスタン・バングラデシュであることから（店田 2024: 11）¹¹⁰、これらの国にルーツをもつ第二世代の数も多いと考えられ、そうすると、ほとんどの第二世代の肌の色は日本人のそれとは異なっている可能性が高い。聞き取りのなかでも、「黒人（アニサ 女性 25 歳・63）」や「うんこ（ジャリール 男性 21 歳・16）」と呼ばれる経験や、「触らんで、俺は黒い肌になりたくない（ユースフ 男性 21 歳・15）」といった棘のある言葉を投げつけられた経験が挙げられていた。外見的な差異は肌の色だけでなく、彫りの深い顔立ちや体毛の濃さなどが「日本人の中にあっては異質な特徴」（児島 2021: 219）として意識され、これにコンプレックスを抱く者はなんとかして日本人の外見に近づけたいと考える。

アリフ 男性 25 歳・32：（小学生の頃）テレビでやってる美白クリームのコマーシャル見て、あれ欲しいっていつも思ってた。

サービラ 女性 30 歳・72：日本人の顔になりたいです。

——やだー。こういう彫りの深い顔の方がいいにきまつてるじゃない。

サービラ：だから化粧でつぶしてるんですよ、がんばって。私この前、夢にまで見まし

¹¹⁰ 2023 年末の時点で、インドネシア 13 万 16 人、バングラデシュ 2 万 4914 人、パキスタン 2 万 4422 人（店田 2024: 11）。

たもん。これ（目）を一重に変えるとか奥二重に変えるって。

——日本人はここを目指してるのよ、一生懸命化粧して。

サービラ：じゃ、くれてやるよ、って思います。絶対こんな顔だったら毎日泣くぞって
思いますもん。（……）だから私、その（筆者の）鼻筋欲しいですもん。

——やめて、こんな鼻、悲しいから。

サービラ：くれよー、と思いますもん。

親世代からも、「（小学生の頃）脱毛に病院連れて行きました（母 D）」、「日本人のお面が
ほしいって言ってた（父 A）」など、子が幼いうちから差異を意識している様子が語られ、
また第二世代による SNS の動画配信のなかでも、同化願望ゆえに整形手術を受けたいと望
んでいたという語りがある。

A：やっぱ、普通の日本人、普通の顔で、みんなと一緒に生まれたかったなー、って何
回も思ったりするんですよね。

B：思った時もあったし。友達に普通に、「整形したいわ」みたいな、「とりあえず肌の
色変えるやろ、目小っちゃくするやろ」とかいろいろ言ってたけど。

（むすりむ Tube 2020）

とはいえ、外見的差異はそう簡単に埋めることはできない。そこでかれらは、内面的な同
調を図ることで周縁化を回避しようとする。移民第二世代の先行研究においても、「肌の色
以外で変えられる容姿や趣味を日本人に近づけるなどして」級友らへの接近を試みる例や
（児島 2021: 228）、級友らと違うことを感じ取られないよう「必死に空気を読んで」周囲
に同化しようとする例が示されている（下地 2018: 367）。第二世代も同様に、排除される
立場から抜け出す努力をすることで、周囲への同化に成功した事例は多い。しかし、「やっ
ぱり狙われるんですよ、外国の子と違って目立つでしょ（ハニフ 男性 24 歳・29）」という
ように、その努力が報われない場合もあり、また性格によっては、「日本人になりたいとい
う気持ちが強くて、みんなと一緒に合わせるために自分を縛りつけていた（母 D）」者のよ
うに、そうした努力が精神的な負担を増すことで新たな問題が生じることもある。

周縁化から逃れるためには、高等学校進学や転校といった人間関係の「リセット」（角
替 2021: 332）も有効である。「高校に入ってから、友達から『ハーフええな』って言われ
るようになった（ハルーン 男性 21 歳・28）」というように、周囲からの評価の転換を語
る者もいれば、保育園に通う頃から続いていたいじめが、中学 2 年時に転校したのを機
に、「むしろ珍しがられて、居心地はすごい良かった（スレイマン男性 25 歳・30）」とい
う経験に変わる場合もある。また、そうしたリセットの機会を利用して、新たな自己演出
の努力をする者は、小中学校と長く続いていたいじめが高等学校でなくなった理由を、
「コミュニケーション力が上がったから（ラニヤ 女性 23 歳・62）」と自己分析する。そ

うした努力をせずとも、「見た目に関してはやっぱ小学生って、悪いところ見つけて言うてくるんですよ。そういう幼稚な人っていうのが、高校からいなくなった（マイサ 女性 24 歳・71）」というように、周囲の社会的成熟度が上がることで周縁化が収まることもある。特に進学校や特進クラスに進学した者からは、「聞かれはしました、イスラームについて興味がある、みたいな（マイサ 女性 24 歳・71）」というように、むしろ興味関心をもって接しようとする級友らについての語りがみられた。これらの事例は、前節に確認した量的調査で、「外国ルーツに起因するからかい」を小学校で経験した者が 49 人、小学校で経験した者が 30 人、高等学校で経験した者が 18 人と、教育段階が上がるにしたがい少なくなっていく傾向がみられたことの説明になるだろう。

(2) ムスリムに付与されるスティグマ

外国ルーツの子どもの周縁化は、外見的な差異によるだけでなく、特定のエスニック集団に付与されたスティグマを原因とするものもある。例えば、中国やフィリピン系の第二世代に対して、「出稼ぎ」「汚い」「貧困」「環境汚染」といった否定的なイメージが攻撃の材料となりやすいことが先行研究に示されるように（坪田 2021: 268-9; 三浦 2015: 229-30）、ムスリム第二世代にも、「攻撃的」「過激」「怖い」といったイメージが付与されがちである。それはメディアの報道の影響によると考えられ、「テロリスト」や「イスラム国」といったあだ名をはじめ、「おい、過激派！（ラハット 男性 16 歳・2）」、「お前爆弾魔なんか？（ラシード 男性 22 歳・22）」といった過激派組織と同一視するからかいを受けたという語りは非常に多い。それはときに「お父さん IS と通じてないの？（アズマ 男性 14 歳・27）」、「お前の父ちゃんテロリスト！（アリーム 男性 22 歳・26）」のように親をも巻き込んだ攻撃として第二世代を悩ませる。

2001 年のアメリカ同時多発テロ事件以降、滞日ムスリムが否定的な視線を受ける状況は続いていたが、2015 年の過激派組織 IS による日本人拘束事件以降、その状況はさらに深刻になる。事件を報道するメディアが犯罪者集団に対し「イスラム国」という呼称を使用したことで、イスラームとの混同が起きたのも、その理由のひとつだろう。当時の新聞記事の見出しには、「モスク、イスラム店舗…警察庁、嫌がらせ阻止へ警戒徹底指示」（『産経新聞』2015.1.15）や「名古屋モスク―脅迫・嫌がらせ『後藤さん人質』で相次ぐ」（『毎日新聞』2015.2.5）とあり、モスクやムスリム経営の店舗への嫌がらせや違法行為が相次いだことがうかがえる¹¹¹。イスラームとテロ行為を結びつけた非難はムスリム個人に対しても向けら

¹¹¹ 例えば、名古屋モスクには、脅迫や抗議の電話、「日本国民の怒りを代弁して抗議文とするから覚悟しろ。我々はイスラムが日本からいなくなるまで戦うから覚悟しろ、それが嫌なら速攻立ち去れー」「国に帰ってください。日本人の敵。イスラム圏の人の姿を見るのも嫌です」といったメールや葉書が届いた（名古屋モスク 2015b）。別のイスラーム団体にも、「お前たちも、本当は人をころしたことがあるだろ？イスラム教は人をころすの

れ、当時モスクの集会参加者からは、駅や電車の中であるいは道を歩いていて、いきなり見ず知らずの人から「国に帰れ！」や「テロリスト」と叫ばれたといった経験が次々と語られていた。大人の世界でさえこうした偏見が蔓延するなか、第二世代が学校生活のなかで容赦ない攻撃にさらされることは容易に想像ができる。以下は、当時の戸惑いを語る第二世代の会話である。

エリヤス 男性 16 歳・19：ニュースでイスラム国って言うせいで、IS がイスラームの組織だと思われちゃって。それと同じ人達と思われちゃうから、だからもうテロリストだと思われてたりして、すごいつらい思いをしてて。理解してくれない人はずっといじめみたいな感じで通りすがりに「テロリスト」って呼んだり、そういう事をする人が中にはいっぱいいて。

マライカ 女性 15 歳・38：私の場合は授業中で話題に出ちゃったので、みんなが知っちゃって、一緒にいても話しかけてくれなかったりとか。

エリヤス：IS が出たのが急すぎて、一気に来たから、対応というか困って。周りからどう見られるかっていうのも、また一から考え直さないといけなくなったし。この先どういう目で見られるのかとかすごい考えて。

マライカ：混乱しているし、何でこんな事言われているんだろうとか思うし。

エリヤス：まずニュースで何でこの人達がイスラム国とかイスラミックステイトって言われているのか分からなくて。ただのテロじゃんと思って、全然イスラム関係ないじゃんと思って。

過激派組織がどのような解釈をしようとも、イスラームにおいて殺人は大罪であり¹¹²、その教えを知る第二世代にとっては、卑劣な犯罪行為がイスラームの名のもとに行われていることに納得できず、それによって自分までが同一視される現実を理解が追い付かない。上記引用のマライカは、小学校低学年の第二世代が級友らにからかわれて泣いているのを目撃したときのことを、「テレビを見ているから子どもはすぐに言葉を覚えちゃうし、それが言っているいいことや悪い事かまだ判断出来ない」と嘆いており、メディアが作り出す偏見が年齢にかかわらず浸透している様子がうかがえる。

がすごくすきな宗教だよ！もう日本人・他の国の人たちをころさないでください。お前が死ね！！」「人の首を切るのが好きですね。これからは、お前たち気をつけろ。うしろからバットでなぐるからな！」(Japan Dahwa Foundation 2016) といった葉書が届いている。

¹¹² クルアーンには、「人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。(第 5 章 32 節)」、「正当な理由による以外は、アッラーが尊いものとされた生命を奪ってはならない。(第 17 章 33 節)」などの節がある。

偏見による排除の経験は、その後の第二世代の行動を臆病にすることがある。進学や転居などで新しい環境に置かれたとき、自身がムスリムであることを隠すべきか明らかにすべきかあるいはそれをいつカミングアウトするかは、かれらにとって大きな問題である。

エリヤス 男性 16 歳・19：初対面とか友達になったばかりの人に、自分がムスリムということを使うのがやっぱり緊張して。言って相手の反応を見るまでドキドキで、怖くて。相手がもしこれで、「お前無理」みたいになったら、すごいきついから。

マライカ 女性 15 歳・38：言ったら向こうの態度が変わったらどうしようとか、この関係崩れたらどうしようとか、すごい変なことを想像しちゃって言えなかったりとか。(……) あの時みたいになったらどうしようとか、やっぱり拒絶されたらすごい残るから、頭にも記憶にも。

アサド 男性 19 歳・20：中学からずっと、ムスリムであることを隠してた。常にムスリムだってばれるんじゃないかって恐怖があって、誰かがイスラームの話をするとき緊張して心臓がバクバクして。友達に馴染むため嘘をつかないといけない。ムスリムってイメージされないように、わざとハラームをやったり。(……) 社会の授業でイスラームやるときは、僕を指名しないでほしいって先生に頼みに行った。

上記引用のアサドがムスリムであることを中学高等学校の 6 年間隠し続けていたのは、小学校の社会科の授業中に起きたテロ事件と混同した揶揄がきっかけである。こうした過去の不快な経験は自身のルーツの隠蔽のきっかけになりがちである。それはムスリムであることを知られないようにするだけでなく、それを連想されないように親の出身国を隠すことも含み、例えば出自を聞かれた際に、パキスタンやインドネシアといったムスリムマジョリティ国の名を答える代わりに、アメリカやブラジルなどと偽る者がいる(伊藤 2016: 42)。こうした隠蔽や偽りは、かれらなりの自己防衛の手段であるのだろうが、それを続けることは、「学校での自分と家庭での自分と二人いて、どっちが本当の自分かわかんなくなってくる」というアサドの語りのように、自己のアイデンティティを不確実にし、青年期の〈自分とは何者か〉という問いに答えを見出すことを困難にする。

4 宗教的背景による疎外感

前節で論じた通り、第二世代の経験する周縁化は、他の外国ルーツの子どもの経験に共通するが、加えて宗教的背景による差異を意識する点で、かれらの疎外感はさらに深刻である。例えば食の禁忌や服装規定など、ムスリムマジョリティ社会ではごく当たり前の実践も、日本では常に周囲からの注目を浴びるものであり、外見的差異による排除の経験を重ねてきた第二世代だからこそ抱く強い同化願望は、それによって決定的に阻害される。だがムスリム家庭に育つ第二世代にとって、家庭の価値観に異を唱えることは難しく、これに従わない

ことで親の愛情を失うことを恐れる者は、周囲への同化願望との間で葛藤する。その実態を本節で検証していく。

(1) 食の禁忌により意識される差異

イスラームには豚肉を始めとする食の禁忌がある。そのため、安価な豚肉が使用されることの多い給食の場面は、親世代にとって大きな不安要素のひとつである。教育活動の一環として全員が同じ給食を食べることが奨励されているなか¹¹³、かつてアレルギー対応への意識が一般的でなかった頃には弁当の持参が認められにくかった(クレシ 2023: 27)。1990年代の日本人女性改宗者の集会では、禁忌の食材と一緒に調理した場合その料理は汚染されているという見解や、形としての肉だけでなくブイヨンや肉エキスも避けるべきだとの見解に困惑したという話題が頻繁に取り上げられており、入信間もない日本人母にはどのようにハラールを運用すべきかの判断は難しい。多くは夫である外国人父の意向に従うことになるが、外国人父は給食の実態を知らないため、その判断はさまざまである。例えば、給食で出されるおかずには一切手をつけるべきでないと考える親は、子にパンと牛乳だけで過ごさせ、妥協することを選択した家庭では、子は配膳された皿から自分で豚肉を除けて食べる。前者の家庭に育つ子は、教室中に漂う給食の香りを嗅ぎながら隣席の皿を横目に毎日パンと牛乳しか口にできず、また後者の場合は、級友から「嫌いだからって残すんじゃないよ(ナジュマ 女性 24 歳・67)」、「好き嫌いするんじゃないよ(ヌール 女性 34 歳・74)」といった非難に耐えなければならないなど、いずれにしてもこれらは学校での不快な経験として蓄積されていく。

アレルギー物質を含む食品の原材料表示を定める「平成 13 年厚生労働省令第 23 号」(厚生労働省 2001)の発令を経て、食物アレルギーへの認知が進み学校の対応は次第に軟化し、近年では、宗教を理由とした弁当の持参は珍しいことではなくなっている。親世代がこれに安堵する一方で、教室のなかでたった一人弁当を食べることは子にとって周囲との差異を確認する場面であり、これを小学校 6 年間――地域によっては中学校と合わせて 9 年間――毎日繰り返すことは苦痛である。調査のなかでも、「**小学校でお弁当だったのも恥ずかしかった。周りと違うことで萎縮しちゃう**(アスマ 女性 27 歳・73)」という語りはよく聞かれ、級友からの視線を気にするあまり、弁当を手で隠しながら食べていた者や、「『**お腹いっぱい**』と言って食べないで帰ってきた(父 A)」者もいる。

なお近年の弁当についての各家庭の対応はさまざまで、給食の献立にかかわらず毎日弁当を持参させる家庭もあれば、献立によって弁当持参と給食の併用を選択する家庭もある。

¹¹³ 1946 年の文部・厚生・農林三省次官通達により、給食は教育活動の一環として位置付けられ、1954 年の学校給食法制定により、教育活動として実施されるようになった(文部科学省 2019: 218)。

アサド 男性 23 歳・19：食べれる食べれないに分けてて。食べれないものとしては、肉とかゼラチンとか、そういうものだけを避けて、あとは基本的に（給食を）食べてました。

シャヒーム 男性 21 歳・17：小学校の頃はそんなにね、肉とかそういうの全然気にしてなくて、豚のある日ぐらいは弁当持ってきてたね。だからパンとかも全然気にせず食ってたし、チキンとかも。

豚肉を避ける点はほぼすべてのムスリムに共通するが、イスラーム式屠畜がなされていない牛肉や鶏肉について、またゼラチンや乳化剤などについての考え方は家庭によって異なる¹¹⁴。そのため、上記引用のシャヒームのように、豚肉のみを避けるという判断をする家庭では給食を食べる日数が弁当持参の日数を上回るが、禁忌とするものが多い家庭ではその逆になる。給食の献立にかかわらず毎日弁当を持参させる家庭では、「牛乳だけ取ってて、あとはお弁当だった（ジャリール 男性 21 歳・16）」という者や、「全部お弁当だった。牛乳も何も飲まずに（アニサ 女性 23 歳・63）」という者がいるように、牛乳を注文するか否かの選択肢もある。

表 5-3 は、名古屋のコミュニティ内にある集会SYM¹¹⁵にて行われた第二世代同士の座談会に参加した12人の弁当持参の形態をまとめたものである。この人数をもって第二世代全体を論じるつもりはないが、少なくともこの座談会で、給食を食べたことがない者は4人おり、かれらの母はすべて外国人であったことから、献立表を読めないあるいは読めてもその料理を知らない外国人母の家庭では、弁当持参を選択しがちな傾向にあることがうかがえる。この4人の弁当の中身は、「夜ご飯をそのまま弁当にしたものとか（イムティアズ 男性15歳・1）」、「〇〇（母の出身国）のカレーなんだけど（オマール 男性17歳・6）」など、献立表を意識しない料理であった。それに対し、外国人母の家庭で1人と日本人母の家庭で4人が給食の献立と同じかそれに近い中身をもたせており、それは「自分だけが弁当だったのはイヤだった（ヤシーン 男性17 歳・7）」というような、子の感じる差

¹¹⁴ クルアーンには、「かれがあなたがたに（、食べることを）禁じられるものは、死肉、血、豚肉、およびアッラー以外（の名）で供えられたものである（第2章 173 節）」とあるほか、「アッラーの御名が唱えられなかったものを食べてはならない（第6章 121 節）」とある。アッラーの名を唱えた屠畜がなされなければ牛肉や鶏肉も禁忌と考える家庭もある一方、非イスラーム圏である日本では豚肉さえ避ければいいと考える家庭もある。

¹¹⁵ SYM は、2014 年 8 月名古屋のコミュニティ内に発足した「中高生お茶会」が名称を変更して継続した Space for Young Muslims の通称。ここで取り上げたのは、2020 年 10 月 10 日と 17 日に行われた「給食あるある」をテーマとした座談会の内容である。

表 5-3 SYM 参加の第二世代の弁当持参の形態 (12 人中)

弁当持参の形態	母が外国人(5人)	母が日本人(7人)
弁当＋牛乳＋給食	1人	7人
弁当＋牛乳	3人	0人
弁当のみ	1人	0人
中身は給食の献立と(ほぼ)同じ	1人	4人
中身は給食の献立と無関係	4人	3人

出所：SYMの座談会に参加した第二世代の会話をもとに筆者作成

[illegible]

写真 5-1 自治体ごとに仕様が異なる調理手順書(左から小平市、福岡市、名古屋市)

出所：小平市、福岡市、名古屋市在住の第一世代の提供による

異を少しでも緩和してやりたいと願う親の努力によるものだろう。

実は自治体ごとにその名称や仕様は異なるが、給食調理員が使用する調理手順書(写真5-1)を入手することで、生徒全員に配布されるひと月分の献立表からは分かりにくい詳細な原材料や分量、調理手順を知ることができ、これに従えば、給食と同じ献立を家庭でも調理することは可能である。だが調理手順書の存在を担任教員が知らない場合、ムスリム家庭の保護者にその情報は共有されない(クレシ 2023:27)。給食に関する親世代への調査でも、調理手順書を使用して給食と同じ献立の弁当を用意しているのは、回答者29人のうち1人であった(ラフマンヌール 2023: 28)。担任教員による調理手順書の共有が進めば、給食の献立と同じかそれに近い中身をもたせたいと思う親に現状かかっている余分な負担が軽減されるのではないだろうか。

なお、SYM の座談会では、弁当についての肯定的な経験と否定的な経験がどちらも語ら

れていた。

ムラド 男性21歳・18：正直給食のご飯よりお母さんのご飯の方がおいしいから、全然不満はなかったんですけど。周りの人も、「おいしそう」「おいしそう」っていうし。(……)

アシア 女性 18 歳・44：確実にうちらおいしいじゃん。そしたら周りから来て、「ちょっとちょうだいよ」、(弁当の中身を取る身振りをして) ばぁー！って。

ジャリール：あ、俺あったわ、一回。運動会の日かなんか、揚げ物ばっか入れるから、それで「ちょうだい、ちょうだい」つつって、やられたことがあった。

ムラド：俺も「ちょうだい」って言われたことあるけど、一生懸命ガードしてた。

アニサ 女性 23 歳・63：なんかやっぱり、お母さんが作るものは全部お母さんが好きなものを作るから、においが強いんだよね。めっちゃ気にしてた。

ジャリール 男性 21 歳・16：臭いよね。電車でも結構、出ちゃうんだよね。

アニサ：で、密封するじゃん。もうやばいわけよ、夏とか、すごい臭くて。で、言われたことある、「カレー臭い」「カレー民族」みたいな。つらかった、それは。なんか臭すぎて、「国に帰れ」って言われた。(……)

ジャリール：アニサとほとんど一緒っていうか、臭いのこととか、やっぱりよく言われた。一番印象的なのは、小学校入ってめっちゃワクワクしてお弁当持って行ったら、言われたのが「臭いんだよ」。

アニサ：言われるよねー。

弁当持参という点で好奇の視線が集まるなかで、級友からの「おいしそう」や「ちょうだい」といった反応は良い思い出として語られるが、その一方、親の出身国によっては香辛料を多用する料理があり、それらはさらにからかいの好材料となりやすい。だが上記引用のジャリールが「そんなに臭いが強いものを入れられたくない」と言いながら、それでも「同じ献立を用意する難しさとか、今まで見てるから、そんな負担かけさせたくない」と語るように、かれらは給食の場面で不快な経験を重ねながらも、毎朝早起きして弁当を用意してくれる母への感謝を忘れてはいない。だからこそ、その弁当を台無しにするような悪質ないたずらには憤慨する。

ハニフ 男性 24 歳・29：一番腹立ったのは、やっぱり弁当の(いたずら)。なんで親が作ってくれた弁当に、なんで(豚肉の)ウインナーが入ってるの？って。え、なんで？って、なるじゃないですか。(それを見て) 笑ってるやつがおるんですよ。

——結局その日はどうしたの？

ハニフ：(いたずらした生徒を) ボコボコにして。弁当も食べずに、そのとき帰ったん

やったかな、家。授業もほったらかして。

——それ、親に言った？

ハニフ：言っていないです。親にもあんまり言えへんからね。

ラハット 男性 16 歳・2：(昼の礼拝をして戻ったら、自分の弁当箱に唐揚げが乗っていたので)、隣にいた子に聞いてみたんです。「これ、俺が食べる肉なのかな」って。そしたら、「いや、違うよ」って笑って言ってきて。「は、どういうこと？」って思って。(……) (理由を) 聞いたんですけど、「別に、お前がどういう反応するか見たかっただけ」って。なんか余計におかしいなと思って。(……)

——(事前アンケートに)「友達が、自分のハンバーグはハラール肉だから食べてと言われ、信じて口の中に入れた瞬間、まあ違うけどねと言われ、とっさに出した」ってのもあるけど。これ、唐揚げと同じ人？

ラハット：同じ人です。なんかやり方が違うんですけど。(……) 嘘ついてまでっていうのは、みんなの前でだったんですけど。

——うわー、それは晒し者になっちゃうね。

ラハット：悪意が感じられますね、それ。

食の禁忌を知ったうえでの悪質ないたずらや、「豚をお前の口に突っ込んで、イスラームを壊してやる(ユースフ 男性 21 歳・15)」といった攻撃的なからかいがあることから、第二世代の疎外感の主要因は、イスラームについての理解が十分でないという問題ではなく、差異を受け入れられない日本の学校環境にあると考えることもできるだろう。

ところで、第二世代を悩ませるのは悪意ある攻撃だけではない。食の禁忌に関する善意の気遣いもまた、かれらにとって負担となることがある。

アニサ 女性 19 歳・63：友達と遊びに行った時や友達の家に行った時に(食の禁忌を)説明するのが面倒で、「やっぱいいよ」ってなっちゃう。クラス会やバイトの飲み会でも、私一人のために全員が気を遣うのがイヤ。本当はみんなとワイワイしたい、つらい。

ラニヤ 女性 23 歳・62：ムスリムであることを嫌だと思うのは、友達付き合いが面倒くさい。遊びに行ってもご飯食べに行こうってなるとこっちが申し訳ない。私のせいで行ける店が限られてきちゃうから。

高等学校・大学時代には、学校帰りや文化祭の打ち上げといったイベントで友達と外食する場面が増える。周縁化の経験を重ねてきた第二世代にとって、食の禁忌を理解してくれる友達は大切な存在であるからこそ気を遣わせたくない。「1 人だけ食べられないと迷惑かかっちゃうから(アズマ 男性 14 歳・27)」と、友達と一緒に外食したい気持ちを抑えて、「友

達に誘われても、その 8 割は親に言わないで断る (ナジュマ 女性 24 歳・67)」という者は多く、「部活の打ち上げは年に 2 回あるけどほかの子に紛れて休んでる (ヤシーン 男性 17 歳・7)」というように、かれらなりに角を立てない工夫をしている様子もみられる。だがその一方で、「気を遣われるのが申し訳なくて、それが嫌で、『いいよ行こうぜ』ってみんなに合わせる (アリフ 男性 25 歳・32)」者は、禁忌を破るという選択をすることになる。

「葛藤」とは、「複数の相互排他の要求が同じ強度をもって同時に存在し、どの要求に応じた行動をとるかの選択ができずにいる状態 (赤井 1999: 285)」であることは前述したが、周囲に同調したいことと禁忌を破ってはいけないことの相互排他の要求に、第二世代の多くは苦しんでいる。調査協力者の一人が SNS で発信する、「中学の打ち上げで何も食べれない。友達には距離置かれるし一種の地獄だよ」(SUOMIAKKI 2017) という嘆きもその一例である。だがそうした「地獄」で苦しむ者がいる一方で、周囲に同調しつつも禁忌を破らない工夫をする者もいる。例えば、名古屋のコミュニティでの参与観察において、学校行事の打ち上げで行った飲食店で、終始キムチと白飯だけ食べていたという者やソフトクリームだけを食べていたという者がいた。同様の工夫は、第二世代による SNS の動画配信のなかでも語られている。

A: ラーメン屋行ったときに、ずっと白米食べてた¹¹⁶。(……)

B: 俺、ラーメン屋誘われるとさ、まず普通に断るのね、なんも言わずに。今日無理だわ、みたいな感じで、断るんだけど。なるほど、行っても食えるもんあるんだね。

A: あるある、白米全然食べれるし。豚汁じゃなければ、みそ汁食べれるだろ。

B: なるほど、その手があったか。

A: その手がある。だから、行くだけ行ってコミュニケーション取るってのもあり。コミュニケーション取ってそこで食事をするってのも、俺大事だと思ってるから。(……)

「気を遣わせてごめんなさい」しか思ってなかった。でも、一緒にいる子たちには好きなもの食べてもらいたいから、「ラーメン屋行きたい、でもお前食べれないよね」「いいよご飯食べるから」。

(むすりむ Tube 2021)

第二世代の多くはモスクやイスラーム団体といったコミュニティを敬遠するため、第二世代同士の情報交換の機会ほとんどない。だが今後、コミュニティに参加しなくとも、SNS を通じてこうした工夫が広く共有されていくことで、かれらの葛藤は軽減されていくかもしれない。

¹¹⁶ ラーメンはスープに豚由来成分を使用していることが多いので、ムスリムにとっては禁忌の食品のひとつとされる。

(2) 服装規定により意識される差異

イスラームにおいて、女性はその美しさを覆い隠すことが求められる¹¹⁷。しかし、どこを隠すべきかの解釈はさまざまであり、第二世代の場合、その判断はたいてい親に委ねられる。一般的に、頭髪を隠すスカーフはムスリム女性の象徴として語られがちだが、質的調査を行った女性の調査協力者 42 人のうち、調査の時点でスカーフを着用していた女子は 11 人と、それほど多くない。その理由としては、『被り物しろ』って言われた時は、『嫌だ!』って抵抗した。これ以上異質なものになりたくなかった (アスマ 女性 27 歳・73)」というように、周囲との差異を嫌う子が親の要求を拒む場合が多い。だが、自分からスカーフを着用しようとする子に対して、「父に『やめて』って言われた。〇〇 (父の出身国) の親戚は誰も被っていないからって (アナム 女性 19 歳・51)」という家庭や、「早すぎる、もうちょっと待ったら? (ヤスミーナ 女性 15 歳・37)」と親が思い留ませようとする場合もある。一方、親の意向に従ってスカーフを着用した結果、それを見慣れていない級友や教員からの不遠慮な視線に傷つく第二世代もいる。

サーニア 女性 22 歳・59：周りの目を気にしすぎて、なかなか勇気が出なくて、ずるずる引っ張って (小学) 6 年生まで、2 年間ぐらい。本当は 4 年生の終わりに被らなきゃいけなかったけど、ずるずるずるずる。(母に)「中学までには被らなあかんよ」って言われて、6 年生の終わりで被っちゃったって感じで。でもやっぱり泣くんですよ、なんかもう周りの目も怖いし、どう見られるか。やっぱ友達も減りました。やっぱりそうやって被って、なんか減ったというか、「変な子」って離れていく感じがなかったわけではなくて。(……) なんかやっぱり、髪の毛出してる時とは違う注目があるから。多分きつと皆も見ただことないものだから。でなんか、言ってくる子とかもいた、からかってくるような感じの子とかね。「髪の毛生えてないだろ」とか「ハゲ」とかね。

シャジア 女性 20 歳・52：小学校にスカーフを被って行ったことがあって、そのとき先生が「どうした?」って聞いてきて。もうそれ以降、被りたくない。

幼い頃から差異による周縁化を繰り返し経験している第二世代は、実は級友からの心無い言動にある種のあきらめを感じているところがある。上記引用のサーニアの語りに「やっぱり」という副詞が頻用されているのは、スカーフ着用によって級友と距離ができることをある程度を予想していたということだろう。だがそうした心無い言動を正してくれるはずの、少なくとも第二世代はそれを期待している教員からの視線までも級友と変わらないと知ったとき、かれらは大きく傷つく。本章 2 節の量的調査の自由記述欄にも、スカーフを着

¹¹⁷ クルアーンには、「外に表われるものの外は、かの女らの美 (や飾り) を目立たせてはならない (第 24 章 31 節)」とある。

用して行った小学校で「一番最初に担任に『なにそれ笑』と笑われた（女性 24 歳・188）」という記述があるが、その後には、「クラスメイトに何か言われる覚悟はしていたけど、担任に言われる覚悟をしていなかったのも、あまりのショックすぐスカーフをとった」という一文が続く。この回答者が 10 年以上も経っても「外でスカーフをしてるとき、笑い声が聞こえたら自分が笑われていると感じ」、上記引用のシャジアが現在も頑なにスカーフ着用を拒否しているのは、その傷が成長しても癒えないことを示している。また高校 2 年生のとき、過激派組織による事件と関連付けて「先生に「大丈夫？」って聞かれて、ショックを受け」たアニサ（女性 19 歳・63）」も、中学生の頃から着用していたスカーフをこの日以降外しており、調査の時点でも「いつかまた被りたいとは思うけど」と言いながら、その勇気が出ないことに悩む様子がうかがえた。級友同士のからかい以上に、教員の何気ないひと言の影響力は大きい。

スカーフ着用によってそれほどこだわらない親がいる一方で、脚が露わになることについては、ほとんどの親が強い拒否感を示している。女子の多くは、「6 歳でスカート履くのは禁止（サリー 女性 39 歳・75）」、「スカートとかは履けへん（……）『下は隠せ』って（サリマ 女性 21 歳・57）」というルールのもと、私服ではズボンを着用するのが一般的である。だが中学校や高等学校の女子の制服においてスカートが主流であるなか、ズボンの制服を勧める親もあり、差異を目立たせたくない思いと親の要求との狭間で葛藤を抱える第二世代もいる。

アイニー 女性 21 歳・55：姉は制服を、みんなスカートなのにズボンで行ってたんですよ。（……）制服に女の子がズボン履くなんてその頃はなかったのに、特注で作ってもらって。（……）父は「（スカートを履くくらいなら）中学になんて行かなくていい、もう〇〇（父の出身国）に行きなさい」みたいなことを言ったらしくて。（……）でも姉、それがもうトラウマで。

サーニア 女性 22 歳・59：（母にズボンの制服を勧められて）さすがに、ちょっとズボンはって思って、「スカートで」って言って。（母は）「じゃあ長くしてね」みたいな感じになって。長いのも長いで、ちょっとダサいじゃないですか。だから靴下を上げれるところまで上げて。極力そういう。みんなと差がないように工夫して。

女子の制服にズボン着用を認める学校が一部にあり（店田・岡井 2010: 117; 佐藤 2015: 106-7）、親世代がこれを歓迎するのに対して、第二世代はこの対応を決して喜んではない。そこでかれらは親を納得させるために、「一番長いスカートを注文して、長い靴下で足を隠し（アスマ 女性 27 歳・73）」たり、スカートの下にジャージを履いたりといった工夫で折り合いをつけようとする。だが一人、「アバーヤ（全身を覆う上着）の上に制服のブレザーを着て行ってきました（シャヒラ 女性 20 歳・60）」というシャヒラは、差異に頓着せず

宗教的価値観を優先する事例として珍しい。

シャヒラの場合、学校現場での理解があったことを付言しておく。小学 5 年生時に初めてスカーフを着用する際には、「**先生がクラスみんなに説明してくれたんで、誰にも変なことを言われなかった**」ほか、「**中学入学の前、『こういう子が入ります』って小学校の先生が説明に行ってくれた**」などさまざまな場面で教員の配慮があり、差異があっても受け入れられる経験の積み重ねが、シャヒラの自己肯定感を育んだと考えられる。だが前出のシャジアやアニサの事例にみられるように、こうした頼りになる教員が学校現場に常にいるわけではない。例えば、水着を着用できないため水泳の授業を見学するという事例は珍しくないが、そのなかに、「**たまに校庭走って来いとかって、私だけマラソンさせられた（アスマ 女性 27 歳）**」という語りがあり、級友らがプールに入っているのを横目に夏の炎天下、校庭を走らされる生徒の気持ちを想像できない教員がいることを示している。

服装規定が特に女子に差異を強く意識させている点で、学校生活における周縁化の経験は女子の方がより深刻といえよう。なお女子にはさらに、男子以上に厳しい行動制限がさらに課せられることがある。

(3) 行動制限により意識される差異

前章 4 節で述べたように、出身国や地域の文化を宗教的義務と混同した行動制限が、イスラームの名のもとに課される家庭が一部にある。そうした家庭に育つ第二世代の経験を扱うことで、ムスリム家庭全般に共通する考え方であるとの誤解を招くことは本意ではないが、数が少ないからといってこれらを見做することは、第二世代の生きられたイスラームの経験を拾い上げるという本研究の趣旨に沿うものではない。本項では一部の特殊な事例もいくつか取り上げるが、それらをもって一般化するつもりはないことを、あらかじめ断ったうえで論を進める。

調査のなかでよく聞かれた行動制限としては、「**中高大ずっとお泊りダメ、恋愛ダメ、帰宅が遅いと怒られる（シャジア 女性 20 歳・52）**」という語りに代表されるような、厳しい門限と外泊の禁止そして異性とのかかわりの制限がある。外泊や異性とのかかわりの制限についての語りは男女ともに聞かれたが、厳しい門限についての語りは女子に集中し、その延長上に部活動や修学旅行への参加が許されないなどの語りもあった。いずれも親の出身国や地域では当たり前のことであるのかもしれないが、日本で学校生活を送る第二世代にとっては級友の誰のものとも異なる制限であり、その理由が十分に示されないまま従うのは容易でない。

女子の門限については、「**『マグリブ（日没）¹¹⁸までに帰るように』って言われてる（マライカ 女性 16 歳・38）**」、「**小学生の時は、季節によるけど 4 時とか 5 時、マグリブの（アニ**

¹¹⁸ 季節によってまた地域によって異なるが、例えば関東圏でいうなら、冬は 16 時半頃、夏は 19 時頃。1 日 5 回の礼拝のうち、マグリブ礼拝はこの時間帯に行われる。

サ 女性 23 歳・63)」というように、マグリブの時間帯をひとつの基準とする家庭は多く、それは「暗くなるまでに帰らないといけなくて (アスマ 女性 27 歳・73)」という語りにもうかがえる。親世代への聞き取りにおいて、夫の出身国に家族で移住した日本人女性が現地での習慣について、「女性が一人でマグリブ後に出歩くことはあり得ない (母 E)」と語っており、そうした一部の地域の常識がイスラーム的なものとして日本に暮らす子にも適用されているのだと考えられる。そのため、少しでも門限に遅れば、「学校に電話がかかってきちゃう (アスマ 女性 27 歳・73)」、「校内放送かけられて (アイニー 女性 21 歳・55)」といったことも珍しくない。なかには、特別に放課後 30 分間残ることを許可されてバレーボール部に入部したものの、「ストレッチして、始まる前に終わってしまうっていう。(……) 結局、もう無理じゃない？ ってなって、退部して (サーニア 女性 22 歳・59)」という語りもあり、部活動への参加をあきらめた者もいた。また少数ながら、そもそも門限どころか登校以外の外出を厳しく制限されていたという語りもあるが、これもまた親の出身国や地域の文化によるものだろう。

アスマ 女性 27 歳・73：「女子は遊びに行くものじゃない」って言われて育ちました。一回高校のとき、どうしても幼馴染みと会いたくて。そのときは、親が相手とコンタクトを取って確認してからじゃないと、遊ぶことも許してもらえませんでした。

サーニア 女性 22 歳・59：高校生の時とか、私一回も友達と遊んだことなくて。(……) 大学の時も、てか今もダメなんですけど。仕事帰りでどっかに寄るっていう風になると、なんか一回連絡して許可を得ないといけなくて。

外泊の禁止は男子にも課されることがあるが、修学旅行への参加が認められなかったという語りは女子からのみ聞かれた。両親ともに外国人の家庭では当然のことと受け止められるが、母親が日本人の家庭ではこれを不憫に思って車で同行するという事例がわずかにみられた。だがそれも、学齢が上がるにつれ旅行先が遠方になるため、負担は大きい。

アイニー 女性 21 歳・55：姉の時は、修学旅行も行かせないで。母がついて行くって、一緒に行ったんですよ私も。(……) だから私たちが後ろからスタスタついてって、姉が民泊に泊まる時だけ、私たちがドライブしてピックアップして泊まらせないようにして。で、また朝送りに行くんです。

シリーン 女性 21 歳・58：修学旅行ひとつにしても、行っちゃダメっていうのがあったので。小学生は行ったんですけど、母がついて来るんですよ。だから尾行じゃないですけど、近くにいて。で、ホテルは一緒に。(……) 中学校になったら次、〇〇(国内の地名) っていう風になって、距離が延びるってなったらもう、「もうついて行けん」

って言われて。(……)

——なんでダメなんだろう。

シリーン：(父に)「一人ではダメだから」って言われて、確か。「〇〇(父の出身国)の女の子たちはみんな一人で動かないよ」とか言われて、それでピタッと終わる、みたいな。

上記引用のような事例がある一方で、前項で言及したシャヒラは、教員の配慮によって修学旅行に参加することができた。

シャヒラ 女性 20 歳・60：(父に) 修学旅行、行っちゃいけないって言われて。まあ仕方ないな、イスラームだから、って思ってたら、(小学校の) 先生がその気持ちに気づいてくれたのか、家まで来てくれたんです。何が問題なのか、父に聞いてくれて。父は、男女一緒だからとか、食事や大浴場のこととか言って。先生はそれにひとつずつ対応してくれました。バスの座席表とか見せて、周りは全部女子でとか、旅館の部屋割はこうなって、女の先生が一緒でとか。

——それで行けたんだ。

シャヒラ：はい、すごくいい先生。

シャヒラの語りに登場する教員は、学校生活のさまざまな場面でマイノリティ生徒の心情に添う対応をしている。そのせいか、シャヒラはその後の量的調査協力の際にも、「学校で不快な経験をしたことがありますか」という問いに対して「ない」と回答しており、自由記述欄には「学校行きたくないと思ったことは一度もありませんでした」と記している。教員の影響力については次節で詳述するが、級友と同じ行動ができないことに悩む第二世代にとって、差異があっても受け入れられるという経験の積み重ねを後押しする教員の存在は貴重であり、かれらのその後の生き方をも変える。

ところで、厳しい行動制限に従う際、イスラームの知識を身につけて育った者とそうでない者とはその受け止め方がまったく異なる。親からの指示がたとえ言葉足らずであっても、その背景にある理由を知識で補って納得して行動するなら、それほど不満が生じることはない。だが十分な知識の継承が行われない家庭に育つ者は、「**なんで父の満足のために、私たちは我慢しないといけないんだろ** (シリーン 女性 21 歳・58)」という思いを抱きながら、その指示に従う。納得できないまま、級友に許されていることを禁止され級友がしていないことを強要され続けることは、かれらに大きな葛藤を抱かせる。例えば、異性との交際については、女性保護を徹底するイスラームの価値観を知っている者は、自らの意志で異性との間に距離を保とうと考えるが、そうでない場合は、「**彼氏作ったら父に追い出されちゃう** (メレク 女性 16 歳・40)」や「**父に男の子と遊んでるの見られたら、もう終わりです** (アイニー 女性 21 歳・55)」というように、親の叱責を恐れて異性との交際を避ける。だが恐

れるのは親であるから、それはつまり親に知られなければいいと考える者がいても不思議はない。

アナム 女性 19 歳・51：ボーイフレンドがいることは、父には秘密にしていたんだけど、高 1 の時、スケジュール帳を見られちゃって、バレちゃって。父が爆発しちゃって。

マイサ 女性 24 歳・71：バレたときは意外と淡々として、(いつものように) ワーッとかわなくて、父も。「お前やってるだろ」みたいな、なんか結構トーンが低い感じで言われて。恐ろしすぎて、ひーってなって。(……) なんかちょうど名誉殺人の事件とか見てたので。ヤバイ、殺されるかもって思って。

一方、周囲への同調を図ろうと努力する年代の第二世代にとっては、級友らの恋愛話の輪に入れないことも意外と大きな問題と捉えられがちである。

ヌール 女性 34 歳・74：周りの同級生の子がお付き合いをしたりすることが増え、自分はそれがタブーなので、会話をすると溝をいつも感じて、なぜうちはダメなんだろうと悩んでいました。親はただダメと言うだけで、大した説明をしてくれず、ただイスラームではダメだから！としか言われなかったので、納得いかない部分もあり、好きな人ができても気持ちを打ち明けることができず、苦しい思いもしました。

母 B：(息子は) 女ダメ、婚前交渉ダメって言いつけと、周りがみんな恋愛の話をしているギャップに苦しんで。自由に恋愛したいって思いながら、でも父には言えない。(……) 高校生くらいからイスラーム嫌いになってたけど、それを父に言えない、父の落ち込みがひどいことを知っているから。

ヌールはこの当時、交際を制限する親に対して『『イスラームは私とは全く関係ない、私はムスリムなんかじゃない』と言ってしまった』という。母 B の子は、大学進学を機に家を出て以来、現在に至るまで一切イスラームと関わりのない生活をしている。かれらの経験にみられるように、納得できる説明なしに行動制限のみが課される場合、イスラームは同化を阻害するものとして理解され、〈ムスリムであること〉を否定する要因となる。

女子を育てる親世代のなかには、異性との交際云々以前に、我が子が男子の近くにいること自体を忌むべきと考える者がいる。先行研究には、保育園に通う幼児について、「男の子と女の子を隔てなく同じプールに入れたり、裸で日光浴をさせたり、お昼寝をさせることに強い抵抗を感じている」(桜井 2003: 178) 外国人親の事例が挙げられている。調査のなかでも、幼稚園の頃の出来事として、イスラームの勉強会に行く車に同乗していた男子と「仲

良く喋ってた時、『お父さんすごい目で見てたんだよ』みたいな、『もう離れろみたいな目で』（と母に言われた）（サーニア 女性 22 歳・59）」という語りがあり、外国人親の心配は子がまだ学齢に達する前から始まっていることがわかる。そうした親は、子が小学生になるとさらに不安を募らせ、我が子の教室での座席が男子の隣にならないよう担任教員に要望するなどの策を講じるが、それでも男女共学の教室内で会話を制限することまでできるはずもない。

シリーン 女性 21 歳・58：（小学校で）参観日のときに父が来て、男の子がちょうどそのタイミングに私に喋りかけてきて。（父が）見てる！みたいな感じになって。その子は悪気なく、たいした話じゃない話をしてきて。（……）アッラーに対して、私喋っちゃダメなんだとかより、父に見られたらヤバいんだみたいな、そっちになるみたいな。なんかね、ずっと（父に対して）恐怖心があるというか。

メレク 女性 16 歳・40：夜ごはん食べる時、毎晩父に「今日は男子と話してない？」って聞かれて。話すんですけど。でも本当のこと言ったらショック受けちゃうから。その度に嘘をつくのがつらい。

幼い頃から異性とのかかわりに対する父の反応を繰り返し見てきたかれらは、「やっぱり見られたらそうやって文句言われるんだって思って。やばいなって学習してって（サーニア 女性 22 歳・59）」、その結果、嘘をついてまで隠さなければいけないと考えるのも無理はない。家族以外の異性と接触する機会があまりない地域出身の親にとって、男女が一緒に過ごすことが当たり前の日本の学校生活は、さぞや非常識なものに映るのだろう。しかしかれらの出身国や地域とは異なり、男女の完全隔離が現実的でない日本での親の過干渉は第二世代を苦しめる。上記引用のメレクは中高一貫の共学校に通っていたが、高等学校進学の際に外部受験をして県外の女子校に転校している。転校した理由には複合的なものがあるにせよ、「中2の頃は家を出たいと思っていた」や「死にたいと思ったとき」についての語りがあることから、メレクにとって毎晩父に嘘をつくことが相当な精神的負担であったと想像できる。

ほかにも、親世代がイスラームの教えに基づいた制限だと主張するもののなかには、歌を聞くこと歌うこと、さらにはテレビや漫画や映画を見ることの禁止など、日本で学校生活を送る上で周囲との差異を意識せざるを得ない行動制限がいくつもある。それらのなかには、他のムスリム家庭にみられない極端な義務や禁止が含まれており、必ずしも宗教的背景によるものではないことは明らかなが、「この世代のイスラームの女の子とかの関りもないし（シリーン 女性 21 歳・58）」、「私たちなんかより厳しい人はもっといるんだから、みたいな感じで（サーニア 女性 22 歳・59）」説得されれば、従うほかないだろう。しかもそうした制限は、たいてい理由や根拠も示されず強要されるため、すでにさまざまな場面で周囲と

の差異を意識し排除の経験を重ねてきた第二世代にとって、大きな葛藤の要因となりうる。家庭の価値観に従うことは学校での疎外感を深め、級友らに同調しようとすれば親子関係の悪化につながるという、まさに相互排他の要求が同じ強度をもって同時に存在している状態のなか、かれらはどちらの要求に応じた行動をとるかの選択ができずに懊悩する。だからこそ学校現場において、そうした葛藤を抱える第二世代に寄り添い、生徒の立場に立った配慮をする教員の果たす役割は大きい。

5 教員の無理解による疎外感

本章2節で、第二世代の学校での不快な経験の一因に「教員の無理解」もあることを述べた。もちろんすべての教員がそうであるはずはないが、一部に偏見をもちまた配慮に欠けた教員がいる現状は、量的調査においても質的調査においても確認できる。本節では第二世代の語りに加え、実際にムスリム生徒を受け入れた経験のある教員の語りも採り上げながら、学校現場における実態の検証を行う。

(1) 偏見をもった教員がもたらす影響

社会科知識のある教員にとって、過激派組織による事件が起きたとしても、それが圧倒的多数のムスリムと無関係であることは自明であり、そのためか、児童生徒がセンセーショナルなメディアの報道によって誤った印象を抱いていることに思い至らない場合がある。時事問題を扱う授業で、イスラームを自称する犯罪者集団とイスラーム全体の区別をすることなく事件が扱われることも多く、それが誤解や偏見の拡散にひと役買うことにさえなることに気づかない教員もいる。本章1節で示した記述式アンケート調査で、「学校のテストの時事問題でも『この事件を起こしたのは何教徒であるか』という出題のされ方であったこともあり、ISの人たちが起こしたというよりもイスラーム教がそうさせているというふうに考えてしまっていました（学校7の学生）」という回答があった。こうした教員による誘導が複数の学校で行われている可能性を想像するに、相当数の生徒がイスラームに否定的なイメージを抱いて社会に巣立っていくこともあながち否定はできないだろう。それが日本社会の偏見を醸成させていくきっかけになるとすれば、教員の影響力の大きさを改めて感じざるを得ない。

マライカ 女性 14歳・38：今テレビのニュースでこうこうっていうことを、社会の先生がやっぱり触れていて。そうするとみんな私を見て、なんでそうなっているのとか言われて。そんな、私に聞かれても、私関係無いから知らないし。(……)「俺達殺されちゃう」とか目の前で言われて。向こうは多分からかっているんですけど、やっぱり傷ついて。

エリヤス 男性 16歳・19：(友人の事例を挙げて、)先生が、テロがひどくなっていっ

ているという話を授業中にしたらしくて。そこで友達とかがみんなその子がムスリムってことを知っているから、お前もムスリムだよなみたいになって。そこからどんどん話が進んでいって、お前もあいつらと一緒にじゃねーのって言われて。それで授業が終わったんですけど、その友達がトイレに行行って戻ってきたら自分の机と椅子がなくて、廊下に出されていて。鞆も全部廊下とか教室から離れた所に置かれてて。(……) 爆弾とか危険なものを持っているかもしれないからって言われて。

メディアを通して生じた誤解や偏見は、学校教育の場で解消されることが望ましい。しかし、ムスリム生徒がいることに教員が無頓着な教室では、犯罪者集団の起こした事件の責を第二世代が一身に負うかたちになる。それでも、反論するための語彙力が未熟な年齢の第二世代は、「テストの答えに『イスラム国』って書かないといけなくて (ヤスミーナ 女性 15 歳・37)」も不本意ながら回答するしかない。また、級友らにムスリムであることを隠していたアサドは、教室で注目されないように、「**社会の授業でイスラームやるときは、僕を指名しないでほしいって先生に頼みに行った** (アサド 男性 19 歳・19)」ことがある。しかし英語のテストでは、ムハンマドと書かれたインク壺にペンを入れた途端に爆発する風刺画が出題され、「ムスリムとしてでなく、**あえて先生の喜びそうな答え**」を書いたところ、答案返却の際に教員から「この答えは本当か」と質されてしまい、級友らの前で返事に窮したという。なお、この学校ではほかにも、ペンを手にしたフランス人と銃を手にしたムスリムの上に「WHO HAS DAMAGED MUHAMMAD MORE?」と書かれた風刺画を教材として、英語で討論させる授業も行われたことがある (『読売新聞』 2015.1.14)。

学校現場でスティグマを負いがちな第二世代にとって、教員は頼りになるはずの存在である。だがそれが叶わない場合、教室に逃げ場はない。

アリフ 男性 25 歳・32：保育園で、僕をいじめるとその子が先生にほめられるの。

——なんで？

アリフ：知らない。顔が外国人だからじゃない？

ハルーン 男性 21 歳・28：中学の時は先生もいじめに加担してたな、なんか公開処刑みたいな。暴力的ないじめがひどくなってって、父が学校に怒鳴り込んだことありました。

上記引用の 2 人の記憶にある教員の行動が実際どうであったか不明だが、少なくとも学校現場で頼りにしていた大人が、からかいやいじめを受けるかれらに助けの手を差し伸べてくれる存在でなかったことは確かだろう。そしてそうした記憶は、成人した調査時でも消えていない。また、ある第二世代が小学校で不登校になった原因は、社会科の授業でイスラームが取り上げられた際に級友が発した「お前身体に爆弾巻いてるの?」という発言でも、教

室内に上がった嘲笑の声でもなく、それを「先生がスルーした」ことであったという。級友からの揶揄には慣れていても、それをあたかも肯定したかのような反応をした教員に、この第二世代は大きな失望感を抱いた。教員の側にそうした意図はなくとも、教室内で過剰に反応する生徒たちを正さない教員の態度に、生徒の揶揄に同意しているあるいは加担しているとさえ受け止める者はいる。

(2) 教員の配慮によって変わる学校生活

一方、こうした状況の改善に取り組む自治体もある。以下は2015年の日本人拘束事件の直後に、三重県津市の教育委員会が市内の幼稚園長・小学校長・中学校長・人権教育担当者宛てに注意喚起を行った「教職員の皆様へ」と題する書面からの引用である。

今回の人質事件で、日本に住むイスラム教徒への脅迫や嫌がらせが相次いでいます。市内の学校においても、イスラム教を信仰する児童や外国につながる児童に向けて、「イスラム国」の言葉を使ってからかったり、ふざけたりする事案が発生しています。人種差別や部落差別、障害者差別と同様に、宗教による差別的行為は、「からかい」や「ふざけ」として許されるものではありません。そうした言動を受けた子どももその家族も大きな苦しみと傷を負います。もし、学校・園において、そうした行為を見つけたときには、その場でその行為を中止していただくとともに、子どもたちに、そうした行為が差別的な行為であること、多くのイスラム教徒やそのご家族を苦しめたり不安にさせたりしていることを伝えてください。(津市教育委員会事務局 2015)

上記の注意喚起は、すぐに県教育委員会や近隣の市教育委員会に共有されており、その後もモスクのある校区では教職員らによるモスク訪問が行われるなど、教育現場における連携が図られている。だがそうした偏見を正す意義と効果の大きさが、国内すべての地域で認識されているわけではない。例えば名古屋市教育委員会では、名古屋モスクからの注意喚起要請に対して、「実際にいじめに合っている事例がなければ指導を行えない」という回答がなされ¹¹⁹、未然に被害を防止しようという姿勢は感じられない。イスラームに限らず、マイノリティへの配慮に地域差が見られるのが現状である。

ところで、本章1節で言及したイスラームのイメージについての自由記述式の調査において(表5-2)、いずれの学校でも「危険・過激・テロ」に関する回答は上位に挙がっていたが、学校5が学校3・4・6・7・8と明らかな違いがあった点に注目したい。他の5校では、「怖い・過激・テロ」に関連するキーワードが約30～60%の回答に書かれていたのに対し、学校5ではそうした回答は13.6%と比較的少ない。代わりに学校5で最も多い回答

¹¹⁹ 2015年2月27日から3月3日にかけて津市教育委員会職員と名古屋モスクとの間で交わされたメールより。

は「肌を隠す・髪を隠す」であった。これは、調査を行った 2020 年の時点で、学校 5 にスカーフを着用したムスリム生徒が 3 人在籍していたことに関係するのかもしれない。この学校は、調査時点までに 6 人のムスリム生徒受け入れの経験があり、過激派組織による日本人拘束事件があった直後にもムスリム生徒の入学を受け入れている。この生徒の担任教員は、「心配はもちろんありましたよ。イスラム国とかの問題がこんだけあって、どういう見方されるかなって（教員 A）」と、当初の懸念を語る。だがそれに続けて、「こっちの持っていき方次第かなってのは正直あったんで、そこはまあまあ自信はあったんで、いじめとかそういう偏見はさせない自信はあったんで」と、他の生徒らの偏見を正す覚悟についても語っている。それが奏功したのか、教員からも当該ムスリム生徒からも不愉快な出来事があったことは聞かれず、むしろ級友らに自然と溶け込み学校生活を楽しんでいた様子が語られた。

教員 A：学校の中にムスリムの子がいるっていうので、あー普通に生活してんだっていうのが見られていく。で、そいつが友達同士むっちゃ楽しくやってたりとか、いろんな学校行事でいろいろ活躍してたりするのを目の当たりにすると、「あーすげえな、ムスリムの人ってすごい一生懸命やるな」とかってなっていく。ほかのクラスの子を見て、「あ、普通じゃん」ってハードルが下がってるのは間違いないです。（……）事前にいろいろ想定して心配しとったことは、全部杞憂に終わりました。

教員 B：いろんな子がいるってことを受け入れることに対して、意図的にそういうのを担任とか授業担当者が意識して持ってかないと。（……）先生側が気づかせてあげないと、周りにそういうのを気づく状況がないと、たぶんなんかいろいろトラブったりはきっとあるだろうなって。ただ、そういうトラブルがあった時に、学校としてそういうのはダメだっていうのを、生徒指導だったりそういうレベルとかで、そういう体制はできてるので。（……）いろんなマイノリティに対して敏感であろうということは、常々言い続けているし、そこに私たちも気づいていきたいっていう思いがありますね。

上記引用の教員 B も教員 A と同じ学校に努める者である。この 2 人の語りから、この学校では、誰も排除しない教室経営によってマイノリティにとって居心地の良い場が確保されていると想像できる。そうした教員の配慮のもとで快適な学校生活を送るムスリム生徒の姿が、日常的に校内でみかけられることで、他の生徒たちのムスリムに対するイメージが形成され、それがメディアによる影響を上回ったものと推察できる。なお学校 5 は、ムスリム生徒や外国にルーツを持つ生徒だけでなく、性的マイノリティや介助犬を連れた足の不自由な生徒の受け入れ経験もあり、かれらが教室内で居心地の悪い思いをしないようにという配慮は、他の教員らの語りからも強く感じられた。それは例えば、「（マイノリティの）彼女たちをきっかけに多様性も広がっていくし（教員 C）」、「同じ空間に当たり前と一緒に

いることで異文化を理解していくっていうのがいいところじゃないかなと（教員 D）」というように、多くの生徒に差異は悪いことではないというメッセージとして伝わり、教室は多様性を理解し認め合う学びの場となっていく。

また、中部地方にあるムスリム集住地域の公立中学校には、2020 年の調査時点で 12 名、2024 年の調査時点で 10 名のムスリム生徒が在籍しており、ほかにもブラジルや中国、韓国など外国にルーツを持つ生徒も複数いる。地域の障がい者施設に院内学級を置き、また特別支援学校との交流も長く続けているという背景があり、2 回の質的調査に協力を得た 11 人の教員すべての語りにマイノリティを排除しない気遣いを感じられた。例えば、管理職の教員からは、「少数派の子たちが安心して学んだり過ごせたりっていうことを実現していかなくちゃいけない（教員 E）」という目標と、「（教室は）多様な価値観とか国際感覚に自然と接する場で（……）彼ら彼女らにとっても居心地のいい場所（教員 F）」であるべきだという信念が語られた。社会科の教員は時事問題を扱う際に、「ムスリムだけでなく日韓関係の問題ですとか、そういった系統の子もいるので、注意を払ってどちらかに偏ることがないようにというような意識を持って指導をしています（教員 G）」と語っていた。ときに特別な対応が求められることがある音楽や体育、家庭科の教員からも¹²⁰、苦労話のようなものは特段語られることはなく、「全く気にならなかったんですね、（……）ご家庭に合わせてます（教員 H）」というように、個々のムスリム生徒の違いがごく自然に受け入れられていることがうかがえた。また社会科と数学科の教員からは、校区内のモスクを何度も訪問して生徒やその親たちと一緒に礼拝をした経験や、ハラール食を食べたり調理したりといった逸話まで語られ、偏見を抱くどころか多様性を楽しんでいる様子まで垣間見ることができた。

上記 2 校の教員に共通するのは、ムスリム生徒に限らず外国にルーツを持つ生徒や性的マイノリティ、障がい者などさまざまなマイノリティを自然に受け入れようとする姿勢である。こうした教員のもとでは、教室内の生徒たちにも良い影響が広がっていくと推察できる。そうした教室では、ムスリム生徒もまた偏見による排除に悩むことなく居心地良く過ごすことができるだろう。先行研究において、ヨーロッパでは、社会から向けられる憎悪に幻滅と怒りを抱いた一部の移民第二世代が人の弱みに付け込む言説に感化され（Zuber 2023: 53）、非行や暴力につながる実態が指摘されていた。こうしたホスト国民による憎悪は、顔の见えない想像上のムスリムという移民集団に対して向けられたものであったことを考えれば、学校生活を快適に過ごすムスリム生徒一人ひとりの姿が、社会のまなざしを変えてい

¹²⁰ 家庭によっては、歌を歌うことや楽器を弾くことを禁じたり、女子の体操着や水着に懸念を示したり、また家庭科で調理実習の際に厳しいハラールの基準を要求したりする場合がある。ただし第 1 章に述べた通り、神と人間の関係は垂直的關係であり、ムスリムの信仰と実践は多様であるから、すべてのムスリム生徒がこうした問題を抱えているわけではない。

く可能性もあるだろう。ヨーロッパのような暴力の連鎖が日本で起きることのないよう、イスラームを自称する一部の犯罪者集団をイスラーム全体と区別するような教員の存在が、学校教育の場に求められる。

ところで、教員によるイスラームへの偏見は、別の形でも表れることがある。初めてムスリム生徒を受け入れる学校では、書籍等で得た知識に頼りすぎる教員が、掃除用洗剤に動物由来の成分が含まれることを懸念したり、学校での礼拝を希望しない生徒に礼拝用の部屋を提供したりと、ステレオタイプの対応をすることがある。だが、「(入学予定校の担任教員が) なんかたくさん勉強してくれたらしくて。礼拝や断食やスカーフのことまで心配してくれたけど、『普通でいいです』って答えた。そういう特別な扱いとか嫌だから (アリーシャ 女性 16 歳・42)」という語りのように、こうした「善意の偏見」(大橋 2021: 180) は周囲との差異を嫌う第二世代を困惑させる。特に、自身のルーツの表出に消極的な第二世代は、教員の特別な対応によってムスリムであることが級友らに知られてしまうことを恐れる。書籍等で得られる情報は、19 億人のムスリム一人ひとりの個性を捨象したものでしかなく、そうした顔の見えない集団としてのムスリムについての情報は、かえってイスラームそのものが許容する多様性を気付きにくくしてしまうことを、教員は知っておく必要がある。例えば、前述の学校 5 がこれまでに受け入れた女子生徒 6 人のうち、スカーフ着用は 4 人、学校の提供する礼拝スペース利用者は 1 人であり、中部地方のムスリム集住地域の公立中学校学校でも、校内での礼拝や断食への取り組み方、服装規定、特定の授業への参加の制限などは、家庭の方針によってさまざまであるという。まさにこの両校の教員が「ムスリムって一緒にたにしたら、逆に学校の中で偏見を植え付けることになる (教員 C)」、「同じムスリムと言っても家庭ごとにやっぱり違うもんだから、そこの認識をしておく必要は当然ある (教員 F)」と語る通り、求められるのは個々の生徒を理解することであり、それはムスリムでない日本人生徒に対応するのと同じく一人ひとりの個性を尊重する教育のあり方と何ら変わりはない。

教員 C: (事前の) 勉強は必要やと思うんです、徹底的に (本を) 読めばいいと思います。でもそれがすべてじゃないので、読んでないつもりでその子とは話します。その子が言ってることを理解するためには、もしかしたら読んだ何かがヒントになったりはするんで。

教員 I: 本はいくつか読んだんですけど、無理に読まなくてもいいのかなと思うんですね。結局その家族が何を望んでるか、子どもが何を望んでるかっていうところに注意していくっていうのが一番かと。

事前に書籍で情報を得ることも、親の要求を受け入れることも、どちらもムスリム児童生徒のためを思う教員の配慮といえるかもしれないが、結果的にかれらを苦しめることになる

なら、それは「善意の偏見」にほかならない。

これに関連して、「第1回教員×ムスリムミーティング」¹²¹に登壇した教員Jによる「誰に対する配慮か？何のための配慮か？」という問題提起も重要である。それは例えば、学校に対して礼拝用スペースの確保や男女の隔離、制服や体操着への融通を求める保護者の要求を受け入れることが、正しい配慮といえるかを問いかけるものである。宗教継承に熱心な親であれば、我が子が宗教実践に従うに十分な環境を学校に期待することは当然だろうが、そうした親の要求がムスリム児童生徒の思いと乖離している場合、教員はどちらに配慮すべきなのだろうか。往々にして親の要求を受け入れることがムスリム対応の好例とされがちだが、それは周囲との差異をこれ以上目立たせたくない生徒の心情をないがしろにすることがあると、教員Jは指摘する。本研究の調査協力者のなかにも、親の交渉通りに授業中に礼拝の時間を知らせてくる教員に、「自分で『やらなくていいんです』って説明した（アリフ 男性 25 歳・32）」者や、親の要求を受けて学校が用意した礼拝室を利用しないという無言の抵抗をする者はいるが、実際には、「反発しても意味ないからな（シリーン 女性 21 歳・58）」とあきらめる第二世代の方がはるかに多いのではないか。それは、集団礼拝が行われる金曜日に早退する生徒や音楽や美術の授業に参加しない生徒、炎天下のプールサイドで水泳の授業見学し続ける生徒、修学旅行に参加しない生徒、教室で異性と並ばないよう隔離された授業を受ける生徒、学校でたった一人ズボンの制服を着用する女子生徒についての語りが非常に多いからである。その点では、前出のシャヒラの語りに登場する教員の事例は、生徒の疎外感に気づき状況を好転させた事例として、ムスリム生徒対応の良い指針となるだろう。

教員C：（必要なのは）まずその子とちゃんと話することだと思います。その子その子でも違うし。それはムスリムの子だけじゃなくて全員違うので。あとは、ムスリムに対してっていう問題として捉えるよりかは、あらゆる多様性に対して自分たちの学校がどう対応していくのかっていうことをもう一度見返す感じが必要なのかなって思います。ムスリムだけのノウハウなんてないと思うので。

こうした個人に向き合いその声に耳を傾ける教員が増えるならば、第二世代は周縁化に悩むことなく学校生活を送ることができるだろうし、それはまたさまざまなマイノリティの児童生徒たちを排除の経験から救うことにもつながるだろう。いうまでもなく、教員は児童生徒がどのような学校生活を送るかを左右する重要な役割を担っている。一人でも多くの教員がステレオタイプや偏見から自由になって個々の生徒に向き合い、マイノリティの

¹²¹ 一般社団法人清真の木主催で2025年1月12日に開催された学校関係者とムスリムとの交流会議。テーマは「当事者の語りから考える課題と向き合い方」。現役の高等学校教員3人と第二世代2人が登壇した。

児童生徒たちを排除の経験から救うための配慮が求められているといえるだろう。

6 小括

本章では、「学校生活における第二世代の生きられた経験はどのようなものか」について考察するため、学校現場でのイスラーム理解と、第二世代が学校生活において疎外感を覚える場面について考察した。

学校教育においてイスラームを扱う科目は社会科であるが、イスラームの説明に十分な時間を費やすことは難しく、生徒・学生らは主にメディアを通してイスラームのイメージを形成する。しかし、過激派組織につけられた「イスラム国」の呼称と、それに関するセンセーショナルな報道によって生じた否定的なイメージは、事件とは無関係の圧倒的多数のムスリムに対して強い恐怖感や嫌悪感を抱かせ、スティグマとして第二世代を苦しめる。ヨーロッパで顔の見えない想像上のムスリムという移民集団に対して憎悪が向けられ、それによって排除を経験し幻滅と怒りを抱いた一部の第二世代が非行や暴力に走るといった現実をみるに、日本の学校教育の場で一部の犯罪者集団をイスラーム全体と区別するような授業が行われる必要があるだろう。

第二世代への量的調査の自由記述欄に書かれた経験から学校での不快な経験を検討するに、外見に関する揶揄や「国に帰れ」「テロリスト」などの誹謗中傷は、「ありきたり」で「当たり前」のものと捉えられていることがわかった。そうした外国ルーツそして宗教的背景による級友からの排除以外に、第二世代は教員の基本的な知識不足と配慮のなさによっても、学校での居心地の悪さを感じている様子がうかがえた。ここから垣間見える学校生活の実態を、より具体的かつ詳細に把握するために、質的調査によって得られた第二世代の学校での生きられた経験を検証した。

はじめに取り上げたのは、外国にルーツを持つことによる排除の経験である。第二世代は、「外国人だからといっていじめられて」、自身を周囲と異なる存在として意識するようになる。陰口や無視は男女にかかわらず聞かれたが、男子からは身体的な攻撃を受けた経験も語られた。そうした不快な経験の原因を外見的差異によるものであると考える者は、「日本人の顔になりたい」と望み、またせめて内面的な同調を図ることで周縁化を回避しようとする。しかし、メディアの影響によってムスリムに「攻撃的」「過激」「怖い」といったスティグマが貼られることで、量的調査で挙げられていたような「国に帰れ」や「テロリスト」といった誹謗中傷は、質的調査においても多くの第二世代にとって日常的なものになっている現状が明らかとなった。そうした偏見による排除の経験を避けるため、自身がムスリムであることを隠し、またムスリムであることを連想されないよう出自を偽る第二世代もいる。自身のルーツを否定し、ときに「ムスリムってイメージされないように、わざとハラームをやったり」することは、かれらのアイデンティティを不確実にし、青年期の〈自分とは何者か〉という問いに答えを見出すことを困難にする。

外見的差異やスティグマによる排除の経験を重ねてきた第二世代のなかには、「日本人に

なりたいという気持ち」を強く抱く者も多いが、宗教的背景による差異は周囲からの注目を浴びやすく、同化願望は決定的に阻害される。例えば、食の禁忌から給食の代わりに弁当を持参する第二世代は多く、かれらは教室で一人だけ級友らと異なるものを食べることに、「周りと違うことで萎縮しちゃう」と感じ、禁忌を理解しない級友からのからかいに傷つく。なかには、禁忌を知った上での悪質ないたづらを受けることもあり、第二世代の疎外感の主要因は、イスラームについての理解が十分でないという問題ではなく、差異を受け入れられない日本の学校環境にあると考えることもできる。また女子の場合、頭髮や肌を覆うスカーフの着用以上に脚が露わになることを嫌がる親が多く、学校の制服を工夫するほか、体育の授業における体操着や水着への制限もあって、男子よりも差異を強く意識しやすい。さらに一部の家庭で、出身国や地域の文化を宗教的義務と混同した行動制限が課されることがあり、歌を聞くこと歌うこと、テレビや漫画や映画を見ることが禁止されるほか、特に女子は、厳しい門限、修学旅行の参加禁止、恋愛どころか異性と口をきくことすら禁じられる場合もある。こうした日本で学校生活を送る上で周囲との差異を意識せざるを得ない行動制限が、ほとんどの過程では理由や根拠も示されず強要されるため、すでにさまざまな場面で周囲との差異を意識し、排除の経験を重ねてきた第二世代にとって、納得できないままに従わなければならないのは大きな負担である。

このように、第二世代はさまざまな点において周囲との差異を意識し、なかなか叶えられない同化願望を抱きながら学校生活を送っている。それらの差異やスティグマは簡単に排除の要因となり、「小学校6年間と中学校3年間と高校3年間、全部いじめられてた」という者は珍しくない。そうしたなかで、学校現場で最も頼りになるはずの教員もまた、イスラームへの偏見に捉われている場合がある。例えば、イスラームを自称する過激派集団とイスラーム全体の区別なく事件を扱う授業によってさらに誤解が広がった事例や、教室内のムスリム生徒に無頓着な授業やテストが行われる事例もある。教員から助けの手が差し伸べられることを期待しているからこそ、それが叶わない場合、第二世代の失望は大きく、それをきっかけに不登校になる者もいる。だがその一方で、学校現場でムスリム生徒への差別的言動が起こらないよう注意喚起をする自治体や、ムスリム生徒が教室内で居心地の悪い思いをしないようにという配慮をする学校もある。そうした学校の教員からは、個々のムスリム生徒の違いをごく自然に受け入れている様子とマイノリティが排除されない気遣いが感じられた。書籍で得た知識やステレオタイプに捉われた「善意の偏見」で過剰な対応をするのではなく、個々の生徒に向き合いその声に耳を傾ける教員がいることで、第二世代は周縁化に悩むことなく学校生活を快適に過ごすことができる。それはムスリム生徒に限らず、さまざまなマイノリティの児童生徒たちを排除の経験から救うことにもつながるだろう。

第6章 〈ムスリムであること〉にどう向き合うか

1 第二世代の生きられたイスラーム

前章まで、家庭環境においてまた学校生活において、第二世代がどのような問題を抱えているのかを、第二世代の当事者の語りを取り上げつつ考察してきた。そこでは、さまざまな生きられたイスラームの経験を拾い上げることを優先したため、個々の語り手の背景についての詳細な説明を付すことはしなかった。しかし、そうした語りの断片のみで、その語り手が表明した〈ムスリムであること〉への向き合い方やそこに至った要因を論じるべきではないだろう。かれらが表明した〈ムスリムであること〉への肯定的なあるいは否定的な感情は、幼少期から調査時に至るまでの過程でいくつもの戸惑いや疑問、さまざまな経験を重ねた末の懊悩の発露であり、それらの背景にも注目して読み解くことも、第二世代のおかれた現状を知るために必要な作業であると考ええる。本節では、事例の数をあえて絞ることで、かれらの生きられたイスラームの経験を詳細に観察していきたい。前章までと同様、それらの語りの発言者はすべて仮名で表し、長期間にわたって調査を行った場合は、各項のはじめに初回調査時と最終調査時の年齢を記し、番号は第3章の表3-1に対応するものである。なお、この5人の事例を抽出した理由として、アスマ、アリフ、マイサは比較的長期間の調査により葛藤が生じる過程やこれを克服する過程の追跡が可能であったため、ディーン、ダリヤは家庭での継承の不足を環境によって補ったという興味深い事例であったためであり、これらによって第二世代の経験を一般化するものでないことをはじめに断わっておく。また、引用の一部に省略や伏せ字、表現の統一を行うことも前章までと同じである¹²²。

(1) アスマ（女性 初回調査時 27 歳、最終調査時 32 歳・73）

4人きょうだいの長女。両親ともに外国人だが、3歳で来日して以来日本語で教育を受けてきたアスマにとっての第一言語は日本語である。母国語で話す両親とは、日常会話レベルでは問題ないが、込み入った内容になると意思疎通は困難であり、学童期から青年期にかけて生じるさまざまな悩みを相談することができなかった。

小学校3年頃に始まったいじめのことも、両親は知らない。「シカトされて、陰口言われて、ばい菌扱いされて、落としたものを拾ってあげようとしたら『触らないで!』」と言われるような日々が6年生まで「ネチネチと」続いた。いじめの原因は、学校でたった一人の外国人であり外見的に目立っていたせいもあるだろうが、イスラームを理由とした行動面での違いも影響していたと思われる。女子は遊びに行くものではないという理由で登校以外の外出は禁じられ、放課後友人と遊ぶことは許されなかった。歌を聞くこと歌うこと、テレビや漫画や映画を見ること、肌を露出すること、男子と話すことなど、級友にとって当たり前の行為がすべて禁じられた。給食の代わりに毎日弁当を持参していたことは、「恥ずか

¹²² 前掲注 91 を参照。

しかった。周りと違うことで萎縮しちゃう」と感じていたし、水着は肌を露出するからと水泳の授業は毎回見学していたことを級友らは奇異に思っていただろう。「みんなと違うのが嫌だった」、そして「みんなと同じでいたかった」。しかし、すぐに激怒する父には怖くて逆らえない。その怒鳴り声はいつも近所中に響きわたっていたほどで、今でもアスマは大声を聞くと恐怖を感じる。「癩癩もちの父」は、冬の夜でも子どもたちを外に締め出して朝まで家に入れないような折檻を繰り返す。小学3年生の弟が全裸で外へ出されたことは忘れられない。だが一度だけ、どうしても父の言うことに反論したことがある。小学校高学年になって、スカーフをかぶるように言われたときは、『嫌だ!』って抵抗した。これ以上異質な物になりたくなかった」。

イスラームを熱心に信仰する両親は、良いことには「アッラーの思し召し」と言い、悪いことがあれば「アッラーが怒っている」と言うのが口癖である。父からの厳しい命令は母を介してああしろこうしろと伝えられる。だが、「どうしてもなぜではなく、ただあれはダメこれはダメのみ」で、その根拠にはいつもイスラームがあることが示された。しかし、イスラームの世界観すら学んだ記憶のないアスマにとって、その教えはただ自分を「束縛するもの」でしかない。中学生の頃にはすでにイスラームが嫌いになっていた。「わたしのアイデンティティを無視して全てを押し付けられるのが苦しかった」。それでも父の怒りを恐れ、両親の前ではおとなしい良い子を演じ続けた。

中学・高等学校の頃は、家にいることが苦痛で、学校にいる方が居心地良かった。帰りたくなって、放課後の教室で友達とお喋りをするのを楽しみにしていた。だが暗くなる前には帰らなければいけないから、少しでも帰宅が遅くなると学校に電話がかかってくる。当然、部活動に加入することも、アルバイトに行くことも許されない。「なんで周りのみんなと同じような生活ができないのか、当たり前が当たり前じゃないのはすべてこの血のせいだと恨みました」。

母はアスマの監視役だった。高校生の頃、どうしても幼馴染と遊びに行きたいと訴えたとき、母は電話で相手の確認をした。大学生になって、黙って友達と遊びに出かけたことが発覚したとき、アスマの携帯電話に登録された番号に上から一件一件電話をかけて誰と一緒にいたのか調べたのも母だった。なおこの出来事はかつてないほどに父を激怒させ、携帯電話を没収されたうえに外出も禁止、半年間大学に通うことが許されなかった。「精神的に抜け殻状態になった」アスマは、その後大学を中途退学する。

最初の調査時（27歳）はこの出来事から7年後のことだった。10歳下の妹は高校生になっており、高校時代のアスマには決して許されなかったアルバイトや、友達と花火を見に行く自由さえ手に入れている様子を、複雑な気持ちで眺めていた。アスマもこの頃には、アルバイトに出かけられるようにはなっていたが、バッグや財布の中身を検閲されレシートに記載された店や時間を確認されるなど、母による監視はまだ続いていた。それでも家の外では、隠れて禁忌を口にし麻雀を楽しみ男性と交際する自由がある。イスラームのことを「まったく知らない、知りたいとも思わない」と言うアスマにとって、禁忌を破ることには何の

罪悪感もない。だがインターネットで「棄教」を調べると、「名誉殺人¹²³」の記事が出てきて怖くなった。イスラームを受け容れられないことを知られて、父に「**幻滅される、失敗作だと思われる、捨てられる**」ことも怖かった。アスマの周囲には不満や戸惑いを共有できるような同世代のムスリムは誰もいない。自分に許されなかった自由を謳歌している妹とは、不公平感への恨めしさもありもう何年も良好な関係を築けずにいるため、家庭内で完全に孤立していた。「**アッラーがいるとも思えない**」にもかかわらず、親の前では相変わらずムスリムとしてふるまい続けるしかなかった。

その半年後、自分を偽ることに疲弊したアスマは家を出て一人暮らしを始める。母には、使い慣れない母国語を必死に並べて、ムスリムとして生きられないことを伝えた。だが父に本当の気持ちは言えない。どれほど激怒され罵られるか、想像すらできない。電話をかけるたびに母は泣いて、「ひとに何て思われるだろう、こんなこと誰にも言えない」と娘を恥じる言葉を繰り返していた。

最終調査時（32 歳）、アスマは日本人男性との結婚を控えて、同じ宗教でなければ結婚させないという父からの圧力に戸惑っていた。父は、日本語で書かれたイスラーム関連の書籍や日本人ムスリムによる SNS の動画配信を、アスマだけでなく相手男性にも勧めてくる。

「**私はもはや完全に宗教アレルギーで、父の話を聞くたび反吐が出ますし、気分が悪くなります**」と言いながらも、アスマはなんとか結婚を認めてもらいたくて、延々と続く父の自語り「**平和的解決のために**」黙って聞き続けるしかない。しかも父は、「**恋愛結婚することが恥なのか**」、非ムスリムが結婚相手であることを口止めしてくる。相手男性はかたちだけの入信とニカー（イスラーム式結婚の契約）を承諾してくれたが、父はそれを書面に残すことにこだわり、さらに月に何度かモスクに連れて行くことを条件に加えた。アスマは「**自分が苦しんできたものに大切な人を巻き込むのは心が痛みます**」と嘆き、父の干渉が将来の夫や子どもにまで及ぶ可能性を懸念する。この時点でもなお父は、アスマが〈ムスリムであること〉をすでに否定して生きていることを知らない。いっそすべて話してしまおうかとも思ったが、「**私が失敗作だとか思い通りに行かなかったこと**」で母が責められることを懸念して思いとどまった。

その半年後にアスマから届いた SNS には、ニカー以降、相手男性と父を会わせないよう盾になっているという近況報告に加え、「**結婚に関しての両親とのやりとりで一段と感じたのは、思想や宗教の押し付けというのは立派な DV であるということですね**」という一文が書かれていた。

¹²³ 棄教や自由恋愛によって家族の名誉を汚した者に対する親族による私刑が、ときにムスリムマジョリティの地域で見受けられることがあるため、「名誉殺人」がイスラームと関連付けて語られることが多い。しかし「名誉殺人」は、実際は部族の慣習法が国家法より優先される地域の因習であり、イスラームがこれを推奨しているわけではない。

(2) アリフ（男性 初回調査時 25 歳、最終調査時 30 歳・32）

外国人父と日本人母の間に生まれた 4 人きょうだいの長男。結婚を機に入信した母にイスラームの知識はなく、イスラーム継承は父の役割であった。父に言われて、小学校の帰りにはモスクに寄って、何時間もクルアーンの勉強をするのが日課だった。アラビア文字もすらすら読めるようになり、クルアーンの章節をいくつも暗記した。それを披露すると父に褒められるのが嬉しくて頑張った。だがアラビア語の意味はわからない。礼拝も断食も「**アッラーのためとかじゃなく父のため**」に行っていた。

保育園でも小学校でも、アリフはいじめを受けていた。保育園の教員は加害児の味方をし、小学校の教員は加害児童の家庭の事情を引き合いに出していじめを正当化した。その頃は肌の色が周囲と違うからいじめられるのだと考えて、テレビコマーシャルで見る美白クリームをよく母にねだっていた。小学 4 年生の時、アリフが時間通りに礼拝できるよう、父が学校に交渉して、時間になると、教員が「礼拝の時間だよ」と声をかけてくるようになった。ちょうどアメリカ同時多発テロ事件直後のことで、級友の目が気になった。授業中に自分一人だけ教室を出て、礼拝をすることが恥ずかしかった。「**何してんの俺？って思って**」、2 週間でやめた。教員にはもう声をかけなくていいと、自分で伝えた。もちろんそのことを、父は知らない。

中学生の頃までは、自身がムスリムであることは当たり前だと思っていた。だが父が伝えるイスラームは宗教実践に関わるのが中心で、神はそれに従わなければ罰を下す存在であると教えられ、神に対しては「**信仰心というより恐怖心しかなかった**」。幼い頃から小さな疑問がいくつも生じたが、それらに答えてくれる人は誰もいなかった。例えば、左利きのアリフが描く絵を母はいつも褒めてくれたが、父の親戚は左手で食事するアリフを不浄だと言って咎めた。「**自分の左手はすごいと思ってた、なのにそれを否定されたのが嫌だった**」。非ムスリムは地獄に行くと言われたが、母方の日本人の祖母がイスラームを知らないまま地獄に行くのかと思うと、「**そんなアンフェアなことあるの、そんなことするのが神さまなのって思って**」納得がいかなかった。父の経営する会社の業績が悪化した時、父は神が助けてくれると言ったが、何も変わらなかった。人の運命があらかじめ神によって定められているなら、「**頑張る意味くない？**」と思った。受験の成功を父が祈ってくれた時、その願いが叶うことはほかの誰かが不幸になることではないかと考えた。利益の相反する人の祈りに対して、「**神様はどっちの願い事を叶えるのだろうか**」と疑問が湧いた。青年期にかけてイスラームへの疑念はさらに膨らんでいくが、周囲に同年代のムスリムはおらず、それを共有する人はいない。家族は皆当たり前のようにイスラームを受け容れており、まるで「**洗脳されてる人たち**」のようにみえて、どうせ相談しても宗教観に則った答えしか得られないのはわかっている。誰にも相談できない疑問や違和感を一人で抱えて、それでも親の前ではムスリムとしての生活を続けなければならない。ムスリム家庭に生まれたことを恨めしく思った。

高校生になると、学校帰りに友達と飲食店に寄って時間を過ごす機会が増える。アリフの

家庭では、父の解釈にしたがって、豚肉だけでなくイスラーム式屠畜がなされていない牛肉や鶏肉も禁忌として避けることになっていた。だからファミリーレストランに誘われたときは、肉の入っていないメニューを選んで食べた。だがハンバーガーショップやラーメン店に誘われたときは、ハラールではないからと断って一人で先に帰った。そのうち店選びをする際には、「ちょっと待って、アリフいるじゃん」と友達が気遣ってくれるようになる。自分のせいでみんなが食べたいものを食べられないことに申し訳ないという思いが募っていき、高校2年生のある日、ラーメン屋に行こうとする友達に、「いいよ、行こうぜ」とついて行った。初めて禁忌を口にするときは緊張したが、それも何度か繰り返すうちに罪悪感は薄れていく。「みんなと同じ楽しいこととか嬉しいことを共有できないのが嫌」で、友達に合わせて食事をするようになった。礼拝や断食も、父が見ていないところではしなくなっていった。自分でもムスリムとして生きることにあきらめを感じていたが、それでも家庭ではムスリムらしくふるまい続けた。

大学進学を機に親元を離れてからは、もうムスリムのふりをする必要はない。大学内にムスリムの集まりがあると聞いたが、そうした集まりには一切近づかなかった。かれらの食事会に一度誘われたことがあったが、「拒否反応」を示した。それより、禁忌を気にしないで友達と過ごす学生生活のほうがずっと楽しく、「自分が教えられてきた当たり前が違うことを知った」。大学卒業後は実家から遠く離れた地方の会社に就職し、さらにイスラームから距離をとった。初回調査時（25歳）はこの頃で、「常にアッラーに監視されているという恐怖心がある」と語り、「どんどん道を踏み外す、いいのか悪いのかという葛藤の繰り返し」に悩む様子がうかがえた。また、結婚や子どものことを考えて将来への不安も抱いていた。親の望むようなムスリム女性と結婚することは考えられない、かといってムスリムでない女性と結婚することを両親は認めないだろう、子には自由に生きてほしい、自分と同じ苦しみを味わってほしくない、そう考えると「葛藤はまだまだ終わらない」。

その4年後の調査時には（29歳）、アリフに以前のような葛藤は見られなかった。〈ムスリムであること〉をはっきりと否定し、その原因について、「何かがあってボンってなったんじゃないくて、いろんなものが重なってとかだと思う」と語る。さらに、「この世には、ずっとムスリムでいることで絶対に知り得ない、味わうことのできない世界がある」として、イスラームにとらわれた人達の「視野が狭い」ことを指摘する。イスラームだけでなく、宗教すべてが生きる上で必要なものではないと、アリフは考える。かつて悩んでいた結婚にもアリフなりの決着をつけた。相手の日本人女性には、かたちだけの入信とニカーの手続きを承諾してもらい、父を満足させた。その後も父の前ではあえてイスラームを否定せず、イスラームを信仰する家族については、「自分とは違う人種・価値観の人達なんだなぁと距離を感じ」ているが、表面的には和やかな付き合いが続いている。

最終調査時点で（30歳）、アリフはまだ父に、ムスリムとして生きるのをやめたことを伝えていない。その理由を尋ねると、しばらく考えた後、「親から嫌われるのも怖いし、怒られるのも怖いし、悲しまれるのも怖いし、家族の中で自分だけ孤立するのも怖いし、自分が

間違ってることをしてるっていう風に認識するのも怖いし。全部怖いよ」という答えが返ってきた。

(3) マイサ（女性 初回調査時 21 歳、最終調査時 28 歳・71）

外国人父と日本人母の間に生まれた長女で、きょうだいはいない。幼いときに両親は離婚し、親権は父が獲得。おとぎ話や絵本の代わりに、クルアーンやハディースの話を毎日父に聞かされて育った。

自分が周囲のほかの子どもたちと違うことに気づいたのは幼稚園に入ってから。「ガイジン」と呼ばれ外見の違いを揶揄された。外見の差異についてのからかいは中学まで続いていたが、差異があることはそれほど気にならなかった。「私、選民じゃないですけど、自分たちが正しいって思っていました」と言うように、ムスリムである自分たちは非ムスリムの日本人とは違うと聞かされて育ったため、むしろ級友に優越感さえ抱いて差異を受け容れていた。父が言うことはいつも正しいと思っていた。「どんな話をしても全部イスラームの話に帰結する」ほど熱心な父から、マイサはイスラームの世界観を含めた知識をたっぷりと継承されて育ったが、その一方で実践については、「強制すると神に失礼だから」という理由で礼拝やスカーフの着用など一切強要しなかった。マイサはイスラームに反発したこともなく、ムスリムであることに迷いも抱かずに成長した。

大学進学を機に親元を離れ、マイサは他県で寮生活を送るようになった。父からモスクに行って友達を作るよう言われていたので、大学近くのモスクを何度か訪れたが、そこに年齢の近い第二世代はいなかった。第一世代の女性たちからはスカーフの巻き方を注意され、礼拝の仕方の間違いを指摘され、父の出身国の言語を話せないことを非難された。「なんだこいつら、聞いてた話と違うぞ」と感じた。非ムスリムとの間に垣根を作っていた分、ムスリム同士は信頼できる味方だとずっと思っていたのに、「でも蓋を開けたらなんか変な奴ばっかじゃないか、ってなって」、ムスリムへの不信感が募るようになった。モスクには半年ほど通ったが、自然と足が遠のいた。絶対的に正しいと思っていたイスラームへの信頼が揺らいでいった。

ある晩、カラオケ店で女友達と遅くまで遊んだことがあった。翌日父から、門限を過ぎても寮に戻らなかったことで怒鳴られて、携帯電話の GPS 機能で、常に位置情報を追跡されていたことを、この時初めて知った。売春婦呼ばわりされ、「言えないくらい汚い言葉で」2 時間も罵られたことは不愉快だったが、それより、これまで監視されていたことが「気持ち悪かった、ずっと見てたのかって」。父のいうことは全部正しいと思っていたそれまでの確信に疑問が生じると、父が教えてくれたイスラームまでも疑わしいものに思えてきた。その後、「だんだん模範的な子じゃなくなって」いき、遊びたい盛りだったこともあり、夜通しカラオケをしたり飲酒をしたりするのが普通になっていった。父に GPS で追跡されないよう、夜は携帯電話を寮に置いて出かけることも覚えた。禁忌を口にするにも、「こんなたいしたことないのがハラームなんだ、っていうぐらい」抵抗感はなく、「現世の快樂に

溺れる、みたいな」生活をするようになっていった。ボーイフレンドもできた。マイサのためにムスリムになってもいいという覚悟を見せてくれた男性だった。だが父の知人の尾行で、ボーイフレンドとのドライブが発覚した。直ちに実家に戻るようにと命じた父の口調は淡々としていて、いつもの怒鳴ったり罵ったりする様子と違うのがかえって恐ろしかった。「**名誉殺人の事件とか見てたので、ヤバイ、殺されるかもって思って**」、帰れなかった。それ以来もう 4 年も父には会っていない。母を介して、そのボーイフレンドがイスラームに入信する意思のあること、あいさつに行きたがっていることを伝えてもらったが、「来るな！俺の視界に入ったら殺すぞ、その男」という剣幕で取り付く島もない。そういえば父は昔から、マイサが異性と関わることを極端に嫌っていた。高等学校時代に男子と話していただけで名誉殺人について仄めかされたこともある。大学生になって始めた塾講師のアルバイトを反対されたのも、男性がいる職場は危険だからという理由だった。

父の過干渉について、「**神に任せればいい**」とマイサは言う。神が寛大さを示しているのになぜその神を信仰する父は寛大でないのか、罰する権利をもつのは神だけなのになぜ父がそこまで怒るのか、こうした疑問を呈するのは、幼い頃からイスラームの知識を身につけてきたマイサらしい。「**あなた（父）がそんな見張らなくても、神さまが四六時中見てるんだから、出しゃばるなよって思います**」、この言葉からは、マイサの心の奥に神への信仰が確固としてあることがうかがえる。なお、マイサには SNS で気の合う第二世代は何人かいるが、身近なところで親しく付き合える同年代のムスリムがいない。モスクで出会うムスリムや父に不信感を抱き、「**物理的にも孤立だし、精神的にも孤立して、結構閉ざしちゃって**」いるせいで、イスラームから距離を置いてはいるものの、幼少期から身につけたイスラームの世界観を完全に捨て去ることは難しい。

マイサは母ともしばしば会う関係が続けている。母はイスラームに否定的な立場であり、マイサがイスラームの話をしようとする、「聞きたくない」といった態度で拒否する。ムスリムを「世界中でテロしてる」と批判し、宗教実践から離れた娘を「ムスリムなんて笑わせるわ」と嘲笑する母に対して、マイサは「**とにかくつらいです**」と語る。SNS でも、「もうイスラームやめたぜ」と発信しながら、それを咎める他のムスリムからの反応に傷つき悩む。イスラームをいくら拒絶してはいるが、たまに礼拝をしたくなることがある。「**逃げられないんですよ、どんなに生きてもイスラームの中にいるんです、何をやっても**」と複雑な心情を吐露していた。

この調査時（24 歳）から 2 年後に再会したマイサは、大学院を終了して父のいる実家に戻っていた。イスラームを拒絶しようとしてそれがうまくいかずに葛藤していた頃とは打って変わって、表情にも話し方にも穏やかさが感じられた。このときにはすでに〈ムスリムであること〉を肯定する立場に転じており、そのきっかけを、「**親と仲直りできたことが大きいです**」と語る。最終調査時（28 歳）は、ちょうどニカーをしたばかりのときで、「**ムスリムと結婚をしたことで信仰はより盤石になりました**」という語りからは、ムスリムとして生きることにもう迷いはなく、むしろ自信さえうかがえた。そして、かつて〈ムスリムであ

ること〉を否定していた理由について、「**本当の問題はイスラームからじゃなくて親との関係だった**」と振り返る。当時は、「**ゴリゴリのきつい保守的な外国人ムスリムたち**」を避けてコミュニティに支えを求められなかったことも、孤立する原因となっていた。今は地元で「**良いムスリムの方たちに会えた**」ことを喜び、コミュニティの大切さを実感している。

(4) ディーン（男性 初回調査時 17 歳、最終調査時 18 歳・8）

外国人父と日本人母の間に生まれた 3 人きょうだいの長男。家庭内でイスラームの継承は一切行われていない。むしろ母の意向で、幼い頃から浄土真宗の経典を読まされるなど、仏教徒として育てられた。父も母に遠慮してか家族の前で礼拝することはなく、ディーンによれば、「**こっそりはしてたと思うけど、見たことはない**」。

外国ルーツによるいじめは、小学 1 年生から 5 年生まで続いた。靴やランドセルを隠されたり、「死ねよ」のような言葉の暴力もあったが、「**負けたくなくて**」休まず登校した。ずっとバドミントンをやっていたこともあり、「**ここで学校行かなくなったら負け**」だという思いが強くあった。6 年生になっていじめの首謀者がわかった翌日、「**キレて大暴れして**」、いじめは止んだ。家庭では豚肉が食卓に並ぶことはなかったが、給食は特に弁当を持参するということもなく、みんなと同じ給食を食べていた。

中学生になって、父の同郷の仲間が集まるフットサルに参加するようになり、そこで同じ日本人母をもつ同い年の男子と知り合い仲良くなる。その男子に誘われて、高校 1 年生の 5 月、名古屋のコミュニティ内にある集会「**中高生お茶会**」のバーベキューに参加した。そこには、自身と同じ背景をもつ同年代の子どもたちが 15 人もいた。かれらとの出会いは「**今まで経験したことのないもの**」で、「**いろんな国の子たちだけど、やってることは一つ、同じものを信じて生きてるから、なんかすごいな**」と感じた。「**日本だと八百万の神なんで、いろんなものを信じて、いろんなものに都合のいい時だけお願いしてって感じだけど、この子たちは違う。一人の神様がいらっしゃるっていう考えでずっと動いてて、何するにしても神さまが見てるとか、すごいなと思った**」。ひとしきり食事とお喋りを楽しんだ後、かれらがマグリブ（日没時）の礼拝をするために立ち上がり並び始めたとき、ディーンも迷わずその列に加わった。今まで一度もやったことがなかった礼拝を、見よう見まねで行った。ムスリムとしてのルーツを初めて意識した日だった。

「**イスラームってもんは知ってたんですよ、僕社会好きだったんで**」と言うように、その知識は教科書に載っている程度で、父からは何も聞いたことはない。まず礼拝を試みたくて、父の帰りを待って一緒にした。クルアーンの存在も知らなかったディーンに、父がモスクから日本語の解釈本を持ってきてくれた。ひと月後のラマダーンでは、初めての断食に挑戦した。名古屋のコミュニティ内で毎週土曜日に開かれている「**中高生お茶会**」にも定期的に参加するようになった。初回調査時（17 歳）は、バーベキューに参加して半年ほどの頃だったが、このときすでに第二世代の仲間がたくさんできていた。「**ムスリムであることで、友達が増えた**」ことが嬉しかった。神の存在についてはもちろん、天国や地獄といったイス

ラームの死生観、礼拝のやり方や食の禁忌といった実践に至るまで、ディーンはお茶会の仲間から教えてもらった。休日に一緒に出かけるような親しい友達もできて、「**ムスリムに生まれてよかった**」と思う。

高等学校でも、すぐに級友らに自身がムスリムであることを明かした。「**別に隠すもんじゃないんで。何言われようが関係ない**」と考えていた。覚えてたの知識を披露して、「イスラム国」とイスラームを混同する級友らの誤解を解いた。食事にも気を遣うようになり、学園祭ではアメリカンドックや豚汁を避けてうどんだけを食べていた。アルバイト先でも「**曲げたくないんで**」、ムスリムであることを明かして、賄い食もハラールの印が付いた輸入肉で用意してもらった。海外の修学旅行先でモスクを見つけたときは、級友を待たせて中に入って礼拝をした。

しかし、仏教徒として育ててきたディーンの変化に、母は不快感を示した。家で礼拝しようとする、「日本人の癖に」「日本の国籍捨てや」と言われる。母は、日本では仏教を信仰すべきだと主張し、「郷に入っては郷に従えって知らんの？」と繰り返した。毎週土曜日の「中高生お茶会」に参加するときは、それを引き留めようとする母と必ず口論になった。「**なんか、自分の生き方を反対されてるみたいで、ずっともやもやするから、あえて言うんです、『今日モスク行くから』って**」。駅に向かって自転車をこぐ間にも「戻ってこい」という電話がかかってくる、電車に乗っても SNS で「お前のモスクは遊びだ」と非難される。そういう状態が 2 年半ほど続いた。高校 3 年生の終わり、お茶会の仲間のなかでも特に親しい友達が急死した。その直前まで、危篤状態にある友達のために、家では父と、お茶会では仲間たちとみんなでドゥア（神への祈願）をしたが、願いは聞き入れられなかった。この出来事をきっかけに、ディーンは母に、「**生きたいように生きさせてよ。僕の人生だから、後悔はしてないし。やりたいように生きて、最後に死にたいから**」と訴えた。これ以後、母は何も言わなくなった。

お茶会はその後「SYM」と名称を変更するが、ディーンは相変わらず集会への参加を続け、第二世代の仲間との交流を深めていく。イスラームについてわからないことは仲間に分ければ教えてもらえる。困ったときは誰かが必ず支えてくれる。ディーン自身も、名古屋モスクが主催する非ムスリムの生徒・学生との交流会で、積極的に自身の経験を語り、さらには仲間との動画作成にも関わって、イスラームの誤解や偏見を解くための発信に協力していた。最終調査時（18 歳）には、「**いろんなつながりができて、いろんな考え方だったり、自分の中でもプラスになる面が多くて**」、ムスリムとして生きることを選択してよかったと語っている。

その後、新型コロナウイルス感染拡大防止のための活動自粛により「SYM」の定例開催がなくなり、仲間と会う機会も減ってしまった。だがそれから 4 年後に近況を尋ねた際には、「**生き方は変わってません。生活の一部に自然にある感じです**」と、変わらず〈ムスリムであること〉を自身のアイデンティティとして受け止めて生きている様子を語っていた。

(5) ダリヤ (女性 27 歳・70)

日本人父と外国人母の間に生まれた 2 人きょうだいの長女。母の出身国で育ち、小学校 3 年生のときに来日。それまではムスリムマジョリティ社会で学校生活を送っていたため、礼拝のし方やクルアーンの読み方などの基礎知識は学習しており、ムスリムとしての自覚は持ち続けている。だが母は「**割とフリーだった**」ため、家庭での宗教継承は行われず、日本の小学校の給食でダリヤが豚肉を食べることに**も頓着しないほどだった**。

父の仕事の関係で、ダリヤの家族は来日後も何回か転居を繰り返しているが、5 年生のときに転校した先の小学校で受けた外国ルーツによるいじめは**壮絶だった**。「**ちょっと嫌な記憶で、蓋してしまってる部分もある**」と言いながら、それでもダリヤの口からは、靴を池に投げ入れられたり、筆箱には砂を詰められたり中の鉛筆や定規がすべて折られたり、といった陰湿ないじめの様子が次々と語られた。体育の授業で着替えた服がごみ箱に捨てられていたときは、埃だらけで臭くて着ることができず、体操服のまま授業を受けたという。両親の抗議にもかかわらず、証拠がないからということで担任教員も校長も何も対策を講じてはくれなかった。「**もちろん無視も当たり前で、常に一人っていう**」状況だったが、「**負けたくないっていう一心で**」毎日休まず登校した。中学 1 年の途中で転校した先では、「**やんちゃ**」な周囲に同調することで、外国ルーツに関するからかいがいじめに発展することは避けられた。髪を染め、耳だけでなく鼻や眉毛にまで安全ピンで穴を開けてピアスだらけにして、夜中に帰宅するなど、友達と「**一緒に荒れていた**」。

ダリヤが中学 3 年生の頃、母が急に礼拝をし始め、スカーフをかぶるようになった。家族で食事に行ってもハラールを意識してか、母だけ肉料理を注文しなくなり、酒も飲まなくなった。家族に対して同じ行動を要求することはなかったが、ダリヤにとってはそれが遠回しの圧力のように「**じわじわじわじわ来て**」、イスラームの実践をめぐって母と頻繁に喧嘩するようになる。その後、父の海外赴任が決まったが、高校生になっていたダリヤはひとり日本に残ることにして、母と小学生の妹だけが父と渡航した。母の眼が届かないところでは、服装も「**短パンに、ほぼほぼ服着てない状態**」、食べ物も気にせず自由に過ごすことができる。部活動にも力を入れて、楽しい高等学校生活と一人暮らしを謳歌した。だが近況を知らせるため、家族共用の SNS にスカート丈の短い制服姿の写真を送ると母に咎められる。夏休みには家族に会うため父の赴任先に行くが、そこでも母とは過呼吸になるほどの大げんかをして、ほとんどともにコミュニケーションを取れないまま帰国した。「**母との距離感が遠くなった**」ことで「**イスラームに対しての距離も遠くなった**」という。

ダリヤが大学生の時、両親と妹が日本に戻ってきた。クルアーンを読む母の声が家の中に響くようになり、家族そろっての外食先はハラール肉を提供するレストランになった。アルコールの臭いを勘づかれて母と喧嘩になるのが嫌で、友達と飲酒するときは翌日帰宅するようにした。ファジュル（夜明け前の礼拝）に起こされるが、もう礼拝を済ませたと嘘をついて起きなかった。だが出かける前にメイクをしているダリヤの横で、母が毎日ドゥアの言葉を唱えており、それを聞いているうちにいつか自然と覚えてしまう。そういう生活が 1 年

ほど続くと、今まで意識しないでいた〈ムスリムであること〉に、少しだけ向き合うようになっていく。礼拝をしないことが「ちょっと気持ち悪い、っていう風になって」いき、酒については、飲んでいるときの罪悪感はないが、後から「罪滅ぼしじゃないんですけど、ちょっと1、2ページぐらい」クルアーンを読むようにした。高校生の頃は避けていた第二世代のコミュニティにも参加してみた。するとそこには、「みんな同じ悩み」の仲間がいた。共感し合える「仲間ができるのはとっても大事」だということに気づき、そこが「唯一の逃げ場」になった。礼拝をすると「ちょっとなんかうまくいったような気がして」、1日5回を守るようになり、就職してからも休憩時間を利用して礼拝をしていた。しかし、スカーフを被ることだけはできなかった。

スカーフについては、大学時代にトラウマになるような出来事があった。ラマダーン明けのイード礼拝に参加するため、おしゃれの延長上で白いドレスに白いスカーフを被って出かけたが、人ごみに押されて満員電車とホームの隙間に落ちて、下半身がすっかり挟まれてしまった。怖かった。しかし、スカーフ姿のダリヤを敬遠してか、手を差し伸べてくれる者は一人もなく、誰もがそのままダリヤをまたいで電車に乗り込んでいった。泣きながら自力でホームに這い上がり、汚れてしまったドレスのまま、それでもイード礼拝の会場に向かった。今日は良い日だから良い気分でいようと思って、駅での出来事を忘れようとした。ムスリムの友達と会ってお喋りするうち、忘れられた気がした。だが帰宅しようと駅に向かう途中、前から歩いてくる見知らぬ女性から「『日本から出ていけ!』って大声で、すごい怒鳴られた」。イスラームを自称する犯罪者集団による日本人質事件が起きた直後のことだった。朝の電車での出来事といい、スカーフを着用することで、周囲から向けられる視線が急に冷たくなることに、この日初めて気づいた。調査時（27歳）はそれから9年経っていたが、この日の出来事を思い出して、「怖いですよ、怖いですが怖いです。だから今でも、怖いです怖いです」とダリヤは繰り返す。イスラームを学ぶにつれ、スカーフを被りたい気持ちは高まってくるが、「もうトラウマのようになってしまって」、抵抗感は大きい。

調査の最後に、ダリヤの高校生時代の写真を見せてもらった。イスラームの服装規定の中でおしゃれを楽しんでいる現在のダリヤからは想像もつかないような、臍を出した短パン姿の可愛いダリヤが写っている。かつて毎日のように喧嘩していた母に対しては、「今は憎しみとか一切ないんです。私は私なりで、今大人になれたから」と語る。外見も中身も、わずか10年でこれほどまでに変わることになるとは、ダリヤもその母も想像していなかったに違いない。

なお、調査から半年ほどして再会したダリヤは、スカーフをおしゃれに被っていて、そこに躊躇いはまったく見られなかった。その直前に、母の出身国の宗教学校の「短期合宿」にひと月間参加していたのだという。幼い頃に学んだイスラームを改めて知識として取り入れることで、〈ムスリムであること〉に自信を取り戻し、恐怖を乗り越えることができたのかもしれない。周囲が皆ムスリムのなかで当たり前のようにムスリムとして過ごす生活は、は、実践の重要性に気づくきっかけになり、またその習慣づけにも役立ったことは間違いな

く、「来世への道のりが、すごく私のなかでは勉強になりました」と語っている。その後少しずつだが、自身の第二世代としての経験を発信する活動にも関わるようになっており、さらにその 3 か月後に近況を尋ねた際には、スカーフ着用について「帰国してから続けます。それなりにファッションと一緒に楽しんでいます」と誇らしげに語っていた。

2 生きられたイスラームの分析

第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方はさまざまである。まず、宗教継承が行われる家庭とそうでない家庭があり、前者の場合、家庭で継承される宗教実践の内容が同じではなく、これをどこまで遵守するか度合いにも違いがある。さらにはイスラームを肯定的に受け容れる者、これを否定する者、あるいはどちらか決めかねて迷う者もいるが、その程度にも濃淡があることは、序章に提示した図序-1 で示した通りである。前節で取り上げた 5 人の最終調査時点での〈ムスリムであること〉への向き合い方をこれに位置付けるなら、アスマ、アリフは第Ⅲ象限、マイサ、ディーン、ダリヤは第Ⅰ象限になる。いずれもかれらが青年期の後半あるいは成人期に入ってから調査であり、発達段階の重要な時期に自らの意志で選択をしたものであることから、おそらくこれがアイデンティティの基礎として今後のかれらの生きる方向づけになるものと推察する。しかし、ここに至るまでの過程で、大きな変遷があったことはその生きられた経験からうかがえる。本節では、5 人の〈ムスリムであること〉への向き合い方の変化と宗教継承の背景を簡易的に整理し、かれらの選択のきっかけの分析を行う。

(1) 5 人の選択と背景の概要

図 6-1 はそれぞれ、①アスマ、②アリフ、③マイサ、④ディーン、⑤ダリヤの〈ムスリムであること〉への向き合い方の変遷を示したものである。アスマ、アリフはともに、青年期の初めからイスラームを否定しながらも、宗教継承に熱心な親のもとでムスリムらしくふるまうことを余儀なくされており（第Ⅱ象限）、それがかれらの葛藤を深めていた。どちらも、親の目の届かないところでは礼拝や断食、食の禁忌などの実践に従わないことはしばしばあったが、はっきりと〈ムスリムであること〉と決別するのは（第Ⅲ象限）、家を出て親の影響下を離れてからである。マイサは、幼少期からムスリムの自覚をもちながら実践の強要のない家庭に育ち（第Ⅳ象限）、その後親への不信感からその親によって継承されたイスラームを否定するが（第Ⅲ象限）、親との関係修復により以前より積極的に〈ムスリムであること〉に向き合うようになっている（第Ⅰ象限）。家庭での宗教継承が行われなかったディーンは、無自覚から始まり、仲間のサポートによって実践のし方を学び知識を得ながら、〈ムスリムであること〉を自らのアイデンティティとして受け容れるに至る（第Ⅰ象限）。ダリヤもまた宗教継承のない家庭に育つが、ムスリムマジョリティ社会で幼少期を過ごしたこともあり、ムスリムの自覚をもっていたが（第Ⅳ象限）、その後親の回心に影響されて実践の重要性に気づき、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する生き方に変わっている

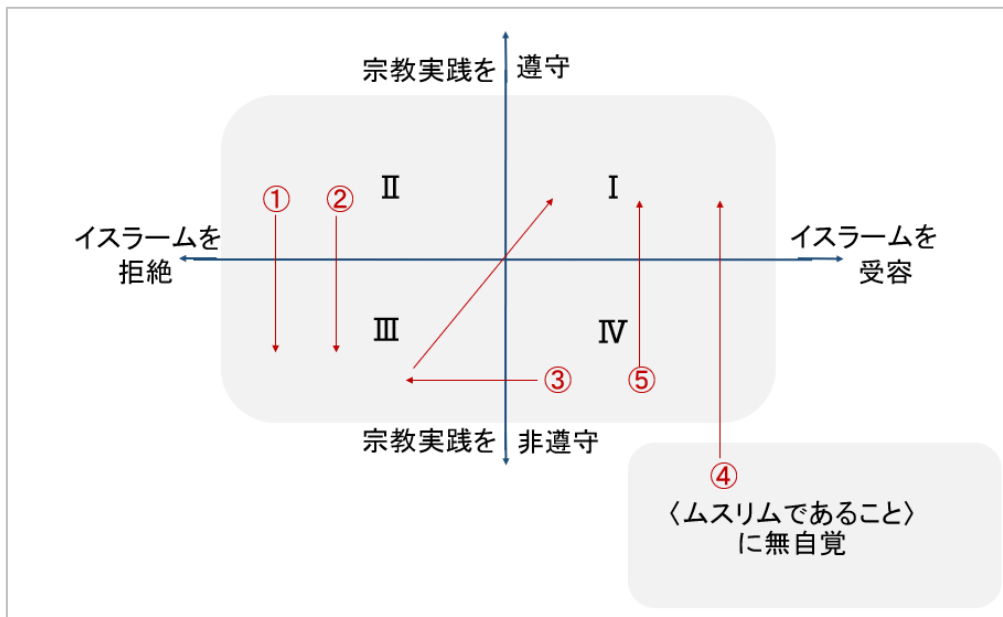


図 6-1 ①アスマ、②アリフ、③マイサ、④ディーン、⑤ダリヤの〈ムスリムであること〉への向き合い方

表 6-1 5 人の宗教継承の背景

		向き合い方の 変化	宗教継承に かかわった者	実践の継承	知識の継承	学習の機会
①	アスマ	Ⅱ→Ⅲ	外国人両親	幼児期から		
②	アリフ	Ⅱ→Ⅲ	外国人父	幼児期から		
③	マイサ	Ⅳ→Ⅲ→Ⅰ	外国人父	幼児期から	幼児期から	
④	ディーン	無自覚→Ⅰ				高校時代
⑤	ダリヤ	Ⅳ→Ⅰ	外国人母	大学時代から		小学校低学年 大学卒業後

(第Ⅰ象限)。

かれらの宗教継承を整理するなら、表 6-1 に示すように、家庭での継承に関わるのは、ディーン以外、いずれも外国人親である。その内容として、クルアーンの読み方や暗記、礼拝や断食などの義務行為の遂行や禁忌とされる行為の回避といった実践面の継承は、アスマ、アリフ、マイサに対して行われていた。しかし、そうした実践の意義やイスラームの世界観についてクルアーンやハディースに基づいた知識を継承されたのはマイサのみである。アスマとアリフがイスラームの知識を得る機会のないまま青年期を迎えている点では、一切の継承が行われなかったディーンと変わらないが、ディーンは高校時代に自ら学習する

ことで知識を得ている。一方、ダリヤは青年期に入ってから継承であるが、ムスリムマジョリティ社会で過ごした学童期の前半までに基本的な知識を身につけており、さらに成人してから、不足する知識を補おうと自ら学習する姿勢がみられる。

わずか 5 人のデータをもって結論を急ぐべきではないが、最終調査時点で〈ムスリムであること〉を積極的に肯定しているのは（第Ⅰ象限）マイサ、ディーン、ダリヤの 3 人であり、かれらに共通するのは成長のどこかの時点でイスラームの知識を獲得する機会があったということに注目したい。前章までにみてきた通り、学校生活のなかで差異を意識し排除を経験する第二世代にとって、級友の誰とも異なる実践を十分な説明もなく行うことは苦痛である。反対に、マイサやディーンの語りにみられるように、知識を得て納得することで周囲との差異は気にならなくなる。すなわち、知識の有無は第二世代の葛藤を克服する鍵のひとつであると考えられる。では知識のほかに、かれらの〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を及ぼすものは何があるのか、それを以下の項で検討していく。

（2）〈ムスリムであること〉を否定する要因

アスマ、アリフは最終調査時点で、マイサは青年期のある時期に、〈ムスリムであること〉を否定する立場を明確に表明している。そうした選択に至る要因はそれぞれに異なるが、いずれも決して珍しいものではなく、他の調査協力者の語りのなかにも程度の差はあれ、その片鱗を垣間見ることができる。そこで、アスマ、アリフ、マイサが〈ムスリムであること〉を否定するに至った主要因に焦点を当てることで、第二世代の多くが抱えがちな問題の所在を改めて確認していきたい。

アスマの語りには、「みんなと違うのが嫌だった」「これ以上異質なものになりたくなかった」、「周りと違うことで萎縮しちゃう」のように、周囲との差異を忌避する表現が目立つ。外国ルーツの子どもの多くは顔立ちや肌の色といった外見的な差異により学校での排除を経験するが、第二世代はこれに加えて宗教的背景による差異も排除の理由になる。「とくに義務教育機関において『日本人らしさ』と集団への同化が求められる」（下地 2018: 366）なかで、長期間にわたる重層的な排除の経験はアスマに強い同化願望を生じさせたと考えられる。しかし、父権制の強い地域出身の両親のもとでは、その願望を叶えることは難しい（Mansour 2015=2016: 122）。父に怯える母にその橋渡し役を期待することもできないまま、一方的な命令に従うしかないなかで、その根柢にはいつもイスラームが示されていた。その結果、アスマはイスラームを同化を阻害する原因として認識するようになり、その価値観を強要する父を嫌悪する。こうした構造は実は珍しくなく、調査のなかでも、同化願望についての語りと合わせてイスラームと親の両方を否定する語りが多く聞かれた。

アリフの場合、父が伝えるイスラームは宗教実践に関わることが中心で、現実生活を送る中で感じる矛盾を解決するための指針さえ示されず、疑念ばかりが蓄積されていった。イスラームにおいて神の第一次的な本体は、慈悲や愛といった「優しい明るい、おだやかな面」であり、罰や審判といった「暗い、烈しい、恐ろしい性質」は第二次的なものである（井筒

1991b: 126)。しかしアリフには、「**信仰心というより恐怖心しかなかった**」というように、後者のみが強調されて教えられていた。マンスールは、ドイツにおける宗教継承の傾向について、「地獄に墮とされる恐怖によって、やさしいアラーがせっかく子どもに与えてくれたもっとも美しい贈り物、つまり生きている喜びがゆがめられてしまう（ママ）」(Mansour 2015=2016: 159) と指摘するが、日本でも同様の継承が行われる傾向は否定できず、それが第二世代のイスラームへの誤解を招いている。アスマの両親も「**アッラーが怒っている**」という表現をよく使ったが、知識の継承が十分に行われないムスリム家庭では、子が従わない場合に、神の罰をちらつかせて実践が強要されることがしばしば起こりがちである。こうした家庭に育つ第二世代のなかには、イスラームがどういう教えかわからないまま、ただ罰を恐れて〈ムスリムであること〉を肯定する者もいる。だがアリフは、「**みんなと同じ楽しいこととか嬉しいことを共有できないのが嫌**」と語るように、恐怖心を抱えながらも、理解できないイスラームより級友との価値観の共有を優先した。ここでは、イスラームは日本の価値観と両立しえないものとして理解されており、そうした対立構造のなかで二者択一的に後者を選択する第二世代は少なくない。アスマのようにイスラームを積極的に否定するのではなく、アリフが「**いろんなものが重なって**」と言うように、イスラームへの誤解や矛盾、日本の価値観との衝突を繰り返し経験することでイスラームから離れてしまう者もいる。

一方、マイサは上記2人と異なり、実践を強要されることもなく、イスラームへの疑問はすべて父が解決してくれるという、恵まれた環境に育ってきた。豊富な知識は、自らを「**選民**」と考えるほどにムスリムであることへの自信を抱かせ、級友との差異も一切気にならずに、高校生活までを過ごした。だが大学進学後、モスクで出会ったムスリムによる不快な経験と全幅の信頼を置いていた父への幻滅は、マイサがそれまで正しいと思っていたイスラームへの信頼を失墜させた。実はモスクで不快な経験をしたことのある第二世代は多い(岡井・店田 2019b: 17-31)。日本のモスクにはさまざまな出身国や地域のムスリムが集まるため、礼拝前の清めや礼拝中の動作、スカーフの被り方や服装規定など、実践方法にも多様性が見られるのが普通である。そうしたなかで、自身の出身国や地域の実践方法と異なるやり方をする第二世代に、それを間違いだと注意する第一世代がいる。日本育ちの若いムスリムは何も知らないという認識から出た善意の助言であろうし、それを大声で指摘するのも悪意があつてのことではないだろうが、多様性を無視した批判や衆目に晒されての注意は、日本で社会化された第二世代にとっては不快なものに感じられる。こうした経験を重ねることでムスリムへの不信感を募らせ、モスクから次第に足が遠のいていったという事例は、マイサに限らず、調査協力者の語りの中でも非常に多く聞かれる。また、娘の貞操を守ることへの第一世代の執着の度合いも、日本で育った第二世代には理解し難い。アスマの母が携帯電話に登録された番号に片端から電話をかける行為や、マイサの父のようなGPSでの追跡や人を使つての尾行といった行為は、かれらが悪びれず謝罪もせず一方的に子を罵る様子から、それを正しい行為と認識していたと思われる。だが日本で社会化された第二世代には

理解し難い行為であり、さらにそれを正当化するための枕詞として「イスラームでは」という表現が使われることで、結果的に第二世代はイスラームを受け入れられないものと考えられる。つまるところ、イスラームを嫌悪する第二世代のなかには、その教えに対してではなく、一部のムスリムの言動によって幻滅に至る場合もあるということだろう。

(3) 〈ムスリムであること〉を肯定する要因

最終調査時点で、ムスリムのアイデンティティを肯定的に受け容れていたのは、マイサ、ディーン、ダリヤである。それぞれ、〈ムスリムであること〉をある期間否定したり、無自覚であったり、否定はしないが実践を行わなかったりという立場を取っていたが、その後〈ムスリムであること〉を改めて肯定的に受け容れる選択をした。そのきっかけもまた、他の調査協力者の語りのなかにしばしば登場するものである。それらを以下に整理する。

前項で論じたように、マイサがイスラームに不信感を抱いたのは、第一世代の言動に対する幻滅による。知識として理解していたイスラームと現実のムスリムとの乖離に落胆した結果、コミュニティを敬遠し父とも疎遠になった。だが父との溝を埋めることに成功したマイサが、「**本当の問題はイスラームからじゃなくて親との関係だった**」と自己分析しているように、イスラームに再び向き合うことを可能にしたきっかけは親との関係修復であった。調査の中でも、親との不仲がイスラームを否定する要因になっていると思われる語りが複数みられることから、良好な親子関係は宗教継承に必須のものであるといえよう。またマイサがイスラームを否定していた時期、「**確実に孤立してた**」と感じたのは、周囲に悩みを共有できる仲間がいなかったためと考えられる。だからこそ、新しいコミュニティで別のムスリムと出会いさらにムスリムの配偶者を得たマイサの、「**信仰はより盤石になりました**」という語りは、身近に信頼に足るムスリムの存在があることの重要性を示しているといえよう。

居心地の良いコミュニティが第二世代のアイデンティティ形成に影響を及ぼすことは、ディーンの実験からも明らかである。家庭での宗教継承が一切なかったにもかかわらず、ディーンは、コミュニティ内で出会った同年代の仲間によって知識と実践を身につけ、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する立場をとるようになった。ディーンが「**ムスリムであることで、友達が増えた**」と語り、ダリヤが「**仲間ができるのはとっても大事**」と語るように、差異による排除の経験を重ねてきた第二世代にとって、共通する背景を持つ仲間の存在は貴重であり、その出会いを提供するコミュニティは、常にマイノリティとして過ごしてきたかれらがマジョリティの側にいられる場として、かれらを疎外感から救済する重要な役割を担う。だからこそ、そうした「**唯一の逃げ場**」に集まる第二世代は、マイサが「**ゴリゴリのきつい保守的な**」と表現するような、出身国や地域の文化と混同されたイスラームを強要する大人たちの干渉から守られなければならない。例えばディーンが参加していた中高生お茶会（のちにSYMと名称変更）の取り組みとして、「大人の強制から守るため」（カン

ほか 2024: 56) に、集会には見守り係以外の大人の立ち入りを禁止しており¹²⁴、そうした第二世代の居心地の良さを優先した運営側の配慮も重要である。

ダリヤが最終的に〈ムスリムであること〉を積極的に肯定するようになったきっかけは、宗教学校への短期合宿であった。幼少期にイスラーム学習の経験はあれど、その後青年期にかけて実践の継承が十分ではなかったことが、ダリヤのアイデンティティの揺らぎにつながっていた。安達智史は、知識が「若者たちのイギリス社会への適応のための重要な資源あるいは手段となるものである」（安達 2020: 251）と述べており、合宿参加による知識の獲得が、ダリヤの〈ムスリムであること〉への向き合い方を変容させたことは間違いない。加えて、合宿先でほかのムスリムと共に生活したことも、マジョリティ側に立つ数少ない経験として意義があったと考えられる。ダリヤの場合はひと月間の合宿だったが、調査の中では、それより短い期間の合宿経験者にも〈ムスリムであること〉への向き合い方の変容が訪れていることから、ムスリムマジョリティ社会で一定の期間を過ごす経験は、かれらが自信を取り戻す後押しとなると考えられる。

3 他の調査協力者の語りと併せての考察

前節までに、5 人の生きられたイスラームの経験から、〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を及ぼす要因と、その向き合い方の変容する過程を確認した。そこでみてきた〈ムスリムであること〉を否定する要因は、表 6-2 に示す通り、①同化を阻害するイスラームへの嫌悪、②イスラームへの誤解や矛盾、日本の価値観との衝突など複数の要素が積み重なった結果、③ムスリムへの不信感からくるイスラームへの幻滅である。これらは他の調査協力者の語りにも程度の差こそあれうかがえたものであり、第二世代が〈ムスリムであること〉に迷いを感じる際にある程度共通する経験であると考えられる。同様に、〈ムスリムであること〉を肯定する要因として明らかになった④良好な親子関係、⑤共通する背景を持つ仲間やマジョリティを感じられる場の存在、⑥知識の獲得は、迷いを感じることはないあるいは少ない者の語りに頻繁にみられる経験であり、これらは第二世代が葛藤を乗り越えるために重要な要素であると考えていいだろう。そこで本節では、第 4 章および第 5 章で描き切れなかったこれらの要因と〈ムスリムであること〉への向き合い方との関連について、他の調査協力者の語りと併せて考察する。

日本で社会化される第二世代は、マイノリティであることを意識して成長するなかで、①や②が原因で〈ムスリムであること〉に迷いを感じる者は多い。そうした思いは中学生や高

¹²⁴ SYM の集会には、毎回 1～2 人の日本人女性が「見守り係」として同席する。会の進行に基本的には関与せず、万一トラブルが起きたときに対処できるよう、文字通り見守る姿勢で同席する。男子と女子の間に衝突はあるが、同室であることに難を示す外国人親を安心させるためにも、見守り係の大人が同席することは有効でもある（カンほか 2024: 56）。

表 6-2 〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を及ぼす要因

〈ムスリムであること〉を否定する要因	〈ムスリムであること〉を受け容れる要因
①同化を阻害するイスラームへの嫌悪	④良好な親子関係
②イスラームへの誤解や矛盾、日本の価値観との衝突など複数の要素が積み重なった結果	⑤共通する背景を持つ仲間やマジョリティを感じられる場の存在
③ムスリムへの不信感からくるイスラームへの幻滅	⑥知識の獲得

校生の時期に生じやすいが、親の保護下にあるこの時期にそれを表に出すことは難しく、親の期待に応えようと無理をして実践に従い続ける。青年期のどこかの過程で④や⑤や⑥といった要因を経て〈ムスリムであること〉を肯定する者もいるが、こうした要因と関わる機会のないまま、大学進学や就職などで親元を離れるのをきっかけに、迷いがはっきりと否定の感情に変わる者もいる。特に③の対象が親である場合には、親との関係を断つこととイスラームを拒絶することを同義に捉える様子がみられる。こうした〈ムスリムであること〉に積極的な否定の立場をとる者のその先の変容については、かれらがまだ成人期の途中であるため現段階で考察に十分なデータはないが、すでにアイデンティティを確立したかれらの語りからは、今後も否定の立場を変える可能性は低いと思われる。かれらは〈ムスリムであること〉にまつわる葛藤を解消して、イスラームと関わらない生活のなかで平穏な生活を送っており、実はこうした第二世代は多いのかもしれない。

一方、他の第二世代の語りのなかには、青年期のある時期に〈ムスリムであること〉に迷いを抱えあるいはこれを否定しながらも、積極的に肯定する立場へと変容した様子が見え、そこには④や⑤や⑥といった要因の影響があると思われる事例もあった。例えば、「ムスリムであるという自分の属性を疑問に思ったことは何度もあった」というサリー（女性 39 歳・75）は、厳しい父に代わっていつも味方でいてくれた母の「無償の愛」に救われたと語っている（④の要因）。シャヒーム（男性 21 歳・17）は、「罪悪感とか疑問とか恐怖心みたいなものが波みたいに襲ってくる」ことに苦しんでいた中学生時代に、父や親戚から「愛と一緒にイスラームが運ばれてくる」経験をしており（④の要因）、さらに「心のリミットが来てた」高校 1 年生のときにコミュニティ内で大勢の第二世代と出会っており、「仲間の存在っていうのはホントにありがたい」と語る（⑤の要因）。こうしたコミュニティは、「腹を割って話せる仲間と出会う唯一の場であり、仲間づくりだけでなく、自分のアイデンティティを確認するためにも重要な役割を果たしている」（カンほか 2024: 58）と第二世代自身が記しているように、学校でも家庭でも疎外感を抱えがちな第二世代にとって欠かせないものであると考えられる。また、「何のために生きているのか

わからなくて（……）つらさがあった」というガフル（男性 28 歳・31）は、海外の宗教学校での合宿に参加した高校 1 年生の夏休みに「**神様を見つけた！**」と語っている（⑥の要因）。これらの事例に登場する第二世代はいずれも、アイデンティティの揺らぎの過程で④や⑤や⑥といった要因を経て、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する立場を取るようになった者たちである。

なお⑥の要因、すなわち知識の獲得については、ヨーロッパの先行研究で、ムスリムとしてのアイデンティティ形成のために知識が大きな役割を果たすことが指摘されている（DeHanas 2013: 81; Otterbeck 2013: 131; 安達 2020: 251 など）。日本の第二世代についても、これが該当する事例を以下に示したい。まず、父に言われて従う実践に価値を見出せず、「父のためにモスクに行っていた」というアズマ（男性 16 歳・27）は、中学生の頃は「**モスクに行くとムスリムが嫌いになる**」ほど、日本で社会化される中で知る常識と異なる第一世代の言動に幻滅し、〈ムスリムであること〉に自信を持てずにいた。だが「**イスラームを捨てて無神論者になろうと思って**」、イスラームを否定する材料を求めてインターネットを検索するうち、海外の著名な学者や説教師らによる解説動画に「**どんどんはまっていて**」家庭で伝えられてこなかったイスラームの世界観を知った結果、アズマは「**神は本当にいると確信した**」という。同様に、高校生までは「父のために礼拝しているくらいの気持ち」だったアリーム（男性 22 歳・26）も、長らく「日本人であることとムスリムであることの二者択一で迷って」いたが、大学生のときにやはりインターネットを活用して疑問を解消していくうちに、「**イスラームの美しさを知った**」という。前出のサリー（女性 39 歳・75）もまた、実践に従う理由は「父の前ではいい娘でいたいという思い」からだったが、大学卒業後に留学したムスリムマジョリティ国で「**イスラームの多様性を知ってカルチャーショックを受けて、本当のイスラームとは何だろうと思ってクルアーンを読み始めた**」のをきっかけに、「**自分でイスラームを選び取った**」と語る。

3 人の語りには、迷いを抱えている時期には「父」の顔色をうかがっていた様子が垣間見えるが、知識の獲得により、イスラームにおける神との関係は「直接的、個人的なもの」（Hamidullah 1957=1983: 65）であること、つまり父を介在させる必要がないことに気づいてからは、いずれも積極的にイスラームを受け容れる立場に変容している。その過程は、前出のガフルの、「**家庭で受けたイスラーム教育は、何の役にも立っていない。イスラームは自分で見つけたと思ってる**」という語りが表すように、「第一世代から得られなかった答えを他の情報源を通して得ることで、重荷であったイスラームを納得して受け入れる」（クレシ愛民 2018: 33）というものである。この「自分で見つけた」という表現は、奇しくもサリーの「**自分でイスラームを選び取った**」とよく似た表現であり、アリームも同様に「**ボーンムスリム¹²⁵って言うよりかは改宗したくらいの気持ち**」と語っていることから、能

¹²⁵ キリスト教との家庭に生まれ幼児洗礼を受けた者が「ボーンクリスチャン」と呼ばれるように、ムスリム家庭に生まれムスリムとして育てられた者が「ボーンムスリム」と

動的な知識の獲得による「重荷」からの解放が、いかに新鮮なイスラームとの出会いをかれらに呈したかを物語っている。

なお、ここでいう「知識」とは、親世代の出身国や地域のいずれかで有効な限定的なものではなく、クルアーンとハディースに基づく普遍的な知識のことである。アズマやアリームがインターネットで入手する際にも、「アズハル¹²⁶とか、ちゃんとした権威のあるイスラーム学校を出てるイマームや法学者の情報（アリーム 男性 22 歳・26）」が、普遍的知識の出典として意識的に選ばれていた。そうした情報のなかで示される神は、本章 1 節に言及した、アスマの両親が口にしていたようなあるいはアリフが恐れていたような、裁き罰を与える存在ではなく、「優しい明るい、おだやかな面」（井筒 1991b: 126）をもつ慈悲や愛に満ちた存在である。その神によって創造された世界のあり方や求められる実践の意味が、現代社会に生きる者にとって矛盾なく説明されることで、イギリスの移民第二世代が「イスラームに基づかない（ものとして理解される）いくつかの慣習から自由になり、西洋社会の中で生活やライフプランをめぐる選択の幅を高め」（安達 2020: 251）たように、日本の第二世代を「重荷」から解放する。

調査協力者のなかには、極端に厳しい実践の強要によって、級友らと行動を共にする機会を繰り返して妨げられ、同化願望を叶えるには〈ムスリムであること〉を否定するしかないと考える者がいた。こうした心情について第二世代当事者は、『ムスリム』と『日本人』という両立し得ない役割を自らの中で統合しきれず、二つの社会の狭間であがき揺れ続けている」（クレシ愛民 2018: 33）と表現する。しかし、かれらが「ムスリム」と「日本人」を両立しえないものとするのは、一部の出身国や地域の文化と混同されたイスラームしか知らないからである。「あれダメこれダメの規律と罰への恐怖しか教わらなかった」サリーが、「父の息のかかっていないイスラーム」を学んだのちに「日本人とイスラームは相反するものじゃない」と気づいたように、文化から切り離された知識越しにみるイスラームは、実は日本社会に生きることと矛盾するものではない。むしろクルアーンやハディースが示す生き方の指針は日本の常識と重なるところが多く、エジプトのシシ大統領の「日本人は歩くクルアーン」（首相官邸 2016）という言葉を借りずとも、善きムスリムであることは日本社会に生きることと両立しうる。前出のハルーンも「自分っていう人間の中に、ムスリムと日本人と〇〇（父の出身国）人が入ってる。どれも自分の一部やから、自分がムスリムであるかないかってことは悩むことじゃなくて、イスラームを捨てる必要はないと思う（ハルーン 男性 21 歳・28）」と語っている。知識による宗教と文化の切り分けは、その文化のなかに生きていない者にとって、つまりムスリムがマイノリティである社会に生きる者が、その社会

呼ばれることがある。その宗教を信仰する者がマジョリティの国や地域ではそういった呼称は不要だが、社会でマイノリティの宗教継承者については、自らの意志で入信した者と区別する際にこの語が使用される。

¹²⁶ アル＝アズハル大学は、エジプトのカイロに本部を置くスンナ派の最高教育機関。

の価値観とイスラームを矛盾のないものとして受け容れるために、絶対的に必要なことである。

とはいえ、これらの事例に登場する第二世代は知識の獲得にあたり、英語もしくは現地の言語を媒介語としている。ヨーロッパの先行研究では、知識獲得の場としてモスクやイスラーム関連の教育機関の利用が可能であることが示されているが（安達 2020: 258; DeHanas 2013: 79, 81）、日本国内にそうした社会資源を利用する環境は、現時点では十分に整っていない。モスクで行われるクルアーン学習は、アラビア語の音で読む練習や暗記が専らで、意味の解説が行われることはめったになく、ましてやクルアーンの意味理解まで踏み込んだアラビア語教育が行われる場はほぼないといっている現状にある。近年開校が相次ぐイスラーム学校においても、クルアーン理解のためのアラビア語教育を行っているところは2校のみであり（クレシ明留 2024: 36）¹²⁷、アラビア語教育を行っている大学は2014年時点で49校あるが、その8割以上は週に1回のみの授業開講であるため（鷲見・鷲見 2016: 104）、クルアーンを理解できるだけのアラビア語習得は困難である。そうしたなか、知識の獲得を求める第二世代は、アラビア語を理解する著名な学者や説教師らによる解説動画をインターネット上に探すことになるが、それらも海外発信のものばかりであるため、英語を解さない者には十分な理解は難しく、海外留学や宗教学校への短期留学も日本語以外の語学力が必須となる。こうした現状において、知識獲得の重要性に鑑みた、日本語での学習環境の整備は早急に進められるべき課題だろう。

4 ムスリムとしての自覚

前節までに、第二世代が〈ムスリムであること〉を肯定する要因と否定する要因とを整理してきたが、こうした要因の影響を受けた者が〈ムスリムであること〉とどのように向き合うのかを明らかにするため、最後に、ムスリムとしての自覚の有無に関する調査協力者の回答を検証する。

あるイスラーム団体が行った調査によれば、8割以上の第二世代がムスリムとしてのアイデンティティを失いかけているという（見原 2023: 246）。一方、本研究の量的調査においては、第3章に示した通り、青年期の途中あるいは幼い頃からずっとムスリムとしての自覚をもって生きていると回答した者の合計は78.6%である（図3-5）。質的調査を行った75人のなかでも、語りのなかで〈ムスリムであること〉をはっきり否定した者は9人のみで、それ以外は何らかの形でこれを肯定する発言あるいは態度を見せていたことを考えると、程度の差こそあれ、全体の88.0%はムスリムの自覚を有する者である。先のイスラーム団体の調査結果と真逆のものになるこの数字をどのように解釈すればいいだろうか。2つの調査結果がこれほど乖離する理由として、標本抽出のやり方や設問の形式に違いがあることが想定されるが、ここでは、当該イスラーム団体の考える「ムスリムとしてのアイデンテ

¹²⁷ Sapporo International School と Fukuoka International Islamic School の2校。

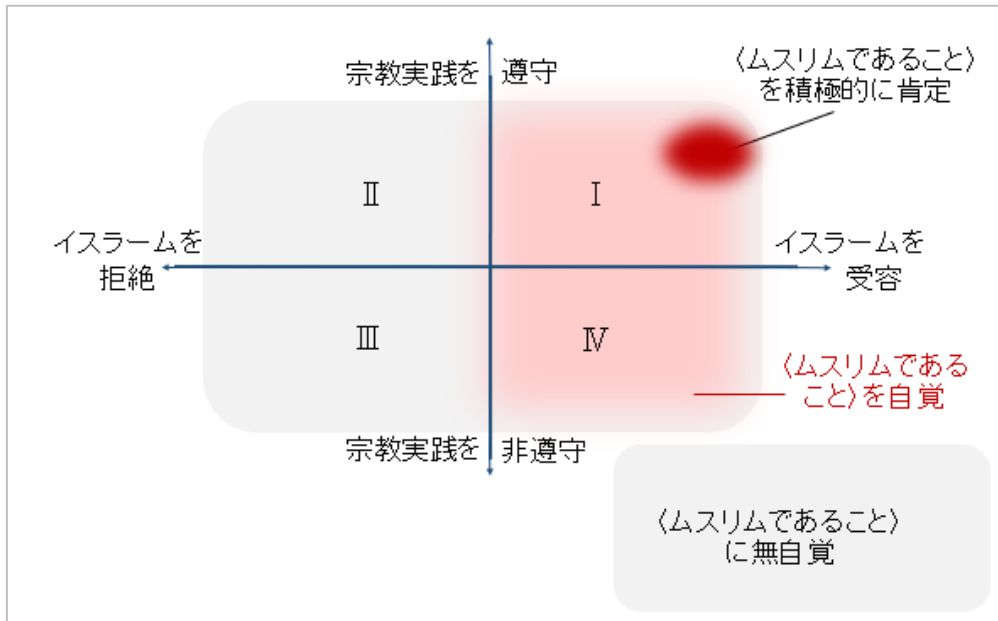


図 6-2 第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方 (図序-1 の再掲)

ィティ」と、本研究の調査協力者が自認する〈ムスリムであること〉の意味内容が異なっているのではないかという仮説を立ててみたい。

このイスラーム団体は外国人の第一世代によって運営されていることから、「ムスリムとしてのアイデンティティ」を有する者とは、第一世代の理想とするムスリム像に近い者を指していると考えられる。それは、序章に示した「第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方」の図で、第 I 象限の右上端の赤色で示した位置に分類されるような（図 6-2 として再掲）、イスラームを積極的に受容し宗教実践を遵守する者のことではないか、そうだとすれば、これ以外が 8 割を超えるのもうなずける。しかし、本研究の調査協力者の示すムスリムの自覚のありかたは非常に多様である。

ユースフ 男性 21 歳・15：なんで自分はムスリムだろうと疑ったことはありません。なんで周りの人たちはムスリムではないのだろうかと思うことはよくあります。(……) アッラーに祈りをささげている時が好きです。

ナジュマ 女性 24 歳・67：(ムスリムの自覚は) あるけど、でも認めたくない、しんどい。(……) (イスラームについて) 決して誇りには思わない。

上記引用のユースフは、幼い頃から宗教実践を行いかつイスラームを当然のこととして受け容れており、まさに図 6-2 で第 I 象限の右上端の赤色で示した位置に分類される者といえるだろう。こうした存在はモスクやイスラーム団体といったコミュニティの視界に入りやすく、ムスリムマジョリティ社会に育った第一世代にとってなじみのあるムスリム像

であり、「ムスリムとしてのアイデンティティ」を有する者として規定されやすい。本研究の調査協力者のなかにも、イスラームを「嫌だと思ったことは一度もないです（ジャリール 男性 17 歳・16）」、「大好き、っていうか愛してる（エリヤス 男性 17 歳・19）」というように積極的に肯定する者や、「どんなに体調が悪くても礼拝しないとザワザワする（ウセイド 男性 19 歳・11）」、「（夜の礼拝を）忘れたかもしれないと思ったら、寝てても起きてやる（ザミン 男性 18 歳・9）」と語るほどに 1 日 5 回の礼拝を欠かさず行う者はいる。だがそこまで積極的でなくとも、イスラームを「やめたいけど、やめれない（ハニフ 男性 24 歳・29）」、「やるしかないもの（アサド 男性 19 歳・19）」として、〈ムスリムであること〉を肯定する者は決して少なくない。また、ムスリムの自覚の有無を問う質問に、「まあ……」と言って考え込んでしまったラニヤ（女性 23 歳・62）や「認めたくない」と言う上記引用のナジュマは、それでも自身が〈ムスリムであること〉を否定しない。図 6-2 でいえば、イスラームの受容の程度は横軸の長さの分だけさまざまであるが、原点を通る縦軸からわずかにでも右側に位置する者、すなわちラニヤやナジュマは、本研究においては消極的ながらもムスリムを自認する者である。

他方で、スカーフの着用もなく、礼拝をするのは「たまに（女性 18 歳・47）」と言うサイダや「一日 2 回くらい（女性 18 歳・45）」と言うスハナも、ムスリムの自覚を問う質問には、「ありますよ、困った時に神さまがいると思うから（サイダ）」、「あります。イスラームは嫌いじゃない（スハナ）」と肯定的な回答をしている。なかには、食の禁忌を破っていることを告白しながら〈ムスリムであること〉を肯定する者さえいる。こうした宗教実践を遵守しない第二世代は、第一世代の育ったムスリムマジョリティ社会では「ムスリムとしてのアイデンティティ」を失った者に数えられるのかもしれない。だがそもそもムスリムとは何であるのかを問うたとき、宗教実践は必ずしも〈ムスリムであること〉の必要条件ではない。イスラームにおける信仰とは、「存在世界全体の所有者」（井筒 1991:145）である唯一の神の存在を「真実と認め受け入れること」（松山 2017:29）であり、この信仰をもつ者がムスリムである。松山洋平（2017:27-9）がイスラーム神学における信仰の構成要素について 3 つの説を紹介するなかで¹²⁸、いずれの説においても「心における真実であるとの承認」が根本的なものであると述べられているおり、「その人がムスリムであるかどうかは、その人の行為に基づいて決まるものではない」（松山 2017:30）。したがって、たとえ礼拝を行わなくとも食の禁忌を破ったとしても、その者が「神の目から見てムスリムでなくなる

¹²⁸ 松山が紹介するスンナ派の神学における「信仰の構成要素」をめぐる 3 つの説は次の通り（松山 2017:27）。

説①：信仰＝「心における真実であるとの承諾」

説②：信仰＝「心における真実であるとの承諾」＋「言葉による告白」

説③：信仰＝「心における真実であるとの承諾」＋「言葉による告白」＋「体による行為」

わけではない」(松山 2017:21) ののである。このことから、本研究の質的調査において〈ムスリムであること〉をはっきり否定した 9 人のほかは、程度の差はあれムスリムの自覚を有する以上、図 6-2 の薄い赤で塗りつぶした範囲に分類していいだろう。つまり、本研究が指す〈ムスリムであること〉を自覚する者は、第 I 象限の右上端の赤色で示した部分よりもっと広い範囲にあり、たとえ限りなく縦軸に近いところに位置していても、かれらは「神の目から見てムスリム」である。

ここで思い起こされるのは、先行研究におけるフランスやイギリスの移民第二世代の事例である。山下泰幸 (2018) の論考に登場する第二世代は、ムスリムであることをはっきりと自認しながらも宗教実践を回避することで、親世代が継承しようとする宗教規範とフランス社会の構造的圧力との間に生じる葛藤を克服し、学業および職業上の成功を収めている。安達智史 (2020) が扱った第二世代の多くも、親世代から継承された慣習から自由になることでイギリス文化とイスラームを両立させ、ムスリムとして自己を再定義している。DeHanas (2013) の調査でも同様に、実践を行っていない第二世代が——なかにはマリファナを吸うと告白する者でさえ¹²⁹——ムスリムの自認をもっている様子が示され、「脱文化型」と「ハイブリッド型」の戦術を柔軟に組み合わせて、社会に順応しつつ信仰を維持している様子がうかがえた。いずれも、親世代が理想とするムスリム像には合致していないかもしれないが、上の定義にしたがえばかれらはムスリムである。

これらの事例に鑑みれば、日本の第二世代もまた、ムスリムがマイノリティである日本を生き抜くための戦術¹³⁰を、先例のないなか手探りしている最中にあるのだと考えていいだろう。かれらはモスクやイスラーム団体といったコミュニティに近づくことがないため、第一世代の視界には入りにくい**が、「見た目はこんなんだ (ムスリムの服装規定の典型ではない) けど、心はイスラーム」**というアナム (女性 19 歳・51) のような第二世代は決して少なくない。宗教実践こそ重要と考える第一世代が、8 割以上の第二世代が「ムスリムとしてのア

¹²⁹ クルアーンには、「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。(第 5 章 90 節)」とある。ここで「酒」と訳されているアラビア語「khamr」の語源は理性を覆い隠す (khamara) ことであり、別の解釈本では、「酔わせるもの(酒)」(水谷監訳 2019: 109)、「理性を飛ばす酔わせるもの」(日本ムスリム協会訳 2022: 122)とあるように、酒に限らず、マリファナもハラームとされる。

¹³⁰ 第二世代に限らず、多くの日本人改宗者でさえ、こうした戦術を駆使しなければマイノリティとして日本社会を生き抜くことは難しい現実があるということを付言する。日本人による日本初のイスラーム団体の名誉会長であった樋口美作も、「もしそのムスリムが俗的な生活に妥協してイスラームの義務行為を怠ったとしても、そのことを気にし、悔悟し、償いの気持ちを忘れない限りムスリムであると思っている」(樋口 2007: 214)と語っている。

イデンティティ」を失いかけていることに危機感を覚える一方で、生きられたイスラームの視点に立てば、社会に順応しつつ「ムスリムとしての自覚」を有する第二世代は、実は日本にも相当数いると考えられる。

そうだとすれば、子が幼いうちから家庭で施されるイスラーム教育は無意味ではない。フランスやイギリスの移民第二世代の事例においても、今は宗教実践に従うのをやめた調査協力者が2歳の頃からクルアーン学習を始めていたことや（山下 2018: 45）、ほぼすべての調査協力者が幼少期に両親からイスラーム教育を受けていたことが語られている（安達 2020: 261）。問題は、第二世代が社会化の過程で、親世代から継承される宗教規範と学校生活を通して知る新たな価値観との間に生じる葛藤とどう向き合うべきかの答えをもたないことであり、前例のないなかで宗教継承をする第一世代にとっても、子の苦悩にどう寄り添うべきかの指針が共有されないことである。

サリー 女性 39 歳・75：ムスリムであるという自分の属性を疑問に思ったことは何度もあったけど、父の信頼を裏切ってはいけないという思いがずっとありました。（……）父親が求める理想の娘とのギャップで苦しんだ時に、自分の父は、〇〇（父の出身国）人じゃない自分、ムスリムじゃない自分を愛してくれないのではないかと、という疑問がずっとあったからだと思います。その点においては、母ははっきりと、どんな自分でもいつもサリーの味方だと言ってくれました。道を大きく外れることなく、精神的にもおかしくならなかったのは、母の無償の愛が大きかったと思っています。

アシーフ 男性 22 歳・21：9 歳までは普通に〇〇（父の出身国）の幼稚園小学校行っていたので、礼拝のやり方も知ってたし、断食のやり方も。（……）（日本に住むようになって）やっぱり礼拝とかはちょっと嫌やったんですね、強制されるから。（……）

——強制されずに自分で礼拝したいと思えるようになったのはいつぐらい？

アシーフ：〇〇（父の出身国）に合宿に行ったら、みんな、ほかの第二世代の子が「あ、もうアスル、やろうか」みたいな。みんな「やろうやろう」って雰囲気やったから。「あ、みんなやるパターンなんや」って。こっちはもう絶対やりたくないパターンなんで。そうそれで、みんなやるんやって。そっから自分でもちょっとやっていこうかなって思いだしたのが、20 歳くらいです。

フスナ 女性 26 歳・69：（父は）厳しくて、小さい頃から「礼拝やれ」とうるさかったです。（……）（その後父の出身国で）イスラームを勉強して、礼拝するようになりました。

——それまでは礼拝しなかった？

フスナ：子どもの時からイスラームは嫌いじゃなくて、アッラーを信じてはいたけど、礼拝しようとは思えなかった。

上記引用の3人はいずれも、家庭での宗教継承に戸惑っていた過去について語っており、同様の経験は珍しいものではない。それらは多分に実践の強要によるものであるが、本章2節で考察したような、良好な親子関係、共通する背景を持つ仲間やマジョリティを感じられる場の存在、知識の獲得といった要因をきっかけに、青年期の途中でムスリムとしての自覚の高まりと葛藤の克服に至る者も多い。その意味でも、「**子どもの頃からイスラームに触れることも正解なのかもしれない**」とサリーが振り返るように、家庭での根気強いイスラーム教育は重要といえるだろう。とはいえ、ここでいうイスラーム教育とは、イスラームの世界観を含めた知識の継承であり、実践のみに偏った形骸化したイスラームの継承と区別されなければならない。さらに付け加えるなら、親子の会話の機会も十分に確保されるべきだろう。

アイニー 女性 21 歳・55：父は、私がいろいろ言っても聞いてくれないんですよ。聞こうとしてくれない、聞く耳をもたない。私になんか言っても、「ダメ、それは違うから」って。私の意見とかは何もないんですよ。（……）多分みんな、小学校からムスリムとして育ってれば、ムスリムっていう自覚は全員あると思うんですよ。やめたいって思うのは、押し付けられた時。だから良好にムスリムの環境を築いていければ、別に（自覚が）なくなるものではないし。

アシーフ 男性 22 歳・21：ちっちゃい頃、父はずっとイスラームのこと教えてたんですけど、僕らの話はあんま聞かへんかった。（……）イスラームの教えをきつく言われるから親が嫌いだとかじゃなくて、それ以外の話を親がしないから親が嫌いだってなる。

子は親との会話を望んでおり、また親に愛され理解されたいと切に願っている。子が信仰を維持することを望むのであれば、実践の強要ではなく、良好な親子関係を築くことに注力すべきであろう。調査協力者には、半構造化面接の最後の質問として、「親世代に伝えたいこと」を尋ねてきたが、その回答は一般論として語られながらも、実は自身の親に対する切実な訴えであることが多く、示唆に富む。それらの語りから、内容が重ならないもの10件を以下に引用して本節を終えることにする。

- ・子どもを理解してあげて、押しつけたらぐれるから。わからないなら調べて教えてほしい、結論だけ言われても納得できないし。（マライカ 女性 16 歳・38）
- ・子にわかるように少しでも説明してほしい。親が育った場所と子が育つ場所が違うことを理解すべき。（ウセイド 男性 19 歳・11）
- ・絶対に強要しないで。いくら口で説明してもわからないんだから。子どもがイスラーム

- ムいいと思える環境を用意してあげてほしい。(ナジュマ 女性 24 歳・67)
- ・強制や、イスラームが嫌だと思わせてしまうようなハラームな教育をしていないか確認しましょう。子どもに質問されたことは 1 から 10 まで答えるか一緒に調べてください。(マイサ 女性 24 歳・71)
- ・子どもの気持ちも考えてゆっくり教えてほしいと思います。ただ子どもは親のことを聞けとかじゃなくて、親も子どものことを聞けみたいな、お互い分かり合うことも大事だと思います。(アリーバ 女性 25 歳・68)
- ・イスラームの話をする前に子どもとの関係が重要。自分にとって受け容れがたいものを理解してもらうためには親子の関係をフレンドリーにすべき。子どもを理解してあげてほしい。(フスナ 女性 26 歳・69)
- ・やはりドゥアの力は計り知れないので、ドゥアを沢山して欲しいです。完璧な親は居ません。今、一番悪い方法で子どもにイスラームを伝えているかもしれません。でも、どうなるかはアッラー次第です。ドゥアは本当に大切だと思います。そして最後に、自分の子どもに自分が子どものことを愛していると伝えてください。それも子どもの支えになると思います。(ユースフ 男性 21 歳・15)
- ・本当に神を信じているのなら、目の前の結果に喜んだり落胆したりしないで神の計画を信じて待ってください。神の計画が一番ベストなもの、ちゃんとストーリーが決まっている、急に来る。人間の目で見て善し悪しを決めずに、長い目で見たらいい。(ガフル 男性 28 歳・31)
- ・子どもを愛することが大事、見守る姿勢が大事。(ヒナ 女性 20 歳・53)
- ・イスラーム抜きでも子どもを愛することを忘れないでほしい。(スレイマン 男性 25 歳・30)

5 小括

すでに論じてきた通り、第二世代の背景はさまざまであり、宗教継承が行われる家庭もあればそうでない家庭もある。後者においては、〈ムスリムであること〉にまつわる葛藤はないが、前者においては、知識を伴った実践の継承が行われる場合と、実践のみに偏った継承が行われる家庭がある。さらに家庭によって、食の禁忌や服装規定、行動制限などの基準はさまざまであり、実践に従う際に子が感じる負担の度合いにも違いがある。こうしたいくつかの要因が複雑に混ざり合って、第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方が決定されるが、その向き合い方は固定されたものではなく、成長の過程で時間的な変容がみられる。

そこで本章では、5 人の第二世代の生きられたイスラームの経験を詳細に観察することで、かれらが成長の過程でどのような問題や葛藤を抱え、どのように〈ムスリムであること〉に向きあうのかをみてきた。かれらのうち 3 人は家庭でイスラームの知識をほとんど継承されずに育っているが、2 人（アスマ、アリフ）は青年期のある時期まで親の課す宗教実践に

従いながらも〈ムスリムであること〉を肯定することができずに葛藤し、どちらも最終調査時点ではこれを否定する生き方を選択しており、実践の強要のゆえにイスラームに強い嫌悪感を抱く者さえいた。もう1人（ダリヤ）はこれとは逆に、実践の強要のない家庭で非ムスリムと変わらない生活をしていたが、幼少期に海外でイスラームの世界観を身につける機会があり、成人してから改めて知識の獲得と実践の習慣化の機会を経て、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する選択をしていた。この最後の事例は、幼少期に身につけたイスラームの知識がムスリムとしての自覚を維持するために大きく影響する可能性を示唆するが、それは別の意味で、イスラームを拒絶しようにもそれがうまくいかずに苦悩する第二世代の背景をも説明する。この事例では、イスラームの知識を豊富に有するがゆえにそれが現実と乖離していることに幻滅し、青年期の途中で〈ムスリムであること〉を否定する立場を宣言していた。しかし、その原因のひとつである親との関係が改善し新たなコミュニティで好意的に受け入れられたことで、葛藤が解消され、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する立場に移行していきことから、模範となりあるいは理解者となる存在もまた、〈ムスリムであること〉への向き合い方に大きな影響を及ぼすといえるだろう。それは家庭で宗教継承が行われなかったもう1人（ディーン）の事例において、〈ムスリムであること〉に無自覚であったところから、同じ背景をもつ第二世代との交わりを通して知識を身につけながら、その自覚を養っていく様子からも明らかである。

これら5人の生きられたイスラームの経験から、イスラームの世界観を含む知識の有無は、その後の〈ムスリムであること〉への向き合い方を左右するといえるだろう。幼少期に身につけた知識はムスリムの自覚の維持につながり、子をムスリムとして育てたいと望む家庭において早期の継承は有意義にはたらく。しかし、それが実践のみに偏ってしまうとムスリムの自覚が育まれないどころか、子の葛藤を深めることになり、ときにイスラーム嫌悪や親子関係の悪化を招く場合がある。むしろ継承が一切行われなくとも、成長してからイスラームを学習する機会をもつことで、葛藤なく〈ムスリムであること〉を肯定する者がいる現実をみるに、実践のみに偏った宗教継承は有害無益であり、そのやり方は見直される必要があるといえまいか。

もう一つ注目すべきは、第二世代にとって模範となりあるいは理解者となる存在の重要性である。5人のうち3人（アスマ、アリフ、ダリヤ）が継承のあり方に違和感を覚え、1人（マイサ）は親だけでなくコミュニティ内の第一世代にも不満を抱いており、ひいてはムスリムへの不信とイスラームへの幻滅につながっていく。さらに、そうした不信や幻滅は、それを共有できる仲間がいるか否かで、問題の受け止め方に差が出る。それは、周囲に理解者や共感者をもたず孤立していた3人（アスマ、アリフ、マイサ）の青年期の葛藤の様子と、そのうちの1人（マイサ）が理解者を得た後にイスラームの受け止め方を大きく変える様子にうかがえるほか、同年代のムスリムが集まるコミュニティによって〈ムスリムであること〉への肯定感を上げていった2人（ディーン、ダリヤ）の経験にも該当する。第一世代との関係において生じた不満に限らず、イスラームに対する疑問を共有し相談できる仲間が

いることは、家庭や学校で疎外感を抱きがちなかれらに精神的な拠り所を提供し、自己のアイデンティティに自信を持つきっかけとなることは間違いない。

本章の前半では、〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を及ぼす要因とその向き合い方の変容する過程を、5人の生きられたイスラームの経験を通して分析したが、第4章および第5章でその語りを引用した他の第二世代の経験にも、同様の経験は程度の差こそあれうかがえる。ムスリムがマイノリティである社会に暮らす以上、第二世代の多くが、同化願望や日本の価値観との衝突、またムスリムへの不信によって、〈ムスリムであること〉に迷いや否定的な感情を抱くことは仕方のないことであるが、ある者はそのために葛藤を深め苦悩し、ある者は良好な親子関係や仲間の存在、また十分な知識の獲得によってこれを克服する。なお、ここでいう「知識」とは、親世代の出身国や地域の文化から切り離された、クルアーンとハディースに基づく知識のことである。そこで示される慈悲や愛に満ちた神の存在と、その神によって創造された世界のあり方や求められる実践の意味を知ることが、現代社会に生きる第二世代が、その社会の価値観とイスラームを矛盾のないものとして両立させるために重要である。とはいえ、現時点で日本語でイスラームの知識を得る機会はほとんどない現状にある。第二世代の健全なアイデンティティ形成のためにも、知識獲得の重要性に鑑みた、日本語での学習環境の整備は早急に進められるべき課題だろう。

〈ムスリムであること〉を肯定する立場を取る者であっても、イスラームの受け容れ方は一様ではない。第一世代が理想とするような、確固としたムスリムの自覚をもち宗教実践を怠らない者以外にも、聞き取りにおいて「ムスリムとしての自覚」を有すると回答した者は実は多い。そのなかには、「認めたくない」と感じながら、いわばあきらめのようにこれを受け容れる者もいれば、礼拝や断食を規定通りに行わないが、「イスラームは嫌いじゃない」と肯定的な意思表示をする者、食の禁忌を破っていることを告白しながら、あるいは服装規定を遵守していなくとも、「見た目はこんなだけど、心はイスラーム」と言う者もいる。それは、先行研究にみられるフランスやイギリスの第二世代が、社会に順応しつつムスリムとしての自覚を維持している様子に重なり、日本に暮らす第二世代もまた、かれらなりに〈ムスリムであること〉と日本人であることを両立させる戦術を手探りしていることがうかがえる。幼い頃から継承されたイスラームは、多くの第二世代のなかに根付いており、仲間の存在や知識の獲得といった環境条件が整えば、これを積極的に受け容れる可能性もある。そうであるなら、親世代は無理な強要を避けて、子への愛情を存分に示し、良好な親子関係を築いていくことが優先されるべきなのではないだろうか。

第7章 総括

1 各章で得られた知見

本研究では、日本に暮らすムスリム第二世代が、外国ルーツの子どもとしてまた宗教と向き合わざるを得ない環境の中で、幼児期・児童期から重層的な周縁化を経験しかつ多様な価値観の中で葛藤を抱えつつ、どのように〈ムスリムであること〉と向き合うのかを論じてきた。

その際の研究の枠組みとして、ヨーロッパのムスリム研究において近年注目される「組織に属さないムスリム (non-organized Muslims)」と「生きられたイスラーム (lived Islam)」という概念を用いた。「組織に属さないムスリム」は、モスクやイスラーム団体といった組織に積極的に関与するムスリムを代表化させてきたこれまでのムスリム研究に対し、そうした組織に依存しないムスリムに注目しようとする視点である。また「生きられたイスラーム」は、教会や宗教行事の外で起こる一般の人々の経験に焦点を当てた、生きられた宗教 (lived religion) の枠組みをムスリムに適用したものである。これもまた、1日5回の礼拝を欠かさない者やスカーフを着用する者など、宗教実践に熱心で超可視的 (hypervisible) なムスリムを対象としてきたこれまでの研究に対し、そこからこぼれ落ちてしまうような個人の宗教性に関心を移そうという試みである。日本のムスリム研究においても同様に、組織を構成するムスリムを研究の対象として、かれらの信仰形態や宗教実践が明らかにされてきたが、組織に属さないムスリムの生きられたイスラームについての研究の蓄積は薄い。また、これまでの日本のムスリム研究が扱ってきたのは主に、1980年代に流入したニューカマー・ムスリムである第一世代についてである。その子どもである第二世代を扱う研究は始まったばかりであり、超可視的な一部の経験しか捉えられてはいない。しかしながら、外国ルーツの子どもに関する諸考察にみられる周縁化の経験や、新宗教における宗教継承に関する問題は第二世代にも重なるものであり、加えてムスリムに対する社会のまなざしは厳しさを増している。こうした現状において、第二世代が家庭や学校でどのような問題を抱え葛藤を克服して〈ムスリムであること〉に向き合うのかを考察するのが本研究の目的であり、第二世代当事者への質的調査によって得られたかれらの生きられたイスラームの経験を第4章から第6章で分析し論じた。各章で得られた知見を以下に整理する。

(1) 家庭環境における第二世代の生きられた経験はどのようなものか

第一に、ムスリムの両親のもとに生まれた子はムスリムとみなされるが、その子が成長して〈ムスリムであること〉を肯定するようになるかどうかは親の育て方にかかっている。そのため多くのムスリム家庭では、子の生後すぐから幼少期にかけて、宗教儀礼が行われイスラーム教育が行われる。親世代の出身国や地域では、アダブ (ハディースに基づいた礼儀作法) の伝授やクルアーン学習、礼拝の習慣化のために、マドラサ (イスラームを学ぶ塾) が

一翼を担い、また小学校でもイスラームに関する知識がその世界観を含めて伝授されるが、そうした社会資源を利用できない日本では、子へのイスラーム教育はすべて親がその責を負わなければならない。しかし、第一世代である親たちには踏襲すべき先例がなく、それぞれに試行錯誤を繰り返していた。

第二に、そうした試行錯誤の様子を第二世代への量的調査の自由記述欄に書かれた経験から検討するに、礼拝やクルアーン学習のほか、食の禁忌や服装規定に関する実践の継承が行われていることは多くの回答に共通していた。そのなかには、実践の継承が強引に進められることへの抵抗感と、それに従うことで周囲との差異を意識せざるを得ないことへの戸惑いを抱える者がいる。だが一方で、同じように実践の継承が行われながらも、なぜそれをすべきなのか、なぜしてはいけないのかといった説明が示されて育った第二世代は〈ムスリムであること〉に否定的な感情を抱きにくい。つまり、日本のムスリム家庭で行われるイスラーム教育のやり方には、知識を伴う継承とそうでない継承の二通りあり、それが、第二世代のムスリムとしての自覚に影響を及ぼす可能性は大きいと考えられる。

第三に、質的調査によって得られた経験についての語りからは、3～4歳でクルアーン学習や礼拝の習慣化のための継承が行われる家庭もあれば、子が成長してから急に熱心に始められる家庭もあり、特に後者の場合、子の戸惑いは大きい。また、語りのなかには、十分な説明なしに実践のみを強要する外国人父が頻繁に登場するが、日本で育つ子にとっては周りの誰もやっていないことを、イスラームの世界観を理解しないまま従うことは難しい。子はその実践の意味を問うが、親の言語的ハンディキャップのせいで「ムスリムだから」「イスラームではそう決まっているから」といった簡単な説明しか得られないことに不満を抱く。その一方で、夜の家族団らんの時間を知識の継承に充てる外国人父や、日中子供と過ごす時間の中で身近な事象を通してイスラームの世界観を伝える外国人母の努力によって、継承に葛藤を抱えない事例もみられた。これらの生きられた経験から、子が〈ムスリムであること〉を肯定的に受け容れられる継承には、イスラームの世界観を含めた知識の伝授と、それが早期に始められること、そのための時間的な余裕と支障なく意思疎通するための言語能力とが必要であることが明らかである。ただしこれらの条件が叶わない場合には、海外のリソースを利用することも有効である。

第四に、外国人親の中には子を取り巻く環境を理解せず、日本ではかなり極端と思われるような出身国や地域の文化を押し付ける者がいる。それでも親を悲しませたくない、がっかりさせたくないと思う子は、実践の意味を理解できなくとも親の愛情を求めて無理をするが、級友らの行動にみられる日本の価値観と異なる自身の家庭の価値観に悩み、そこで感じる不自由さをすなわちイスラームだと考えて、内心では〈ムスリムであること〉に抵抗を感じることがある。だがそうした子の葛藤に気づけない親は、有無を言わせぬやり方でさらなる実践を強要し、子がそれに従うのを見て宗教継承に成功していると満足する。ここに親子の意識のずれがある。さらに、初めての宗教継承に試行錯誤を重ねる親にとって、第一子への実践の強要は厳しくなりがちであるが、我が子の来世での幸福を願って宗教継承をした

つものの親には、自由度の高い生活を送る弟や妹そしてそれを許す親を恨めしく思う第一子の気持ちは伝わりにくい。なかには、親の目が届かないところではイスラームと関わりのない生活をしながらも、親の愛情を失いたくないためにムスリムのふりをする者も少なくなく、そうした二重生活が、〈自分とは何者か〉を問う青年期にアイデンティティの混乱を招き、それが不登校や非行、精神疾患の誘因ともなりうる。子は常に親の愛情を求めている、もちろん親も子の幸せを願っている、それにもかかわらずこれらが交わらないのは、子を幸せにするには宗教継承が欠かせないという、ムスリムマジョリティ社会の当たり前が親の意識にあるからだと思われる。

第五に、そうしたなか、日本人母が、子と外国人父の仲介役を果たす事例が複数みられる。日本でムスリムとして生活することへの葛藤を経験した日本人母だからこそ、子の良き理解者となりうるのだろう。子は日本で社会化する第二世代であり、かれらを取り巻く環境は、親世代の誰も経験したことのないものである。かれらの懊悩を軽減するためには、親が子を取り巻く環境を理解し、子がムスリムであるかそうでないかにかかわらず、受け入れる姿勢を示すことが重要である。

(2) 学校生活における第二世代の生きられた経験はどのようなものか

第一に、日本の学校教育において、イスラームの説明に十分な時間が割かれることは難しく、主にメディアを通して形成されたイスラームの否定的なイメージは、事件とは無関係の圧倒的多数のムスリムに対して強い恐怖感や嫌悪感を抱かせる。ヨーロッパの先行研究では、顔の見えない想像上のムスリムという移民集団に対する憎悪と排除が移民第二世代に幻滅と怒りを抱かせ、その一部の者が非行や暴力に走るといった現実がみられたが、日本がその轍を踏まないためにも、学校教育の場で一部の過激派集団をイスラーム全体と区別する授業が行われる必要がある。

第二に、量的調査の回答から、学校生活のなかで外国ルーツそして宗教的背景による級友からの誹謗中傷などによる不快な経験をする第二世代は、高等学校より中学校で、中学校より小学校で多いことがわかった。またその自由記述欄からは、かれらがそうした学校で排除される経験を「ありきたり」で「当たり前」のものと捉えていることも示された。なお第二世代は、級友からの排除によって傷つくだけでなく、教員の基本的な知識不足と配慮のなさによっても教室での居心地の悪さを感じる経験をしていた。

第三に、質的調査によって得られた外国にルーツを持つことによる排除の経験からは、男女にかかわらず陰口や無視がみられる一方、男子からは身体的な攻撃についての語りも複数みられた。こうした排除の経験を重ねた第二世代のなかには、日本人らしい外見に近づきたいと願い、日本人らしく振る舞おうと内面的な同調を図ることで周縁化を回避しようとする者がいる。さらに、一部の過激派集団とイスラームを混同した偏見による排除を経験したという語りも非常に多く語られ、これを回避するために、自身がムスリムであることを隠しあるいはムスリムであることを連想されないよう出自を偽る第二世代もいる。自身のル

ーツを偽り隠すことは、かれらのアイデンティティを不確実にし、〈自分とは何者か〉という問いに答えを見出すことを困難にする。

第四に、質的調査によって得られた宗教的背景による排除の経験からは、食の禁忌や服装規定にまつわるからかいやいじめについての語りが数多く聞かれたほか、そうした周囲との差異がもたらす疎外感に悩む様子も複数語られた。一部の家庭では、出身国や地域の文化を宗教的義務と混同した行動制限が課されることもあり、学校生活を送る上で周囲との差異を意識せざるを得ない行動制限もあり、級友に許されていることを禁止され級友がしていないことを強要され続けることに、かれらは大きな葛藤を抱く。家庭によっては、そうしたいくつもの制限に納得できる説明が示されず、ただ「イスラームだから」という理由で課される場合も珍しくない。すでにさまざまな場面で周囲との差異を意識し、排除の経験を重ねてきた第二世代にとっては、これに従うことは大きな負担であり、同化願望を阻害するものとしてのイスラームを嫌悪する者がいる。

第五に、級友からのからかいやいじめに悩まされる第二世代にとって、学校現場で最も頼りになるはずの存在は教員である。だが実際には、教員自身がムスリムへの偏見にとらわれている場合は少なくなく、例えば、時事問題を扱う授業で一部の過激派集団とイスラーム全体の区別をすることなく事件を扱ってさらに誤解を広めた事例や、教室内のムスリム生徒に無頓着な授業によって過激派集団の事件の責を第二世代が一身に負うかたちになってしまった事例がある。頼りになるはずの教員から助けの手が差し伸べられない場合、ムスリム生徒は逃げ場のない教室で居心地の悪さに耐えなければならず、そこでの不快な経験をきっかけに不登校になる者もいる。その一方で、学校現場でムスリム生徒への差別的言動が起これないよう注意喚起をする自治体や、ムスリム生徒への配慮をする学校もある。そうした学校の教員からは、ムスリム生徒を特別扱いするのではなく、個々のムスリム生徒の違いをごく自然に受け入れている様子とマイノリティが排除されない気遣いが感じられる。こうした環境が各地の学校に整っていくなら、第二世代を含めさまざまなマイノリティが周縁化に悩むことなく、居心地良く過ごせる学校生活が実現するだろう。

(3) 第二世代は〈ムスリムであること〉にどう向き合うのか

第一に、5人の第二世代の生きられたイスラームの経験に焦点を当てることで、〈ムスリムであること〉への向き合い方は人によってそれぞれ異なり、また一人の生きられた経験のなかでもその向き合い方は変容していくことが明らかになった。まず、宗教継承が行われる家庭とそうでない家庭があり、さらに前者においては、知識を伴った実践の継承が行われる場合と、実践のみに偏った継承が行われる家庭がある。また、そこで継承される実践の基準も家庭によって異なるため、子がこれに従う際の負担の度合いにも違いがある。それらの要因が複雑に混ざり合い、第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方は変容していく。

第二に、知識を伴わず実践に偏った継承が行われた者は、青年期のある時期まで実践に従いながらもイスラームを受け容れられずに葛藤し、最終的にこれを否定する生き方を選択

していた。また、実践を強要された者がイスラームに強い嫌悪感を抱くのに対して、実践の強要がなかった者は、青年期の途中で迷いは見られたものの、最終的には〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する選択をしていた。その選択に影響を及ぼしたきっかけとして、ひとつには知識の獲得と実践の習慣化の機会を得たこと、もうひとつは迷いの原因となった親を含む第一世代との関係の改善があった。かれらの生きられたイスラームの経験からみえるのは、実践の強要がかえって子をイスラームから遠ざけること、そして十分な知識と理解者の存在が〈ムスリムであること〉を肯定する後押しになるということである。

第三に、5人の生きられたイスラームの経験から得られた〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を及ぼす要因と、その向き合い方の変容する過程は、他の第二世代の語りのなかにも程度の差こそあれうかがうことができることを確認した。青年期の初めには、〈ムスリムであること〉に迷いや否定的な感情を抱く者は多いが、これを肯定するための要因に触れる機会のないまま青年期の後半から成人期にかけて、迷いがはっきりと否定の感情に変わる者もいる。その一方で、良好な親子関係や共通する背景を持つ仲間の存在によって、これを積極的に肯定する立場に変わっていく事例もある。なかでも知識の獲得は、親世代から継承されたイスラームを文化から切り離すために有効であり、それによって日本社会の価値観とイスラームを矛盾のないものとして両立させることで、〈ムスリムであること〉を肯定的に捉えるきっかけとなりうる。

第四に、ムスリムとしての自覚をもつ第二世代は、親世代が危機感を抱くほど少ないわけではないことを確認した。聞き取りにおいて「ムスリムとしての自覚」を有すると回答した者は実は多く、確固としたムスリムの自覚をもたずとも、あるいは宗教実践を遵守していかなくとも、幼い頃から継承されたイスラームはかれらのなかに根付いていると考えられる。知識の獲得や仲間の存在といった環境条件が整えば、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する可能性もあり、そうであるなら、親世代は無理な強要を避けて良好な親子関係を築いていくことが優先されるべきであろう。

2 研究の目的を振り返って

本研究の目的は、第二世代の生きられたイスラームの経験を通して、かれらが家庭や学校でどのような問題を抱え、〈ムスリムであること〉にどう向き合うのかを検討することであった。これに対する答えを簡潔にまとめる。

多くのムスリム家庭では早期から宗教継承が行われるが、第一世代である親たちには踏襲すべき先例がなく、それぞれの試行錯誤が奏功する場合もあれば、子の葛藤を深める結果となる場合もある。特に、時間的な余裕や支障なく意思疎通するための言語能力の不足から十分な説明が施されず、実践に偏った継承が行われる家庭は少なくなく、日本の価値観と異なる自身の家庭の価値観に悩みながらも、親の愛情を求めて無理をする第二世代の葛藤は大きい。

学校でさまざまな周縁化を経験する第二世代は強い同化願望を抱きやすく、それゆえに

級友らの前ではムスリムであることを隠し、ルーツを偽り、宗教的禁忌を破ってみせるなど、周囲への同調にせいっぱいの苦心をする者がいる。だが家庭では、学校でのふるまいを隠し、宗教実践に従い良きムスリムを演じる。家庭でムスリムのふりをする子の葛藤に気づけない親は、宗教継承に成功していると満足し、さらなる実践を強要することさえあり、二重生活によってアイデンティティに混乱が生じた第二世代の懊悩はより深くなる。こうした親子の意識のずれを解消するためには、親が子を取り巻く環境を理解し、子がムスリムであるかそうでないかにかかわらず、受け入れる姿勢を示すことが重要である。

学校での周縁化の理由は、外見的な差異や宗教的背景による差異のほか、一部の過激派集団との混同が引き起こしたスティグマによる排除もある。級友によるからかいやいじめ、またときに悪質ないたづらを日常的に経験する第二世代にとって、教員は最も頼りになるはずの存在である。しかし、教員自身がムスリムへの偏見にとらわれている場合、ムスリム児童・生徒は逃げ場のない教室で居心地の悪さに耐えなければならない。その一方で、配慮ある教員によって学校生活を楽しめた第二世代もいる。ムスリム生徒受け入れに成功している学校現場では、ステレオタイプの過剰な対応ではなく個人に向き合うことの重要性と、マイノリティの生徒たちを排除の経験から救うための配慮が教員から語られる。こうした環境が各地の学校に整っていくなら、第二世代に限らずさまざまなマイノリティが居心地良く過ごせる学校生活が実現するだろう。

こうした家庭や学校での経験は、第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方に影響を及ぼす。家庭で十分な知識の継承が行われた者はこれに迷うことはあまりなく、反対に実践に偏った継承が行われた者は、それが学校生活を送るなかで同化を阻害するものだという意識を募らせ、〈ムスリムであること〉に迷いや否定的な感情を抱きやすい。こうした感情を解消するきっかけのないまま成長する者は、青年期の後半から成人期にかけて、イスラームを積極的に否定する立場をとりやすく、その一方で、良好な親子関係や仲間の存在、また宗教知識の獲得といったきっかけを通して、〈ムスリムであること〉を自身のアイデンティティとして捉え直し、これを積極的に引き受ける立場に変容する者もいる。

あるいはそこまで積極的な態度を示さなくとも、いわばあきらめのような肯定のし方をする者や、宗教実践が伴わないために第一世代から「ムスリムとしてのアイデンティティ」を失ったようにみえる者もいる。それでもかれらが唯一の神の存在を真実と認め心のうちで信仰を維持し続けている以上、かれらがムスリムであることは間違いない。こうした消極的なかたちでイスラームを受け容れることは、マイノリティとして日本社会に順応して生き抜くためのかれらなりの戦術であり、おそらくは、そういう〈ムスリムであること〉への向き合い方を選択する第二世代の数は多いと思われる。

そうだとすれば、子が幼いうちから家庭で施されるイスラーム教育は無意味ではない。ここでいうイスラーム教育とは、イスラームの世界観を含めた知識の継承であり、第二世代の青年期の葛藤を深めないためにも、実践のみに偏った形骸化したイスラームの継承と区別されることが理想的だろう。さらに付け加えるなら、子は親に愛され理解されたいと切に願

っている。子が信仰を維持することを望むのであれば、親は良好な親子関係を築くことに注力すべきであろう。

3 研究の意義

次に研究の意義を述べる。本研究の学術的意義は、①マイノリティとして日本社会を生き抜く第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方の諸相を明らかにしたことである。加えて新規性として、②研究の対象、③調査の対象、④分析の枠組み、⑤二人称的視点の4点を挙げ、さらに関連する⑥外国ルーツの子どもに関する研究、⑦教育学における教室経営や教材研究、⑧新宗教研究における宗教継承問題、⑨ヨーロッパのムスリム移民研究にも新たな知見を提供しうる点も学術的意義に加えたい。また、本研究は問題の発見に留まらず問題解決を志向するものであり、⑩日本政府の「第二世代対策」の見直し、⑪理解者を増やすことによる共生の可能性、を社会的な意義として挙げたい。これらについて、以下に整理する。

① 第一に、マイノリティとして日本社会に生きる第二世代の〈ムスリムであること〉への向き合い方は多様である。かれらは、家庭で継承される宗教規範と社会化の過程で身につける日本の価値観との間で葛藤を抱えやすく、この葛藤を乗り越えられるか否かが、〈ムスリムであること〉を積極的に肯定するか否定するか立場を大きく分ける。なお〈ムスリムであること〉を肯定する者のなかには、日常的な礼拝や断食、服装規定や食の禁忌を守るといった宗教実践のいずれかあるいはすべてを遵守しない者相当数もいる。そのあり方は、第一世代からみた理想の第二世代像、あるいは社会からまなざされる典型的なムスリム像からかけ離れているが、それでもムスリムの自覚をもつ以上、かれらは「神の目から見てムスリム」である。同様の事例はヨーロッパの先行研究にもみられることから (DeHanas 2013; 山下 2018; 安達 2020)、これはムスリムがマイノリティである社会に暮らす第二世代の、社会に順応するための戦術であるといえるだろう。

② 第二に、日本のムスリム研究がこれまで対象としてきたのは、主にニューカマー・ムスリムといわれる第一世代であり、その来日に至る各国のプッシュ要因から来日後の生活、ネットワーク作り、モスク設立の動向、結婚と子育て、ハラール、墓地などさまざまな側面から扱われて現在に至る。これに対して、第二世代を対象とした研究は、かれらの成長を待つてようやく始まったところであり、第一世代研究のような多角的な調査や考察は進んでいない。したがって、第二世代を研究の対象とすることは、日本のムスリム研究の裾野を広げる新たな試みといえる。本研究が行った75人への質的調査と、103人分の量的調査および6年分の参与観察によって得られたデータは、始まったばかりの第二世代研究に新たな事例を提供するものである。

③ 第三に、研究の場で第二世代当事者の声が拾い上げられるようになったのは2015年以降のことであるが (岡井ほか編 2015; 岡井・店田編 2019a, 2019b など)、そこで調査の対象とされた第二世代は〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する者が中心であり、十分

な分析が行われていない。また第二世代に関して既発表の論考は、筆者によるもの（クレシ 2021b, 2022, 2024a, 2024b; 大形ほか 2023）を除いて、親の国籍や〈ムスリムであること〉への向き合い方に些かの偏りがみられる。それらは第二世代の現実の一部ではあるが、ここから日本の第二世代像を描くことは適当ではない。本研究は、親の国籍はもちろん、年齢、性別、〈ムスリムであること〉への向き合い方がさまざまな第二世代を調査の対象としている。第二世代の多様性を鑑みるに、これまで一部分しか描かれてこなかった第二世代像をより現実近づけることに貢献できたといえよう。

④ 第四に、モスクやイスラーム団体といったコミュニティを出発点にしてきたこれまでのムスリム研究では、そうしたコミュニティを構成する活動的な人々が代表化されがちであった。しかし、神と人間が「垂直的關係に成立する」（井筒 1979:215）イスラームでは、コミュニティを介在させずに信仰や実践を維持する人々の方が実は多い。ヨーロッパではすでに、「組織に属さないムスリム」（Jeldtoft 2011）を対象に、その「生きられたイスラーム」（Dessing et al. eds. 2013）が注目されつつあるが、この枠組みは日本ではまだ一般的ではなく、組織に属さない日本人女性改宗者に関する論考（安達 2017）があるのみである。本研究は、これに続くものであり、コミュニティを利用することが少ない第二世代の日々の経験に焦点を当てたものとしては本邦初のものである。〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する者だけでなく、これに迷いや否定的な感情を抱く者、消極的に肯定する者をも視野に入れて、その生きられたイスラームを描いたことで、日本の第二世代研究の空白の大きな部分を埋めることができたと考える。

⑤ 第五に、筆者が日本人改宗者でありまた第二世代を育てる母である点に関して、研究の対象と極めて近い背景をもつことで、客観性への疑念という批判を受けることは承知しつつも、あえて「二人称的視点」（諏訪 2015, 2020）による研究の利点を主張したい。調査において語り手は「語りを生産する演技者」（桜井 2005:38）であり、なかでもスティグマのある者は「人に与える印象について自意識を働かせ計算づくにならなくてはならない」（Goffman 1963=2016:34）から、聞き手が異なればその自己呈示も異なって当然である。そうであるなら、本研究の調査協力者が筆者にみせた自己呈示は、同じ境遇にある者に対して、あるいは親世代に向けて計算されたものであると考えられ、それは三人称視点の研究者にみせるのとはまったく別のものであることは間違いない。したがって、筆者が「二人称的（共感的）かわり」を通して受け止めたかれらの自己呈示は、これまで誰も描くことができなかった新たな側面であり、これらを明らかにし分析した本研究によって、日本の第二世代像の解像度が一段と高まったといえるだろう。

⑥ 第六に、外国ルーツの子どもの周縁化の経験は、いわゆる「ハーフ」やニューカマー第二世代に関する研究でも頻繁に取り上げられてきた。その原因として、外見的な差異や特定のエスニック集団へのステレオタイプに注目されがちだが、本研究はこれに加えて、宗教的背景による差異に起因する排除や差別の実態を示した。また、特定のエスニック集団に向けられる排除や差別のまなざしによって、自身のルーツに疎外感を抱く経験は第二世代

にも共通するものであり、これを乗り越える過程をいくつかの事例をもって示すことができた。

⑦ 第七に、さらにそうした排除や差別は、児童・生徒間のみならず教員の偏見によって教室内でも起こりうること、またメディアによって拡散される一部の過激派集団とイスラームとを混同するような誤解は、社会科の授業において十分に正されていないことを、質的調査と量的調査の結果をもって示した。これらは、教育学における教室経営や教材研究に新たな問題提起をするものである。

⑧ 第八に、昨今取り沙汰される「宗教2世」問題は、新宗教においては教団による圧力がある点でイスラームと構造的な違いがあるものの、親からの実践の強要に苦しむその姿に自らを重ねる第二世代がいることも事実である。新宗教研究の側からムスリム家庭における宗教継承の参照はいまだ行われていないが、日本国憲法で保障された¹³¹「信仰しない自由」を選択しにくい家庭環境のもとで子が葛藤するという状況は相似しており、これを乗り越えた第二世代の事例は、新宗教研究における宗教継承を考察するうえで十分に有益な情報を含むと考える。

⑨ 第九に、本研究はヨーロッパの移民第二世代研究にも貢献しうると考える。第一世代の来日と定住は、ヨーロッパにおけるそれより約20年遅れて始まり、その過程はカースルズとミラーの移民の定住過程のモデルに沿って（Castles & Miller 1998: 28）、ほぼ同じように進行しており、またムスリムが否定的まなざしを向けられる点も共通している。しかし、かれらの抱える社会への幻滅や怒りが、2000年代にヨーロッパ各地でテロ事件を引き起こした状況は¹³²、そこから20年が過ぎた日本では少なくとも現時点でみられない。この違いが、日本の第二世代を取り巻く状況によるものであるとしたら、かれらの現状を論じた本研究は、ヨーロッパのムスリム移民研究に有益な知見を提供しうるのはないだろうか。

⑩ 第十に、前述の2000年代のヨーロッパで相次いだテロ事件が日本政府の「ホームグロウンテロリスト」への警戒感を高め、すべての第二世代は「ホームグロウンテロリストの脅威になりうる存在」として、監視対象にされている現実がある（第三書館 2010: 375-6）。当時の公安が策定した「第二世代対策」はヨーロッパの移民第二世代の現状分析を参考としたものと思われるが、日本の第二世代の抱える問題がヨーロッパの移民第二世代の現状をそのまま映すものではない以上、これまでの網羅的な実態把握や監視といった強権的な対策は見直されるべきだろう。これまで明らかにされてこなかった日本の第二世代の現状を明らかにした本研究は、公安にとっても、より日本の実態に即した新たな対策を考えるきっかけとなるはずである。

⑪ 第十一に、ヨーロッパで「ホームグロウン・テロリストが生み出された背景には、構造的排除の問題がある」（石川 2024: 242）という指摘にしたがえば、移民第二世代が「幻

¹³¹ 憲法第20条1項前段および第19条。

¹³² 前掲注24を参照。

滅と怒り」を抱くような「社会的な排除の圧力」(宮島 2016: 259)が日本社会に広がることは阻止されなければならない。そのためには、ムスリムへの否定的なまなざしがいつかヨーロッパのようなムスリムへの憎悪に発展しないよう、共生が進められていくべきだろう。そのために必要なのは、マジョリティ側がマイノリティの孤独や不満を理解する視点を持つことであり(ハタノ 2011: 144)、これまでなかなか表に出ることがなかった第二世代の経験を明らかにした本研究は、理解者・共感者を増やし共に生きる社会を築くために有効である。

4 研究の限界と今後の課題

前節で、①研究の対象、②調査の対象、③二人称的視点について、その新規性を学術的意義に数えたが、これらに関連して今後の課題とすべきことを付言する。さらに、④親の国籍による分析、⑤知識の獲得に関する詳細、⑥信仰の内容に関する詳細、⑦日本で子育てする第一世代の生きられたイスラームについては、論じるためのデータが十分ではないことから、また、⑧社会生活における経験の分析、⑨イスラーム学校に関する議論については、時期尚早の理由で扱うことができなかった。これらについて以下に整理する。

① 第一に、本研究は第二世代を対象として、かれらに向けられる社会のまなざしやかれらの抱える葛藤を描いてきたが、こうした経験は第二世代のみに固有のものではない。外国ルーツの子どもたちや宗教 2 世のおかれた状況は、関連研究として第 1 章で言及したが、これら比較的新しい問題が顕在化する以前から、「日本人(ヤマトンチュ・和人)による在日コリアン、アイヌ民族、琉球・沖縄に対するオリエンタリズムの視線は継続している」(塩原 2012: 52)ことは紛れもない事実である。異質性をもった者には「同化」を要求し、それができない者には不寛容であるという日本社会のあり方は、「“日本は同質的社会だ”という言説には、“日本は同質的社会であるべきだ”という価値観がセットになっている」(福岡 1993: 15)ことによるのだろう。したがって、第二世代を含め外国ルーツの子どもたちや宗教 2 世などに向けられる否定的なまなざしは決して新しいものではなく、出自の違いにまつわる偏見のなかで日本人への「同化」を迫られ葛藤を抱えるさまざまなマイノリティの子どもたちは、これまでも数多く存在してきたに違いない。かれらに関するこれまでの議論を十分に尽くすことなく、またかれらの抱える問題との接続に言及する余裕がなかったことを、本研究の限界として意識しつつ今後の課題とすべきと考える。

②第二に、本研究はさまざまな背景をもつ第二世代に調査の対象を広げることで、その多様性を明らかにしてきたが、これをもって第二世代の全体像を描くわけにはいかない。調査協力者の語りはいずれもかれらに固有の経験を示すものにすぎず、既存のムスリム研究が抱える「代表性問題」(岡井 2024: 126)を解決するものではない。だが質的調査としては、個々の生きられたイスラームの経験はすべて貴重なものであり、これまで描かれてきた第二世代像の偏りをいくらかでも修正できたことの意義は大きいと考える。

③第三に、二人称視点による研究の利点を主張しつつも、聞き手の属性が語り手に何らか

の影響を与えるであろう限界について意識的でなければならない。親世代の一人であるという筆者の属性は、共感を求める者には打ち明けやすい状況づくりに奏功する反面、それによって思いや経験を言葉にすることを躊躇した者がいる可能性を否定はできない。別の属性をもつ二人称視点にも同様の死角は生じうるものであり、それは、聞き手が対象に近い背景をもつがゆえに生じる限界といえるかもしれない。したがって、二人称視点が三人称視点や一人称視点と比べて優れているというつもりは毛頭なく、語り手は常に自己防衛的な「状況操作や演技」(桜井 2002: 30)をするものであるから、いずれがより対象の実態を正しく引き出せるかを議論することは無価値である。それよりむしろ、立場や属性の異なる聞き手に対して呈示された部分と部分を接ぎ合わせることで、相補的に実態に近づくことができると考える方が妥当だろう。よって本研究がその積み上げに貢献した第二世代の生きられたイスラームの事例は、親世代の一人という属性からの二人称視点だからこそ引き出せたものとして、三人称視点や一人称視点あるいは別の属性による二人称視点を補い、これから本格化するはずの第二世代研究に貢献するものである。

④第四に、調査データを分析する過程で気づいた点をいくつか言及する。まず、質的調査における第二世代の語りのなかで、抗議や非難の対象として頻繁に登場するのは外国人父だということである。外国人母に対して非難に類する発言があったのは 4 人(外国人母をもつ者の 16%)、日本人母に対しては 1 人(日本人母をもつ者の 2%)、日本人父に対しては 0 人であったことに比べると、その差は顕著である。外国人母や日本人父についての語りそのものが少ない(それぞれ 25 人と 7 人)ということもあるだろうが、親との対立の構図はほぼ外国人父との間にあるという、いったんの仮説を立てることができる。その理由として、③に述べたように、聞き手の属性が日本人母であることが語り手になんらかの影響を及ぼした可能性は否定できず、ほかに、日本人母は継承に熱心でないこと、日中子と過ごす時間の多い母の継承のやり方が父と大きく違うこと、またイスラームの母親観¹³³がその背景にあることなど、いくつか推察することができる。これを検証するためには、外国人母をもつ者と日本人父をもつ者のデータをさらに集めること、宗教継承のやり方に関するより詳しい調査を行う必要があるだろう。

これに関連して、質的調査と量的調査において調査協力者の親の組み合わせとして、それぞれ、親の一方が外国人である者 53 人と 70 人(70.7%と 67.0%)、両親ともに外国人であ

¹³³ イスラームにおいては、母親を大切にすることが繰り返し説かれており、それは天国に入るための絶対条件と考えられている。例えばハディースには、「アブー・フライラは、次のように伝えている。一人の男が『アッラーの使徒よ、誰に一番つくすべきでしょうか?』と言った。すると預言者は次のように言った。あなたの母親です。その次もあなたの母親です。またその次もあなたの母親です。そしてその次はあなたの父親です。それからあなたの血縁に近い人の順です。(ムスリム)」(磯崎ほか訳 1989: 511)とある。

る者 20 人と 28 人 (26.7%と 26.2%)、両親ともに日本人である者 2 人と 4 人 (2.7%と 3.9%) であった。両調査を比べる限りその割合に大差はないが、先行研究における国内のムスリム家庭の構成はそれぞれ 59%、38%、3%と示されており¹³⁴、これに照らすと、本研究の調査では、親の一方が外国人である者が実態よりかなり多く、両親ともに外国人である者が実態を下回っていることになる。ここから考えられるのは、先行研究に示された 2016 年末の構成比が (店田 2018: 116) その後 10 年弱の間に变化した可能性と、本研究の調査協力者へのアクセス方法に限界があったために実態を正しく反映できなかった可能性である。今後さらなる調査を進める際の検討課題とすべき点である。

親の国籍についてはもう一点、地域によって家庭での経験に関して共通する内容がみられた。例えば、南アジア地域出身の父をもつ者に父権制の影響に関する語りが集中する一方で、東南アジア地域出身の母をもつ者から十分な宗教知識を継承されたという語りが複数聞かれた。本論文では、人物の特定を避けるため、発言者の親の国籍情報を伏せたために、調査協力者の葛藤と親の出身地との関連性が推察できる場合でも、それに言及できないという限界があった。出身国ごとの特徴を分析するためには、同じ国籍の親をもつ者のデータを一定数集める必要があるだろう。

また第 3 章で述べた通り、量的調査の拡散の過程で一部にムスリムコミュニティの協力があったため、回答者が〈ムスリムであること〉を積極的に肯定する者に偏る結果となってしまう、そこで得られた数値的なデータを、日本に暮らす第二世代全体の意識の傾向を推測するために用いることを控えざるを得なかった。知見のさらなる精緻化のためには、調査協力者へのアクセス方法を再検討すべきと考える。

⑤ 第五に、イスラームの知識の獲得が、親世代が依拠する文化や伝統から宗教を切り離すことに有効であることを、本論文では繰り返してきた。だが調査の時点では、知識の獲得の重要性に気づいていなかったため、半構造化面接の設問にこれに関した問いを含めていない。イスラームの知識を日本語で身につける機会はほとんどない現状において、日本語以外の言語を媒介語として知識獲得の機会を得た第二世代の経験は貴重である。今後かれらを対象として、学習の内容や期間、使用言語、学習以前と以後の変化、そうしたリソースへのアクセス方法などの詳細を調査し、本研究を通して改めて発見できた問題に向き合いたい。

⑥ 第六に、本論文には第二世代が神をどう捉えるかといった信仰の内容に関する記述はない。それは本研究の初めの段階では、〈ムスリムであること〉を否定する第二世代が圧倒的に多いはずだという仮説によって、半構造化面接の設問を否定する要因を探ることを目的に組み立てたことによる。研究を進めるうちに、ムスリムとしての自覚を有する第二世代が意外に多いことが明らかとなったが、かれらの信仰がどのようなものであるかを尋ねることを怠ったまま調査を終了した。今後は改めて、第二世代がどのように神と対峙している

¹³⁴ 前掲注 3 を参照。

かの語りを集めることで、第一世代の信仰のあり方と比較し、日本におけるイスラームの様相を論じていきたい。

⑦第七に、本論文では第二世代の語りを中心に論じてきたために、第一世代の語りの引用は限定的となってしまう。第二世代の成長過程を通して、かれらの身近で常に強い影響を与えていた親の視点にも注目すべきであったと反省する。例えば、親の強引な宗教継承のしかたを第二世代の葛藤を深める要因の一つに挙げたが、第一世代の視点からみればそれは、非イスラーム圏の日本で我が子を良きムスリムに育てるための親としての奮闘である。第二世代の生きられた経験がこれまで描かれてこなかったと同様に、そうした親としての第一世代の経験を扱う研究もいまだ十分に進められてはいない。踏襲すべき先例がないなか試行錯誤を繰り返すかれらの様子を知るとは、第二世代の家庭での経験をさらに理解する助けになり、また次の世代の子育ての指針を示すものともなりうる。前述の通り、これまでも第一世代については多方面からの研究が行われているが、子育てに関する詳細な研究はまだない。そこで今後は、第二世代の生きられたイスラームと並行して、第一世代の親としての生きられたイスラームに焦点を当てた研究も展開していくべきだろう。

⑧ 第八に、本論文では、第二世代の家庭環境のほか、学校生活における経験について分析を行ったが、学校生活に焦点を当てた理由は2つある。ひとつには、日本で社会化されることがアイデンティティ形成にどう影響を及ぼすのかを明らかにするためであり、もうひとつは現実問題として、調査対象がまだ成長の過程にあるからである。店田・岡井（2010: 9）が行った調査時に回答者の第一子の平均年齢が8.6歳であったことからわかるように、本研究の調査開始時である2016年の時点では調査協力者の多くはまだ10～20歳代前半であり、かれらにとって日本社会との主な接点は学校であった。年月の経過につれ第二世代の年齢層は幅を広げて、今や30歳代の者も珍しくない現状にあり、就職や結婚といったステージに踏み出した者も多く、すでに第三世代も誕生し始めている。そうした新たな環境における第二世代の日本社会における経験を論じること今後求められるだろう。今なお増え続ける10～20歳の第二世代の抱える問題や葛藤に引き続き関心を払うことと合わせて、第二世代研究の裾野を広げていく作業も進めていくべきだろう。

⑨ 第九に、青年期の第二世代が葛藤を深める主要因として、知識を伴わない宗教継承と学校での周縁化の経験があることを言及してきたが、これを解決する可能性のあるものとして、昨今親世代の関心を集めているのがイスラーム学校¹³⁵である。2024年末時点で小学校課程まで設置済みのイスラーム学校は6校あるが¹³⁶、いずれも教授言語は英語で、算数や

¹³⁵ 学校教育法第一条が定義する「一条校」ではなく、法的には「学校」を自称することを許されていない団体であるが（学校教育法第百三十五条）、便宜上、他の研究者に倣って「イスラーム学校」と呼ぶこととする。

¹³⁶ 東京都豊島区の International Islamia School Otsuka（2004年設立）、神奈川県海老名市の British International School（2007年設立）、東京都葛飾区の Tokyo Iqra International

科学といった一般教育科目のほかにクルアーンやアラビア語といったイスラーム教育科目を教授している。第一世代をはじめ教育関連の研究者からもその存在は注目を浴びており、学術的な場でも、イスラーム学校運営者が一堂に会する機会がもたれている¹³⁷。だが利用者側の立場から意見が交わされたのは、慶應義塾大学で開催された「第 7 回全国ムスリムミーティング」¹³⁸が初めてであり、そこでは、ムスリムとして日本で子育てする親世代の立場から、イスラーム学校の長所だけでなく短所も提起された。そのなかから、内容が重ならないもの 10 件を以下に引用する（野中監修 2025: 20）。

長所

- ・学校でイスラームの知識を得られる
- ・いじめにあう確率が低い
- ・ムスリムとしてのアイデンティティを保つ
- ・信仰のある先生方、友達から良い影響を受けることができる
- ・ムスリムとの自然な人間関係のなかで愛情を育むことができる

短所

- ・教師の養成や運営の力が中途半端
- ・日本で生きていく上での常識や社会性の習得機会の減少
- ・日本で非ムスリムの人たちの中で生きていく術を身につけられない
- ・日本人でもなく外国人でもない中間的な存在になってしまう
- ・大学生や社会人になったときに周りの人たちとの異質さが目立つ

長所として挙げられた内容からは、子どもたちが理想的な学習環境のもとでムスリムとしてのアイデンティティを確立できるだろうという期待が感じられる。だが短所に挙げられているのはまさしくその裏返しであり、日本人として生きるための常識や社会性を身につけるのが難しいという不安がうかがえる。序章で述べたように、ルベン・ルンバウトや宮島僑がホスト国での社会化の年齢の区切りをおよそ 12 歳としているのは、社会に適応するために必要な常識や不文律は初等教育の学校現場で日々養われていくことが多いためであろう。

School（2014 年設立）、東京都渋谷区の Yuai International School（2016 年設立）、北海道札幌市の Sapporo International School（2021 年設立）、福岡県糸島市の Fukuoka International Islamic School（2023 年設立）。

¹³⁷ 例えば、2023 年 11 月 24 日の広島での会議には、6 校のうち 5 校の運営者が登壇、2024 年 12 月 21 日の名古屋大学での会議には、4 校の運営者が登壇している。

¹³⁸ 慶應義塾大学にて 2024 年 10 月 13 日開催。テーマは「日本のイスラーム学校を語る：親と子の視点から」。第二世代を育てる親 7 人（うち 2 人は第二世代）が登壇した。

「学校は小型の社会」(Dewey [1899]1980: 13) というジョン・デューイの言葉を引くまでもなく、子どもたちは学校生活のなかで、それが肯定的なものであれ否定的なものであれ、そこから社会的な関係性や責任を学んでいく。あるイスラーム学校の生徒が日本人のことを「地獄に行く存在」として見下していたという事例がある。同様の話は、国内のブラジル人学校や海外の日本人学校でもあると聞く¹³⁹。社会全体からみればマイノリティの存在でありながら、マジョリティとして過ごせる空間で社会化が進められるという、ある種のいびつな構図のなかで育つ者たちがいずれ日本社会に巣立つ日を迎えたとき、かれらはムスリムに対する社会の否定的なまなざしをどう受け止めるのだろうか。また日本社会は、常識や不文律を知らずあるいは蔑視ゆえにそれを尊重しない者にどのような視線を向けるのだろうか。

ヨーロッパのムスリム移民が、ホスト国に暮らしながらも全体社会と交わることのない「並行社会」を形成してきた結果(石川 2024: 237)、一部の第二世代がホスト国民との共存よりも対立に向かうという現実をみるに、日本におけるイスラーム学校の位置づけを議論していく必要があるだろう。まだ卒業生を輩出しているところが少ないため、生徒の発達過程への影響やその教育効果を詳細に検討する段階とはいえないが、今後かれらの生きられたイスラームに注目することで、その環境がアイデンティティ形成に及ぼす影響を検討する必要があるだろう。

5 今後の展望

第二世代の生きられたイスラームの経験の可視化は、親世代にとって、自身が経験したことのない環境に生きる子の心情を想像し子に寄り添うための手がかりとなるものである。また第二世代にとっても、同様の経験をしている者がいると知るとは疎外感の払拭につながり、それによって自身のルーツに自信をもつことができるなら、周縁化の経験を乗り越えるきっかけにもなる。他方で、可視化されたかれらの経験を発信することで、学校現場でも第二世代が置かれた状況への理解者が増えるなら、学校は第二世代に限らずさまざまなマイノリティにとって居心地よい場として機能する。それがいずれマイノリティとの共生の成功モデルとして社会全体に拡大していくことで、そのまなざしが排除から包摂に転換するならば、ヨーロッパの先行研究にみられるような幻滅と怒りを抱く第二世代の誕生を阻止することも可能だろう。それは、日本政府の懸念を杞憂に終わらせることであり、そうした日本型の共生モデルをヨーロッパに提言することさえ視野に入れていいかもしれない。

繰り返しになるが、日本のムスリム研究において第二世代の経験の検証が始まってもう

¹³⁹ 名古屋市教育委員会に所属する日本語集中教室指導員の話によると、ブラジル人学校の生徒らは「日本人を馬鹿にする」ことが多いようで、その場に同席していたインドネシアの日本人学校に通った経験をもつ者も、これに同意して、当時は「インドネシア人を下に見ていた」と語っていた。

10 年が経過しようとしている。だが現時点で、成長したかれらの声をその多様性に考慮しつつ集め分析する作業は、かつての第一世代を対象とした研究の広がりほどには進んでいない。本研究はこうした研究の蓄積の薄さを補うべく、第二世代に近い背景をもつ筆者が、二人称的かかわりを通してかれらの経験を再構築したものである。あと数年も待てば、いずれ第二世代自身による一人称研究が始められ、本論文が十分に検討しえなかった点を補い、さらに多角的な調査が進められていくことだろう。それらの礎に本研究がならんことを期待する。

参考文献

- 安達智史、2017、「『日々生きられる宗教』としてのイスラーム日本人ムスリム女性の事例から」『社会学研究』100、181-205.
- 安達智史、2020、『再帰的近代のアイデンティティ論——ポスト 9・11 時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム』晃洋書房.
- 安達智史、2023、「リベラルなイスラーム——日本人女性の改宗者女性を事例として」伊達聖伸編『フランスのイスラーム／日本のイスラーム』水声社、163-80.
- 赤井誠生、1999、「コンフリクト」中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司編『心理学辞典』有斐閣、285.
- Amazon ランキング、2025、「イスラム教（一般）関連書籍の売れ筋ランキング」、Amazon ランキング（2025 年 1 月 15 日取得，<https://www.amazon.co.jp/gp/bestsellers/books/775884>）.
- Ammerman, Nancy T., 1997, “Golden Rule Cristianity”, David Hall ed., *Lived Religion in America: Towards a History of Practice*, Princeton: Princeton University Press, 196-216.
- Ammerman, Nancy T., 2007a, “Studying Everyday Religion: Challenges for the Future”, Nancy T. Ammerman ed., *Everyday Religion: Observing Modern Religious Lives*, Oxford University Press, Inc., 219-38.
- Ammerman, Nancy T., 2007b, “Introduction: Observing Religious Modern Lives”, Nancy T. Ammerman ed., *Everyday Religion: Observing Modern Religious Lives*, Oxford University Press, Inc., 3-18.
- 安溪遊地、2008、「フィールドでの『濃いかかわり』とその落とし穴」安溪遊地・宮本常一『調査されるという迷惑——フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版、59-87.
- Anna N、2020、「宗教と国際報道——イスラム教はどのように報道されているか？」『GLOBAL NEWS SUPPORT』（2025 年 1 月 15 日取得，<https://globalnewsview.org/archives/12945>）.
- アズミ・ムクリサフ、2024、「日本でムスリムとして子どもを育てる」嶺崎寛子編『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 7 日本に暮らすムスリム』明石書店、79-95.
- Bectovic, Safet, 2011, “Studying Muslims and constructing Islamic identity”, *Ethnic and Racial Studies*, 34(7): 1120-33.
- Castles, Stephen & Miller, Mark J., 1998, *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World Second Edition*, MACMILLAN PRESS LTD.
- 第三書館編集部編、2010.、『流出「公安テロ情報」全データ——イスラム教徒＝「テロリスト」なのか？』第三書館.
- Daveed, Gartenstein-Ross, 2015, “How Many Fighters Does The Islamic State Really Have?”,

- War on the Rocks, (Retrieved January 15, 2025, <https://warontherocks.com/2015/02/how-many-fighters-does-the-islamic-state-really-have/>).
- DeHanas, Daniel Nilsson, 2013, “Elastic Orthodoxy: The Tactics of Young Muslim Identity in the East End of London”, Nathal M. Dessing, Nadia Jeldtoft and Linda Woodhead eds, *Everyday Lived Islam in Europe*, Routledge, 69-84.
- Department of Economic and Social Affairs (DESA), 1998, *Recommendations on Statistics of International Migration*, Revision 1, United Nations
- Department of Economic and Social Affairs (DESA), 2020, *International Migration 2020 Highlights*, United Nations
- Department of Economic and Social Affairs (DESA), 2025, ‘Methodology: Standard country or area codes for statistical use (M49)’, (Retrieved January 15, 2025, <https://unstats.un.org/unsd/methodology/m49/#geo-regions>).
- Dessing, Nathal M., 2013, “How to Study Everyday Islam”, Nathal M Dessing, Nadia Jeldtoft and Linda Woodhead eds., *Everyday Lived Islam in Europe*, Routledge, 39-52.
- Dessing, Nathal M., Jeldtoft, Nadia and Woodhead, Linda eds., 2013, *Everyday Lived Islam in Europe*, Routledge.
- Dessing, Nathal M., Jeldtoft, Nadia and Woodhead, Linda eds., 2013, “Introduction”, Nathal M Dessing, Nadia Jeldtoft and Linda Woodhead eds., *Everyday Lived Islam in Europe*, Routledge, 1-5.
- Dewey, John, [1899]1980, Jo Ann Boydston Ed., *The School and Society*, Southern Illinois University Press.
- ドウカイソウタ、2016、「日本の国際報道における「宗教」(2015 年)」『GLOBAL NEWS SUPPORT』、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://globalnewsview.org/archives/4389>) .
- Durkheim, Emile, 1912, *Formes élémentaires de la vie religieuse* (古野清人訳、1975、『宗教生活の原初形態』岩波書店.)
- Elkassem, Siham, Csiernik, Rick, Mantulak, Andrew, Kayssi, Gina, Hussain, Yasmine, Lambert, Kathryn, Bailey, Pamela and Choudhary, Asad, 2018, “Growing up Muslim: The impact of Islamophobia on children in a Canadian community”, *Mental Health*, 12 (1): 3-18.
- 榎井緑、2011、「外国にルーツをもつ子どもたちのこれまでと現状」財団法人アジア・太平洋人権情報センター編『外国にルーツをもつ子どもたち——思い・制度・展望』現代人文社、6-20.
- 榎井緑、2022、「外国人と外国につながる子どものいま——そのさまざまな姿」荒巻重人・榎井緑・江原裕美・小島祥美・志水宏吉・南野奈津子・宮島僑・山野良一編『外国人の子ども白書：権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から 第二版』明石書店、.21-

4.

- Erikson, Erik H., 1968, *Identity: Youth and Crisis*, New York: W.W. Norton & Company, Inc.,
(中島由恵訳、2017、『アイデンティティ——青年と危機』新曜社.)
- Erikson, Erik H. & Erikson, Joan M., 1997, *The Life Cycle Completed: A Review Expanded Edition*, New York: W.W. Norton & Company, Inc., (村瀬孝雄・近藤邦夫訳、2001、『ライフサイクル、その完結』みすず書房.)
- 藤田庄市、2023、「カルト問題のなかの2世問題」塚田穂高・鈴木エイト・藤倉善郎編『だから知ってほしい「宗教2世」問題』菊間書房、37-55.
- 福田友子、2012、「パキスタン人——可視的マイノリティの社会的上昇」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社、221-50.
- 福田友子、2020、「パキスタン人——エスニック・ビジネスの確立と定住」小林真正編、駒井洋監修『移民・ディアスポラ研究 9 変容する移民コミュニティ——時間・空間・階層』明石書店、88-95.
- 福田義昭、2008、「神戸モスク建立前史：昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成」白杵陽研究代表者『日本・イスラーム関係のデータベース構築：戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開』科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書 平成 17 年度～平成 19 年度、23-62.
- 福岡安則、1993、『在日韓国・朝鮮人』中央公論社.
- 蒲生礼一、1958、『イスラーム』岩波書店.
- Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Note on the Management of Spoiled Identity* (石黒毅訳、2016、『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- 五味麻美・大田えりか、2024、「日本の産科医療施設で出産したムスリム外国人女性の妊娠・出産経験に関する質的研究」『日本助産学会誌』38(1): 92-102.
- Graham, William Albert, 1993, *Beyond the Written Word: Oral Aspects of Scripture in the History of Religion*, Cambridge University Press.
- Grotevant, Harold D. & Cooper, Catherine R., 1986, “Individuation in Family Relationships: A Perspective on Individual Differences in the Development of Identity and Role-Taking Skill in Adolescence”, *Human Development* 29 (2): 82-100.
- Gryphon 2017 「「豚肉を食べるお前は汚れている」…宗教で親と分かり合えないという、オミアクキさんの体験談」、togetter、(2025 年 1 月 15 日取得、<https://togetter.com/li/1163383>) .
- Hall, David D., 1997, “Introduction”, David Hall ed., *Lived Religion in America: Towards a History of Practice*, Princeton: Princeton University Press, vii-xiii.
- Hamidullah, Muhammad, 1957, *Introduction to Islam*, Centre Culturel Islamique, (黒田美代子訳、1983、『イスラーム概説』イスラミックセンター・ジャパン.)
- ハタノ、リリアン・テルミ、2011、「『共生』の裏に見えるもう一つの『強制』」馬淵仁編『多

- 文化共生」は可能か』勁草書房. 127-48.
- 樋口美作、2007、『日本人ムスリムとして生きる』佼成出版社.
- 樋口直人、2007、「滞日ムスリム移民の軌跡をめぐる問い」『国境を超える——滞日ムスリム移民の社会学』青弓社、11-23.
- 樋口直人、2010、「在日外国人のエスニック・ビジネス——国籍別比較の試み」『アジア太平洋レビュー』7: 2-16.
- 樋口直人・丹野清人、2000、「食文化の越境とハラール食品産業の形成——日ムスリム移民を事例として」『徳島大学社会科学研究所』13: 99-131.
- 樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文、2007、『国境を超える——滞日ムスリム移民の社会学』青弓社.
- 樋口裕二、2005、「埋葬状況からみた在日ムスリムコミュニティ」『常民文化』28: 43-69.
- 法務省、2002、「出入国管理基本計画(第2次)」、(2025年1月15日取得、https://www.moj.go.jp/isa/policies/policies/press_000300-2_000300-2-2.html) .
- 法務省入国管理局編、2003、『出入国在留管理——新時代における出入国管理行政の対応』法務省.
- 堀内勝、2008、「アラブ・イスラム世界の饗宴(6) 割礼の祝宴とコーラン暗誦の祝宴」『食文化を楽しむ一冊 Vesta』69: 61-7.
- Houellebecq, Michel. 2015 *Soumission*, Flammarion (大塚桃訳、2015、『服従』、河出書房新社.)
- HUMAYUN MUGHAL TV JPN、2022、「Why did Islam spread around the world? Dr.Muhammad tahir abbas Khan Ritsumeikan」、YouTube、(2025年1月15日取得、<https://youtu.be/YO6dfG3ae0Q?si=2i6GApgKBEl2mYpZ>) .
- 稲原美苗、2018、「当事者とともに——現象学的質的研究の可能性を考える」『現象学と社会科学』1: 31-48.
- 猪瀬優理、2011、『信仰はどのように継承されるか——創価学会にみる次世代育成』北海道大学出版会.
- 猪瀬優理、2014、「教団の維持・存続と少子高齢社会——信仰継承に着目して」『現代宗教2014』、139-58.
- 井上順考、1995、「既成宗教と新宗教との布教態勢の違い」『現代宗教研究』29: 32-49.
- 石井研士、2020、『プレステップ宗教学〈第3版〉』弘文堂.
- 石井由香、1995、「国際結婚の現状——日本でよりよく生きるために」駒井洋編『定住化する外国人』明石書店、73-102.
- 石川真作、2018、「フランスにおける宗教的多元主義と過激化——エスニックブラインドな共和国モデルから治安の多文化主義へ」『グローバルリスク研究』日本国際問題研究所、157-67.
- 石川真作、2024、「ヨーロッパの『移民問題』から何を学ぶか」嶺崎寛子編『イスラーム・

- ジェンダー・スタディーズ 7 日本に暮らすムスリム』明石書店、234-45.
- 伊藤亜衣、2016、「日本人ヤングムスリムとの出会い——社会が抱える問題を見るために」『メディア展望』661: 42-3.
- 岩渕功一、2014、「〈ハーフ〉というカテゴリー化に関する〈当事者〉への聞き取り調査」岩渕功一編『〈ハーフ〉とは誰か——人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社.
- 岩倉洸、2024、「日本社会におけるムスリム墓地への関心と対応——主要新聞紙の報道から」『龍谷大学社会学部紀要』65: 2-21.
- 岩崎久志、2016、「「生きられた経験」を明らかにする現象学的考察の検討」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』29(1): 11-28.
- 岩崎久志、2018、「現象学的アプローチにおけるインタビューの検討——ライフストーリー研究を参照にして」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』30(2): 87-101.
- 井筒俊彦、1979、『イスラーム生誕』人文書院.
- 井筒俊彦、1991a、『イスラーム文化——その根底にあるもの』岩波書店.
- 井筒俊彦、1991b、『井筒俊彦著作集 8 コーランを読む』岩波書店.
- Jacobson, Jessica, 1998, *Islam in transition: religion and identity among British Pakistani youth*, Routledge
- Japan Dahwa Foundation/静岡ムスリム協会、2016 年、「2016 年 7 月 13 日投稿記事」(2025 年 1 月 15 日取得、
<https://www.facebook.com/profile/100064751887145/search/?q=2016%E5%B9%B4>)
- Jeldtoft, Nadia, 2011, “Lived Islam: religious identity with ‘non-organized’ Muslim minorities”, *Ethnic and Racial Studies*, 34(7): 1134-51.
- Jeldtoft, Nadia, 2013, “The Hypervisibility of Islam”, Nathal M. Dessing, Nadia Jeldtoft and Linda Woodhead eds., *Everyday Lived Islam in Europe*, Routledge, 23-38.
- Jeldtoft, Nadia and Nielsen, Jørgen S., 2011, “Introduction: methods in the study of ‘non-organized’ Muslim minorities”, *Ethnic and Racial Studies*, 34(7): 1113-9.
- JP ステーション、2024、「大規模土葬墓地を住民の声を無視して強硬する町長が新人に選挙で負けた結果…」、YouTube、(2025 年 1 月 15 日取得、
<https://youtu.be/6FH1hKsTPLE?si=7ICR5b1GG4EgQvfg>).
- 抱井尚子・八田太一・阿部路子・大河原知嘉子・眞壁幸子・福田美和子・野崎真奈美・亀井智子、2022、「混合研究法の認知度・活用状況と研究実践上の課題——看護学研究者を対象とする実態調査から」『Aoyama Journal of International Studies』9: 93-121.
- 上代圭子・野川春夫・工藤康宏・秋吉遼子、2016、「スポーツイベントを通じたイスラム系在日外国人のスポーツ・ライフの調査研究——イスラム系在留資格者に対するスポーツ政策の基礎情報の収集」『笹川スポーツ研究助成研究成果報告書』、67-75.
- 片倉もところ、1991、『イスラームの日常世界』岩波新書.
- Kassam, Ashifa, 2023 ‘Dutch Muslims fearful for future after ‘shocking’ election results’ in

- The Guardian, (Retrieved January 15, 2025, <https://www.theguardian.com/world/2023/nov/23/dutch-muslims-fearful-for-future-after-shocking-election-results-geert-wilders>).
- 桂悠介、2021、「日本におけるイスラームへの改宗プロセスの分類——『結婚』に還元されない諸経験に着目して」『宗教と社会』27: 65-79.
- 川添航、2017、「外国人定住化時代におけるイスラーム系宗教施設の役割とその拡大——東京都豊島区『マスジド大塚』を事例として」『新地理』65(3)、16-33.
- 警察庁編、1993、「国際化社会と警察活動」、平成5年警察白書、(2025年1月15日取得, <https://www.npa.go.jp/hakusyo/h05/h05index02.html>) .
- 警察庁編、1994、「国際化社会と警察活動」、平成6年警察白書、(2025年1月15日取得, <https://www.npa.go.jp/hakusyo/h06/h06index02.html>) .
- 警察庁編、1995、「警察活動の国際化と国際協力」、平成7年警察白書、(2025年1月15日取得, <https://www.npa.go.jp/hakusyo/h07/h07index08.html>) .
- 警察庁編、1999、「国境を越える犯罪との闘い」、平成11年警察白書、(2025年1月15日取得, <https://www.npa.go.jp/hakusyo/h11/h11index01.html>) .
- 警察庁編、2003、「公安の維持」、平成15年警察白書、(2025年1月15日取得, <https://www.npa.go.jp/hakusyo/h15/pdf/E0600000.pdf>) .
- カン夢咲／パイン・ゼイイェトウン／クレシ明留、2024、「SYM 名古屋モスク——日本中のみんなに伝えたい、一人じゃないよ」嶺崎寛子編『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 7 日本に暮らすムスリム』明石書店、56-58.
- 公安調査庁、2024、「世界のテロ等発生状況：2024/9/1 アフリカ（サハラ以南）」、(2025年1月15日取得, <https://www.moj.go.jp/psia/terrorism/index.html>) .
- 菊池真理子、2022、『「神様」のいる家で育ちました——宗教2世な私たち』文藝春秋.
- 小林真生、2020、『移民・ディアスポラ研究 9 変容する移民コミュニティ——時間・空間・階層』小林真生編、駒井洋監修、明石書店.
- 小林多寿子、2005、「ライフヒストリー・インタビューをおこなう」桜井厚・小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房、71-128.
- 児島明、2006、『ニューカマーの子どもと学校文化——日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.
- 児島明、2021、「イントロダクション——生きられた経験としての排除」清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平、『世界人権問題叢書 103 日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店、211-33.
- Kojima, Shinji, 2023, “To Bury or Not to Bury: Muslim Migrants and the Politics of Funerary Rights in Contemporary Japan”, *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus* 21(11): 1-21.
- kokkai_watch、2024、「イスラム国指導者『千葉県野田市にイスラムの学校を作るから 5000

- 万円寄付して』←通るか！そんなもん！」、TikTok、(2025 年 1 月 15 日取得, https://www.tiktok.com/@kokkai_watch/video/7394483743337172231) .
- 駒井洋、2004、「日本のムスリム社会を歩く」片倉もとこ・梅村坦・清水芳見編『イスラーム社会』岩波書店、198-212.
- 駒井洋、2020、「イラン人——超過滞在者としての人生」小林真正編、駒井洋監修『移民・ディアスポラ研究 9 変容する移民コミュニティ——時間・空間・階層』明石書店、96-7.
- 厚生労働省、2001、「食品衛生法施行規則の一部を改正する省令の施行について」、(2025 年 1 月 15 日 取 得 , https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta6056&dataType=1&pageNo=1) .
- 厚生労働省、2002、「警察庁、法務省及び厚生労働省の三省庁の合意に基づく『不法就労等外国人対策について』の取りまとめについて」、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/03/h0306-5.html>) .
- 工藤正子、2008.、『越境の人類学——在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会.
- 工藤正子、2016、「差異の交渉とアイデンティティの構築——日本とパキスタンの国境を越える子どもたち」川島浩浩平・竹沢泰子編『人種神話を解体する 3 「血」の政治学を越えて』東京大学出版会、303-31.
- 工藤正子、2021、「トランスナショナルな家族の生成と再編——日本人女性とパキスタン人男性の国際結婚夫婦と子どもたちの事例から」移民政策研究 13: 9-26.
- 工藤正子、2024、「若いムスリム女性のアイデンティティ形成——日本とパキスタンにルーツをもつ女性たちの事例から」嶺崎寛子編『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 7 日本に暮らすムスリム』明石書店、59-75.
- 倉真一、1995、「景気後退下における在日イラン人——出身階級・生活機会およびその獲得戦略を中心に」『年報社会学論集』(8): 191-202.
- 倉真一、2003、「1990 年代日本における入国管理政策と非行性の産出」『宮崎公立大学人文学部紀要』10 (1): 67-87.
- 黒田壽郎、1980、「イスラームの心」中央公論社.
- Lipka, Michael, 2017, “Europe’s Muslim population will continue to grow – but how much depends on migration”, Pew Research Center, (Retrieved January 15, 2025, <https://www.pewresearch.org/short-reads/2017/12/04/europes-muslim-population-will-continue-to-grow-but-how-much-depends-on-migration/>).
- Luckmann, Thomas, 1967, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, Macmillan, (赤池憲昭、ヤン・スィングドー訳、1976、『見えない宗教——現代宗教社会学入門』ヨルダン社.)
- 牧野信也、1996、『イスラームの原点——〈コーラン〉と〈ハディース〉』中央公論社.

- Mansour, Ahmad, 2015, *Generation Allah. Warum wir im Kampf gegen religiösen Extremismus umdenken müssen*. FISCHER, S., (高本教之・犬飼彩乃・由比俊行・早川文人・平井敏雄・荻原耕平共訳、2016.『アラー世代——イスラム過激派から若者たちを取り戻すために』晶文社.)
- 丸山英樹、2007、「滞日ムスリムの教育に関する予備的考察」『国立教育政策研究所紀要』136; 165-74.
- 松本祐馬・向井智哉・近藤文哉・金信遇・木村真利子、2020、「宗教信者イメージと受容的態度の関連」『パーソナリティ研究』29(1): 17-9.
- 松本耿郎、2002、「イマーム」大塚和夫・小杉泰・小松久雄・東長靖・羽田正・山内昌之編『岩波イスラーム辞典』、170.
- 松本学、2002、「当事者による当事者研究の意義」『教育方法の探究』5; 93-8.
- 松本高明、2005、「日本の高校生が抱くイスラーム像とその是正に向けた取り組み——東京・神奈川の高校でのアンケート調査を糸口として」『日本中東学会年報』21(2): 193-214.
- 松長昭、2009、『在日タタール人：歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』東洋書店.
- 松山洋平、2017、『イスラーム思想を読みとく』筑摩書房.
- 松山洋平、2018、「書評 飯山陽著『イスラーム教の論理』」『オリエント』61(1): 74-8.
- McGuire, Meredith, 2002, *Religion: The Social Context*, 5th ed., Wadsworth, a Thomson Learning Company, (山中弘・伊藤雅之・岡本亮輔訳、2008、『宗教社会学——宗教と社会のダイナミクス』明石書店.)
- McGuire, Meredith, 2007, “Embodied Practices: Negotiation and Resistance”, Nancy T. Ammerman ed., *Everyday Religion : Observing Modern Religious Lives*, Oxford University Press, Inc., 187-200.
- McGuire, Meredith, 2008, *Lived religion: faith and practice in everyday life*, Oxford University Press
- 見原礼子、2023、「オルタナティブ教育の場としてのイスラーム学校——ヨーロッパと日本における動向から」伊達聖伸編『フランスのイスラーム／日本のイスラーム』水声社、239-59.
- 水上徹男、2020、「バングラデシュ人——新しい層の流入と第2世代以降の定着」小林真正編、駒井洋監修『移民・ディアスポラ研究 9 変容する移民コミュニティ——時間・空間・階層』明石書店、98-100.
- 南龍太、2020a、「狙い撃ちされたイラン人：消えない負の記憶と忘れられる権利」、(2025年 1 月 15 日 取得 , <https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/4d7cc41ab61d3482deaf5f966c2c7eee99c3f80e>) .
- 南龍太、2020b、「イラン人は「い集」したのか? : 「中国人かな、110 番」という時代を超えて」、(2025 年 1 月 15 日 取得 ,

<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/d4bc27e05ed89b8547273914400c071d5f29bf22>).

三浦綾希子、2015、『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ——第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房.

三浦綾希子・額賀美紗子、2021、「疎外感の形成と克服の方途——フィリピン系の学校経験」清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平、『世界人権問題叢書 103 日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店、347-72.

宮島喬、2014、『外国人の子どもの教育』東京大学出版会.

宮島喬、2016、『現代ヨーロッパと移民問題の原点』明石書店.

宮島喬、2021、『多文化共生の社会への条件——日本とヨーロッパ、移民政策を問いなおす』東京大学出版会.

宮下阿子、2014、「対話的構築から〈対話的還元〉へ——研究者が『当事者でもあること』を問い直す」『三田社会学会』19: 20-33.

文部科学省、2018、「学校基本調査 [卒業後の状況調査]」、(2025 年 1 月 15 日取得, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_2.pdf).

文部科学省、2019 『食に関する指導の手引 第二次改訂版』文部科学省

文部科学省、2021、「『留学生 30 万人計画』骨子検証結果報告」、(2025 年 1 月 15 日取得, https://www.mext.go.jp/content/20220914-mxt_gakushi02-000025000_1.pdf).

文部科学省、2023a、「帰国・外国人児童生徒等の現状について」、(2025 年 1 月 15 日取得, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/genjyou/1295897.htm).

文部科学省、2023b、「令和 5 年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」、(2025 年 1 月 15 日取得, https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000007294_04.pdf).

森千香子、2016、『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版.

森伸生、2002、「ムサッラー」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之共編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、963-4.

森雄二郎、2018.、「外国にルーツを持つ子どもの教育支援に関する一考察」『同志社政策科学研究』20(1): 89-100.

森本武夫、1998、『イスラーム入門——その宗教の本質と教義問答』宗教法人日本ムスリム協会

Moslimani, Mohamad & Passel, Jeffrey. 2024, “What the data says about immigrants in the U.S.”, Pew Research Center, (Retrieved January 15, 2025, <https://www.pewresearch.org/short-reads/2024/09/27/key-findings-about-us->

immigrants/).

村井尚子、2000、「ヴァン=マーネンにおける『生きられた経験』の現象学的探究」『京都大学大学院教育学研究科紀要』46: 348-60.

Murray, Douglas, 2017, *The Strange Death of Europe: Immigration, Identity, Islam*. Bloomsbury. (町田敦夫訳、2018、『西洋の自死：移民・アイデンティティ・イスラム』東洋経済新報社.)

Murshed, Syed Mansoob and Pavan, Sara, 2009, *Economics of Security Working Paper 14, Identity and Islamic Radicalization in Western Europe*, Berlin: German Institute for Economic Research.

むすりむ Tube、2020、「【むすりむインタビュー】はさーぬ、24 歳、京都在住」、You Tube、
(2025 年 1 月 15 日 取 得 ,
<https://www.youtube.com/watch?v=nRWlRH3LzrM&t=321s>) .

むすりむ Tube、2021、「【むすりむインタビュー】だいき、20 歳、岐阜在住」、You Tube、
(2025 年 1 月 15 日取得, <https://www.youtube.com/watch?v=OdN-tl43NdA&t=139s>).

名古屋モスク、2015a、「経過報告：『イスラム国』という名称の変更を希望します」、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://nagoyamosque.com/3409.html>).

名古屋モスク、2015b、「温かい励ましに感謝します」、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://nagoyamosque.com/3416.html>).

名古屋モスク、2019、「外国人ムスリムのための進学説明会「進路についてかんがえよう」の報告」、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://nagoyamosque.com/10998.html>).

名古屋モスク、2020、「外国人ムスリムのための進学説明会「進路についてかんがえよう」の報告 (2)」、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://nagoyamosque.com/12519.html>).

名古屋モスク、2023、「外国人ムスリムのための進学説明会「進路についてかんがえよう」の報告 (3)」、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://nagoyamosque.com/16651.html>).

内閣府、1988、「第 6 次雇用対策基本計画 閣議決定」(2025 年 1 月 15 日取得, <https://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryuu/no.13/data/shiryuu/roudou/520.pdf>) .

中村廣治郎、2005、「日本のイスラム研究」『宗教研究』78(4) : 71-92.

中野祥子・奥西有理・田中共子、2015、「在日ムスリム留学生の社会生活上の困難」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39: 137-51.

中野剛志、2018、「移民という『自死を選んだ』欧州から学ぶこと——『リベラリズムによる全体主義』がやってくる」東洋経済オンライン、(2025 年 1 月 15 日取得, <https://toyokeizai.net/articles/-/254395>) .

浪岡新太郎、2013、「イスラームと人権保障——ヨーロッパ・フランスにおけるムスリム『問題』の制度化と法」『PRIME』36: 67-72.

———、2020、「誰のことかわからないままに、ムスリムについて語る問題」令和元年外務省外交・安全保障調査研究事業報告書『反グローバリズム再考』日本国際問題

- 研究所、243-9.
- Neitz, Mary Jo, 2011, “Lived Religion: Signposts of Where We Have Been and Where We Can Go from Here”, Giuseppe Giordan and William H. Swatos, Jr., eds., Springer, *Religion, Spirituality and Everyday Practice*, 45-56.
- 子島進・服部美奈、2019、「在日ムスリムによる地域交流——モスクでの聞き取り調査から」『アジア文化研究所研究年報』53、54-66.
- NHK、2023、「“宗教2世”を生きる 対話を始めた当事者たち」、NHK NEWS WEB、(2025年1月15日取得, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20231028/k10014238611000.html>).
- 日本学術会議、2020、『外国人の子どもの教育を受ける権利と修学の保障——公立高校の「入口」から「出口」まで』日本学術会議.
- 日本学生支援機構 (JASSO)、2020、「2019 (令和元) 年度 外国人留学生在籍状況調査結果」(2025年1月15日取得, www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2019z.pdf).
- 西田今日子、2023、「日本に育つムスリム「2世」をめぐる覚書」塚田穂高・鈴木エイト・藤倉善郎編『だから知ってほしい「宗教2世」問題』菊間書房、378-89.
- 野中葉監修、2020、『第5回全国ムスリムミーティング「神をどう伝えるか——母と子による報告」報告書』慶應義塾大学 SFC 研究所イスラーム研究・ラボ.
- 野中葉監修、2021、『第6回全国ムスリムミーティング「広がるヤングムスリムの輪——コミュニティの可能性」報告書』慶應義塾大学 SFC 研究所イスラーム研究・ラボ／慶應義塾大学野中葉研究会ムスリム共生プロジェクト.
- 野中葉監修、2025、『第7回全国ムスリムミーティング「イスラーム学校を語る——親と子の視点から」報告書』慶應義塾大学野中葉研究会ムスリム共生プロジェクト.
- 額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子編、2019、『移民から教育を考える——子どもたちを取りまくグローバル時代の課題』ナカニシヤ出版.
- 沼田彩誉子、2012、「極東出身の在米タタール人に関する調査——戦前・戦中期日本における『回教政策』再評価のために」『日本中東学会年報』28 (2), 127-44.
- 大形里美、2021、「グローバル化時代における日本の国内向けハラール・サービスをめぐる諸問題——ハラール基準に関する誤解がもたらしているもの」『九州国際大学国際・経済論集』8: 35-70.
- 大形里美／スリ・ブディ・レスタリ／クレシ サラ好美、2023、「日本の教育現場でどのようにムスリムの子どもたちを受け入れるべきか——シンポジウムから学ぶ」『九州国際大学国際・経済論集』12: 75-106.
- 小川玲子、2022、「千葉の移民コミュニティの教育と福祉に関する調査——アフガニスタン人とスリランカ人コミュニティの現状」千葉大学移民難民スタディーズ+NPO 法人多文化フリースクールちば編『千葉の移民コミュニティの教育と福祉に関する調査——アフガニスタン人とスリランカ人コミュニティの現状』千葉大学移民難民スタディー

ズ、3-11.

小川さゆり、2023、『小川さゆり、宗教2世』小学館.

荻上チキ、2022、「チキラボ 1131 人実態把握調査レポート① 宗教2世は、家族と教団に、何を求められるのか？」荻上チキ編『宗教2世』太田出版、48-73.

荻原廣・三浦智佐美、2022、「滞日ムスリムの児童生徒への最良の支援について——日本語教育を中心に」『文学部論集』106: 33-59.

大橋充人、2021、『在日ムスリムの声を聴く——本当に必要な“配慮”とは何か』晃洋書房.

岡井宏文、2007、「イスラーム・ネットワークの誕生——モスクの設立とイスラーム活動」『国境を超える——滞日ムスリム移民の社会学』青弓社、178-209.

岡井宏文、2018、「ムスリム・コミュニティと地域社会——イスラーム団体の活動から『多文化共生』を再考する」高橋典史・白波瀬達也・星野壮編『現代日本の宗教と多文化共生——移民と地域社会の関係性を探る』明石書店、181-203.

岡井宏文、2023、「老いと死と向き合う——日本のモスクにおける死の引き受けと埋葬に関する予備的考察」『移民研究年報』29: 43-55.

岡井宏文、2024、「見えにくいものを見るということ——日本のイスラーム社会の概要と実態把握上の課題」嶺崎寛子編『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 7 日本に暮らすムスリム』明石書店、118-30.

岡井宏文・店田廣文編、2019a、『全国マスジド（モスク）代表者会議・次世代部会「若者世代とイスラム、日本」の記録」2018年2月3日』早稲田大学多民族・多世代社会研究所／早稲田大学アジア・ムスリム研究所／早稲田大学イスラーム地域研究機構

岡井宏文・店田廣文編、2019b、『全国マスジド（モスク）代表者会議・第2回次世代部会「ヤングムスリムとムスリム・コミュニティ——ヤングムスリムの居場所から考える」の記録 2018年9月15日』早稲田大学多民族・多世代社会研究所／早稲田大学イスラーム地域研究機構.

岡井宏文・店田廣文・小島宏編、2015、『「ヤングムスリムの将来設計——学ぶ・はたらく・生きる」 第7回全国マスジド（モスク）代表者会議の記録 2015年1月31日』早稲田大学アジア・ムスリム研究所／早稲田大学多民族・多世代社会研究所／早稲田大学イスラーム地域研究機構.

小野仁美、2019、『イスラーム法の子ども観——ジェンダーの視点でみる子育てと家族』慶應義塾大学出版会.

Orsi, Robert, 1997, “Everyday Miracles: The Study of Lived Religion”, David Hall ed., *Lived Religion in America: Towards a History of Practice*, Princeton: Princeton University Press, 3-21.

大谷千晴、2022、「いじめの克服における教育の対応」荒巻重人・榎井緑・江原裕美・小島祥美・志水宏吉・南野奈津子・宮島僑・山野良一編『外国人の子ども白書：権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から 第二版』明石書店、210-1.

- 大塚和夫、2004、「ムスリムの人生儀礼——命名、割礼、結婚そして葬送」片倉もところ・梅村坦・清水芳見編『イスラーム世界』岩波書店。
- 大塚和夫・小杉泰・小松久雄・東長靖・羽田正・山内昌之編、2002、『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
- Otterbeck, Jonas, 2011, “Ritualization among young adult Muslims in Malmö and Copenhagen”, *Ethnic and Racial Studies*, 34(7): 1168-85.
- Otterbeck, Jonas, 2013, “Experiencing Islam: Narratives about Faith by Young Adult Muslims in Malmö and Copenhagen” Nathal M. Dessing, Nadia Jeldtoft and Linda Woodhead eds, *Everyday Lived Islam in Europe*, Routledge. 115-34.
- Our World In Data Female employment-to-population ratio, 1991 to 2021、, (Retrieved January 15, 2025, <https://ourworldindata.org/grapher/modeled-female-employment-to-population-ratio?time=earliest..2021&country=BGD~MYS~IDN~IRN~JPN~PAK>).
- Portes, Alejandro and Rumbaut, Rubén G., 2024, *Immigrant America: A Portrait 5th ed.*, University of California Press.
- Primiano, Leonard Norman, 1995, “Vernacular Religion and the Search for Method in Religious Folklife”, *Western Folklife*, 54(1): 37 -56, (小田島建己訳、2007、「翻訳 宗教民俗における方法の探求とヴァナキュラー宗教」『東北宗教学』3: 129-57.)
- クレシ愛民、2019、「日本人か、ムスリムか？——第二世代の葛藤から」『M ネット』196: 32-3.
- クレシ明留、2024、「日本のムスリムのアラビア語学習動機と現状——課題と展望」慶應義塾大学総合政策学部 2024 年度春学期卒業プロジェクト（未刊行）。
- クレシ サラ好美、2017、『ハラールとハラール認証——ムスリマの視点から実情と課題を語る』、奥田敦監修、慶應義塾大学湘南藤沢学会。
- クレシ サラ好美、2020、「名古屋におけるムスリムコミュニティの様相——戦前期と現代のモスク設立の動きを中心に」『人間科学研究』33(1): 27-38.
- クレシ サラ好美、2021a、「名古屋におけるムスリムコミュニティの様相——モスクの活動および日本人女性による自主活動の展開」『グローバル・コンサーン』3: 244-64.
- クレシ サラ好美、2021b、「日本に暮らすムスリム第二世代——当事者の語りから見える葛藤の様相」『KEIO SFC JOURNAL』21(1): 154-176.
- クレシ サラ好美、2022、「日本に暮らすムスリム第二世代——学校教育現場における実態の検証」『白山人類学』24: 131-54.
- クレシ サラ好美、2023、「ムスリムと食——名古屋のコミュニティの事例から」『M ネット』226: 26-7.
- クレシ サラ好美、2024a、「『ムスリムであること』とどう向き合うか——第二世代の語りから」嶺崎寛子編『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 7 日本に暮らすムスリム』明石書店、40-55.

- クレシ サラ好美、2024b、「『ムスリムであること』の否定に至る背景と要因：日本のムスリム第二世代の語りから」『人間科学研究』37（1）、pp.23-36.
- Rabe, Marlize, 2003, “Revisiting 'insiders' and 'outsiders' as social researchers”, *African Sociological Review*, 7(2): 149-61.
- ラフマンヌール瑠美花、2023、「日本の公立小中学校におけるムスリム児童生徒への学校給食対応——学校給食対応の現状と提案」東京外国語大学言語文化学部 2022 年度卒業論文（未刊行）.
- Rumbaut, Rubén G., 2002, “Severed or Sustained Attachments? Language, Identity, and Imagined Communities in the Post-Immigrant Generation”, Levitt, Peggy and Waters, Mary C. eds., *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, Russell Sage Foundation, 43-95.
- Rumbaut, Rubén G., 2004, “Ages, Life Stages, and Generational Cohorts: Decomposing the Immigrant First and Second Generations in the United States”, *The International Migration Review Vol. 38 No. 3*, Sage Publications, Inc., 1160-205.
- 佐伯胖、2017、「『二人称的アプローチ』入門」佐伯胖編『「子どもがケアする世界」をケアする——保育における「二人称的アプローチ」入門』ミネルヴァ書房、33-77.
- Said, Edward W., 1978, *Orientalism*. Georges Borchardt Inc., (板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、1993. 『オリエンタリズム 下』平凡社.
- 坂本勉、2001、「東京モスク沿革誌」『アジア遊学』30: 121-8.
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚、2005、「ライフストーリー・インタビューをはじめ」桜井厚・小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房、11-55.
- 桜井啓子、2003、『日本のムスリム社会』ちくま新書.
- 佐藤兼永、2015、『日本の中でイスラム教を信じる』文藝春秋.
- 下地ローレンス吉孝、2018、『「混血」と「日本人」——ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社.
- 島蘭進、1990、「新宗教の発生時期」井上順孝・中牧弘允・孝本貢・西山茂・対馬路人編『新宗教辞典』弘文堂、6-8.
- 清水睦美、2021a、「移民第二世代研究を考える」清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平、『世界人権問題叢書 103 日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店、15-33.
- 清水睦美、2021b、「同化のなかの疎外感——ベトナム系・カンボジア系の学校経験」清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平、『世界人権問題叢書 103 日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店、235-372.
- 清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平、2021、『世界人権問題

- 叢書 103 日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店
- 清水唯一郎・諏訪正樹 2014 「オーラル・ヒストリーメソッドの再検討——発話シーケンスによる対話分析」『SFC ジャーナル』14 (1) : 108-132.
- 塩原良和、2012、『共に生きる——多民族・多文化社会における対話』弘文堂.
- 塩尻和子、2020、「イスラモフォビアに立ち向かう」『日本のイスラームとクルアーン——現状と展望』晃洋書房、91-121.
- 首相官邸、2014、「ISIL(「イラク・レバントのイスラム国」)等国際テロに係る各関係省庁の主な取り組み状況」、(2025年1月15日取得, <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/hanzai/dai22/siryou4.pdf>) .
- 首相官邸、2016、「日本・エジプト首脳会談等 2016年2月29日」、(2025年1月15日取得, https://japan.kantei.go.jp/97_abe/actions/201602/29article2.html) .
- 出入国在留管理庁、各年「出入国管理統計統計表」、(2025年1月15日取得, https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_nyukan.html) .
- 出入国在留管理庁、各年「在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表」、(2025年1月15日取得, https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html) .
- 出入国在留管理庁、2000、「出入国管理基本計画(第2次)」、(2025年1月15日取得, https://www.moj.go.jp/isa/policies/policies/press_000300-2_000300-2-2.html#02-1) .
- 出入国在留管理庁、2024、「本邦における不法残留者数について(令和6年1月1日現在)」、(2025年1月15日取得, https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00041.html) .
- 総務省、2005、『留学生の受入れ推進施策に関する政策評価書』、(2025年1月15日取得, https://www.soumu.go.jp/main_content/000250658.pdf) .
- 総務省、2013、「外国人の受入れ対策に関する行政評価・監視——技能実習制度等を中心として——結果報告書」、(2025年1月15日取得, https://www.soumu.go.jp/main_content/000219636.pdf) .
- 総務省統計局、2024、「人口推計(2023年(令和5年)10月1日現在)——全国：年齢(各歳)、男女別人口・都道府県：年齢(5歳階級)、男女別人口」、(2025年1月15日取得, <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2023np/index.html>) .
- Statistics Canada, 2021a, “Census of Population” Statistics Canada, (Retrieved January 15, 2025, <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/index-eng.cfm?MM=1>).
- Statistics Canada, 2021b, “Infographic 5 Nearly one in five recent immigrants were born in India, the highest proportion from a single place of birth since 1971”, (Retrieved January 15, 2025, <https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/221026/g-a005-eng.htm>).
- 杉本均、2000、「滞日ムスリムの教育問題——日本におけるもう一つの異文化」江原武一編『多文化教育の国際比較——エスニシティへの教育の対応』玉川大学出版部、309-25.

- 杉本均、2002、「イスラーム教徒における社会文化空間と教育問題」宮島喬・加納弘勝 編『変容する日本社会と文化・国際社会 2』東京大学出版会、145-167.
- 鷺見朗子・鷺見克典、2016、「日本の高校と大学におけるアラビア語の教育と学習者」『アラブ・イスラム研究』14: 103-121.
- SUOMIAKKI、2017、Twitter（現 X）への投稿記事、（2025 年 1 月 15 日取得、<https://x.com/suomiaaki/status/830608372311285760>）.
- 諏訪正樹、2015、「一人称研究だからこそ見出せる知の本質」諏訪正樹・堀浩一編、人工知能学会監修『一人称研究のすすめ：知能研究の新しい潮流』近代科学社.
- 諏訪正樹、2020、「間合い研究の本質」諏訪正樹編『「間合い」とは何か——二人称的身体論』春秋社、219-56.
- 諏訪正樹・清水唯一郎、2014、「本音を語ることを促すインタビュー技法に関する一考察」『人工知能学会全国大会論文集 第 28 回（2014）』: 1-4.
- 鈴木江里子・藤本伸樹、2013、『非正規滞在者をめぐる政策的課題——チャーター機によるフィリピンへの集団強制送還を受けて』移住労働者と連帯する全国ネットワーク／日本カトリック難民移住移動者委員会.
- 鈴木隆雄、2010、「当事者であることの利点と困難さ——研究者として／当事者として」『日本オーラル・ヒストリー研究』6: 67-77.
- 高橋典史、2012、「総論——日本社会における宗教の特徴」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔 編『宗教と社会のフロンティア——宗教社会学からみる現代日本』、勁草書房、3-22.
- 高畑幸、2000、「バイカルチュラル・アイデンティティの構築に向けて——日比家族の第二世代の事例から」『市大社会学』1: 24-36.
- Takahashi, Saul J. 2021 'Islamophobia in Japan: A Country at a Crossroads' in *Islamophobia Studies Journal*, 6(2), pp. 167-181.
- 高谷幸、2018、「「外国人労働者」から「不法滞在者」へ——1980 年代以降の日本における非正規滞在者をめぐるカテゴリーの変遷とその帰結」『社会学評論』68 (4): 531-48.
- 竹下修子、2000、「外国人ムスリムと日本人女性の結婚——結婚満足度の規定要因の分析から」『ソシオロジ』45(2): 55-68
- 竹下修子、2001、「日本人妻のイスラームへの適応——外国人ムスリムを夫にもつ妻の実例分析から」『愛知学院大学論叢』48(3): 157-72.
- 田巻松雄、1995、「滞日アジア人の動向——日本の国際化との関連から」駒井洋編『定住化する外国人』明石書店、255-89.
- 店田廣文、2009、『全国モスク代表者会議——第 1 回会議の記録 2009 年 2 月 11 日』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文、2015、『日本のモスク——滞日ムスリムの社会的活動』山川出版社
- 店田廣文、2018、「日本人ムスリムとは誰のことか——日本におけるイスラーム教徒（ムスリム）人口の現在」『社会学年誌』59: 109-28.

- 店田廣文、2019a、「地方自治体におけるムスリム住民に対する『多文化共生』施策の現状」『人間科学研究』33(2): 225-34.
- 店田廣文、2019b、『「日本に帰化した外国人の生活と意識に関する調査」——帰化ムスリムを対象とする調査結果——単純集計結果報告書』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文、2020、『「日本に帰化した外国人の生活と意識に関する調査」——第2回調査・帰化ムスリムの回答結果——単純集計結果報告書』多民族多世代社会研究所.
- 店田廣文、2021、『世界と日本のムスリム人口 2019/20年』多民族多世代社会研究所
- 店田廣文、2023、『「日本のイスラーム」と日本人ムスリムの現在」伊達聖伸編『フランスのイスラーム／日本のイスラーム』水声社、85-103.
- 店田廣文、2024、『日本のムスリム人口 2024年』多民族多世代社会研究所
- 店田廣文・石川基樹・岡井宏文、2012、『「外国人に関する意識調査」射水市報告書』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文・石川基樹・岡井宏文、2013、『「外国人住民との共生に関する意識調査」福岡市報告書』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文・岡井宏文、2008、『日本のモスク調査 1——イスラーム礼拝施設の調査記録』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文・岡井宏文、2009、『日本のモスク調査 2——イスラーム礼拝施設の調査記録』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文・岡井宏文、2010、『滞日ムスリムの子ども教育に関する調査報告書』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文・岡井宏文、2011、『「外国人に関する意識調査」岐阜市報告書』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 店田廣文・岡井宏文・小野亮介編、2020、『第11回全国マスコド（モスク）代表者会議——「ムスリムが生きた『平成』の時代——遺産・継承・融合・断絶・競合』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室／早稲田大学アジア・ムスリム研究所.
- 鑑幹八郎、1990、『アイデンティティの心理学』講談社現代新書.
- TBS、2023、「“宗教と虐待”孤立する2世をどう支援していくべきか 変えていく長年の「タブー視」【news23】」、TBS NEWS DIG、(2025年1月15日取得、<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/404852?display=1>) .
- 寺田貴美代、2003、『共生社会とマイノリティへの支援——日本人ムスリマの社会的対応から』東信堂.
- 手塚和彰・駒井洋・小野五郎・緒方隆彬編、1992、『外国人労働者の就労実態——総合的実態調査報告集』明石書店.
- 東京弁護士会、2022、「2021年度 外国にルーツをもつ人に対する職務質問（レイシャルプロファイリング）に関するアンケート調査 最終報告書」、(2025年1月15日取得、

- https://www.toben.or.jp/know/iinkai/foreigner/26a6af6c6f033511cccf887e39fb794e_2.pdf).
- 東京弁護士会、2024、「職務質問におけるレイシャルプロファイリングに関する意見書」、(2025年1月15日取得、
<https://www.toben.or.jp/message/pdf/20240327ikensho.pdf>) .
- 東京新聞、2024、「教義の矛盾に気づいたら…17歳で精神が壊れた 宗教2世が苦しむ偏見や孤立 本当に難しいのは脱会后」、TOKYO Web、(2025年1月15日取得、
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/311497>) .
- 東長靖、1996、『イスラームのとらえ方』山川出版社.
- 東長靖、2002、「イバーダート」大塚和夫・小杉泰・小松久雄・東長靖・羽田正・山内昌之編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、149.
- 東長靖、2002、「イーマーン」大塚和夫・小杉泰・小松久雄・東長靖・羽田正・山内昌之編『岩波イスラーム辞典』、170.
- 坪田光平、2021、「困難経験の移動と階層性——中国系の学校経験」清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平、『世界人権問題叢書 103 日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店、263-290.
- 塚田穂高、2006、『『2世信者』の信仰形成の過程と教団外他者』川又俊則・寺田喜朗・武井順介編『ライフヒストリーの宗教社会学——紡がれる信仰と人生』ハーベスト社、82-104.
- 塚田穂高、2012、「新宗教の展開と現状」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編『宗教と社会のフロンティア——宗教社会学からみる現代日本』勁草書房、23-43.
- 塚田穂高、2022、「「宗教2世」問題の沸騰は何を問いかけるか」『現代用語の基礎知識 2022』自由国民社、278.
- 塚田穂高、2023、「「宗教2世」問題の基礎知識」塚田穂高・鈴木エイト・藤倉善郎編『だから知ってほしい「宗教2世」問題』菊間書房、16-36.
- 塚田穂高・鈴木エイト・藤倉善郎編、2023、『だから知ってほしい「宗教2世」問題』菊間書房.
- 角替弘規、2021、「個人化した対処と自発的周辺化の背景——ペルー系の学校経験」清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平、『世界人権問題叢書 103 日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店、321-45.
- 津市教育委員会事務局、2015、「ISIL（アイシル）による人質事件等による偏見や差別的行為を見逃さないための教職員への注意喚起について（依頼）（2015年2月23日付 人教第783号）」
- 植村要、2015、「当事者性に関わるインタビュー調査についての方法論からの考察」『保健医

療社会学論集』26(1): 48-57.

植村清加、2000、「固有の関係を辿る共同性——フランスのマグレブ系移民第二世代のスクーフをめぐる」成城文藝 170; 45-18.

植村清加、2016、「フランス・アルジェリア系移民第二世代の学校経験と変化する学校——パリ郊外の優先教育地区を中心に」『白山人類学』19、105-29.

Van=Manen, Max, 1990, *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*, (村井尚子訳, 2011, 『生きられた経験の探究——人間科学がひらく感受性豊かな〈教育〉の世界』ゆみる出版).

Woodhead, Linda, 2013, “Tactical and Strategic Religion”, Nathal M. Dessing, Nadia Jeldtoft and Linda Woodhead eds., *Everyday lived Islam in Europe*, Routledge, 9-22

山下泰幸、2018、「ハイブリッド文化としてのフランスの新しいイスラーム——信仰実践を回避する移民第二世代のムスリムの語りから」『ソシオロジ』63(1): 39-57.

横道誠編、2023a、『信仰から解放されない子どもたち——宗教 2 世に信教の自由を』明石書店.

横道誠編、2023b、『みんなの宗教 2 世問題』晶文社.

米本和弘、2021、『カルトの子——心を盗まれた家族』文藝春秋.

依光正哲、2002、「日本における外国人労働者問題の歴史的推移と今後の課題」一橋大学経済研究所世代間研究センターディスカッション ペーパーNo.52.

吉川孝、2017、「現代現象学とは何か」植村玄輝・八重樫徹・吉川孝編『現代現象学——経験から始める哲学入門』新曜社、3-32.

吉田達矢、2013、「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相——人口推移と就業状況を中心に」『名古屋学院大学論集 言語・文化編』24(2): 281-91.

義澤幸恵、2023、『オランダのムスリム移民——「柱状化」と多文化主義の可能性』明石書店.

在マルセイユ日本国総領事館、2015、「2015年の主な出来事」、(2025年1月15日取得、
<https://www.marseille.fr.emb-japan.go.jp/jp/sejikezai/sejikezai2015.html>)

雑学紹介チャンネル、2004、「イスラム国指導者『千葉県野田市にイスラムの学校を作るから5000万円寄付して』」、YouTube、(2025年1月15日取得、
https://youtube.com/shorts/l4kQGqE1_8g?si=BBx2aMQPof69Ipfo) .

Zuber, Valentine, 2023, (田中浩喜訳、「フランスにおけるライシテとイスラーム——近世から現代まで」) 伊達聖伸編『フランスのイスラーム／日本のイスラーム』水声社、45-65.

※クルアーンとハディース

日本ムスリム協会訳、1982、『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会

日本ムスリム協会訳、2022、『クルアーン研究注釈センター注釈学者グループ クルアーン

簡潔注釈』国書刊行会

水谷周監訳・杉本恭一郎訳補完、2019、『クルアーン——やさしい和訳』国書刊行会

磯崎定基、飯森嘉助、小笠原良治訳、1987、『日訳サヒーフムスリム 第一巻』日本サウデア
アラビア協会

磯崎定基、飯森嘉助、小笠原良治訳、1988、『日訳サヒーフムスリム 第二巻』日本サウデア
アラビア協会

磯崎定基、飯森嘉助、小笠原良治訳、1989、『日訳サヒーフムスリム 第三巻』日本サウデア
アラビア協会

牧野信也訳、1993、『ハディース イスラーム伝承集成 上巻』中央公論社

牧野信也訳、1994、『ハディース イスラーム伝承集成 中巻』中央公論社

牧野信也訳、1994、『ハディース イスラーム伝承集成 下巻』中央公論社

SUNNAH.COM a, “(366)Chapter: The Friday Prayer For The Slave And The Woman”,
(Retrieved January 15, 2025, <https://sunnah.com/abudawud:1067>).

SUNNAH.COM b, “(17)Chapter: The Adhan In The Ear Of The Newborn, 19 The Book
on Sacrifices”, (Retrieved January 15, 2025, <https://sunnah.com/tirmidhi:1514>).

SUNNAH.COM c, “(1) Chapter: `Aqiqah, 27 Chapters on Slaughtering” , (Retrieved
January 15, 2025, <https://sunnah.com/ibnmajah:3165>).

SUNNAH.COM d, “(19) Chapter: The 'Aqiqah With One Sheep, 19 The Book on
Sacrifices”, (Retrieved January 15, 2025, <https://sunnah.com/tirmidhi:1519>).

SUNNAH.COM e, “(33) Chapter: What Has Been Related About Disciplining The Son, 27
Chapters on Righteousness And Maintaining Good Relations With Relatives” ,
(Retrieved January 15, 2025, <https://sunnah.com/tirmidhi:1952>).

SUNNAH.COM f, “(100) Chapter: Saying Bismillah Before and Al-Hamdulillah After
Eating, 2 The Book About the Etiquette of Eating” , (Retrieved January 15, 2025,
<https://sunnah.com/riyadussalihin:727>).

SUNNAH.COM g, “(16) Chapter: What Has Been Related Regarding Reciting A Letter Of
The Qur'an And The Reward For That” , (Retrieved January 15, 2025,
<https://sunnah.com/tirmidhi:2910>).

付録：調査協力者の語り

第二世代 75 人への質的調査によって得られた語りはいずれも貴重なものであるが、本論文中にそのすべてを記載することは不可能であり、やむを得ず割愛した語りの方がはるかに多い。それらを含め、今後の第二世代研究に資すると思われる語りの一部を、以下に引用する。

家庭での宗教継承についての語り

・クルアーン学習と礼拝

マイサ 女性 24 歳・71：(父は) どんな話をしていても全部イスラームの話に帰結するんですよ。ちっちゃい頃は、何とも思ってませんでした。むしろ素直に吸収する子だったので、なるほどって。私、選民じゃないですけど、自分たちが正しいって思ってました、そればっか聞いてるので。で、クルアーンの話とか、そこはありがたかったんですけど、ハディースの話とか、やっぱ読まなくても毎日されるから、誰がどうでみたいな。だから結構、読んでないのに話とかすごい知ってましたね。おとぎ話感。絵本の代わりでした。

——理想的な家庭ですね、ムスリムを育てるには。

マイサ：そうですね。その代わり不思議なのが、無理矢理礼拝とか、ヒジャーブとかは全く強制してないです。

——礼拝も？

マイサ：されませんでした、強制。なんか、したいときにしなさいっていう。強制すると神さまに失礼だからっていう。

ウセイド 男性 19 歳・11：小さい時は、寝る前にイスラームの話をしてしてくれました。

(……) 今は毎日忙しくてなかなか会う時間がなくて、「礼拝しときなさい」「豚肉食べちゃダメ」とか、最低限のことを言うだけ。

ラニヤ 女性 23 歳・62：父がイスラームの歴史を教えてくれて、母が礼拝の仕方を教えてくれた。

——分担制なのね。

ラニヤ：父の専門は理系だけど、歴史好きで、小さい時から教えてくれました。

——じゃあ、知識はしっかり身につけてるんだ。

ラニヤ：深く知ることができましたね、ちゃんと知ることができた。日本では学校でイスラームについて浅くしか習わないから、家で教えてもらえたからよかった。

——礼拝も小さい時から？

ラニヤ：小さい時は何も。「礼拝しなさい」って言われるようになったのは、中学に入

ってからかな。それまでは、どうやってやるかも知らなくて。

——じゃ、今は礼拝はしてるんだ。

ラニヤ：できる時は。夜は家にいるからします、親が「やりなさい」って言うから。

——クルアーンのお勉強は？

ラニヤ：5歳の時、〇〇（両親の出身国）に帰った時に、クルアーンの先生が来て、暗記させられた。

——それは今も覚えてる？

ラニヤ：全部忘れちゃった。

ユースフ 男性 21 歳・15：（母は）子どもの宗教教育には熱心でした。自分が礼拝を始めたのは 4 歳のときです。年長で日本に来たのですが、幼稚園の先生方をお願いして部屋を貸してもらい、礼拝していました。（……）礼拝やマグリブの後のクルアーン朗誦などとイスラームの大原則のような守るべきことは譲らない母でした。（……）母はいつも質問に答えてくれました。答えが分からないものに関しては分からないけど、きっと意味があると言っていました。つまり「何でお祈りしないといけないの？」「いいから、しなさい！」みたいなことはなかったです。

ラハット 男性 16 歳・2：（父は）厳しいっていうか、たくさん教えてくれたって感じですね。面倒臭いは面倒臭いんですけど、強制はしないので。教えてくれるだけで、「うん、ちゃんとやとくよ」みたいな。

——やらなかったときは？

ラハット：ま、多少注意されたり怒られたりは確かにするんですけど、そこまで厳格ではないかな。（……）（礼拝も）強制はしないっていうか。「やれ！」っていうことはないですね。やった方がいいよ的な感じで、圧はかけてくる。

——圧はかけてくるんだ。それを嫌だと思ったことはないの。

ラハット：あるっちゃありますね。やっぱりそんなに、ね。別に自分が好きでやりたいわけじゃないから。

——あ、そうなんだ。

ラハット：いや、なんか昔はそうやって考えてたんですけども、今は慣れちゃったんで、なんとも思わないですけど。

——慣れなんだ。それが変わってくるのは、高校生ぐらいから？

ラハット：中学生ぐらい。

ヤシーン 男性 17 歳・7：（父は）厳しいですね。小 5 からファジュールに起こされるようになって。ファジュールやった後も、クルアーンを読んでからじゃないと二度寝させてもらえないんです。

——眠いのに…。

ヤシーン：弟たちは眠くて泣いてます。

——お父さん、とても熱心なのね。

ヤシーン：そうですね。夜は家族を集めて、クルアーンとかハディースとか読みます。礼拝の大切さを教えてくれたのは父ですね。

——礼拝はいつ頃から始めたの？

ヤシーン：小学生から少しずつ始めて、ちゃんとできるようになったのは中学です。

——学校でも礼拝してるのよね。どこでやるの？

ヤシーン：小中は空き教室でやってました。高校では保健室で。

——じゃあ今では、毎日欠かさず？

ヤシーン：そうですね、塾でも自習室でやってます。常にこれ（携帯用礼拝マット）持ってるんで。

——お母さんも厳しいのかしら？

ヤシーン：全然厳しくないです。けど、イーマーン（信仰心）が強い人で。母が行動で示すのを見てやろうと思うというか。弟たちも母を見てああなりたいって言ってます。父に言われるだけだったらやってなかったと思う。

ヒシャム 男性 16 歳・3：母は厳しいです。学校から帰って 1 時間ぐらいしたら、クルアーンを読まされます。

——小さい時から？

ヒシャム：小 4 から、毎日。

——どれくらい読むの？

ヒシャム：僕は毎日 2～3 ページずつだけど、弟は 5 ページとか。

——意味とかはわかるの？

ヒシャム：（父が）携帯で調べてくれたりします。

ザミン 男性 18 歳・9：6 歳からクルアーン読まされてた。小 5 で〇〇（国内の地名）に引っ越してから、本格的に暗記が始まって。嫌がっていたのにやらされた。

——今も覚えてるの？

ザミン：ジュズ・アンマもスーラ・バカラも。今はモスク行って復習してる、週 2 回。本当は行きたくないんやけど。

——でも、すごいじゃない。

ザミン：親自身覚えてないくせに、俺にだけ無理やり暗記させるのは納得いかん。

——抵抗したりしないの？

ザミン：文句言っても聞いてくれんし。弟たちに、「兄を見習うな」「兄を手本とするな」って何回も言うんで。

スハナ 女性 18 歳・45：(小学) 5 年生までにクルアーン 2 回読み終わってます。

——アラビア語で？

スハナ：(アラビア文字の学習は) 3 歳からやらされてたんで。普通に読めます。

——お父さん、厳しいんだ。

スハナ：すごい厳しい！自由なんて何もない。(……) なんてとか聞いても絶対答えてくれない。聞いたら怒られるし。すぐ手を上げるんで。

サリー 女性 39 歳・75：(父が) クルアーンを読みなさいとうるさいからケンカになるんです。〇〇(父の出身国) に帰るたびに、毎朝クルアーンの先生が来るので逃げ回ってました。日本では、〇〇さん(父の知人) からアラビア語の読み方を教えてもらってました。(……) 食事中にイスラームの講義が始まっちゃうんです。一方的で反対できないからそれ以上話が進まない。

ハニフ 男性 24 歳・29：小さい頃は「礼拝しろ」「お祈りしたか」とよく言っていた。

／ハニフ 男性 24 歳・29：(父は) すごいイスラームに熱心な人で。怖すぎて、もう勉強の時間嫌すぎて。突然、「〇〇(姉の名)、ノートもってきて」って言われて、二人でピクってなって。いやあの、父、手出るんで、ちょっと間違えると。

アイニー 女性 21 歳・55：(父は) うるさいことしか言わない。家いて、一日暇だったら、「なんで礼拝しないの」「今ズフルの時間だよ」とか。

フスナ 女性 26 歳・69：父は変に厳しくて。イスラームに厳しいっていうより「お父さん教」なんです。礼拝しているところもクルアーン読んでいるところも見ることがなくて。自分はやらないのに、子どもには厳しくて、小さい頃から「礼拝やれ」とうるさかったです。

ハミド 男性 19 歳・12：(父は) 言うことがコロコロ変わるんすよ、モスクに行けって言ったり行くなって言ったり。門限もコロコロ変わるし、10 時までって言ったり 8 時までって言ったり。遅くなると母が怒られるし、ホントしんどい。

——礼拝のやり方とか、教えてもらった？

ハミド：家では誰も何も教えてくれない。だいたい父が手本にならんし、礼拝もしてないから。

——え、それなのにモスクに連れて行かれるの？

ハミド：母に。父に言われて。クルアーン暗記するため。あと礼拝のやり方。意味とかじゃなく、動きとか言葉だけ。電話で勉強させられたこともあるし。もうしんどい、中

学の時一回キレた。

——じゃ、もうモスクには行ってない？

ハミド：連れて行かれます。行っても礼拝しないけど。

——モスクに行くのに、礼拝はしないんだ。

ハミド：断ると家に飛ぶ（家の空気が悪くなる）から、行くしかない。ウムラ（小巡礼）も、勝手に申し込みされて行かされて。行ったけど礼拝してない。

サイダ 女性 18 歳・47：9 歳から〇〇（国内の地名）のモスクでクルアーンを暗記させられてました。ジュズの 29 と 30。その頃一緒に住んでいた父の再婚相手に読み方を教えてもらって、あとは自分で覚えました。

スレイマン 男性 25 歳・30：小学校ぐらいまでは、（父に）棒で叩かれたりベルトで叩かれたり、普通にグーで殴られたり。（……）「なんでそんなイスラームをちゃんと信仰しないんだ」って言われた。（……）ちょっと父の教えるイスラーム、おかしいんじゃないかなって思い始めて。それから普通に、もうやり過ごすことがメインになりました。

アシーフ 男性 22 歳・21：9 歳までは普通に〇〇（父の出身国）の幼稚園小学校行っていたので、礼拝のやり方も知ってたし、断食のやり方も。だからもう全部あらかじめ知ってて。（……）（日本に住むようになって）やっぱり礼拝とかはちょっと嫌だったんですね、強制されるから。（……）僕は親になったら気を付けようと思ってることは、子どもの話を聞くことを絶対やろうと思ってて。ちっちゃい頃、父はずっとイスラームのこと教えてたんですけど、僕らの話はあんま聞かへんかった。今日学校で何してたとか、最近部活どうやとかいう話はなくて。それで一方的にイスラームの教えだけを、「今日このハディースのこっからここまでを読め」みたいなことを言う。

——じゃ、イスラームの勉強が親子のコミュニケーションなのね。

アシーフ：そうですね。だから、それ以外のところでもコミュニケーション取ろうと思って。（……）イスラームの教えをきつく言われるからお父さんが嫌いとかじゃなくて、それ以外の話をお父さんがしないからお父さんが嫌いだってなる。だから、それ以外の話を、今日学校で何があったとか何がどうだこうだったつつつて、それで3分の1ぐらいをイスラームの話するみたいな。「ちゃんといただきます、ビスミッラー言いなさいよ」とかそういうぐらいの方が、多分子どもにとってはイスラームをダメとか気持ち悪いとか、そういうの嫌やとか言わないと思うんで。結局そのコミュニケーション不足が、やっぱり第二世代の間であるんじゃないかなと思います。

・納得できる説明の不足

ミズラ 女性 21 歳・56：イスラームの説明をされたことがない。（母は）「生まれつきだからやらなければいけない」っていう、それが嫌。（……）ずっとイスラームの居心地が悪かった。

ライラ 女性 17 歳・43：押し付けてくるのに説明もやり方もなんも教えてくれない。小学生の頃から教えてこなかったお前ら（両親）が悪いだろうって思う。

——例えば、何を押し付けてくる？

ライラ：「礼拝しろよ」みたいな。

——でも礼拝の仕方は教わってないんでしょ、それは言う？

ライラ：言いますけど、「お前のせいじゃん」って言われて。「自分が学ばないから」って言われて。私、言ったんですよ普通に。わかんないから教えてって。言ってるのに全然教えてくれないし。

ハルーン 男性 21 歳・28：何で礼拝しなければならない？って親に聞いても「とりあえずやれ」。イスラームのこと教えてくれって言っても「そこにあるもの読め」。あとは言うことがコロコロ変わる。

マライカ 女性 16 歳・38：〇〇（両親の出身国）では「なんで？」って聞くと、はたかれるのが当たり前。言ったら怒られるから聞けない。クルアーンの意味も知らないくせに。中 1 の時、（中 2 の）兄が「わからないなら言うな」って抗議したことがあって、私は「落ち着いて」ってなだめたんだけど。でもそれ以来、調べてから説明してくれるようにはなった。親がわからないのに押しつけてほしくない。結果だけじゃ納得できない。

サービラ 女性 30 歳・72：（父に尋ねても）「イスラームでは疑問を持つことが罪だ」「地獄に落ちる」と言って答えてもらえない。疑問に持つことは当たり前じゃないですか、知らないことを。それを、そもそも宗教的に疑問を持っちゃいけないみたいな感じを一方的にそればかり言って。で、何かあったら「祈れば解決する」みたいな。祈ってもお前（父）から解放されたわけじゃないけど。

シリーン 女性 21 歳・58：「ダメだからダメ」とか言われて、え、なんで、っていう。詳しいところ聞いて納得したいのに、それが返って来ない。（……）バックグラウンドにはイスラームのことがあるんだからって言われるけど。

サーニア 女性 22 歳・59：父に見られたらヤバいんだみたいな、ずっと恐怖心があるというか。（……）ちょっと私的には冒険したような行動をしても、後から罪悪感がす

ごく襲ってくる感じで、見つかったら父に怒られる、って。

——罪悪感はお父さんに対して？アッラーに対してではなく？

サーニア：父。アッラーとかじゃなくて、もう父に対して罪悪感が…。だから私的には、めっちゃイーマーン（信仰心）の高いムスリムっていうよりは、なんか父に怯えて育ってきたっていうか。（……）厳しく育てられたけど、知識が伴ってなくて。だから余計納得できない部分が多くて。「ダメだよ」とか言われたときに、なんでっていうのがわからなくて。父もなんか説明してくれてるのかもしれないけど、多分父の日本語的にも（問題が）あるし。

アイニー 女性 21 歳・55：（父の禁止に）理由はない。ダメだからダメ。ハディースとか教えてもらってないんですよ。私はそのハディースとかには興味あったんですよ。大学高校入って、なんでダメなんだろう、なんで今までこんなことしてきてるんだろう、何が理由でずっとやらされてるんだろう、みたいな。「とりあえずダメなの、この家は」「ムスリムの家に生まれてきたからダメなんだよ」って母にも父にも言われてきて。じゃ、なんでムスリムの家に生まれたのって。ずっと、なんでなんでなんで、って。なんかやらされてるみたいな感じだったんで、結構それがつらかった。（……）だから小学校の時から勉強会で、もっとハディースとかについて教えてもらってれば。小学校の時モスク行くじゃないですか。子どものモスクと大人のモスクみたいの分かれてて。大人のモスクでは、なんかハディース読み合い会みたいなのが行われてたんですけど。子どものモスクは、もうなんかアラビア語をとにかく覚えようみたいな、字で覚えようみたいな、なんかクルアーンを覚えようみたいな会だったんで。だから、知識を得る機会はなかったですね。そっちの方が正直興味あったかもしれない、アラビア語知るよりも。まあクルアーンも覚ええないといけないけど。

——いっぱい覚えてる？

アイニー：もう忘れしました。

アリーバ 女性 25 歳・68：私も強制されたらめっちゃ嫌だし。（……）子どもの気持ちも考えてゆっくり教えてほしいと思います。ただ子どもは親のことを聞けとかじゃなくて、親も子どものことを聞けみたいな、お互い分かり合うことも大事だと思います。

ユスラ 女性 22 歳・61：（親は）子どもに「これダメ」って言った時に「なんでダメなの」って聞き返したらやっぱり理由が出てこないんですよ。やっぱ理由なかったらわからんから、「えー、じゃいいやん」って感じなんですよ、こっちからしたら。（……）

アリーバ：なんか礼拝の部分とかも、ただ「礼拝 5 回は義務だからやれ」とか。

ユスラ：そう、「なんで？」ってならんくない？

アリーバ：そうそうそう。だからその理由とか、礼拝の大切さをまず教えてたら、多分子どもが礼拝したくなると思います。

——なんで礼拝するのかって聞きました？

アリーバ：聞く前に教えてください。「私たちはアッラーのことを必要だからこういう風にしてるんだよ」「本当は礼拝しないことによってアッラーが何かを失くすとかじゃなくて、逆に私たちが何かを物足りなく感じるから、こういう風にさせてるんだよ」とか。(……)「断食やりなさい」とか「礼拝やりなさい」とか「ヒジャブつけなさい」とかじゃなくて、納得させるように、多分それが大事だと思います。

タイイブ 男性 22 歳・23：(小学校低学年の頃までは) 礼拝みたいなのもいろいろ教え込まれたんですけど。いつの間にか気づいたら、そういうのなくなって。多分、父もあきらめて。(……)(日本でイスラームを実践するのは) 難しいって言ってましたね、母は。

アシア 女性 14 歳・44：うちは父だけ一人で礼拝してる、断食も一人でしてる。母は関係ない、興味ない。家で一番きちんとイスラームやってるのは父で、次が私で、その次が兄で、最後が母。

——え、アシアは 2 番目なんだ。

アシア：私は、たまに自分から礼拝するし。

——すごいねー。たまにって、どれくらい？

アシア：えー、去年は 5 回くらい。

——SYM (第二世代向けの集会) に来たとき？

アシア：うん、あとはイードで。

アサド 男性 19 歳・19：(父は) 昔はイスラームについて厳しかったけど、今は寛容。

——どんな風に厳しかった？

アサド：小学生の時、礼拝の仕方が違うからって、モスクで皆の前で怒鳴られたり。クルアーン覚えさせられたり。あーでも、クルアーン覚えるとお金もらえてた。

——え、そうなの。いくらもらえるの？

アサド：タバーラカッラジーナ覚えたら 5000 円とか、ヤースィーン覚えたら 3000 円とか。

——クルアーン全部読み終えたら、1 万円もらえるって言ってたよね。

ナスィール 男性 16 歳・4：はい。断食も(ひと月間)フルにできたら 1 万円。ハッジも。

——あっ、だから行ったんだ。

ナスィール：行きたくなかったけど、1 万円って言われたから、まゝそれで(参加した)。

アリーブ 男性 19 歳・10：クルアーンは意味を理解しないで覚えてもしようがないから、アラビア語で読まないとダメ。(父は)小さい頃は意味を理解させようとしてたけど、〇〇(国内の地名)では周りの空気に流されて、モスクでクルアーンの暗記をさせられました。30 ジュズ(クルアーンを 30 に分けた最後の巻)の半分くらいは暗記した。そこは、子どもたちが無理に集められて意味を教えずに形式的に押しつけるだけ。だからモスクにいたくない子たちが、いつもコンビニにたむろしてて。一方的に厳しくすると反発しちゃうから、意味がないと思う。(……)(イスラームについて)僕はネットで学びました。

ガフル 男性 28 歳・31：家庭で受けたイスラーム教育は、何の役にも立っていない。イスラームは自分で見つけたと思ってる。

ディーノ 男性 18 歳・8：(イスラームについて)一切、聞いてないです。まったく聞いてなくて。イスラームってものは知ってたんですよ、そういう宗教があるって。社会でも習って、僕社会好きだったんで。何をするとかまったく知らなくて

家族についての語り

・親との関係

シャヒーム 男性 21 歳・16：(中学生の頃)心がメンタルブレイクダウンしちゃって、罪悪感とか疑問とか恐怖心みたいなものが波みたいに襲ってくるんだけど。(……)(父と)ドライブの時、全部自分の、歯がゆいこと全部伝えたら、例えば性のことに関して、「それはシャヒームだけが経験してるんじゃないかってお父さんもそうだったし、みんな大変だけどそのうち大丈夫になるよ」って言ってもらえたのが、まずめっちゃ心を励ましてくれたっていうか。父っていう唯一のムスリムとしてのコネクションから言ってもらえた言葉っていうのがすごい、あの日すごい生き返ったような気がしたんだよね。(……)(その後、父の勧めで父の出身国に行き)そこで、イスラームについてすごい基本的なこと、礼拝の仕方とかクルアーン読むとかドウアとか、そういうちゃんとした基本的なことを、ネットじゃなくて人伝いに、ちゃんとした勉強した人から学んだ。それもただの人じゃなくて、ホントに俺のおばさんだったり。あの変な例えになるけど、愛と一緒にイスラームが運ばれてくる。(……)心がね、ホントにあの、今 21 年生きてるけど、この 21 年の中であの時期が一番キラキラが伝わってくるっていうか、めっちゃくちゃ元気だったのよ、心の中が。

ユースフ 男性 21 歳・15：(母は)〇〇語を(母の出身国の言語)を終始貫いていました。自分の母語でしか、アキーダやイーマーンを説明できないということで、子どもたちには常に〇〇語を使っていました。

——学校と家庭の価値観の違いに悩んだことがありますか？

ユースフ：価値観はいろいろ違いますよね。ただ「無理だと思ったら、皆に合わせていいよ。アッラーは分かってくださる」と母がいつも逃げ道を作ってくれていたの、乗り越えられました。打ち上げも参加しましたし、異性ともカラオケを熱唱していました。

ヌール 女性 34 歳・74：子供の頃は、「できることだけやればいい」と母は何も言いませんでしたが、年頃になると私を見張るようになり始め、貞操を守ることに必死でした。それを煩わしいと思っていました。ですが、結局社会人になってからは、貞操以外のことはなんでもオーケーだった母だったので、そこまで厳しくないことに気付かされました。ただ、私自身完全に拒絶していたので、どうしていいのか分からなかったのかもしれませんが。(……) 結婚するなら相手は絶対ムスリムでないと、まず親は認めないですし、自分もそれは曲げられないようなものがありました。あと、私もある程度強い貞操観念を持っていたので、結婚する前に体に触れることは強く抵抗を持っていました。これが母の教えによる影響であったことは、後に気づきました。(……) ある意味守ってくれていた母に今ではものすごく感謝しています。

エリヤス 男性 17 歳・19：父は厳しいけど、尊敬してます。小さいときから、「母を大事にしなさい」って、ずっと言われてきました。

——お母さんは？

エリヤス：厳しくはないですけど、悪いことをすると「アッラーが見てるよ」って言われます。

サリー 女性 39 歳・75：(父は) 食事中もイスラームの話をするんです、アッラーの話ばかり。小 2 の時、学校で習ったことを話したらイスラームではそうじゃないって否定されて、それ以来学校での話ができなくなって。もう中学以降は、一緒にご飯食べても会話がなかった状態でしたね。でも、父の前ではいい娘でいたいという思いがあって、父の話はいいことだと自分に言い聞かせてました。(……)

——お父さまは厳しい方だったんですね。

サリー：そうですね、厳しかったですけど、母が理解者でいてくれたんで。それがなかったら、イスラームを選んだかはわからないです。でも、父の強制がなかったら今の自分はないだろうなとも思います。子どもの頃からイスラームに触れることも正解なのかもしれない。そうやって考えると、大人になって親も一人の人間としてみると、すごいなと思いますね。あー、うちの親はすごい！

ウセイド 男性 19 歳・11：小さい時は厳しくなくて、イスラームのメリットとか見せてくれてたんですけど。父の性格上、徐々に厳しい部分を出してくるんですよ。で、父

が厳しくなり過ぎると、母が間に入ってくれる。(……) 母は尊敬しています。父も、言う機会がないけど、本当は尊敬してるんですけどね。最近、父と大喧嘩して家出しちゃったんで。

ナジュマ 女性 24 歳・67: 父は(イスラームの実践に) 厳しい。でも母が理解してくれてるから。父との間で橋渡しをしてくれるから。(……) 友だちに誘われても、その 8 割は親に言わないで断る、親に話すのは 2 割くらい。悩みとか愚痴とかは、おばあちゃんに全部言って。

シリーン 女性 21 歳・58: 母が一回言ったことがあって。「こういう地獄から抜け出したいなら早く結婚するしかないよ」みたいな。母に言っても意味ないってなったら、もう誰に言えばいいのか。(……)

——親が厳しくて、反発して家を出ちゃったりという子もいるけど。

シリーン: 反発しても意味ないからな、っていう風になっちゃって。(……)

サーニア: 絶対追いかけてくるし、絶対何としてでも探し当ててくるっていうのがなんか。どこかに行ったところで、見つけられてまた怒られる、みたいなこともあるし。

シリーン: うんそう、倍怒られるみたいな。なんかもう、結局その縛りがずっと。見えない壁みたいのがあったというか。

サーニア: そうそう、そうそうそう。なんか檻の中で育ってるって感じがずっとしてて。なんかね自由に、自由になりたいって、常に思ってたけど。

シリーン: ここから、この状態から脱するにはもう結婚しかないって。(……)

——お母さんは、お父さんとほぼ一緒ですかね。

サーニア: そうですね。もうなんか、違うってことはあんまないもんね。

し: ないね。日本なんだから、こうしてあげないと子どもたちがかわいそうだからとか、そういう意見することはないんで。

サーニア: ない。逆にそれ(父との間の仲介)をしてくれてる人の話を聞くと、「え、そんなことしてくれるの、お母さん」って、みたいな。逆にそれがびっくりする。

アイニー 女性 21 歳・55: なんか父って、話ができないんですよ。日本の常識を全然知らないし、日本の学校の制度とか知ろうともしないし。

——お母さんが全部やってくれたから。

アイニー: 全部やってくれたから、何も知らないんですよ。だから話ができないんですよ。悩み相談とかしても、全然回答が、筋違いなことが返ってきて。父とはまともな話ができないなって思う。(……) (日本語は) 結構下手くそですね。

——お母さんとは何語で話してるの?

アイニー: 日本語です。母もなんか子どもに教える感じで、説明の仕方も全部。(……)

私がもし〇〇語（父の出身国の言語）ができれば、父がもっと大人に見えたんじゃないかな。今、日本語ができないから、そういう（子どもみたいな）父しか見えないけど。

（……）私はとにかく父と話し合いたいけど。

——あー話し合いたいんだ。言葉さえ通じればね。

アイニー：そう、共通言語もないし。父は、私がいろいろ言っても聞いてくれないんですよ。聞こうとしてくれない、聞く耳をもたない。私になんか言っても、「ダメ、それは違うから」って。私の意見とかは何もないんですよ。（……）私の意見を聞いてもらえてるっていうときがほしかった。いつもビクビクしながら、そういう話になったら何も言えなかったから。（……）そういうふうになりたくないじゃないですか、普通に親と子なんて。

——ね、もっと仲良くしたいよね。せっかくの優しいお父さんなのに。

アイニー：そうですね、普通に嫌いじゃないし。嫌いじゃないんですよ、みんな、親のことなんて。ムスリムじゃなくなっちゃってる子たちも、みんな親のことは絶対嫌いじゃないけど、離れざるを得ないぐらい、その子たちの心の余裕がもうないんだと思う。

マグフィラ 女性 23 歳・64：（母の出産で）小学校の中学年当たりの時に〇〇（両親の出身国）に一年弱行って、そんな時にイスラームについて初めて学ぶきっかけがあったっていう感じで。それがなかったら正直今の私があるかどうかかわかんないっていうくらいですね。それも母の望みがあったのかなって感じがしますね。（……）両親と弟たちの言語の壁っていうのがあるので、弟たちにしてみたら、何あの日本語、みたいな、多分言葉に関わらず、親が嫌っているのがあると思うんで。それこそ私が、やっぱ両方話せるっていうのがクッションじゃないですけど、多分そういう役割かなって思っ

スレイマン 男性 25 歳・30：（父には）いまだに一番ショックだったっていうのは、ホントに父としてあるべき姿なのかなと思ったのは、妹が生まれたときに、僕立ち合い出産したんですよ。中学校終わって、放課後バス乗って産婦人科行って。うち自営業なんで、陣痛始まってる日に父が融通きかして病院くればいいじゃないですか。普通に仕事行って、母は陣痛始まってるのに。（母は）自分で車に荷物詰めて入院する道具、運転して産婦人科行ってるんですよ。父は全然、妹が生まれても来なくて。何してるかって言うと、モスクから先生連れてきて妹に謎の言葉聞かせて。それでもう無理だと思いましたね。子どもが生まれるのって結構母体にも負担大きいじゃないですか、生命にかかわることよりもイスラームを優先するんだと思って。やっぱ一生分かり合えないんだっていうのが、ある意味第一段階かもしれないです。

ザミン 男性 18 歳・9：（母は）厳しい。度を越してる、あれは過保護とかじゃなくて支配。逃げ場がないんですよ、家にいるから毎日いろいろ言ってくる。

——お父さんは？

ザミン：あまり会う機会がないし、会っても話さない。キレると激しいから、話したくない。

——お家にいるのもつらいわね。

ザミン：親とは普通な関係をふるまって、心の中では出て行く計画を貯め込んでる。企みがばれないように静かにしてる。親が生きてるうちは演技する、本性を知られたくない。親を殺したいっていつも、何度も思ってる。悪いことをしたくなるのは家で受けたストレスのせい、反抗とかじゃなく、悪いことがしたい。家を出たい、一人暮らししたい。

——高校卒業したら出られるんじゃない？

ザミン：結婚するか（全寮制の）ハーフィズの学校に入る以外じゃ、家を出さないって言ってる。もう生きてる意味がない。

ハミド 男性 19 歳・12：（父とは）中学から普通の会話してない。金の関係だけ。今頃ぐいぐい来られても関係ない、いまさら話しかけてくんなって感じ。

サリマ 女性 21 歳・57：（家の外では禁忌を口にしていることについて）大喧嘩になるやろなと思いますね。「騙してたんか」みたいな、（母に）そういうの言われるやろなって思うけど。親を泣かすのが嫌で。

——親のことは大事なのね。優しいね。

サリマ：別に親が嫌いとか、そんなんではないんですよ。

スレイマン 男性 25 歳・30：（父には）ムスリム抜きで認めてほしいところありますよね。ホントに、イスラーム抜きで。例えばよくあるのは、僕が部活で大会で成績残しました、それはアッラーのおかげですみたいな。え、まじで？みたいな。

アスマ 女性 32 歳・73：俗に言う親ガチャ失敗ですね。毒親と呼ばずなんて呼びましょうか。幸せは人それぞれ、親の思う幸せを押し付けるのは虐待だと思います。（……）私はもはや完全に宗教アレルギーで、父の話を聞くたび反吐が出ますし気分が悪くなります。

サイダ 女性 18 歳・47：生後 3 ヶ月で兄と〇〇（父の出身国）に連れていかれて、祖母と暮らしてました。途中で（サイダが 3～7 歳の間）、兄だけ日本に帰って父のところに。私はずっと祖母のところにいて。祖母は優しくった、足が悪いのにチョコ買いに行ってくれたり、自分はご飯を食べないで私のためにつけて結婚費用を貯めてくれたり。（……）（9 歳で日本に戻ってから）〇〇（国内の地名）では、父の再婚相手の子ども

の面倒を見ないといけなくて、学校は3ヶ月くらい休まされてた。

——え、面倒みるって、サイダちゃん、小学生でしょ？

サイダ：3年生。兄も一緒に、4年生で。(……)(14歳で生みの親に引き取られてから)母は、私に父の面影を見てるんですよ。ちょっと1回反抗しただけで「性格が悪い」と一生言い続ける。「サイダはお父さんのように暴力をふるう」とか言って。

——サイダちゃんがお母さんに向かって暴力ふるうの？

サイダ：そんなことしたくないのに、すごい無神経。ストレスを私にぶつけてくるんですよ、兄にはしないのに。

・きょうだいとの差

ハルーン 男性 23 歳・28：自分は一番上だったから、いろんな押し付けをされたし、禁止されたことも多かった。だから下の兄弟をみると、羨ましくなるし、同時に親を恨めしくもなる。

サーニア 女性 22 歳・59：弟を見てると、あ、なんか全然自由じゃん、みたい。(自分は)外にもあんまり遊びに行けないとか。なんかもうエリアが決められてて、(……)家のベランダから見た時に見える範囲にいなさいみたいな。

メレク 女性 16 歳・40：私は門限6時半だけど。兄は8時とか9時なのに。あと、友達同士で遊びに行っちゃダメ、兄は普通に遊びに行ってるのに。

マライカ 女性 16 歳・38：兄は全部オーケーで、ずるいなーっていつも思う。まあでも、親に暴言を吐いてはいけないと思ってる。だから聞き入れて流すようにしてる。

サリマ 女性 21 歳・57：(きょうだいのなかで)女一人っていうのもあって。だから弟は、中学生の頃とか女の子と遊んでてもいいのに、こっちは男と遊ぶとか。(……)弟が12時過ぎて帰ってきても、別に何も言わないのに、自分が12時過ぎてると「遅い」とか。もう21なのに。心配なんかなって思うから、言ったらいいじゃないですか。「今日はちょっと遅くなるから、1時になるかもしれん」とか言ったら、「いや、1時はありえん」みたいな言うけど、弟とかは2時半とかに帰ってきても別に何も言わんとかって感じやし。

サービラ 女性 30 歳・72：(自分は門限が厳しかったのに、妹は)あんだけ遊び歩いて、あんだけクソ自由にバイト三昧で、帰ってくるのは(夜中の)2時くらいとかで。(……)それでいて見下してくる、「お姉ちゃんはできなかったもんね」みたいな。シバキ回すぞ、このクソガキ！(……)(中学受験のとき)人前で投げ飛ばされて、(父と母

の)二人がかりで罵られ殴られたんですよ、すごくないですか。そんな思いを、妹なんか一回もしたことないんですよ。

アイニー 女性 21 歳・55:姉は本当につらかったと思います、いろんな経験してきて。姉の方が門限とかすごい厳しかったし。私はそんな言われなかったんですけど、姉はすごい厳しくて。7 時になって校内放送かけられてるし。(……)だから姉はすごい私のこと、恨んでるんですよ。「アイニーはいいよね」「アイニーはいいとこしか見てないんだよ」みたいなのがずっとあって。だから私、あんまり姉と仲良くないんですよ。(……)姉、もういろんなこと、家族にも全部喋らないようになったし。だから一緒にご飯も食べなくなって、そっからは。ダイエットとか言いつつも、多分喋りたくなかったんだと思うけど、もう夜何にも食べないみたいな日ばかり続いて。だから一緒に食事することすらなくなっちゃって、姉とは。(……)姉は、私だけでできてることが多いから、「なんでアイニーだけは許されるのよ」「あの時、私は許されなかったよね!」みたいなのがずっとあって。(……)(姉は)周りとは関係すごいフレンドリーだし、すごい人気者なんだけど、家ではもうすごい態度激変。家帰ってきたらバァーンって、「話しかけないでよ」「知らないよ」みたいな。話ができない。

エリヤス 男性 22 歳・19:妹がなんか、結構 10 時らいぐまでに家にいなさいみたいに言われてたけど、自分はない。連絡さえしてれば、1 か月間家にいなくても、なんも言われなくていい。この差をちょっと…。まあ妹に申し訳ないだろうって(思っ)、あんまり夜遅く帰ってきたりしないようにしてるけど。

宗教実践についての語り

・礼拝の実践

ユースフ 男性 21 歳・15:自分が礼拝を始めたのは 4 歳のときです。年長で日本に来たのですが、(母が)幼稚園の先生方をお願いして部屋を貸してもらい、礼拝していました。(……)高校時代になると教室、遊んでいる公園、映画館の駐車場でよくお祈りをしていたのですが、(からかいなどは)特に何もありませんでした。

ザミン 男性 18 歳・9:礼拝は 7 歳からすべて逃したことはない。

——すごい。それは親に言われて?

ザミン:自分の意志で。くせになってる。(夜の礼拝を)忘れたかもしれないと思ったら、寝てても起きてやる。礼拝することがムスリムの証拠やから。

ラハット 男性 16 歳・2:(高校入学時に)一応先生に、「礼拝したいんですけど」って自分で聞きましたね。で、「礼拝する場所、どこか貸してもらえませんか」って聞いた

ら、「いいですよ」って言われて。教室貸してもらえたんですけど、使ってない教室を。でもその鍵が、いちいち取り取りに行って開けるのが面倒臭いので、普通に人気のないところで今はやってます。(……)

——じゃあ小学校の時から5回は欠かさず？

ラハット：小学5年生か4年生ぐらいからやってました。

ヤスミー 女性 15 歳・37：父はイスラームに全然厳しくない。礼拝さえやれば文句は言わない。

——礼拝は1日5回？

ヤスミー：はい、5回。学校に行っている間の分はカダー（既定の時間を過ぎて補う礼拝）で。

エリヤス 男性 17 歳・19：（礼拝は）中3で言われて、高1の終わってから毎日5回やっています。

——学校でもやってるってこと？

エリヤス：いやそれは、夜にまとめて。断食できない分もちゃんと礼拝するようになって、父に言われてるから。「寝る前にドゥアをしなさい」ってのも言われてて。だから、毎晩クルアーンを読んで礼拝してドゥアをしています。ドゥアは本当に、一日に何回もしてる。

ジャリール 男性 17 歳・16：（母は）たまに厳しいけど、礼拝とかクルアーンとか。でも今は、僕に任せてくれます。

——親に言われなくても礼拝してるのね。

ジャリール：礼拝するのは当たり前だと思ってるから。小学校時代からやってたし。学校から帰ってから、まとめて5回。モスクも、小さい時は毎日モスクに行っていて、「行くものだ」と思ってたから、嫌だと思ったことはないです。

ヒシャム 男性 16 歳・3：（礼拝は）やってます、5回。

——親に言われて？

ヒシャム：言われなくても、家族みんながやってるから当たり前で。生活の一部になってる。

ウセイド 男性 19 歳・11：中2で礼拝の仕方を覚えた。それからずっと礼拝している、寝る前にまとめて。どんなに体調が悪くても礼拝しないとザワザワする。

ヒナ 女性 20 歳・53：礼拝は2歳からしていました。小学生の頃に、なんで礼拝する

のかわからなくなって、中高では自然とやらなくなったけど。それは反発とかじゃなく、自然と。今も外ではしないです。家で、帰ってからまとめてしてます。

ヌール 女性 34 歳・74：子どもの頃から、礼拝行為だけは心が落ち着くので好きでしたが、特にいつもやるわけではありませんでした。今は毎日していますが、何かと都合があって時間通りにできず、後でまとめてやることが多いです。

アリーバ 女性 25 歳・68：（小学）4 年生の時に、アスル（午後の礼拝）忘れちゃったんですよ、塾行ってた時に。それでめっちゃ後悔してたので、多分そのぐらいから。別に礼拝を真面目にやってるわけではないですけど、でもやらないと絶対なんかもう悔しいっていうか、なんか泣きそうっていうか、そんな感じなんです。今でも別に、礼拝は絶対ちゃんとしてるとかは保証できないですけど、でもできるだけはやるみたいな感じで。

——じゃあ 4 年生から、もう 15 年欠かさず。

アリーバ：そうですね。でもやっぱり今でも、信仰の状態によって、ただ動いてるだけだなんていうときはあるんですけど。礼拝する時に、本当にアッラーと近づいてるんだなど。

ユスラ 女性 22 歳・61：（礼拝を始めたのは）中学 3 年生ぐらいからですかね。周りがやってるから。〇〇（父の出身国）に行った初めの頃は、やったりやらなかったり。「え、（みんなが）やってる、（自分も）やろう」みたいな感じだったんですけど。気がついたら 5 回の礼拝してました。

アズマ男性 20 歳・27：自分も同じだ。〇〇（ムスリムマジョリティ国）に留学して、それまで全然やってなかったけど、周りがやってるからたまに一緒にやって、気づいたら、ね。

ユスラ：ね、やってました。

イルファン 男性 40 歳・33：中学生の頃には（父に）怒られないように先読みして、言われる前に礼拝するようにしていた。

ガフル 男性 28 歳・31：とにかく（父に）怒られないように行動して。「礼拝したか」って言われるから、礼拝マットをちょこっと動かしたりして、礼拝したふりをしてた。

アニサ 女性 19 歳・63：（礼拝は）小さい頃はちゃんとやってました。今は言われてしぶしぶやる感じ。あと、これはいけない気がするけど、困ったときの神頼みとか。父に「礼拝しろ」って言われるのは当然だと思うけど、でも反発するんですよ。一回「いや

だ」と言ってからやる。1日5回しなければいけないっていうのはわかってる、でもしたくない。自分でも何がしたいかわからない。この状態を変えたい気持ちはあるけど。でも変えられない。

アシーフ 男性 22 歳・21：（父が夜の礼拝）の時に家帰って来て、「イシャ、一緒にやろう」って、二人で「嫌や」って。

ラシード 男性 22 歳・22：「嫌や、嫌や」ってずっと言ってて、もう二人、絶対、なんかわからんけどな、反抗期やったんか知らんですけど。絶対やりたくない。（……）強制されるのが嫌な時期があったから。なんか「やれ」って言われても「嫌や」って言って、「家族でやる」っても「嫌や」って言って、なんか上行って一人でやったりとかして。特に意味のない抵抗やったんですけど、結局やるやんみたいな。

——でもやるんだ。ちゃんとひとりでやるのはすごい

ラシード：でも母からも「礼拝しろ」って言われる。たまになんか「礼拝しいや」って言ってきて。でも、リビングで2人でやるときは2倍速3倍速ぐらいでやるんです。

アシーフ：チャカチャカチャカチャカって。

ラシード：でも1回怒られたことがあって。「そんなチャカチャカすな」みたいな言われて。

——それはいつぐらいまで？

ラシード：高校生ぐらい。（……）

——じゃ、今でもやらない？

ラシード：言われたらやるんですけど。言われてやるのと断食の時期にやるのと。ポイント10倍デーやから「やれ」みたいに言われるから。自発的にやりたいとはまだ思っていないですね。

・食の禁忌

ヌール 女性 34 歳・74：小学校の頃は「なんで豚肉食べないんだよ、好き嫌いするんじゃないねーよ」とか同級生に言われたりすることがありました。

ナジュマ 女性 24 歳・67：（給食は）豚以外はオーケー。でも豚を除けると、「嫌いだからって残すんじゃないよ」って言われるのが嫌だった。

アイマン 男性 20 歳・14：小学校では、食べられないものに線が引かれた献立表をもらって、それを食べないようにして。（配膳係の）友達も、その分食べられるもの、肉以外のおかずとかを多めに入れてくれて。食べられるものが一個もない時は、給食のおばちゃんが別のものを作ってくれました。

——別のもの？

アイマン：ラーメンの日は、僕だけうどんを作ってくれたりとか。あと、調理実習とかは、うちの班だけ、ハラール肉持って行ってそれを使ったり。修学旅行ではもともと手配してくれてたかな。

——じゃあ、食べ物で苦労したことはないわね。

アイマン：もう、トントン拍子で。先生が理解してくれたっていうのが一番ですね。

ハリーム 男性16歳・5：（給食は）食べられないもの、お肉とかあるので、そういう時は母が献立表を見て、似たようなものを作ってくれて、それだけを弁当にして持っていく、っていう。（……）

シャヒーム 男性 21 歳・17：俺はなんか小学校の頃はそんなにね、肉とかそういうの全然気にしてなくて、豚のある日ぐらいは弁当持ってきてたね。だからパンとかも全然気にせず食ってたし、チキンとかも。（……）

アニサ 女性 23 歳・63：私は全部お弁当だった。牛乳も何も飲まずに。なんかやっぱり、お母さんが作るものは全部お母さんが好きなもの作るから、においが強いんだよね。めっちゃ気にしてた。

ジャリール 男性 21 歳・16：臭いよね。電車でも結構、出ちゃうんだよね。

アニサ：で、密封するじゃん。もうやばいわけよ、夏とか、すごい臭くて。で、言われたことある、「カレー臭い」「カレー民族」みたいな。つらかった、それは。なんか臭すぎて、「国に帰れ」って言われた。（……）

ジャリール：アニサとほとんど一緒っていうか、臭いのこととか、やっぱりよく言われた。一番印象的なのは、小学校入ってめっちゃワクワクしてお弁当持って行ったら、言われたのが「臭いんだよ」。

アニサ：言われるよねー。

ムラド 男性 21 歳・18：正直給食のご飯よりお母さんのご飯の方がおいしいから、全然不満はなかったんですけど。周りの人も、「おいしそう」「おいしそう」っていうし。

アシア 女性 18 歳・44：うち、弁当持ってって取られたんだけど。

ジャリール：え、どういうことどういうこと？

アシア：なんか食べれないときあるじゃん。そんな時に別で作って持ってった時、周りとは違うじゃん。確実にうちらおいしいじゃん。そしたら周りから来て、「ちょっとちょうだいよ」、（弁当の中身を取る身振りをして）ばあー！って。

ジャリール：あ、俺あったわ、一回。運動会の日かなんか、揚げ物ばっか入れるから、それで「ちょうだい、ちょうだい」つつって、やられたことがあった。

ムラド：俺も「ちょうだい」って言われたことあるけど、一生懸命ガードしてた。

ジャリール：想像できる。（……）イムティアズは？いつも何お弁当持ってくるの？

イムティアズ 男性 15 歳・1：（不機嫌そうに）なんか、夜ご飯をそのまま弁当にした

ものとか。

ジャリール：ただ夜ご飯が、また昼出てきたから嫌だったわけね。

アズマ 男性 19 歳・27：（給食が食べられないことについて）自分の中で、なんでなんでっていうのはあった？

アニサ 女性 23 歳・63：なかった。なんだろう、最初っからそれだからさ。

アズマ：周りが違うわけじゃん。一人だけ異質な、自分がなんでこんなことしてんだろ、みたいな。（……）友達が小学生だった頃に、親からなんで豚食べちゃダメだっていうのを、しっかりめっちゃめっちゃ説明してもらったみたいで、それでもう自分から納得して、それ以来全然食べたいとは思わなかったっていうのを聞いたんで、結構だから大事なポイントかもね。

ジャリール：やっぱ親の身になって、同じ献立を用意する難しさとか、今まで見てるから、そんな負担かけさせたくないってのはあるけど。やっぱりその、そんなに臭いが強いものを入れられたくない。

アニサ：大事なポイントだよ。臭いが強くないものをね。

ジャリール：うちの親は、「自分たちはムスリムで、ノンムスリムと違うんだよ」みたいなことを説明されて。まあ頭の中ではなんとなく理解してはきたけど、やっぱり言われると嫌だし、そういうことはあったから。（……）言われたとしても、あとは親とかがどうケアするか、そこが一番大事。

アニサ：そう、それ大事。親大事。

——どうやってケアしてもらったの？

ジャリール：されてないです。違うってことだけを言われました。

アニサ：逆に、干渉し過ぎて嫌だっていう方向だったんですけど。（……）（弁当についてからかわれたことについて）優しい言葉を家の中でもらいたいの、学校にそこで掛け合っちゃうのはやめてって。余計ことが大きくなって、子どもだけで解決することを、親も巻き込んだじゃう。（……）

アズマ：じゃあ、子どもに聞かれたら、ちゃんと論理的にしっかり説明してあげる。でもしつこくやりすぎず、学校にも掛け合ってはいけない。で、優しい言葉でちゃんと話すってのが2点目で。あと3点目が、臭いのはダメ。臭いのは持ってっちゃダメだよ、みんな。絶対ダメだよ、親になったら。

ヤシーン 男性 17 歳・7：小学校の時、自分だけが弁当だったのはイヤだった。中学からはみんなが弁当なのでよかった。（……）（高校生になって）部活の打ち上げは年に2回あるけどほかの子に紛れて休んでる。

アスマ 女性 27 歳・73：小学校でお弁当だったのも恥ずかしかった。周りと違うこと

で萎縮しちゃう。

ハニフ 男性 24 歳・29：一番腹立ったのは、やっぱり弁当の（いたずら）。なんで親が作ってくれた弁当に、なんで（豚肉の）ウインナーが入ってるの？って。え、なんで？って、なるじゃないですか。（それを見て）笑ってるやつがおるんですよ。

——結局その日はどうしたの？

ハニフ：（いたずらした生徒を）ボコボコにして。弁当も食べずに、そのとき帰ったんやったかな、家。授業もほったらかして。

——それ、親に言った？

ハニフ：言っていないです。親にもあんまり言えへんからね。

——先生にも言っていないの？

ハニフ：うん。言われへんすよね。誰にも。

ラハット 男性 16 歳・2：（昼の礼拝をして戻ったら、自分の弁当箱に唐揚げが乗っていたので）、隣にいた子に聞いてみたんです。「これ、俺が食べる肉なのかな」って。そしたら、「いや、違うよ」って笑って言ってきて。「は、どういうこと？」って思っ

て。（……）（理由を）聞いたんですけど、「別に、お前がどういう反応するか見たかっただけ」って。なんか余計におかしいなと思って。

——そっか、ふざけてる範囲なのね。やってる本人は悪意じゃなくて。

ラハット：そうですね。でも、こっちは嫌ですけどね。

——（事前アンケートに）「友達が、自分のハンバーグはハラール肉だから食べてと言われ、信じて口の中に入れた瞬間、まあ違うけどねと言われ、とっさに出した」ってのもあるけど。これ、唐揚げと同じ人？

ラハット：同じ人です。なんかやり方が違うんですけど。

——そうだね。黙って置いといたのと、嘘ついてまで食べさせようとするっていうのは。

ラハット：その、嘘ついてまでっていうのは、みんなの前でだったんですけど。

——うわー、それは晒し者になっちゃうね。

ラハット：悪意が感じられますね、それ。

ハミド 男性 19 歳・12：弁当を持って行ってたけど、小 4 から給食も食べてた。

——おうちの人は知ってる？

ハミド：知らんでしょ、言っていないし。

——じゃあ豚肉も食べちゃってたんだ。

ハミド：食べてました、おいしいとは思わないけど。

スレイマン 男性 25 歳・30：小学校は（肉のことを）気にせず全部食べてました。父が

そんな時まで知らなくて、給食のことを。ただ〇〇（国内の地名）にモスクができてから、なんかそういう（親世代の）情報交換がすごくて。それで「学校の給食食べるな」みたいになって。（……）（中２で転校して）僕のためだけに特別食作ってもらうのもあれなんで、別に僕が除けて食べればいいだけなんで、「お父さんには適当に言っと思ってください」という風に言って。中学校の方は理解があったので、父の方には「スレイマン君にはもう豚肉は提供しません」と。実態としては、食べようと思えば食べれたし……食べてましたね、面倒臭いから。

ライラ 女性 17 歳・43：これまで中学校の後半、中３くらいまでは豚肉を食べないで、ちゃんとそういうのはしてたんですけど。でも、高校生入ってから輪が広がるじゃないですか、人間関係の。だから、たまに豚肉が入ってるやつ、いいかなって妥協しちゃって。最近も食べちゃうことが多くなっちゃったし。

サリマ 女性 21 歳・57：お酒飲んでることとか、もう普通に今豚肉も食べてるし。見ないんですよ、お菓子（の成分表示）とかも。これ食べれへんってわかってても、別に食べたいから食べようみたいな感じで、食べちゃったりするし。そういうのは（親に）言ってないですけど。

アニサ 女性 19 歳・63：友達と遊びに行った時や友達の家に行った時に（食の禁忌を）説明するのが面倒で、「やっぱいいよ」となっちゃう。クラス会やバイトの飲み会でも、私一人のために全員が気を遣うのがイヤ。本当はみんなとワイワイしたい、つらい。

アズマ 男性 14 歳・27：打ち上げの食べ物関係で、１人だけ食べられないと迷惑かかってから、それもしやだなって感じですね。

ラニヤ 女性 23 歳・62：ムスリムであることを嫌だと思うのは、友達付き合いが面倒くさい、遊びに行ってもご飯食べに行こうってなるとこっちが申し訳ない。

・服装規定

ヤスミーン 女性 15 歳・37：（スカーフ着用は）小５から。自分で被ろうって決めた。父とか母には「早すぎる、もうちょっと待ったら？」って止められました。「一回被ったら、もう外せないよ」と。でも、同じ〇〇（両親の出身国）人の女子が同級生にいて、一緒に被ろうってなってたから、それでそこから。

アナム 女性 19 歳・51：小５の時、〇〇（父の出身国）に行って自分のアイデンティティに気付いて。〇〇（父の出身国の民族衣装）が好きで、小学校にも着て行ったこと

もあります。でも、スカーフを被りたいと言ったら父に「やめて」って言われた。〇〇（父の出身国）の親戚は誰も被っていないからって。

——じゃあ服装とかは厳しく言われない？

アナム：いえ、中高時代の制服は短いスカートはダメって言われて。膝から上は出しちゃいけないって。家を出たら、（スカートのウエストの部分）中に折って短くしてたけど。

メレク 女性 16 歳・40：（父は）スカーフは強制しないけど、服装には厳しい。ノースリーブやミニスカートはダメ。

サリー 女性 39 歳・75：スカーフは被れとは言わなかったですね。もともとコンサバではないので。バレーボールのユニフォームも OK で。でも 6 歳でスカート履くのは禁止、中高になると私服にうるさく言うようになりました。

ナジュマ 女性 24 歳・67：スカーフの強制はないけど、中高時代の制服のスカートは足首までの長いやつで。

サリマ 女性 21 歳・57：スカートとかは履けへんから、普通にパンツとか、ロングスカートとか。

——夏は、半袖とかは？

サリマ：半袖は着てます。でも「下は隠せ」って。水着も、長いのを履けて言われるけど、可愛くないし。

アイニー 女性 21 歳・55：姉は制服を、みんなスカートなのにズボンで行ってたんですよ。

——ええっ！

アイニー：やばいですよね。かわいそうですよね、姉は。地元でムスリムだった子が、姉が初めてで。中学 1 年生の時に、（……）ムスリムの父親たちに、「あの女の子はどうするんだ」「あの年になってスカート履いて行かせるのか、お前は」みたいな。（……）周りの父親たちからの視線がすごいらしくて、そっからいろいろ父は言われるのが嫌で、っていうのも多分あったと思うんですよ。

——それによってお姉さん、いい迷惑だね。

アイニー：制服に女の子がズボン履くなんてその頃はなかったのに、特注で作ってもらって。でもそれも最初はダメって言われてたんですよ、その中学校に。それだったら父は「中学になんて行かなくていい、もう〇〇（父の出身国）に行きなさい」みたいなことを言ったらしくて。母が絶対に〇〇（父の出身国）の学校になんて行かせてあげたく

ないみたいなの。(……) 日本にいた方がいいって言って、無理やりズボンの制服を作ってもらって。でも姉、それがもうトラウマで。それで、高校からはスカートがオッケーになったんですよ。

シャジア 女性 20 歳・52：スカーフ被らないことを月に一度は(父に)文句言われる。――でも被らないんでしょ。

シャジア：目をつぶってくれてる。

サイダ 女性 18 歳・47：父は厳しい。すぐに暴力をふるう人。小学校の時に、スカーフを強要してきて、絶対外しちゃいけないって。

サーニア 女性 22 歳・59：(父からの) 圧力っていうか、なんかもうダメだから、もうなんか何も言えない感じで。(……) (スカーフを) 被らなきゃいけないって言われて、じわじわ圧をかけられた感じで。私、周りの目を気にしすぎて、なかなか勇気が出なくて、ずるずる引っ張って(小学)6年生まで、2年間ぐらい。本当は4年生の終わりに被らなきゃいけなかったけど、ずるずるずるずる。(母に)「中学までには被らなアカんよ」って言われて、6年生の終わりで被っちゃったって感じで。でもやっぱり泣くんですよ、なんかもう周りの目も怖いし、どう見られるか。やっぱり友達も減りました。やっぱりそうやって被って、なんか減ったというか、「変な子」って離れていく感じがなかったわけではなくて。

・異性とのかかわり

メレク 女性 16 歳・40：彼氏を作ったら父に追い出されちゃう。(……) 夜ごはん食べる時、毎晩父に「今日は男子と話してない？」って聞かれて。話すんですけど。でも本当のこと言ったらショック受けちゃうから。その度に嘘をつくのがつらい。

アナム 女性 19 歳・51：ボーイフレンドがいることは、父には秘密にしていたんだけど、高1の時、スケジュール帳を見られちゃって、バレちゃって。父が爆発しちゃって。その後は気まずい。(父も) 見ないふりをしてる感じ。

ナジュマ 女性 24 歳・67：バレンタインはダメ。「好きな人がいたら連れてこい」って(父は)言うけど、いても言えない。(……) 学生の頃は、宗教のことで悩んでいることが嫌で、普通になりたいってずっと思っていました。

ヌール 女性 34 歳・74：周りの同級生の子がお付き合いをしたりすることが増え、自分はそれがタブーなので、会話をすると溝をいつも感じて、なぜうちはダメなんだろう

と悩んでいました。親はただダメと言うだけで、大した説明をしにくれず、ただイスラムではダメだから！としか言われなかったので、納得いかない部分もあり、好きな人ができて気持ち打ち明けることができず、苦しい思いもしました。

アイニー 女性 21 歳・55：父に男の子と遊んでるの見られたら、もう終わりです。

——見られたことがある？

アイニー：私はないですね。(……) (クラス会で男女数人で集まったとき) 1 年ぐらい経って、なんかで喧嘩した時に (父が) 「あの時もアイニー、男の子と遊んでたでしょ！」みたいな言ってきた。

——1 年間温めてたの？

アイニー：え、まだ覚えてたのみたいな、めっちゃ怖かったです、ホントに。

シリーン 女性 21 歳・58：家では絶対男の子の話は出さない。

——それはいつごろから？

シリーン：親の目が気になるとか、なりだしたのは、やっぱり小学校高学年から。家では喋っちゃダメだなとか、見られちゃいけないとか、男の子と関わってるところは、とか思い始めたのがそれぐらいかなって、確か記憶的には、その辺なんで。(……) なんか男の子と喋るのはダメなことだってわかってるんですけど、参観日のときにお父さんが来て、男の子がちょうどそのタイミングに私たちに喋りかけてきて。ってなった時に、(父が) 見てる！みたいな感じになって。その子は悪気なく、たいした話じゃない話をしてきて。それが、アッラーに対して、私喋っちゃダメなんだとかより、父に見られたらヤバいんだみたいな、そっちになるみたいな。なんかね、ずっと (父に対して) 恐怖心があるというか。

サーニア 女性 22 歳・59：(父が塾に迎えに来たとき) たまたまそこで仲良くなった男の子が「じゃあねバイバイ」って言って、私が「バイバイ」ってやって、それですごい怖かったことがあったの。「バイバイ」ってやって出てきたら、父が車乗った時なんか不機嫌なんですよ。「今の人、男？」って言ってきて。もう咄嗟に、「違う違う、先生にバイバイしただけ」とかって言って。「たまたまその延長線に男の子がいただけだと思うよ」とかって言って。わ、やっぱり見られたらそうやって文句言われるんだって思って。やばいなって学習してって、父の前でやっぱり男概念はダメだなって。(……)

(男子が) 一緒に車に乗ってたときに、仲良く喋ってたとき、「お父さんすごい目で見てたんだよ」みたいな、「もう離れろみたいな目で」(と母に言われた)。ちっちゃいんですよまだ、幼稚園とかそんな。「目をギラギラさせてたよ」みたいな。

——男女が一緒にいちゃいけないのは、いくつぐらいからなんです？

サーニア：小学校から。うーん、じゃれ合いなんだけど、なんか仲良くしてんのが多分

目障りっていうか、ちょっとギラギラしてたよみたいなこと、(母から)聞いた覚えがあるので。(……) なんかその、お父さんからしたら「男は危ないから」みたいな。何が危ないのっていう。そうなんか、もうなんか、なんで避けなきゃいけないって思って。ホントに知識が伴ってないから、なんで止まりなんですよ。なんで、なんでっていうところで。

・行動制限

ハミド 男性 19 歳・12：高校生の時はバイトしちゃダメで。今でも泊りはダメ、20 歳になったら外へ出たい。

サリー 女性 39 歳・75：(父は) 厳しくていろんなことがダメ。お泊りダメ、夜遅いのはダメ、クリスマスコンサートに出るのはダメ。

シャジア 女性 20 歳・52：中高大ずっとお泊りダメ、恋愛ダメ、帰宅が遅いと怒られるからみんなと遊んでも 9 時までに帰らないといけない。(……) ここは日本やから、〇〇(父の出身国)のイスラームを教えないでほしい。

ハニフ 男性 24 歳・29：日本で子どもたちを育てたのは間違いや、とか聞いたことあるし。いろんなことがあるからね。例えば彼氏彼女のこともあるし。夜やっぱ遊びに行ったりとか。日本は、〇〇(父の出身国)では考えられないことがいっぱいあるし。——でも男の子が遊びに行く分にはそんなにうるさく言わないんじゃない？

ハニフ：いや、僕も高校生の頃でも門限多分 10 時とか。ある程度ルールがあって、泊まりに行くのはダメとか、例えば。いろいろ言ったらいけるんですよ、向こうの住所とか、電話番号とか、お母さんの連絡先とか。でもやっぱりなんやろ、隠したかったとかあるし。なんか悪い集まりにもやっぱり行ったこともあるしね。だから、そこらへんから親とあんまりコミュニケーション取らなくなって。

マライカ 女性 16 歳・38：中学までは友達と遊びに行くのもダメ、部活もダメ、文化祭の打ち上げもダメで。今は土曜だけ外出できるようになったけど、「マグリブまでに帰るように」って言われてる。

アニサ 女性 23 歳・63：(門限は) めちゃくちゃ厳しくて。小学生の時は、季節によるけど 4 時とか 5 時、マグリブ(日没)の。高校生で 5 時とか 6 時で。大学生になって、バイトがない日は「7 時ぐらいまでには帰ってこい」、バイトがある日は「10 時半までには絶対着きなさい」みたいな。で、バイトが終わるのが 10 時とかで。すごい怒られた。4 年間ずっと怒られた。

サービラ 女性 30 歳・72：(大学生の時、遅く帰宅したら) 私の部屋のものがズツタズタに切り刻まれてました。カバンも服も、お気に入りの高いカバンも、全部使えないようになってました。

——えっ、ごめんなさい、お父さんの話とつながらないんだけど。

サービラ：帰ってきたのが 11 時半だったから、「ムスリムの女としてとしてお前はこーだあーだ」と言われてからの、「ふしだら」とか「売女」とか。その年から私も研究室入って、帰ってくるのが 11 時 12 時過ぎることがあって。帰ったら、「どうせ大学の男と何かしてたんだろう」とか。

——そんなこと言うの！お母さんそれ知ってる？

サービラ：知ってます。でも母の通訳が入るんです。「父が本当に言いたかったことは……」みたいな。

——なんでお母さん、お父さんの側に立っちゃうんだろう。

サービラ：自分の立場が悪くなるからでしょうね。でも、あれはしょうがないと思います、〇〇(両親の出身国)は本当に(父権制が)ひどいし。母は暴力を恐れて父に何も言えない。

シリーン 女性 21 歳・58：修学旅行ひとつにしても、行っちゃダメっていうのがあったので。小学生は行ったんですけど、母がついて来るんですよ。だから尾行じゃないですけど、近くにいて。で、ホテルは一緒に。(……) なんかさらっと私たちも受け入れてたけど、ヤバいなって思っ。

サーニア 女性 22 歳・59：いや異常だと思った。自分の子どもにはやらないかなって。(……)

シリーン：中学校になったら次、〇〇(国内の地名)っていう風になって、距離が延びるってなったらもう、「もうついて行けん」って(母に)言われて。(……) 高校なんかもう飛行機乗るじゃないですか、〇〇(国内の地名)とか行ってたから。もう絶対ダメだって、聞くまでもなかった。(……)

——なんでダメなんだろう。

シリーン：(父に)「一人ではダメだから」って言われて、確か。「〇〇(父の出身国)の女の子たちはみんな一人で動かないよ」とか言われて、それでピタッと終わる、みたいな。

サーニア：でも私たち、〇〇(父の出身国)で住んだことないし。旅行でホントに 3 回とか、それも期間も 1 カ月半とかね、長くて。それぐらい行ったことしかないのに、「〇〇(父の出身国)の子はこうだよ」って言われたところで。

シリーン：ここ日本だし、みたいな。

アイニー 女性 21 歳・55：姉の時は、(小学校の) 修学旅行も行かせないで。母がついて行くと、一緒に行ったんですよ私も。

——いいお母さんね、そこまでしても行かせてあげたかったんだね、修学旅行に。

アイニー：そう、母は本当に優しい。だから私たちが後ろからスタスタついてって、姉が民泊に泊まる時だけ、私たちがドライブしてピックアップして泊まらせないようにして。で、また朝送りに行くんです。(……)

——でもアイニーさんは行けたんだ。

アイニー：姉も中学ぐらいからオッケーになって。(……) 姉が中学からオッケーだったら、私、小学校からオッケーなんで。そういうところで、どんどん姉が切り開いていったんで。私はだから、だからこそ私は多分そんな嫌いじゃないんだと思います。

——イスラームの嫌な部分を見てないんだね。

アイニー：そうですね。嫌って思った経験があんまりないかもしれないです。姉とかに比べると。だから別に辞めたいとか思わないです、全然。

学校での経験についての語り

・同化願望

アリフ 男性 25 歳・32：(小学生の頃) テレビでやってる美白クリームのコマーシャル見て、あれ欲しいっていつも思ってた。

サービラ 女性 30 歳・72：日本人の顔になりたいです。

——やだー。こういう彫りの深い顔の方がいいにきまつてるじゃない。

サービラ：だから化粧でつぶしてるんですよ、がんばって。私この前、夢にまで見ましたもん。これ(目)を一重に変えるとか奥二重に変えるって。

——日本人はここを目指してるのよ、一生懸命化粧して。

サービラ：じゃ、くれてやるよ、って思います。絶対こんな顔だったら毎日泣くぞって思いますもん。(……) だから私、その(筆者の) 鼻筋欲しいですもん。

——やめて、こんな鼻、悲しいから。

サービラ：くれよー、としますもん。

アスマ 女性 27 歳・73：水着はダメだから水泳の授業はずっと見学、たまに校庭走って来いとかって、私だけマラソンさせられたり。みんなと違うのが嫌だった。(……) できるだけみんなと同じでいたかった。だから(父に)「被り物しろ」って言われた時は、「嫌だ!」って抵抗した。これ以上異質なものになりたくなかったから。

サーニア 女性 22 歳・59：(母にズボンの制服を勧められて) さすがに、ちょっとズボンはって思って、「スカートで」って言って。(母は)「じゃあ長くしてね」みたいな感じ

になって。長いのも長いで、ちょっとダサいじゃないですか。だから靴下を上げれるところまで上げて。極力そういう。みんなと差がないように工夫して。

アサド 男性 19 歳・19：何も悪いことをしない熱心なムスリムと、仕方なく演じている学校での自分という二つのアイデンティティ。学校での自分と家庭での自分と二人いて、どっちが本当の自分かわかんなくなってくる。

・級友らによる不快な経験

アリーブ 男性 19 歳・10：小学校時代は外国人だからといっていじめられて、相談室や図書室登校でした。中学校は一週間しか行ってないです。(……) 今は引きこもり。ほとんど外に出ないから、家の周りに何があるかも知らない。

——お喋りできるようなお友達とかはいない？

アリーブ：いないです。1対1だと喋れるけど3人以上だとフェイドアウトしちゃうんですよ。愛想笑いとかできないし。

サイダ 女性 18 歳・47：小学校中学校ずーっといじめ。女子のいじめがものすごい。

「気持ち悪い」とか言われて、修学旅行の帰りにもケンカして。(……) 高2で登校拒否になって、もう1年半。バイトもやめて。最近2か月、3ヶ月、自分が壊れそう。信頼できる人が信頼できない、妄想のように病んでくる。私がこんなに自己否定しているのに気付いてくれない、気付いてほしい！先生もお父さんもお母さんも何をしてたんだ！

ラニヤ 女性 23 歳・62：小学校から中2までずっといじめがあった、外国人だから。無視とか陰口とか。

——中3でいじめがなくなったってこと？高校は？

ラニヤ：高校では、もう。

——それはどうしてなんだろう。

ラニヤ：コミュニケーション力が上がったから？みんなに合わせるのがうまくなったっていうか。

ウセイド 男性 19 歳・11：小中ずーっと暴力を受けていた、外国人っていう理由で。だから高校はインターナショナルな環境に行きたかったんだけど、うまくいかなくて。

スレイマン 男性 25 歳・30：小学校の頃いじめてる同じメンバーが同じ中学校の校区に来るんで。結局自分たちが中学校で安全な位置を確保するために、僕をいじめるわけじゃないですか。で、中学校の時に、結局それがエスカレートして、肘を骨折させられ

たっていうのがあったんです。

——いじめって、もっと軽いからかいの類かと思ってた…。

スレイマン：いや、すごかったですね。2人がかりで腕を抑えられて、空手やってる子にみぞおち30回ぐらい膝蹴りされて。

——理由は？

スレイマン：なんか「お前むかつくんだよ」みたいな感じで、いきなり来られて。(…)(アメリカ同時多発テロ事件が起きたのが)ちょうど年長ですね。保育園児がそんな、わかるわけないんですけど。結局保育園の友達の両親が言うわけですよ、「あの子の家はあだこうだ、遊ぶな、危ないから」って。で、結局みんな遊ばなくなるじゃないですか。で、小学校に上がってもそれが続いて、ずっと。

ハニフ 男性 24歳・29：ずっといじめられてましたね。小学校6年間と中学校3年間と高校3年間、全部いじめられてた。

——それって全部じゃない。具体的なエピソード、何か話せる？

ハニフ：うーん…ありすぎてどれをしゃべっていいのか。(……)中学校の時は学ランっていうやつやったんですけど、もう家帰ったら、足跡めっちゃついてるとか、学ランに。払って帰ったけど、父にバレて。「これ何？足のマークちゃう？」みたいな。

——蹴られてるってこと？

ハニフ：そうそうそう、ボコボコ。そんなんは週何回もあるし。(……)服隠されたり、靴隠されたりとかもいっぱいあるし、殴られたりしばかれたり。同じ学年じゃなくて、先輩もね。めっちゃ怖いよ。学校行きたくないとか、行ってなかったりとかしましたもん。

ハニフの友人：包丁ここに当てたって言ってなかった？

ハニフ：まあまあ。まあまあまあまあ。

——自殺したかったってことね。それはいつぐらい？

ハニフ：中3とかかな。

——思いとどまったのはなぜ？

ハニフ：勇気なかったですね。グサっていかれへんよ。こうやってやったら痛いんですよ。チクってなって、絶対無理って思って。一発で死なれへんかったら、どうしようとか……もう無理。

——よかったよかった。それはよかった。そんなところに勇気なんかいないから。よかった、本当に。生きてくれてよかった。ありがとう。

ハニフの友人：ありがとう。

ハニフ：死ぬ人もおるもんね。すごいと思うよ。無理ですもんね。(……)この話も自分で50パー(%)ぐらいなんです。まだやっぱり誰にも話されへん。それをな、もっともっと喋れたらな。(……)

——高校は違う地域に行くでしょ？ そうすると、今までのいじめのループから抜けられたりしない？

ハニフ：高校も、なんかいじめのピークだったんですかね。

——長すぎるでしょ、12年間ピークって。

ハニフ：いや、多分もっと。もっと、20年近くぐらいかもしれん。

——え？だって、今24歳でしょ。いじめられてない時期、ほぼないじゃない。

ハニフ：ここ1、2年とかちゃうかな。(……) やっぱりどこ行っても変な奴っておるからね。やっぱり狙われるんですよ、外国の子とかって目立つでしょ。

アスマ 女性 27 歳・73：学校で一人だけの外国人で、そのせいなのか、小3からいじめを受けていました。シカトされて、陰口言われて、ばい菌扱いされて、落としたものを拾ってあげようとしたら「触らないで！」って。そんなのが6年生までずっと、ネチネチと。

ディーン 男性 18 歳・8：小学校の頃は、ハーフってだけでいじめがあつて。いろいろあるんですよ。日本人ってクソめんどくさいんで。自分と違うものを消したい、つてのが多分多いんだと思うんですよ。「死ねよ」みたいな言葉もあつて。靴隠されたりとか。教室行ったらランドセルなくて。(……)

——学校行くの、嫌になったりとかしなかった？

ディーン：そんなことないです。なんか、負けたくないんで、ずっと。ここで学校行かなくなったら、負けなんで。(いじめの首謀者が) わかった次の日に、その子の席の隣に座って、「こんなことしかできないの？ やってること負け犬だよ」って。ずっとスポーツやってるからだと思うんですけど、負けたくなくて。

ダリヤ 女性 27 歳・70：(小学校で) 体育に着替えた後に帰ってきたら、制服がなかったんですね、置いてた制服が。あれって探してみたら、もうどこにもなかったんです。グルグル探して。(……) ゴミ箱の中に入ってたので、臭いじゃないですか。だからもう1人、制服じゃなくて体操着だけで着てたっていう日もあったりして。(……) あと1つとしては、上履きを片方は池、片方は靴箱とか。あとは、そうですね、筆箱の中には砂だらけと、石と、あと鉛筆、定規から全部折られていて。

——親は？

ダリヤ：もちろん知らせて。両親も力になって、校長先生と担任の先生も抗議をしたんですけど、やっぱり証拠がないからと言って、学校側は何もしてくれなかったんです。(……)

——もう学校行かなくてよかったんじゃない。

ダリヤ：毎日なんか負けたくないっていう一心で、ほとんど休まずに行きました。バレ

ーボールを多分続けたかったっていう一心で。もちろん無視も当たり前で、常に一人っていうのもあったので、うん、なんとなくそれで過ごしましたね。

ユースフ 男性 21 歳・15：自分の外見は〇〇人（母の出身国）そのものなので、「国に帰れ！」「触らんで、俺は黒い肌になりたくない。」のようなハーフによる嫌なことが主で、宗教で特に問題は無かったです。（……）少なくともテロリストとムスリムを混同した友人はいませんでした。心の中はわかりませんが。田舎で小、中、高が同じ友人が多くいたからかも知れません。大学に入ってからむしろ「豚をお前の口に突っ込んで、イスラームを壊してやる」といった過激な冗談や「家に宗教持ち込みたくないから」と本気で家に上がらせない友人がいて焦りました。（……）今でも酔っぱらった友人に道端で絡まれたり、性体験を平気で話す同性や異性を見たりすると、たまに泣きたくなります。

サーニア 女性 22 歳・59：（スカーフを着用しているせいで）なんかやっぱ悪目立ちじゃないけど、変に目立つのはあんま好きじゃなかったの。なんかその目立ち方はしなくなかったっていうか。やっぱり、髪の毛出してる時とは違う注目があるから。多分きっとみんなも見たことないものだから。で、なんか言ってくる子とかもいた、からかってくるような感じの子とかね。「髪の毛生えてないだろ」とか「ハゲ」とかね。でもやっぱり、傷つかないわけもなく。それを言われて、「何言っとるんだこいつ、ちゃんと髪の毛あるわ」とかね。別にダメージがないわけでもなく。

——中学生になってからは？

サーニア：それはなかったな。でも視線が痛くて。無言でね。（……）ハブられる（仲間外れにされる）とかそういうのはないけど、友達の優先順位をつけられるとしたら、絶対最後だになっていう感覚はあった。

サービラ：中学2年生の頃、私、友達と遊びに行きたかったんです。（それまで）全然友達と遊ばせてくれなかったから。〇〇（地元の繁華街の名）に行きたいって言ったんですよ。（父は）「ダメだ」、（私が）「なんで？」、（父は）「〇〇（地元の繁華街の名）にはサタンがいる」って。そういうのをずっと（友達に）いじられまくったんですよ。（……）服も、私、サイズXSなんです、Sより小さいんです。なのに（体の線がみえないよう）XXLを着させられて、しかも茶色とかグレーとか地味なやつ。なのに、スカーフは一丁前に着て。同級生からも、当たり前ですけどからかわれて。

ハルーン 男性 21 歳・28：小学生の頃から周りとは違うことが嫌だった、ハーフであることとかムスリムであることとか。テロが起きると「お前イスラームやもんな」って言われるけど、クラスで説明とかできひんし。たたかれたり。（……）（高校生になって）

イスラム国が話題になった時には、「これからは俺に手出せんくなったな」とかって、ネタに走ったりしました。

ラハット 男性 16 歳・2：〇〇（父の出身国）のことを知りもしないのに、なんか、「どうせ東南アジアとか汚い国なんだろう」とか（言われる）。偏見がすごすぎて、もうちょっと調べてから言ってくれよみたいには思います。（……）日々の生活の通常のノリで「おい、過激派！」とか言われるんです。やっぱわかってないのに言ってくるって感じです。

——そう言われるとどうするの。

ラハット：たいてい反論はするんですけど。

——するんだ。笑って流すとかじゃなくて。

ラハット：ものによりますね。そこまで傷つかなかっただけで流したりしますけど。なんかイスラームって、やっぱ僕だけじゃないし、みんなが関わってるので、それを馬鹿にされるとちょっとイラっとくるので。

ラシード 男性 22 歳・22：中学の、ちょっと IS が活発になった辺りぐらいに、「お前爆弾魔なんか？」みたいな言われて。「お前、明後日お前の家爆発するわ」みたいな言っ

て、返したりとかしてたんですけど。（……）
アシーフ 男性 22 歳・21：なんか言われたりするんですけど、「日本で一人だけムスリム」みたいな風に言われるんですけど、そんな時に毎回「世界の 4 分の 1 がムスリムやから、日本人 1 億人の方が少ないぞ」って言って、ボコボコに言い負かすんですけど。「お前らの方が少数派だぞ」ぐらい。多分ないんですよ、そういう孤立感みたいな、9 歳まで〇〇（父の出身国）にいて暮らしてたから。

——マジョリティを知ってるってことなのね。

アシーフ：そうですね、マジョリティの世界知ってるから、なんでマイノリティにそんなこと言われなきゃいけないの、みたいな。

イマーラ 女性 15 歳・36：中学校は成績別に 3 つのコースに分かれてて、私は一番上のコースやったけど、一番下の子たちがからんでくる。わざと近くで「イスラム国消えて」とか。

エリヤス 男性 16 歳・19：ニュースでイスラム国って言うせいで、IS がイスラームの組織だと思われちゃって。それと同じ人達と思われちゃうから、だからもうテロリストだと思われてたりして、すごいつらい思いをしてて。理解してくれない人はずっといじめみたいな感じで通りすがりに「テロリスト」って呼んだり、そういう事をする人が中にはいっぱいいて。

マライカ 女性 15 歳・38：私の場合は授業中で話題に出ちゃったので、みんなが知っちゃって、一緒にいても話しかけてくれなかったりとか。

エリヤス：IS が出たのが急すぎて、一気に来たから、対応というか困って。周りからどう見られるかっていうのも、また一から考え直さないといけなくなったし。この先どういう目で見られるのかとかすごい考えて。

マライカ：混乱しているし、何でこんな事言われているんだろうとか思うし。

エリヤス：まずニュースで何でこの人達がイスラム国とかイスラミックステイトって言われているのか分からなくて。ただのテロじゃんと思って、全然イスラム関係ないじゃんと思って。(……) 朝早くニュースやって、昼のニュースやって。また夜のニュースで全部 1 日中 取り上げられているから。インターネットのニュースでも載っているし。

マライカ：絶対 1 つ目のワードで IS とかイスラム国とかって言ってたし。

エリヤス：SNS でもツイッターでもまた誰かにリツイートされて回ってきたりして。今の情報社会の中でみんな絶対目にしないわけがないから、みんな知っているわけだから、その 中でどうやって生きていくかっていうのはやっぱり。

マライカ：ツイッターっていうのはまったく知らない人間でも、それこそ IS の件が出た時にすごい悪口を書き書いて。イスラム教徒全員出て行けとか。日本来るなとか。

(……) 見たくないけれどリツイートされて回ってきたりとかあって、そのリツイートした人が自分の友達だったっていう時のショックの大きさとか、そういうのが辛いし。見たくない情報も見ちゃって苦しんじゃって。

エリヤス：遮断のしようがないよね。

エリヤス 男性 16 歳・19：(友人の事例を挙げて、) 先生が、テロがひどくなっていてという話を授業中にしたらしくて。そこで友達とかがみんなその子がムスリムってことを知っているから、「お前もムスリムだよな」みたいになって。そこからどんどん話が進んでいって、お前もあいつらと一緒にじゃねーのって言われて。それで授業が終わったんですけど、その友達がトイレに行って戻ってきたら自分の机と椅子がなくて、廊下に出されていて。鞆も全部廊下とか教室から離れた所に置かれてて。爆弾とか危険なものを持っているかもしれないからって言われて。(……)

マライカ 女性 15 歳・38：私は、(弟の通う小学校で) 男の子たちが 1 人のムスリムの女の子をからかっていて、IS の件で。その子もすごい泣いていて。(……) テレビを見ているから子どもはすぐに言葉を覚えちゃうし、それが言っていることか悪い事かまだ判断出来ない学年…2 年生、3 年生かな。

アズマ 男性 14 歳・27：僕も、体育の時間のために体操服に着替える時があって、その体操服に着替える時に、ある子が自分の脱いだ服を顔に巻いて、こうやって (テロリストの真似)。それで違う友達が「わーイスラームだ！イスラームだ！」って、めっちゃ

ゃなんか、笑い合ってたんですよ。いろいろ冗談やってたのが、見てるのがすごい辛くて。IS って言ったらまだいいけれど、イスラームって言ってるから。イスラムと宗教の自分の信じている宗教のイスラームが結びついちゃうから、すごい嫌だなと思っていました。

・教員による不快な経験についての語り

ハルーン 男性 21 歳・28：中学の時は先生もいじめに加担してたな、なんか公開処刑みたいな。暴力的ないじめがひどくなってって、父が学校に怒鳴り込んだことありました。

スレイマン 男性 25 歳・30：(小学)3年の時の体育教師は最悪でしたね。なんですか、「いじめられても負けるな」ぐらいの、ようわからん理論で。結局自分がいじめられたことない人って、ちゃんとしたいじめの対処法を伝えないんですよ。結局いじめられる方にも理由があるとか、弱いからいじめられるとか、そういう根性論って感じで。

——そこで先生が助けてくれたら、いじめが止まったかもしれないのに。

スレイマン：そうそう、そうそう。で、4年生の時は、新任の女性の先生だったから、半分学級崩壊してるレベルで、もうなんか、ようわかんなかったです。で、5年生6年生はまたなんか体育系の教師が来て。(……)(中学で肘を骨折させられたときは)もみ消されましたけどね、普通に教育委員会に。

ハニフ 男性 24 歳・29：(サッカー推薦で入学した高校で)推薦の子たちと先輩たちと集まって練習をする機会あって。でも「外国人やからボール回すな」って、パス来えへんで、ずっと。(……)先生に相談したときには、「サッカーしてる子がそんなんするわけがない」って。親にも言われへんから、情けないし。で、先生に相談したら、もう最終的に、「日本は島国やから仕方ない、外国人を受け入れる文化があんまりない」と。

——先生はそれを直してくれようという気はなかったのね。

ハニフ：相談したけど、直す気なかったですね。で、サッカー部で喧嘩になって。(……)(サッカー部の級友が)なんか「外国人」みたいに言ってきて、そこで僕がプチッと来てしまったんよね。先輩とかにも「外国人や」とかっていじめられるとか、言われてたから。その時に同じクラスの子にプチッと来てしまっって、暴力を起こしてしまっって、停学というのになって。

アサド 男性 19 歳・19：英語のテストに、イスラームとテロを結びつけた絵が出て、それについてディスクライブしろって問題が出たことがある。

——どんな絵？

アサド：インク壺にムハンマドって書いてあって、ペンを入れたら爆発するっていう感じの。

——ひどいな。なんて書いたの？

アサド：ムスリムとしてでなく、あえて先生の喜びそうな答えを。でもそのあと、「これは本当か」って聞かれて。

——職員室に呼び出されて？

アサド：いや、教室で。テスト返す時、みんなの前で。

——わざわざ聞く？で、なんて答えたの？

アサド：「イエス」って言うしかないでしょ。僕は何を書けばよかったの？

シャジア 女性 20 歳・52：小学校にスカーフを被って行ったことがあって、そのとき先生が「どうした？」って聞いてきて。もうそれ以降、被りたくない。

アニサ 女性 19 歳・63：中 2 から高 2 まではスカーフ被ってたんですけど。IS の話題があったとき、先生に「大丈夫？」って聞かれて、ショックを受けちゃって。

——（IS とは）関係ないのにね。

アニサ：（IS と）一緒に見られることがショックで。それでスカーフ取りました。

——えー、ずっと被ってたのに。それで、先生は？

アニサ：びっくりしてました。

——それでスカーフやめちゃったんだ。

アニサ：いつかまた被りたいとは思うけど。でも今じゃない。

アリーシャ 女性 16 歳・42：（高校に）入学が決まって、担任が地理の先生で、なんかたくさん勉強してくれたらしくて。礼拝や断食やスカーフのことまで心配してくれたけど、「普通でいいです」って答えた。そういう特別な扱いとか嫌だから。

・ムスリムであることの隠蔽

サリー 女性 39 歳・75：小学校までは、父のこともパキスタン文化のことも隠さなかったんですけど、中高では一切言わないようにしていました。友達の仲間に入りたいし、みんなと同じでいたいし、だから学校ではイスラームの話はしないで。もうバレないようにしていましたね。

アサド 男性 19 歳・19：中学からずっと、ムスリムであることを隠してた。常にムスリムだってばれるんじゃないかって恐怖があって、誰かがイスラームの話をするとき緊張して心臓がバクバクして。友達に馴染むため嘘をつかないといけない。ムスリムってイメージされないように、わざとハラームをやったり。罪悪感を持ちながら、陰で「ア

スタグフィルッラー（神に許しを請う祈願文）」と言ってた。（……）社会の授業でイスラムやるときは、僕を指名しないでほしいって先生に頼みに行った。

エリヤス 男性 16 歳・19：初対面とか友達になったばかりの人に、自分がムスリムということを使うのがやっぱり緊張して。言って相手の反応を見るまでドキドキで、怖くて。相手がもしこれで、「お前無理」みたいになったら、すごいきついから。

マライカ 女性 15 歳・38：言ったら向こうの態度が変わったらどうしようとか、この関係崩れたらどうしようとか、すごい変なことを想像しちゃって言えなかったりとか。ダメな時の場合を経験した事があって、すごいショックを受けたし。それを経験してからは本当に、この人もその時と同じだったらどうしようとか、やっぱり変な事をすごい考えて。あの時みたいになったらどうしようとか、やっぱり拒絶されたらすごい残るから、頭にも記憶にも。（……）ツイッターっていうのはまったく知らない人間でも、それこそ IS の件が出た時にすごい悪口を書き込んで。イスラム教徒全員出て行けとか。日本来るなとか。そういう事を書いている若い人がいて、それをいいねとか「いいね」の回数が多かったりとか。リツイートして、見たくないけれどリツイートされて回ってきたりとかあって、そのリツイートした人が自分の友達だったっていう時のショックの大きさとか、そういうのが辛いし。見たくない情報も見ちゃって苦しんじゃって。

イスラームの肯定につながる環境についての語り

・親との良好な関係

ガフル 男性 28 歳・31：ムスリム家庭に生まれて良かったって、本当に思う。だって、家庭が愛に溢れてるから。

サリー 女性 39 歳・75：ロールモデルがいない中で育ち、父親が求める理想の娘とのギャップで苦しんだ時に、自分の父は、〇〇（父の出身国）人じゃない自分、ムスリムじゃない自分を愛してくれないのではないかと、という疑問がずっとあったからだと思っています。その点においては、母ははっきりと、どんな自分でもいつもサリーの味方だと言ってくれました。道を大きく外れることなく、精神的にもおかしくならなかったのは、母の無償の愛が大きかったと思っています。

ハニフ 男性 24 歳・29：学校は、何回もいろんな先生にいろんなことで、いじめのこととかで相談したけど、解決されたことは一回もないです。中学校も小学校も。結局、最後僕が思うのは、お父さんお母さんしか味方はいないんだと思うんですね。（……）（いじめの相手を）僕がボコボコにするんですよ、泣きながら。自分を守るために。なんかそれは、全然手を出すことは怒られへんかったんですね、ずーっとずーっと。今になっても怒られへん。（……）停学なった時も、迎えに来てくれて。うん、そんな時も怒られへん

かったもんな。

——学校は大変だったけど、親がずっと味方でいてくれたのはせめてもの救いだわね。

ハニフ：うん、いい親っすよね。

・理解者や仲間の存在

ディーン 男性 17 歳・8：(同年代の第二世代は) いろんな国の子たちだけど、やってることは一つ、同じものを信じて生きてるから、なんかすごいなと思って。今まで経験したことのないもので。日本だと八百万の神なんで、いろんなものを信じて、いろんなものに都合のいい時だけお願いしてって感じだけど、この子たちは違う。一人の神様がいてっていう考えでずっと動いてて、何するにしても神さまが見てるとか、すごいなと思った。(……)

——じゃ、今はムスリムで良かったね。

ディーン：やっぱコミュニティが広がる。いろんなつながりができて、いろんな考え方だったり、自分の中でもプラスになる面が多くて。

ダリヤ 女性 27 歳・70：(ムスリムのコミュニティは) 実は高校の時からあったんですよ。ただ行きたくなかった。でも大学 4 年生あたりぐらいから、オンラインなんですけど、喋る機会が多くなって。その時に初めて気づいたんですよ。あ、ムスリムの人たちと一緒にいると、結構楽しいかも。自分が悩んでることとか、母に押し付けられたとか。多分みんな同じ悩みじゃないですか。だからそこで会うようになってから、もうめっちゃめっちゃ楽かなと思えるようになって。唯一のまゝ逃げ場かな。仲間ができるのはとっても大事ななと思って。

アズマ 男性 15 歳・27：〇〇(留学先のムスリムマジョリティ国)では、どこでも礼拝できるのがいい、学校でもスーパーでも。自分のイマーン(信仰心)が下がっていても友だちが支えてくれるし。アザーンが鳴ると誘ってくれたり。(……) 周りがいろいろ教えてくれる。同世代の子も、子どもの時から勉強しているから知識が豊富だし、リスペクトできる人が先輩もいて、一緒にいるとたくさんのが学べる。異教徒との付き合い方とか、今に合わせた生き方とか、女性を特別に扱うこととか、人を助けることとか。(……) やっちゃいけないことも知ったし、1 日 5 回礼拝しなければいけないと思うようになった。

シャヒーム 男性 21 歳・16：孤立してるとホントにどうしたらいいかわかんない。だからこそ仲間の存在っていうのはホントにありがたいっていうか。(……)(高校 1 年生の) 夏休み終わり頃つらくて、モスク行ったときに、そこで「シャヒームみたいに若いムスリムたちが毎週土曜日集まってワイワイやってる場所があるんだよ」って聞いて

たときに、ホントに何、俺みたいなのはまだ日本にいたんだみたいなの。なんだろう、ホントにハーフでムスリムで日本で生きてるっていうのがほかにいるとは全く思ってた。仲間を見つけたみたいなの。ただの仲間じゃなくて、ツチノコみたいなの珍しいなんか、「ツチノコ見つけた！」みたいなの。で、そこでやっと自分の居場所みたいなのが見つかった。もうね、仲間がいるってのが嬉しくてね。

アシーフ 男性 22 歳・21：〇〇（父の出身国）に合宿に行ったら、みんな、ほかの第二世代の子が「あ、もうアスル、やろうか」みたいなの。みんな「やろうやろう」って雰囲気やったから。「あ、みんなやるパターンなんや」って。こっちはもう絶対やりたくないパターンなんで。そうそれで、みんなやるんやって。そっから自分でもちょっとやっていこうかなって思いだしたのが、20 歳くらいです。

ラハット 男性 16 歳・2：イスラームの子、日本人と〇〇（父の出身国）人のハーフ、僕と同じで、同じ男の子なんですけど、小 4 から中 3 までずっと一緒に学校だったんですけど。その子と一緒にずっと礼拝もしてきたんですけど。彼、礼拝はするんですけど、モスクに来ないんですよ。なんか適当になんか理由つけて。

——遠いからとかじゃなくて。

ラハット：違います。拒絶ってほどでもないんですけど。なんか、なんとなくイヤって。

——今は、連絡とか取り合ってる？

ラハット：取りますね。普通に遊んだりしますね。分かり合える友達です。多分いるとこないのってではだいぶ違うと思いますね。多分いなかったら結構苦しいこともあったかもしれません。なんか彼も、僕がいてくれてよかったって言ってたので。

——よかった。そういうお友達がいるのは。

ラハット：うん、相談できる子がいてよかったなって、ホントに。(……)

——（事前アンケートに）「幼い頃からずっとムスリムの自覚がある」、「ムスリムであることをやめたいと思ったことがない」って書いてある。すごいね、なんでだろう。

ラハット：小さい頃から、父の友達とか知り合いがたくさんいるので、日本に。そういう人たちと結構交流して遊んでたんですよ。川とか行ったり、キャンプしたり、なんかどっかの公民館とかでみんなでご飯作って食べたり。そういう楽しい思い出がたくさんあったので、嫌な思い出が 1 つもなかったの。そういう、学校とかでいじめられるとか以外はそんななかったの。

——いじめもあるけど、それを上回るぐらいいい思い出がいっぱいあるんだ、ムスリムとの関係の中で。

ラハット：楽しい思い出、ムスリムと関わりながら楽しい思い出をたくさん作っていくと、やっぱり嫌なことを上回るぐらいの思い出がやっぱできてくるんですよ。モスクとかでも、コロナ前とかだったら、同年代ぐらいの友達がたくさんいたの。モスク来

たらあの子たちと遊べるっていう感覚で来てたので。モスク楽しいものだったっていう考えで、もう昔から。

・知識の獲得

サリー 女性 39 歳・75：かつては父を怖がっていましたが、20 歳くらいからアッラーを怖がらないといけないということに気付くようになったんですね。父からは、あれダメこれダメの規律と罰への恐怖しか教わらなかったけど、罰の前に慈悲があるはずだと思って。それで、父の息のかかっていないイスラームを学びたくて、〇〇（ムスリムマジョリティ国）の大学へ行ったんです。それまで父が教えるイスラームしか知らなかったから、そこでイスラームの多様性を知ってカルチャーショックを受けて、自己嫌悪に陥っちゃいました。それで、本当のイスラームとは何だろうと思って、クルアーンを読み始めて。それで、自分でイスラームを選び取った、って感じです。

アズマ 男性 16 歳・27：（中学生までは）父のためにモスクに行っていた。モスクに行くのが嫌だった。モスクに行くとムスリムが嫌いになるから。（……）イスラームを捨てて無神論者になろうと思って、だったらちゃんとわかって否定しようと思って、自分を納得させる理由を探して、ネットをいろいろ調べていって。なんか違うじゃん、今まで教えられてきたのと全然違うじゃんってなって。もっと知りたいもっと調べようって、いろいろ見ていくうちに、どんどんはまっていって。神は本当にいると確信した。

マグフィラ 女性 23 歳・64：（高校生の頃）オンラインでダマスカス出身の先生たちが運営されてるホームページがあって、それを何のきっかけかわかんないんですけど、そこに自分で、なんかいろいろイスラーム学びたいなと思ってたどり着いて、クルアーンの見方をまた復習っていうか再開するようになって。（……）（その後）マレーシアから短期の留学生みたいのがぞろぞろ来てて、その中にヒジャブをした子がいて、ホントにそれもわかんないんですけど、急になんか、あああの子みたいにあれ被りたいと思って。校長先生に、「スミマセン先生、私あの子みたいにあれ被りたいんです」みたいな。で、それも言った瞬間に、なんかすごい自分の髪の毛が出てることが恥ずかしくなって。なんかホントに肌が出てるようなぐらい恥ずかしくなって。（……）（教員から）「大丈夫になったよ」って言われた次の日からもうスカーフして。

——じゃあご両親からの強制はなかったんですね。

マグフィラ：逆に強制がなかったから、自分どういう風に軸を立てようかなって思ったときに、（イスラームを学ぶ環境が）目の前にあったって感じなんですかね。けど、私は多分やっぱ、〇〇（両親の出身国）にいた 1 年間っていうのがデカかったのかなと思います。

ガフル 男性 28 歳・31：高 1 の夏休みに〇〇（両親の出身国）のモスクに泊まって勉強させられたんです、2 泊 3 日で、いとこと一緒に。授業は、何言ってるかわからなかったけど来世について話してたんだと思う。母が持たせてくれた日本語訳のクルアーンを開いたら、来世のことが書いてあって。そのとき、「神様を見つけた！」って思った。

——それまでは神様がいなかった？

ガフル：何のために生きているのかわからなくて、目の前のことをやりこなしていかなければならないつらさがあった。真っ暗だった、神がいないから。（……）高 1 の夏に神様を見つけてからは、神さまが用意した道の上を歩いてる。「人生ゲーム」みたいな感じ。生きる意味が決まっているからすごく楽。

ウセイド 男性 19 歳・11：中 1 の時に（イスラームを教えてくれる）先生に会って、そこからいろいろ勉強してる。小学生の頃は、豚肉の禁止とか礼拝とか、なんでこんなことしないといけないんだと思っていたけど、理由がわかれば大丈夫。理解したら変わった。イスラームは、今の自分を支えてるもの。ムスリムで断然良かったと思います。

ハルーン 男性 21 歳・28：周りの子らと一緒にいて、形ばっかで中身がない子とか見ていると、ムスリム家庭に生まれて良かったと思う。

——そうやってイスラームを肯定できるようになったのはいつ頃？

ハルーン：高 2 の時、〇〇（父の出身国）でイスラームの先生に会ってから。イスラームについて何も知らないことに気がついたんですよ。形ばかりのイスラームじゃなく、人間が生きる意味を勉強していくようになったら、クルアーンやハディースに書いてあることがスッと入って来るようになったかな。死んだ後に残るのは信仰だけだった気付きましたね。

シリーン 女性 21 歳・58：なんでお父さんの満足のために、私たちは我慢しないといけないんだろ、みたいなことがあったりしたんだけど。（イスラームの知識を得た）今は、まあお父さんのためってわけじゃないよな、自分たちのためだよな、みたいな。（……）ずっと高校くらいまでは、周りと比べてしかなくて、ずーっと。

ミズラ 女性 21 歳・56：〇〇（母の出身国）で、初めてイスラームを勉強しました。一か月間、合宿で。

——どうだった？

ミズラ：モスクが綺麗で、楽しかった。やりたい気持ちがわいてきて。断食もしました。友だちもできたし。私の中でイスラームのイメージが変わった感じ。

——少しは居心地よくなったのかな。

ミズラ：嫌いじゃない…かな。徐々に受け容れてきてる。グラデーションがある感じ。

〈ムスリムであること〉についての語り

・肯定する立場のグラデーション

ユースフ 男性 21 歳・15：なんで自分はムスリムだろうと疑ったことはありません。なんで周りの人たちはムスリムではないのだろうかと思うことはよくあります。(……)アッラーに祈りをささげている時が好きです。言葉で説明できないことも、お祈りでアッラーに訴えられるというか。淋しいと感じることもよくありますが、アッラーが見てくださっていると思うと楽になります。

エリヤス 男性 17 歳・19：(イスラームは) 大好き、っていうか愛してる。(父に)「ムスリムらしい行動をなさい」「イスラームを誇りに思いなさい」ってずっと言われてきて。だから、小さい時から〈ムスリムであること〉を自覚して生きてます。ムスリムであることは嬉しい。

ジャリール 男性 17 歳・16：(イスラームは) 嫌だと思ったことは一度もないです。みんなと違うことで悩んだこともないです。親から「うちは日本人じゃないんだから」っていつも言われていたから。

マライカ 女性 16 歳・38：5 回の礼拝はカダーでも必ずする、ファジュルとマグリブは絶対。あと、母が「ドゥアを忘れるな、頼るべきは親じゃない、自分でほしいものはアッラーに頼みなさい」と言うから、いつもドゥアしてる。困ったときは神に頼れるから、ムスリムで良かったと思う。

ヤシーン：困った時にアッラーがいると思うと心のよりどころになる。礼拝は、しないといけないっていうんじゃなく、イスラームを学んだら礼拝は大事だと思えるから、だからする。

アズマ 男性 15 歳・27：前は、友達が「神はいない」と言うと納得してしまってた。今は、イスラームが正しいってわかるし、自分がムスリムであることを当たり前だと感じる。ムスリムで良かったと思う。天国へ行きたい。1 日 5 回礼拝しなければいけないと思うようになった。ドゥアをしたい、家族のために、お世話になった人や友人のために。

フスナ 女性 26 歳・69：(ムスリムの自覚をもつようになったのは) 19 歳のときですね。〇〇(父の出身国)に飛ばされて、(イスラーム学校で寮生活をする中で) 本当のイスラームを勉強して、礼拝するようになりました。

——それまでは礼拝しなかった？

フスナ：子どもの時からイスラームは嫌いじゃなくて、アッラーを信じてはいたけど、礼拝しようとは思えなかった。家族を幸せにできない父を見ていて、イスラームにずっと疑問を持っていたから。自分の信仰が少しずつ変わってきたのは、〇〇（父の出身国）に行ったこと、ムスリムの環境で過ごしたことが大きいと思います。

——今のフスナさんにとってイスラームとは？

フスナ：なくてはならない大切なものです。

サリー 女性 39 歳・75：ムスリムであるという自分の属性を疑問に思ったことは何度もあったけど、父の信頼を裏切ってはいけないという思いがずっとありました。父に従いながら、心の中では「なんでこんな家庭に生まれちゃったのか」ってずっと思っていました。（……）

——現在は、ムスリムとしてのアイデンティティはありますか。

サリー：あります。ムスリムであることは自分の属性だと思ってます。今はレギュラーに礼拝もするし、アッラーとのいい関係性を築くことができます。

——すごいですね。日本人であることと〈ムスリムであること〉がぶつかってしまう第二世代が多いんですけど。

サリー：日本人とイスラームは相反するものじゃないですよ。イスラームを信じることは簡単なこと、本当のイスラームを知ってほしいです。

メレク 女性 16 歳・40：（イスラームは）やっちゃいけないことが多くて、前は嫌だと思いう時期があったけど、今はいいと思う。家庭科の授業で第二次反抗期について勉強したんですけど、その時、自分の存在の目覚めについてやって、死後の世界のことが話題になったんです。クラスのみんなは死んだらどうなるかって不安だったけど、私は知っているから何も不安じゃない。ムスリムでよかったな—って思った。あと、友達は何の悪口ばかり言うんですけど、それってイスラームではいけないことだから、醜い言葉を言わないで済む、すごいいい。

ヌール 女性 34 歳・74：子どもの頃はムスリムであることで生きづらさを感じていましたが、ムスリム本来の生き方を知った後は、それが自分が求めていた生き方だと知ることができ、元々ムスリムとして生まれたことに感謝しています。

ガフル 男性 28 歳・31：自分のイスラーム暦は3つにわかれてるんです。最初は、高1で、神はいるってことに気づいて、自分が生きる理由がわかるという段階ね。次が大学院、24歳の夏に、（神が）創造主だって気づいたの、「僕は神が作った存在だ！」って。（……）で、26歳のときに、世界中の美しいものは神のアーヤ（神の創造のしる

し)だと気づいた、アーヤを見つけてほしいと神が望んでいるって。

ヒナ 女性 20 歳・53：(ムスリムの自覚は) あります。イスラームは、まだ自分ではつかみ切れていないけど、親しい感じがするものだと思う。

アナム 女性 19 歳・51：(ムスリムの自覚は) あります。ムスリムは嫌じゃない、イスラームは嫌じゃない。(……) 礼拝も、最近はするようになったし、自主的に。時々母とも一緒にしたり。見た目はこんнад (ムスリムの服装規定の典型ではない) けど、心はイスラームだから。

ハニフ 男性 24 歳・29：生まれたときからムスリムだと思ってた。

——迷ったりはなかった？

ハニフ：嫌になったことはあります。やめたいけど、やめれないと思ってたから。やめたら罰当たるとかいう、怖いあれもあったし。

アサド 男性 19 歳・19：(ムスリムの自覚は) もちろんある。イスラームは、やるしかないもの。やらなければ地獄、ほかに選択肢がない。疑う余地がない、少しでも疑ったらだめ。

シャジア 女性 20 歳・52：(ムスリムの自覚は) あります。大学でもサークルに入らないし、飲み会があるから。大学でいいなと思った人はいたけど、ムスリムを捨ててまでつき合うことはできない。

——シャジアちゃんにとってイスラームってなんだろう。

シャジア：捨てきれへん一部、捨てたら自分じゃなくなる。

アイニー 女性 21 歳・55：多分みんな、小学校からムスリムとして育ってれば、ムスリムっていう自覚は全員あると思うんですよ。やめたいって思うのは、押し付けられた時。だから良好にムスリムの環境を築いていければ、別に(自覚が)なくなるものではないし。それを恐れてすごい押し付けるのは、何の意味もないよと思います。(……)

——アイニーさんにとってイスラームとは何でしょう。

アイニー：何だろう。私にとっては、心の普通に支えではありますね。

——素晴らしい。これだけ立派に育ってるんだから、お父さん心配することないのにね。

アイニー：そうですよ。私はムスリムっていう自覚はあるんで。

——それはすごいです。(お父さん) 信用してくれるといいね。

アイニー：そう、信用してくれないんですよ。ずっと嘘ついてると思われて。

ムラド 男性 17 歳・18：礼拝は、1 日 5 回できるのは月に 2 回くらい。断食はチャレンジするけど、途中でお腹がすいてダメ、年に 2～3 回くらい。でもムスリムとしての自覚はある、普通過ぎて何とも思わない。

シャーフィン 男性 19 歳・13：（ムスリムの自覚は）あるでしょ、当たり前でしょ。信じてるんで。

——じゃ、礼拝も欠かさず？

シャーフィン：そうですね。ファジュルは、母に電話で起こされます。モスクも週に 1 回程度来てるし、父に言われるんで。

アイン 女性 12 歳・34：ムスリムを嫌と思わへん。学校にスーダンとかアルジェリアのハーフの同級生もいるから、（ムスリムは）私だけじゃないし。

——礼拝もしてる？

アイン：保育園の頃からやってる、家にいる時は。父が「礼拝しろ」って言うから。

スハナ 女性 18 歳・45：（ムスリムの自覚は）あります。イスラームは嫌いじゃない。礼拝とかクルアーンとか、最低限のことはしようと思ってます。

——じゃあ礼拝もやってる？

スハナ：一日 2 回くらい。ファジュルは起こされるんで。

アリーブ 男性 19 歳・10：（ムスリムの自覚は）あります。何も知らないのに否定するのはおかしい、まず学ぶことから。なんでこんなことやってるのかわからないままじゃダメ、あいまいなままじゃダメだと思う。

——礼拝はする？

アリーブ：時間があれば。

サワ 女性 16 歳・39：（ムスリムであることを）誇りに思います。マイナーだから大変だけど。学校でも、チャンスがあればムスリムだってことを言ってる。

——礼拝はする？

サワ：去年くらいから。自分でしたいと思ったときに。

タルーブ 女性 19 歳・49：ムスリムで嫌だと思ったことは、今まで一度もないです。ムスリム家庭に生まれて良かったと思ってます、女性として大切にされるから。環境に恵まれていたと思う。（……）イスラームは、環境の中で自然に学んできたんで。成功のカギは環境だと思う。

サイダ 女性 18 歳・47：（ムスリムの自覚は）ありますよ、困った時に神さまがいると思うから。

——礼拝はする？

サイダ：たまに。気持ちが入ってないのにしたくない。

ナジュマ 女性 24 歳・67：（ムスリムの自覚は）あるけど、でも認めたくない、しんどい。

——イスラームについて、思うことがあれば。

ナジュマ：決して誇りには思わない。大学の後輩が「改宗したい」って相談してきたことがあったんですけど、「やめとき」って言ってとめました。

ラニヤ 女性 23 歳・62：（礼拝は）できる時はする。夜とか、家にいるから。親に「やりなさい」って言われるんで。日本人じゃないから、もうあきらめてる。

——じゃあ、ムスリムの自覚はありますか？

ラニヤ：まあ……。

——ムスリム家庭に生まれて良かったと思います？

ラニヤ：うーん、「100%イエス」っていうのは難しいかな。日本で育ってしまったから。

アニサ 女性 19 歳・63：（ムスリムの自覚について）意識したことがないです。この家庭に生まれた以上、ずっとこれで生きて行くしかないと思います。

ハルーン 男性 24 歳・28：（イスラームが）嫌とかどうとかっていうわけじゃなくて。ムスリムであることに限界を感じているのかなっていうのを薄々気づき、自分に限界をかけるようなことなんやったら、別にもうなくていいや、って。（……）イスラームとかなんとかかんとかってやってるよりも、「宗教は全部一緒やんか」っていうような感覚なんですよ。なんかその、シーアの人スンニの人で揉めてる話聞いたりとか、いろんな宗派がどうのこうのとかって話聞いていると、単語の使い方とか、そういう意味がどうのこうのと揉めてるだけで。なんか僕からしたら、ライトの飾り付けの色で揉めてるみたいなの。そこにライトを灯す意味がある、何のために灯してるのかじゃなくて、何のためのライトの色なのかでごちゃごちゃと。みんな見た目だけで意外と本質を知らないのかなみたいな感じやって。だから僕はそういうふうに思った結果、そうやって思って進んでいって。で、ムスリムと名乗ることに違和感をだんだん覚え出していったんで。自分の中でそう思うってことは、そういう自分自身の段階が来たのかなー、みたいな感じで。じゃあまあ、もういいかなっていう感じで、ムスリムっていうのをやめよ、って思いました。別に信じんのやめたとかそういうわけじゃなくて。

——イスラームの何かが嫌なわけじゃなくて、何かの宗教にこだわる……ムスリムで

ある必要もクリスチャンである必要もない。

ハルーン：ないですね。

——じゃ、今はムスリムではないわけ？

ハルーン：いや……

——一応ムスリムなの？

ハルーン：まあ、そうですね。

——でも礼拝して断食して、っていう実践はしない。神さまはいるのね？

ハルーン：そうですね。(……) ま、僕からしたらみんな変わらんって思うんですけど。

根本は全部一緒やからっていう。

・否定する立場のグラデーション

ヤミナ 女性 19 歳・48：(イスラームについては) 私は何も知らない。

——じゃあ、礼拝とかもしない？

ヤミナ：年に 1 回くらい、父に誘われて(礼拝に) 行くことはあるけど。(……) 聞かれたら「ムスリムです」って言うけど、できれば避けていきたい、日本人として生きたい。

ハミド 男性 19 歳・12：(ムスリムとしての自覚は) ない。良さがわからない。これやっていいことがない。宗教に興味がない。

サリマ 女性 21 歳・57：ちょっとのプレッシャーが積み重なると(ムスリムをやめなくなる)。やっぱ、男の子と遊びに行くってなっても女の子と行くとか、ちょっと嘘ついてとかが面倒くさくて。それやったらもう自由にしてくれと思って。しかもなんで親に宗教を強要されなあかんのかかわからへんと思ってる。別に自分で決めたらいいと思うし。まあ家にいるときは、豚肉も食べへんし、お酒も飲まへんし。(……) だからもう、そんな強要される意味も分からんから、自分はもうやめたいってずっと言ってるんですよ。で、結婚するってなっても、宗教が同じ人とじゃないとダメとか、そんなんもいややし。普通に自由に過ごしたいのに。

アリフ 男性 25 歳・32：イスラームに助けられたこともあるけど、基本的には前に立ちはだかる壁。バックグラウンドにはあるから、常にアッラーが監視しているという恐怖感はある。どんどん道を踏み外す、いいのか悪いのかという葛藤の繰り返し。／アリフ 男性 29 歳・32：(ムスリムであることを否定する要因について) 何かがあってポンってなったんじゃないくて、いろんなものが重なってとかだと思うんだよね。俺の場合は、例えばね左利きじゃん。〇〇(父の出身国) に行くとそれを否定されるの。「なんで左で食べるの、右で食べなさい」って言われるの。俺それすごい嫌だったんだけど。自分

の左手が好きだったのね。だって絵描いたら母が褒めてくれるじゃん。だから自分の左手はすごいと思ってたし、みんなに「左利きは天才」だとかって言われてすごい嬉しかったし。なのにそれを否定されたのが嫌だった。(……) イスラームに入っていない人みんな地獄に行くって言うじゃん。そもそも祖母とかどうするのとかもすごい考えたの、小さいときから。だって祖母なんて別に〇〇(父の出身国)に住んでなかっただけでイスラームに触れてなかっただけじゃん。そんなアンフェアなことあるの、そんなことするのが神さまなのって思って。そんなこと言ったら、(母方の親戚)みんな地獄に行くってことだよ、とか。そういういろいろなことが嫌だなんて思うことがたくさんあって、多分そうなんだと思ってるのね。

アスマ 女性 27 歳・73: イスラームは嫌い、男尊女卑だから。男と喋るな、女だから進学させないとか。アッラーがいるとも思えない。／アスマ 女性 31 歳・73: ムスリムでいることは、中学生の頃には嫌だった気がします。ネットで離教について調べてみたら、名誉の殺人だの石打の刑だの怖いことばかり出てきたので、幻滅される、失敗作だと思われる、捨てられる、ただでさえ生きるスキルなんてないのに、学べなかったのに、いきなり社会で1人でやっていけるわけないって怯えてました。／アスマ 女性 32 歳・73: 私が嫌悪を抱いているのは、イスラムの教えや在り方というよりは、人権を無視した思想の押し付けや強制に対してです、多分。

スレイマン 男性 25 歳・30: (自分をムスリムだと思ったことは) ないです、ないです。(……) まあ僕は、結局ある意味、(宗教を強要する父から) 僕としての人格を守るために、イスラームを絶対認めたくないってところがあるのかもしれないですね。

サービラ 女性 30 歳・72: イスラームの人みんな死ねばいい、宗教なんてくそくらえ。父と同じ宗教なんて絶対信じるもんか。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々のご協力とご支援いただきました。特にお世話になった方々について、以下に記して謝意を表します。

まず、この研究は調査に協力して下さった皆さま一人ひとりの貴重な語りがなければ成立しえなかったものです。青年期にある第二世代は、今まさに葛藤を抱えて苦しい胸裡を打ち明けることに困難を感じたかもしれません、また成人した第二世代には、過去を振り返ることに抵抗を感じることがあったかもしれません。それにもかかわらず、ご自身の経験を言語化することに務めて下さったことに、心よりお礼を申し上げます。また、調査が難しい第二世代に代わってその経験を語って下さった親世代の方々、ムスリム生徒受け入れの現状について学校側の姿勢を語って下さった教員の方々にも、貴重な時間を割いて情報をご共有いただけたことにお礼を申し上げます。そのおかげで、第二世代の経験を別の視点からみることができ、研究の内容に厚みを加えられたと考えます。ほかにも、質的調査への協力者をご紹介下さった方々、量的調査を拡散して下さった方々、そしてその量的調査に回答を寄せて下さった方々、皆さまのご支援に心より感謝を申し上げます。

次に、ご指導いただいた慶應義塾大学の諸先生方にも深く感謝を申し上げたく思います。

大学院入学は還暦を迎える少し前のことであったにもかかわらず、主査をお引き受け下さった総合政策学部准教授の野中葉先生には、研究とは無縁の生活を送ってきた老輩の無謀な野望に長らくお付き合いいただくことになってしまいました。社会人入学であるため仕事と研究との両立を図ることが難しく、なかなか博士論文執筆に取りかかれずにいましたが、急かすことなく見守って下さったことで、焦らずそして中途挫折することなく最後まで続けることができました。その分、論文執筆を開始してからの1年間は、何度も個別の面談に時間を割いてご助言くださり、また方向を見誤るたびに軌道修正をしてくださり、そのおかげで一気に論文完成にこぎつけることができました。学生の方が年長であることで、さぞやお気を遣われたことと思います、その点を申し訳なく思うとともに、それでも辛抱強くご指導下さった野中先生に、心より感謝を申し上げます。

副査である総合政策学部教授の清水唯一郎先生には、入学して間もない時期の面談で、質的調査の基本をご丁寧にご説明いただき、またたくさん必読書をご紹介いただきました。その際、研究の対象に極めて近い筆者の背景を否定せず「当事者研究」というものの存在をお示し下さったことで、不利だと考えていた自身の立場を前向きに捉えられるようになりました。研究の右も左もわからなかった初学者がまずその第一歩を踏み出せたのは、この面談があったからこそと思います。清水先生のご指導に、心より感謝を申し上げます。

もう一人の副査である総合政策学部教授の田島英一先生は、長文のメールを何度も書いてくださり、近視眼的な研究姿勢を叱咤していただきました。また、学位申請要件充足のための国際会議の情報を探せず途方に暮れていた際、親身にご助言下さったことも忘れません。論文の基礎構造など、ご納得いただくに十分でない点が多々あることを心苦しく思い

つつも、ご指摘いただいたいくつもの課題を今後につなげるよう、引き続き精進していきたいと思います。田島先生のご指導に、心より感謝を申し上げます。

また、早稲田大学人間科学学術院名誉教授の店田廣文先生には、外部副査として論文審査に加わっていただきました。日本のムスリム研究の第一人者から貴重なご意見をいただけたことは光栄であり、これを参考に追記修正することで論文の完成度を上げられたと思います。なお、ご論考の数々は本論文中でも幾度となく引用させていただいており、いうなれば本論文は、店田先生が切り拓いてきた道を歩むことで完成したものです。その意味では、本研究の全体に指針を示してくださった存在として、店田先生に深く感謝を申し上げます。

このほかに、京都産業大学現代社会学部准教授の岡井宏文先生と立教大学社会学部准教授の本多真隆先生には、歳の離れた友人として、また尊敬すべき研究者として、さまざまな場面で大変お世話になりました。研究に行き詰まるたびに何時間も相談に乗ってくださった岡井先生、論文の書き方の基本をご教示くださった本多先生、また新年早々に草稿にお目通しくださり有益なご助言をたくさんお示しいただけたことも含め、お二方のご支援がなければ本論文を書き上げることはできませんでした。お二方に深く感謝を申し上げます。

また大学院の研究会では、総合政策学部教授の廣瀬陽子先生、総合政策学部准教授のヴ・レ・タオ・チ先生、総合政策学部准教授の山本薫先生、総合政策学部准教授の宮代康丈先生、ほか諸先生方および学生方から、未熟な発表に貴重なご意見ご指摘ご批判をたくさんいただきました。それらの一つひとつが本論文を充実させる土台となったことはいうまでもありません。皆さまに感謝を申し上げます。

最後に、論文完成まで長らく支え見守ってくれた家族に謝意を表したく思います。特に論文の読み合わせや発表の練習につき合ってくれた息子たち、あなたたちのおかげで母は論文を完成することができました、ありがとう。

2025 年 6 月

クレシ好美